
過ぎ去りし日々～高校編～

安部由理野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過ぎ去りし日々～高校編～

【Nコード】

N4985F

【作者名】

安部由理野

【あらすじ】

中学時代から付き合い始め、初キスまでした友里菜と芳人。けれども、高校は別々になり、友里菜はしつくり来ず、芳人はウキウキと最初から違っていた。その内に、二人には第二の人が現れてしまう。約10年前からの青春物語です。果たして、友情以上恋愛未満のこの二人の行く末は？*関西が舞台で、関西弁が出てきますので苦手な方は、ご注意ください。

【前編】 1 最初の過ち（前書き）

「過ぎ去りし日々」中学編」の続編です。お約束通り、書き始めました。

【前編】 1 最初の過ち

【高校編】

1 最初の過ち

柿沢友里菜は、K高校に通いだして三日で、自分の過ちに早くも気がついた。

K高校は大阪府立で、この辺りでも進学率の高い有名な高校だし、芸術やスポーツも盛んで、制服のない自由な校風だと言われていた。評判も悪くはない。毎年、国公立大学には何人か、そして有名私立大学には相当数の卒業生を送り出している。

けれども友里菜は、最初の日からなぜか違和感を感じていた。周りの生徒達は、中学とは違って、あちらこちらから、中には随分遠くから通ってくる子も居る。そしてこの高校には、自分と同じ中学からはそんなに数多く入学していないが、そう言った瑣末な事ではなく、何となく居心地が悪いというか、自分に合わないような雰囲気を感じてしまうのだ。

それがなぜだか、原因は分からない。自分で望んだ高校だというのに、どうしてそんな風に感じてしまうのか、友里菜は戸惑っていた。

むしろ期待が多かった分、尚更そう感じるのだろうと友里菜は樂觀的に信じようとし、決して両親には何も告げなかった。

それでも友里菜は誰かに聞いてもらいたくて、夜遅く芳人に電話した。芳人は既にピッチを持っているのに、友里菜は「まだまだ高校生には早い」と言う父親のせいで、ピッチすら持つては居ない。

けれどもこの頃はまだ、持っている生徒は少数でしかなかったのだ
が。

自分は家の玄関で、両親の息遣いを感じながら電話をしていると
いうのに、あつちはまだもう一步進んでしまっている。既に別々の高校
生なのだから、仕方ないのかも……。弱気が友里菜を襲っていた。
けれども、「あー、もしもし」と言う芳人の間の抜けたような声
を聞くと、途端になぜか幸せな気分になるから不思議だ。

「あ、芳人。ちょっと話したくて……今邪魔？」

「邪魔やないよ」。ちょうど友里菜と話したいと思てたところや」

「今、何してるん？」

「あつ、寝転がって新しい教科書見てた。何や、凄いな、付いて
いけるんかな。てちよつと不安で。友里菜の方は？」

「ああ、わたし？ うん……。かなり不安、てゝか、なんか自分の居
る場所が無いんじゃないのかな。って。へへへ、三日しか経ってへん
のにこんなこと言うなんて、変やね」

「友里菜はちよつと繊細やからな、僕と違って」

と芳人は真面目に言った。

「あ、特別何か言いたいつてわけじゃないけど……。でも、芳人の声
聞いて、何やホツとしたわ。それじゃ、頑張つてね」

「ああ、気張るわ。友里菜も早うピッチ買つてもらつたらええのに
な。ま、他所の家やから、何とも言えんけど」

「それじゃーね」

「うん。じゃな、友里菜」

芳人はピッチを切ると、積み上がった教科書やら参考書やらを見
つめた。そしてなぜか武者震いした。

芳人が入ったI高校は、この辺りでは一番の進学校で、周辺から

は各中学の最上レベルの生徒ばかりが集まっている。芳人の兄、雅人もその卒業生で、今春京大に一発で合格したばかりだ。

けれども芳人は格段雅人を妬ましいとは思わなかったし、対して喜びもしなかった。芳人にとって、鼻高々の雅人は競争相手ではなくあくまでも兄以外の何者でもない。そしてライバルはもはや友里菜ではなく、この高校の入学した生徒全てだった。

芳人はこんなにも自分が勉強好きな人間だったとは、今まで思いもしなかった。自分は出来損ないのヤンキーだとばかり思い込んでいた昔の自分は仮の姿で、今の秀才高の教科書を眺めている自分が本来の自分なのだと痛烈に意識したのだ。

まだ三日しか経ってはいないが、芳人はこの高校は自分にピッタリだという喜ばしい確信を持った。古めかしい戦前からの伝統ある高校……。ここに入れたのも、実は友里菜というライバル兼彼女が居たからだ。そうでなければ、芳人はヤンキーのままだったかもしれない。

そう思うと、芳人は友里菜の声が再び聞きたくなって、側のピッチを取った。けれどもふと、先程の友里菜の声音がどこか淋しげで元気が無さそうな響きを有していたのに、今始めて気付いた。

友里菜、大丈夫なんかなあ。なんや元気が無かったような気がするし。けど、友里菜のことやから、その内にあの高校にも慣れて、新しい彼氏が出来たりしたら、僕の事は忘れてしまつかもな。そんなになつたら大変や！ しげしげと電話やFAXでもしたりせんとあかんかな？

けれども芳人は再び教科書を見つめて、ニヤニヤし始めた。

一方友里菜は、芳人の弾けるような明るい声を聞くと、なぜか心

が沈み、そつと受話器を置いたのだつた。

二人の出発はこつして最初から違っていた。

2 コーラス部

2 コーラス部

友里菜は毎朝着て行く服装に大層気を使うのが、どこか面倒だった。けれどもK高校は私服のみ。皆それぞれ自分に合ったと思われる好き勝手な服を着ている。

友里菜も母と私服の買出しに、繁華街まで出かけた。他の同年齢の女の子達の服をチラチラと見つめ、あれこれ探しまくった。けれども友里菜はどうしても、今流行の服には違和感を覚えてしまう。こんなことだったら、母の言う通り、京都の制服のある私立女子高に行けば良かった、と微かに後悔していた。

服はどうしても異性を意識した服に偏ってしまうのが嫌で、友里菜はわざと地味な服を買い込んだ。

「友里ちゃん、もっと派手な服でもいいんじゃない？　なんかもっさりしてる服ばかりで」

「学校は遊びに行くところじゃないんやから。洋服に気を取られるんは、わたし嫌や」

「ま、それはそうだけど。色がなんか地味だし、流行に関係の無いものばかりで」

「そっちの方がわたしはいいの」と友里菜は頑固に言い張った。友里菜は自分で自分が分からなくなった。鏡の中の自分は、人よりはましだと思うが、けれども物凄い美人という程でもない。

K高校に入った途端、急に自信を無くしてしまった様な気がする……。

友里菜も芳人もバスで近くの鉄道に行くのだが、友里菜はJR、芳人は私鉄と別れてしまったし、時間帯も違うのか、バス停で出会

うこともほとんどなかった。

友里菜はバス停でいつも、制服の私立の女子高生達を見ることに、なんだか羨ましくなってくる。人間は自由を与えられると、反対に束縛が欲しくなる、と言うがまさにその通りで、私服よりも赤いリボンの付いた紺色の制服や、チエックのプリーツ・スカートの私立女子高の生徒が眩しく見えてきていた。

最初からこんな調子では、これからの三年間がどこか思いやられる気がして、不安に胸を締め付けられる思いだ。この気持ちは芳人には分らないだろう。なぜなら、芳人の高校には、公立だが紺色ブレザーの制服があるからだった。

制服か私服かでこんなに迷うなんて、わたし、どうかしている。所詮、中身の問題でしょ……それなのに。

けれども友里菜は毎朝重い気持ちでバスに乗り込むのだった。

暫くして部活を決めなくてはならなくなったが、友里菜は迷わずにコーラス部を選んだ。もともと歌が好きで、もしかしたら音楽部のある大学を、と狙っていたからだ。

けれどもコーラス部も、どこか友里菜にはしっくり来なかった。

K高のコーラス部は、大阪府でもかなり有名な方だ。全国大会にはいつも敗れてしまうが、けれども府下では二位、三位あたりをいつもキープしている元々伝統のある部活なのだ。だから中身は充実しているし、同じ歌が好きな者同士、友達が出来るかもしれない、という浅はかな期待を抱いていた。

けれどもそれは見事に裏切られた。最初の日から、新入生にとっては、先輩には絶対に服従という雰囲気漂い、クラブの中はピリピリしていたのだ。新しく入った新入生も、誰とも目を合わさず、

直立不動のまま緊張して楽譜に目を通していた。

「いいかー、新入り達！　ここは仲良しクラブじゃない！　コンクールに向かつてただひたすら頑張ればいいのだあー！　余計なお喋りは禁じるし、無駄な声は出すな。ただ今から、小部屋でパートを決めるから、三人一組になって先輩達の薫陶を受けるようにい！　分かったか！　分かったら返事をしろ！」

と三年生の声がした。その男子は部長でもないらしいが、なぜか蛮声を張り上げて、新入生を威嚇するのだ。

その場には、音楽教師の姿は無かった。

「はい」と言う小さな声がバラバラと起こったが、その先輩は真つ赤になって怒鳴った。

「声が小さーい！　そんな声で、コンクールに勝ち残れると思ってるのかー！　もっと大きな声で、返事しろー！」

「はーい！ー！！！」

新入生達は、思い切り声を張り上げて、答えた。

「よーしっ！」とその先輩は満足そうにうなずいた。

「なんか、怖い」と友里菜の横の女の子が、つぶやいた。それは友里菜も同じ気持ちだった。音楽クラブだからもっと楽しいのかと思っていたが、それは違ったようだ。これでは、体育会系と何ら変わりは無いではないか……。

わたしはコンクールの為にコーラス部に入っただんやない。一体この雰囲気は何なの？　まるで軍隊みたい。

それでも友里菜は、失望を今から感じないようにしようと思った。けれども帰り道、電車から見る夕景色は暗かった。前途多難……友里菜の高校生活は、結局その一語に尽きるとは、今の友里菜には

分からない……。

3 芳人の選択

3 芳人の選択

芳人はI高校で、どの部活に入るか迷っていた。

兄の雅人は、勉強に障ると部活には入っていなかったし、芳人も特別何かをやりたいと思ったわけではない。特段何かのスポーツが出来るとは思わなかったし、だからと言って芸術にも興味がなかった。

数々の部活のビラを貰っては、それをよく読みもせず、カバンに突っ込んでいた。

それよりも芳人は、1年2組のクラスの男子達と直ぐに気が合い、色々喋るようになった。皆、別々の中学や別々の市や町から来た者達ばかりだが、どこか自分と同じ臭いを感じた。

それは動物的な勘のような気がする。誰も、芳人がもとヤンキーだとは知らないし、一からやり直すにはピッタリの学校だと思う。

その友達の中に、鈴木亮平と言う平凡な名前の男子が居て、二人はどちらとも無く駅までの15分間の道のりを一緒に帰るようになった。妙に話が合い、中学とは又違った“仲間”という意識が芽生え始めた頃のこと、亮平が芳人に妙な事を言い出したのだ。

本当はそれが目的だったのかも……と数年後になって、芳人は気付いたのだが。

「ねえ、大久保君。あのさあ、もう部活決めた？」

「いや、まだやけど。どうしようかな、思うてな。僕の兄貴はこの卒業生やけど、勉強に差し障る言うて、結局どの部にも入らへんかったんや」

「確かに京大に入るつもりやったら、部活やってたら邪魔かもな。けど、大久保君は、兄さんとは違うんやろ？」

「うん、まあな。でも、中学では結構ヤンキーやってたし」

「へ！？ ヤンキー！？ 嘘やろ？ そんなに見えへんで」

「いや、結構親を困らせたんやで」

「へへえ」と亮平は、半信半疑で芳人を見つめていたが、突然耳元で悪魔のように囁き始めた。「なあ、水泳部に入らへんか？」

「す、水泳部！？ 僕は昔って言うか、子供の頃、無理やりスイミング・スクールに行かされたけど、背泳からやったから、からきし駄目でオカンにガツカリされたことがあるんや。なんで、水泳部？ ここの水泳部なんて、府下でもビリケツのほうやで」

「いや、実はな先輩に水泳部の奴が居て、ここに入ったら絶対に水泳部に入れ、と言われてな。けど、僕一人で入るのは、何だか……」と亮平は遂に本音を喋った。

「なんや、一人じゃ嫌なんか？ けれど鈴木君は中学も水泳部やったんやろ？」

「いや……野球部の補欠」と亮平は情け無さそうに告白した。「ただスイミング・スクールでは、成績良かった」

「だったら良いやんか。僕は、水泳は全然あかんねん」

「いや、その先輩とかが丁寧に教えてくれるさかい」

「しごきとかありそうで、嫌やな」

「それは大丈夫！」

亮平は妙に自信ありげにキツパリと断言した。

「実はな、ここの水泳部、人が居らへんでもう直ぐ廃部になるかも知れへんねんって。それで後二人は絶対に欲しいらしいんや」

「なんや、それ」

芳人はガツカリして、亮平を見下ろした。

「だからしごきなんか絶対じゃないんや。な、な、な、頼むわ。ほんと、大久保君、頼むからあ、水泳部に入って。そのガタイやつたら、絶対にOKやし、大人になっても泳げへんって、なんかつまらんやろ？」

「…… ったって、なあ」

「女の子にもてる、逆三角形の身体になるかも知れへんよ」

「今更もてなくてもいいんやけど……」

「え？ 大久保君、もう彼女いるの？ いいなあ」

「か、彼女ってほどじゃないけど」

その時芳人は友里菜の姿を脳裏に浮かべていた。そう言えば、入学以来会っていない……。

「なんや、ボーツとして」

「あ、電車来たわ。じゃ～な」

そう言つと、芳人は反対のホームに向かつて、駆け出した。

「大久保く～ん！ 考えといてや～！」と亮平は、半ば諦めながらも芳人の背中に向かって叫んだ。芳人はちらつと振り向いたが、間髪一髪電車に乗り込んだ。

「多分…… あかんやろうな」

けれども亮平がその事を忘れていたその晩、意外にも芳人から電話があった。

「鈴木君か？ あのなあ、しごきがなかったら、僕水泳部に入ってもいいで」

「えっ、ほんま？」

亮平は躍り上がった。これで先輩に顔向けできる。ただその事しか頭に無かつたのだが、けれども芳人の選択は確かに、“当たり前” だったのだ。

高校の部活によって、三年間の間、地獄も極楽も紙一重、なのだった。

4 友里菜の初友達

4 友里菜の初友達

一学期が本格的に始まり、コーラス部の練習も連日のように行われていたが、ここ数週間友里菜はうかない日々を送っていた。公立の生徒達は、余程でない限りケータイどころかピッチすら持たされてはいなかった。まして、パソコンなど超高級な品物だった時代だ。芳人と会いたい、時々芳人から掛かってくる電話以外には自由に話せず、それも親に盗み聞きされているような気がして、なぜか他人行儀になってしまふ。毎日の様々なストレスが蓄積して、今にも爆発しそうになっていたちょうど5月の連休前、友里菜は始めてある女子と一緒に帰宅することになった。

コーラス部は余りの練習の激しさの為か、私語を慎むように言われていた為か、どうも仲の良い友達が出来そうもなかった。最初から友里菜はこの部に疑問を感じ、自分には合わないような気がしていたのだ。

同じクラスの面子を見ても、気の合いそうな女子も、そしてステキな男子も居そうに無い。

けれどもその内に、女子は幾つかのグループを形成し、その内のどれかに加わっていないとどうものけ者になりそうな気配がしていた。友里菜は気が進まないながらも、どこかの部活に入っているグループの中に入り込んでいた。

その中に、『読書同好会』に加わっている、仁科彩香にしなあやかと言う、小柄な女子が居た。最初はおとなしそうに見えたのだが、何かをきっかけに会話がはずみ、ちょうど電車もJRだったせい、二人は急速に仲良くなっていた。

それにつれて、今まで毎朝高校に行くのが辛くなっていた友里菜は、突然目の前の視界が開けたような、弾んだ気持ちになっていた。

友里菜と彩香は、共に部活のせいか帰宅が遅い。閉門時間ぎりぎりまで、家には帰れなかったが、その時間帯がちょうど合って、二人はどちらかが靴箱で待っているようになった。

友里菜も読書が好きだし、彩香も音楽が好きで、ともにそのような話をするのが楽しくて仕方なかった。彩香は前の中学には居ないタイプの女子で、友里菜にとっては久しぶりに自分と“同類”の女の子のような気がした。

友里菜と彩香は、学校の事、それぞれの部活の事、好きなタイプのアイドルのこと、学科の事、先生の事などを飽きることなく毎日喋っていたが、肝心の家族のことは、二人とも余り口にはしなかった。

けれどもある日を堺に、彩香は打ち解け始め、友里菜は彩香の家庭の複雑な状況を知る事になった。

彩香には弟の岳^{がく}が居るのだが、その弟は別居^{がく}している父の元に居るという。なんと彩香の父親と言うのは、府内でも有名な大学病院の外科医だったのだ。けれども、何かの原因で母親とは別居し、彩香は母と共に小さなアパート住まいだという。

父方の祖父母は、頭の良いと思われる岳を手放したくはないようだったのだ。それは、弟にも医者になってもらいたい、と言う祖母の強い願いがあったからだと言う。

「つまり、成績の良くないわたしは、お呼びで無いつてこと」

と彩香はJRの駅までの間、不貞腐れたように言った。

「良くないって……だって、K高だってそんなに悪い高校とは違うやん」

「わたしの父によると、K高もカスの内らしいねん」と彩香は淋しそうに笑った。

「弟は、私立のN高を目指しているんやて」

「N校かあ」

友里菜は嘆息した。確かに、私立N校と言えば、日本中で知らない人が居ないほどの、関西の名門進学校だ。

「でも、彩香だって、本当はお嬢さんやないの」

「違うつて！ わたしは母を助ける為に、何か仕事を見つけなくちゃならへん」

「でも……彩香、大学には行かへんの？」

「あのけちな父や祖父達は、わたしの為にはお金を出してはくれへんと思う。だって、わたしの母は看護婦さんやったんや。母方のうちは、そんなにお金無いしい」

「なんや、孫にも差をつけるなんて、そんなん考えられへん」

と友里菜が嘆息すると、「友里ちゃんはいいいなあ」と、彩香が言った。

「何で？」

「だってえ、両親が仲が良くて、そしてちゃんと教育にはお金出してくれはるやろ？」

「ん？ まあね」

「それに、彼氏も居てるし」

「ああ、芳人は“彼氏”とはちと違うけど」

「なんで？ キスだけでもしたら、もう正々堂々、彼氏やんか！」と彩香は笑った。「わたしなんか、もう全然もてへん」

「その内、きつと彩香」彩香「好きやで」っていう子が現れるって「ぶつ。ほんまかいな？」

友里菜と彩香は目を見交わして、笑い合った。彩香は小柄だが、笑うとやや歯が出ているものの、そこがビーバーのようで可愛いと

友里菜は感じていた。何よりも、彩香は誠実で真面目だった。彩香にもいい彼氏が出来るといいのに、と友里菜は本気でそう願った。

帰宅して暫くすると、芳人から電話があつた。いつも受話器を手取る度に、友里菜の顔は自然にほころんで行く。

「友里菜かあ？ もうすぐ連休やけど、なんか予定入つとる？」

「練習練習で、一日しか休み無いけど」

「なあ、どこ行かへん？ 親は承諾しとるんやろ？」

「んー、まあね。芳人やつたら、もう公然となつてゐるから。ふふふ」

「なに笑ろてんねん？ じゃあその日、どこ行こかいな。アメリカ村辺りか、それとも季節がいいからどこかの公園とか」

「もう京都はいややよ、わたし」

「うん、もうあそこはええ。なあ、万博公園やつたら、安いと思うけど」

「あの変な塔のあるところ？」

「うん。でも、あそこはオカンが昔、彼氏とデートした所やて。彼氏つて言つたつて、今の父親とは違う人らしいけどな。あははは」

芳人の笑い声はこちらまで明るくする何かを持っていた。

「うん、じゃあ……そこでいい。あそこやつたら、親も安心するし」

「それじゃーな、久しぶりや。友里菜がどう変つてゐるか見もので」

「そんなあー、一ヶ月ちよつとで変つてゐるわけないやん」

「女は、直ぐに変わっていくんや。さなぎから蝶のように」

「ばーかっ」

友里菜と芳人の電話は、両親が呆れるぐらい長々と続いていた。

5 五月の風

5 五月の風

5月は友里菜の誕生月だった。芳人は友里菜に会う前に、駅前の商店街でウロウロし、友里菜へのプレゼントを漁っていた。高校生とは言っても、進学校のI高ではとてもアルバイトなど出来る時間がない。それで芳人の財布は、いつも空っぽに近かった。水泳部に入ってから、とにかく物凄く食欲が出てしまい、帰宅途中で必ず牛丼かマクドを食べないと、家まで持たないのだ。それほど、水泳は腹が減る。

けれども念願のI高に入ったというので、親からの小遣いは確かに増えた。芳人は各店をウロウロし、店主から不審がられたりしたが、遂に大枚はたいてペンダントを買った。女物のペンダントを買ったのは生まれて初めてだ。

芳人がヤンキーの時、ミナミのアメリカ村で、いかがわしい外人の作ったグロテスクな十字架や髑髏のペンダントは買ったことがあるが、そんな毒々しいものを友里菜が欲しがるはずが無い。友里菜はあくまでも真面目で清楚な女の子だ。

散々迷った挙句、芳人は銀製の小さなハートが付いている地味なペンダントを買った。そして慌てて、待合場所の梅田への電車に乗り込んだ。

久しぶりに友里菜に会うというので、芳人はそわそわしていた。友里菜がどんなに変化しているかを見たかったし、又とにかく友里菜の吐息を感じていたいのだ。そしてあわよくば、この間のように、どこかでキスをしたい！ 芳人は自分の卑しい欲望に辟易していたが、けれどもそれが健全な男の子の感情なのだから仕方なかった。

芳人には、まだ女の子の気持ちは完全には把握できないのだ。女の子でも、沙夜のように直ぐ身を任せる子もいるが、それは少数のような気がした。本心から男の子と寝たい子は、やはり高校生ではそんなに居ないだろうし、本気で好きにならなければ、そんな欲望もわかないらしい……とはある本で読んでいたのだ。

両親のときは、高校で手を握っただけで「不良」と呼ばれていたと聞いたが、今では妙な気がする。まして祖父母の時代には、学校も男女別々で、道々目を見交わすだけで「厭らしい」と烙印を押されたのだという。

だから今の時代は、まだましなんやな。好きな子と、堂々とデートが出来るし、キスもあわよくば出来る時代なんやからな。昔の恋人達は、本当に不自由やったんや。あー、窮屈やなあ！

妄想に耽っている内に、電車は到着した。

示し合わせた場所には、大勢の恋人達やカップルが居る。連休中なのだから仕方ないが、芳人はなかなか友里菜の姿を見つけることが出来なかった。時計を見ると、15分も前だ。几帳面で、時間ちようどに来る友里菜はまだなのだろう。

芳人はぼんやりと佇み、人々の群れを見つめていた。その時、向こうから、長いストリートな髪を風になびかせて、スラリとした少女がジーンズ姿で近寄って来た。黒っぽいＴシャツに、薄いグリーンのシャツを重ねている。白い肌が一際目立つ。けれどもどこも無く淋しげだ。

「あつ、友里菜〜！」

芳人は片手を上げた。淋しげな顔が少しほころんだ。

「ここに居たん？」

はにかみながら友里菜が近寄ると、スーッと芳人の脇に立った。

少し見ぬ間に、随分大人になったような気がした。

「芳人、真っ黒け！」

「だって、水泳部やからなあ」

「えっ、今から泳いでいるん？」

「もちや」

そう言うのと、待ちきれないかのように芳人は友里菜の華奢な手を握り締めた。

「友里菜は相変わらず、色白いなあ」

「うふん、そうお？」

ゾクゾクするほどの色つばさが、今の友里菜には漂っていた。中学と高校では、こんなにも違うものなのだろうか？

「友里菜……淋しかったで」

「わたしも……芳人」

二人はピタリと寄り添っていた。不思議なことに、今の友里菜は芳人に対して昔のような警戒心は余り無かった。むしろオトコの臭いがプンプンしている色黒の芳人に、言い知れぬ感情を抱いたのだ。そして自分が昔よりも素直に表現できる。

「ここから、電車に乗るんやろ？」

「うん」と芳人も言葉少なに答えた。

「わたし、今日は少し遅くてもいいんやて」

「友里菜の親は物分りがええなあ」

「それは、相手が芳人だからよ」

はい、いよいよどこかでキスせなあかなあ。どうも今日の友里菜はその気があるらしいし。うっひっひ

「何ニタニタしてんのよお」

「いいや、別にいい」

二人はしっかりと手を繋いだまま、改札口の方へと進んでいった。

6 キスの指南

6 キスの指南

万博公園は、1970年の万国博覧会の会場跡に出来た広大な公園だ。と言うよりも、高度成長時代の“夢の跡”と呼んだほうがより正確かもしれない。

けれども、友里菜と芳人の二人にとって、そんな公園の歴史や成り立ちなどどうでも良かった。良く晴れた日で、大勢の人々が集い、休日を楽しんでいた。

カップルも多いが、芳人にとっては、カップルのほとんどが自分達よりもずっと年上に見える。ただそう見えるだけかもしれないが、芳人は自分達がまだまだ未熟者である事を、なぜかはつきりと認識した。

ふと見下ろすと、友里菜の横顔がある。どこか日本的で淋しげな顔だが、笑うと可愛いし、パツと光が差したようだ。少なくとも、芳人にはそう感じた。

こんなに明るい日だ。とてもじゃないが、人前で堂々とキスは無理っぽい。けれども、汗を流して買ったギフトだけは、どこかで渡さなくてはならない。

が、焦る必要もない。今日は遅くまでいいと、友里菜の両親も認めているのだ。こそこそする必要もなく、焦ってこの前のようなどこか気まずい思いをする事もない。

実は芳人は、水泳部の先輩から聞いた、怪しげなキス指南を思い出していた。

水泳部の先輩達は、確かに亮平の言ったように、体育会系独特の

しごきやどつきは無かった。ただ、口うるさいし、うん蓄が長いのだ。先輩達は、大体成績も良いようだった。

「いいか、大久保！ キスっていうのはな……」で始まった長ったらしいお説教を、水泳の合間に聞かされる派目になった。

「女の子に、突然ドッバーと真正面からキスしても、正直びっくりされるだけや。あつ、それでも平気で『もつとお』とか言う子はやな、それは処女やないねん。処女って、なんか古臭い言い方やけど……つまりや、もうオトコの味を知っている子か、スケベの子だということやな。」

純情可憐な乙女は、どこか恥じらいがあるか、それとも引いてしまふもんやで」

「て事は、林先輩つ、僕の場合は相手が、ひるんだような気がしたんですけど、それって……」

「うん、その女子は、間違いなく処女やな」と林先輩はうなずいた。

「ほんまですかあ？ にしても、なぜそんな古臭い言い方を？」

「俺はな、大久保、古典に興味があるねん。つまり、バリバリの文系やな」

「バリバリの文系……？」

「ま、そんなことは良いとして、大久保っ！ もう彼女がおるんか？ こいつつ、う、うらやまし〜」

「K高の子ですって」と横から、亮平が口ばしを入れた。

「K高！？ 益々許せんな〜」

そう言いつつも、林先輩の目は笑っている。

「じゃあ、どうやったら、女子にキスを巧くすることが出来るんですかあ？」

「ま、その氣いにさせるこつちやな」

「その氣に？」

「つまりだ、大久保。演出するんや。ほらほら、映画とかであるやる？　まず、ほっぺにチューしたりとか、さり気なく耳の下にキスするとか、うなじもええなあ」

「ほんまにそれで、その女子はその気になるんですか？」

「嘘やと思ったら、今度そのテクニクを使え！」

「は？」

「ほくら、もう話は終わり！　さつさと500m泳がんかい！」

そう言うのと、林先輩は、芳人の背中をドンと押して、プールに突き飛ばした。

「ぶはっ！　どうも、ほんまかどうか怪しい……？」

そう感じながらも、芳人は必死でクロールで泳ぎ始めた。最初50mがやっとだったと言うのに、先輩達の教え方がいいのかどうか、芳人はいつの間にかかなり長く泳げるようになっていた。

「大久保君、あの先輩の言うことは当てにはならないですよ。だって、林先輩、彼女がまだ居てへんって言うし」と亮平が耳打ちした。

「単なる妄想かいな？」

「『源氏物語』とかの読みすぎじゃないのかな？」

けれども、芳人は今日あわよくばそれを実行しようと企んでいた。

人ごみが多く、二人は芝生に座り込んだ。本当はただこうしているだけで、幸せな気分になるのだ。一緒に居て、他愛ないお喋りするだけで、本当はそれでいいのかも知れないとも思う。

「何考えてんのぉ？」

見透かされたように、友里菜が芳人の顔を見上げる。

「芳人、なんか締まってきたみたい。やっぱり、水泳って、身体にいいのかなあ」

「そう？　そう思う？」

芳人は途端ににやけた笑いを浮かべてしまったのだった。

7 銀のハート

7 銀のハート

芝生に座り広大な公園を眺めていると、そこがもと万国博覧会エキスポ1970年であったことを忍ばせるものは余り無いようだ。時の流れと言うのは恐ろしいかもしれない。芳人の両親がデートしたという所に、自分達もデートしている。不思議な気がした。

「ねえ、芳人。今でも樋口君とは友達なん？」

と小首を傾げながら、友里菜が尋ねた。

「樋口？ ああ、あいつ今でも時々ピッチに電話して来よるわ」

「確か、樋口君、N商業に入ったんだよね」

「うん。そこには、沙夜の“彼氏”だった岡元もいるそうや。なんや、柄の悪い奴らばかりらしい」

「樋口君、頭はそんなに無いけど、でも心は結構綺麗な人やと思うわ」

「かも知れへんな……だから、あいつとは今でも付き合ってるんやろうな」

「な〜んか、心配。樋口君、N商業で大丈夫やるか？」

「う〜ん、そうやなあ」

芳人には、余り関係の無い樋口に同情する友里菜の気が知れなかった。別に嫉妬ではない。友里菜は樋口などには全く関心が無いのは知っていた。けれども友里菜の癖は、どこか孤独で辛そうな人間に常に向けられていたからだ。

それは、阪神淡路大震災の時のボランティアに志願した事でもよく分かる。

「そう言えば、沙夜はどうしているんやろ？」と友里菜は、案の定呟いていた。

「あいつなら、S高校に入ったらしい」

S高校と言えば、この辺りでは最低クラスの公立高校で、評判が悪かった。

「だけど、沙夜の奴、岡元とは別れたそうやで」

「ああ、良かったわあ！」と友里菜は正直に答えた。「岡元君と一緒にだと、又何かしでかしそうやったからね」

「確かに、岡元はろくな奴やないなあ。ま、あいつと別れただけでも、正解かも」

そう言うってから、芳人は不思議そうに友里菜を見下ろした。

「そんなことより、友里菜、部活どう？ 以前、あんまり面白くないと言っていたやん」

「部活かあ……」

友里菜は両手で膝を抱え、その上に顎を載せた。その横顔はどう見ても幸福そうではない。

「今でも……どうも引つかかるところがあつて」

友里菜は思い出していた。

担当教師が居なくなると直ぐ、三年生の何人かは棒を持ち出して、ドンと床を叩くのだ。

「はよう、発声練習発声練習！ 何ばやばやしとるねん！ 今年の一年生は、もうあかな。鈍くさい奴ばっかしや。特にソプラノ！ 何しとんねん、一体！？ あゝあ、こんなでは、今年のコンクールも又負けやな」

友里菜達一年生は、ただ黙り込んでいた。何か言い返すと、その百倍ものお返しがあるようで、心底怖かったのだ。先輩に恋する……なんて、おかしいにも程がある。少なくとも、このコーラス部で

は、そんなことは500%在り得ない！

かといって、直ぐに部活を辞めるのも、友里菜の自尊心が許さないのだ。

「じゃあ、芳人、水泳部は？ 結構きついんと違う？ シゴキとかある？」

「それがなく、ぜんぜんないんや」

「へえ、体育会系なの？ それは運がいいわ」

「元々、先輩達も本気になって、府大会に一番になるうとか、そんな気は毛頭ないねん。一番どころか、府大会に出るのも面倒くさそうやし、出てもビリやからな」

「それやったら、運動部の意味がないんと違う？」

「それがなく、乗せるのがうまいんやな。つまりは、頭がええねん。僕だって、いつの間にか上達していたし。たった一ヶ月で」

「根性よりも、理性で勝つ、ってタイプなのね。やっぱり、I高はK高とは違うな。うちの高校は、とにかくど根性と根性の一辺倒や。それなのに、勝てへん」

友里菜は黙り込んだ。どうも部活の話は鬼門らしい。

芳人はボタンとその芝生の上に寝そべった。青い青い空が広がっている。

「友里菜も寝転がってみ？ 良い気持ちやで」

「そうお？」と言いつつも、友里菜もゴロンと寝転がった。「ほんと！ 良い気持ち！ 大きな空！」

寝転がった友里菜の手を、芳人はそつと握った。

「やなことがあっても、何とかなる、と言いついて聞かせてこれからもやっていこうよ」

「なんや、もう、芳人って殊勝なことを言っんやから。I高にはいったら、なんか感じ方や、様子まで違ってきて」

そう言いながらも、友里菜も又芳人の大きな掌の感触を確かめるように、握り返した。芳人は少し横を向くと、友里菜の幾分ふっくらした卵型の頬にサツとキスをした。林先輩の言った通りに……。

友里菜は振り向くと、ニツコリと微笑んだ。今までにない安心した微笑だし、妙に色っぽい。

ふへえ、やっぱり先輩の言った通りやったかな？

芳人もニツコリと笑い返すと、ポケットから誕生日のギフトを出してきた。

「ほら、これ。もう直ぐ友里菜の誕生日やろ？ 16歳の」

そう言えば、出会った時はまだ友里菜は13歳だった。

「あつ、なに、これ？」と受け取った友里菜は本当に嬉しそうだ。

「開けてみ」

「うん」

そううなずくと、友里菜は包みを開けた。小さな銀色のハートの付いたペンダント。それを友里菜は右手で持って、宙にユラユラとゆらした。日の光が反射して、実際の値段よりもずっと高価に見える。友里菜には、ピカピカの金色よりも、慎ましやかな銀色の方がよく似合う。

「ありがとう」

「い、いいや」

友里菜の目が真剣になり、そして自分も身をずらしてもっと芳人に近寄った。

「この辺り、誰も居てないわ」

その意味が何か、芳人には直ぐにぴんと来た。そして、その言葉を友里菜が後悔する前に、芳人は友里菜の唇を奪った。友里菜の身体が少し硬直したような気がしたが、以前の時のような不自然な硬直振りではなかった。

芳人は夢見心地で唇を離した。友里菜の目が笑い、そして右手にはしっかりと銀のハートのペンダントが握られていた。

「友里菜……好きや……」

「わたしも……芳人」

今までにこのような至福の時間を過した事が無かったように、今の二人には感じられる。この5月の光の中では……。

8 初めての試練

8 初めての試練

不思議な事に、セカンド・キスをした後、芳人は今日はもうこのままでいいと思った。自分達がまだ親から養われている高校生である事、そしてこれからの勉学の生活を考えると、そんなに焦らずにいた方が得策だと考えたのだ。

芳人の思考は、段々と大人に近くなってきた。理性や抑制がどんなに大事なもののなか、社会生活を営む上で、ルールや常識が如何に大切なのか……。それを芳人は、進学校と言われているI高で、知らず知らず学んで行ったような気がするのだ。

それは友里菜もそうだった。自分の好き勝手は、ある程度我慢しなければ……。それは昔から慎重な性格の友里菜が有していたものだったが、友里菜は高校に入って益々それを認識した。

二人は暗黙の了解のもと、かなり遅く暗くなるまで公園に居たが、やや肌寒くなった頃、ようやくサヨナラを言った。

「今度はいつ会えるかな？」と芳人。

「分からへん」とポツリと友里菜が答えた。閉門のゲートをくぐりながら、二人は繋いでいた手を名残惜しそうに離れた。

「わたし、ここからバスで帰るわ。そっちの方が近いから」

「すぐそこまで送って行くよ」と慌てる芳人。友里菜は首を振り、「誰かに見られるのが嫌なの」とキツパリと言った。

二人が交際しているのは、双方の親も知っているし、親しい友達も知っているが、ただし近所の目と言うのは案外厳しいものだ。

芳人は渋々送って行くのを断念した。

「ごめんね」と友里菜は素直に謝った。「又、いつか会おうよ、ね、
芳人」

「うん……ま、いいか」と芳人は気乗り無さそうに、けれども大人の態度で答えた。

バスに乗り込んだ友里菜は、満員の乗客の中に紛れ込み、どこに居るのか分からなくなった。芳人はなぜか胸が迫り、妙な予感に襲われた。一生懸命目を凝らす、友里菜の姿は見えないまま、バスは発車して行った。

ふーっという溜息が、芳人を包む。けれどもより遅くなった芳人は、友里菜が首に下げた銀のハートのネックレスを眺めているだけで幸福になったのを思い起こしていた……。

進学校は厳しい。早速試験があり、芳人は自分が案外いい位置に居るのを知って小躍りした。水泳部は楽しく、少しずつ暑くなる日々、梅雨の雨の中をもせつせと泳ぎ、帰宅してからは、半分居眠りしながらも必死で勉強した。

未だに友里菜はライバルだ。そしてカノジョでもある。時折の電話やFAX、それだけでも嬉々としてくるのだった。

けれども、友里菜の方では事は重大な局面を迎えていた。

なぜか父親が数日家に居るのだ。そして友里菜が帰宅すると、家の中には妙な湿った雰囲気漂っていた。今まで仲がよいと思っていた両親が、余り口を効かなくなっていた。

「おかえり」と言う母親の声が、妙に素っ気無い。

けれども青春真っ盛りの友里菜には、そんなこと、余り気にも留めないことにしか思われない。友里菜には友里菜の高校での生活があり、それはそれで結構大変だったのだ。

中学では、二番か三番だったクラスでの順位も、半ばまで落ちて

いた。周りが同じような成績の子だから仕方ないといえばそれまでだが、自分の価値観まで否定されたようなそんな沈んだ気持ちになっ
ていた。

加えて、コーラス部は相変わらずちつとも面白くない。いや初秋
のコンクールの為に、練習はもつと厳しくなっていた。

そしてある日、決定的なことが起こったのだ。

6月のある日帰宅すると、母親が暗い顔で友里菜を呼んだ。父親
は二階の自室から出てこない。

「友里ちゃん……あのね、ちょっと話があるの」

その声音はただものではなかった。

「なあに？ 部活でもうクタクタなのに……。あれっ？ 夕飯、ま
だなの？」

「うん」と母親は簡単に言った。「何か取る？ 作りたくなくて」

「ああ、いいよ」と友里菜。「それより、なに？」

母親は揉み手をし、なかなか言い出さなかったが、やがて顔を上
げた。

「お父さん……リストラされちゃった」

「リストラ！？」

友里菜は、それが *restructure*（＝改革する、再構築
する）と言う単語であることも知っていた。そして、世間ではその
ことで、色々喧伝されていた事も。実際の単語の意味とは違って、
日本語では何と言う冷たい響きなのだろう。

「でも、お父さん、まだ49歳でしょ？」

「ううん、50になっちゃった」

「だけど……そんなに若いのに、リストラってあるの？」

「それがあるのよ！」と言う母親の声には、悔しさのようなものが
漂っている。

「残念だけど、お父さんと色々相談したの。この家のローン、もう払えなくなっちゃったから……売って引越ししなくちゃ……ならない……」

「ええっ！？ この家、売っちゃうの！？ そんなに払えない家、何で買うのよぉ！」

「払えたのっ！ 以前はね」と母親はキツとなって言い返した。「だけど、今度行く子会社、幸い関西だけどここよりも遠いし、それに……給料半分ぐらいだし……」

未来は分からない……。それは初めて友里菜が経験する、大人の洗礼だった。

芳人の住んでいるこの町から、離れて行くのだ！ そんなこと、今まで考えもしなかった。世間の風当たりの辛さなど考えずに、ぽーっと生きてきていたが、16歳になった途端、前途は危なっかしく感じられてくる。

その晩、友里菜は芳人のうちにFAXした。

『わたし達、この町を出て行くかもしれません……』

芳人が見る前に、芳人の母親がそれをチラッと一瞥した。芳人には何も言わずに手渡したが、芳人の背中が丸くなったのを、芳人の母親は淋しく感じた。

9 友里菜の居ない町なんて……

9 友里菜の居ない町なんて……

友里菜がこの町を出て行く……引越して行く……。

芳人の頭はもう真っ白だった。何も海外に行くというのでもなければ、日本の遠い最果ての地に行くというわけでもないのに、今の芳人には物事がちゃんと把握できなかった。

けれどもよく読んで見ると、友里菜の父親がリストラに合い、家のローンを払えなくなったから、と言うとだったし、引越すといっても近隣の市町村だ。むしろ、K高校に近い所に家がマンションを借りる、と言うのだ。

けれども、芳人はいつまでも友里菜が自分の側に居るものとばかり思っていたので、これは晴天の霹靂に等しかった。もうあの家は誰か知らない人手に渡るのが……あの窓際から友里菜の歌声が聞こえないのか……。そう想像しただけで、居たたまれない思いだ。

無常、という言葉がこれ程響いた事はない。確かに世の中は動いて行く。永遠に常なるものは、この世には無いのだ。

リストラ、リストラって、よく新聞とかにも載っていたよな。けれど、まさか友里菜の身にも、そのような事が起こるなんてなあ。うちもどうなるか分からへんやんか。これでは益々友里菜と出会う機会がなくなる……。

いいや、高校は今と同じなんやから、別にそう悲観する事も無い。どこかへ消えていくんじゃないし。

そう自分を慰めては見たものの、芳人の気は晴れなかった。だからと言って、今直ぐ友里菜のうちに電話を入れるのも躊躇われた。

いずれ、少し経ってから友里菜にちゃんと聞こう、そう決断すると、芳人は又気合を入れて、ノートを開いた。

けれども、どこかふわふわした気分で落ち着かず、何も頭に入らない。その晩、芳人はとうとう何も宿題が出来ずに終わった。

夏休みまでにはもう一度友里菜に会いたい、という芳人の思いはなかなか叶えられそうになかった。二人とも勉強と部活で精一杯。土曜日曜にも部活はある。

加えて友里菜は、両親が度々口げんかをしたり、家の中の暗い雰囲気能耐えられず、帰宅はもっと遅くなって行った。

時々、沙夜や芳人が家に帰らず、外でいつまでもブラブラしていた心境が分かり、今では何だか我がことのように感じられてくる。あの時は、二人を幾らか軽蔑していたようだった、そんな自分が今は真に恥ずかしい。

そうこうしている間にも、友里菜の留守中不動産屋が出入りし、買い手を連れてくるようになって、事はいよいよ現実味を帯びてきた。友里菜の心にも不安がどんどん押し寄せ、こんな時ほど自分が一人っ子である事を恨んだ事は無い。

けれども時折かかって来る芳人からの電話が、友里菜を幾らか楽にしていた。芳人は心から心配しているようだ。

「なあ、近々どこかで会えへん？」と芳人から電話があつたその晩、「うん」と返事をしようとしていた時、両親が大声を上げて、喧嘩をし始めた。友里菜は慌てて、子機を持って二階にあがったが、すでにその声は受話器を通して芳人にも聞こえていたようだ。

「あれれ？　なんや、あの声！？」

「だから言つてたやろ、両親の喧嘩とか」

「ああ……そうか……」

親の激しい喧嘩などほとんど無い芳人のうちでは、想像すら出来

ない事だった。むしろ、芳人のうちでは兄の雅人との喧嘩の方だったのだから。その兄も、大学に行って少しはおとなしくなり、時折皮肉は言うもののもう以前のような、組んずぼぐれつのような喧嘩は無い。

階下からガチャーンと言う物音がしてきた。そして何やら母のキイキイというヒステリックなわめき声、そして父の怒鳴り声。受話器を持つ友里菜の手が震え、瞳からは涙がわき出てくる。

「友里菜……あの音？」

「もう、もうわたし、耐えられへん！」と友里菜は泣き出した。「いつもこれやねん。大体毎日、親は喧嘩ばかりで」

喉もとから搾り出すような友里菜の声を、芳人は始めて聞いた。友里菜の鳴咽が、耳元から響いてくる。

「どこかへ行きたい！ わたし、どこかへ。恥ずかしいし、情けない。あんな親だったんかと思うと」

「友里菜、しっかりしろよ！」と芳人は思わず声を荒げた。怒鳴るつもりは無かったのに、余りにも弱気な友里菜に別の面を見たように感じたからだ。

「泣いたって、何も解決しいへんぞ」

「ほんま……そやね」と友里菜はすすり泣きながら答えた。

「ごめん、怒鳴って」と芳人は瞬時に後悔した。友里菜はたった一人で、家庭の問題に遭遇しているというのに、優しい言葉の一つもかけてあげられないとは！

「いいの。わたしって、案外弱虫だったのかも……」

そうつぶやく友里菜の声は淋しげだった。

「僕、何も出来へんで、ごめんな、友里菜」

「うっん。わたしも泣き言ばかりでかんにん、芳人。電話くれただけでも嬉しいのに」

「早く夏休みが来て、又友里菜と会いたい」

「わたしも」と友里菜は小声で言った。けれども、芳人の声を聞いただけで、どこか心が落ち着いてきていた。友里菜は少しだけ微笑む。

「早く、ゆつくりと話し合いたいなあ、芳人と」

「いつ、今の家を出るの？」

「さあ……多分、夏休みの間じゃないかな」と友里菜は答えたが、それは本当になったのだった。

10 夏休みの前に

10 夏休みの前に

七月になると、暑い日々が続き、芳人はほぼ毎日プールで水泳の練習をしていた。今年の三年生は全員八月の府大会に出るというが、多分全員がビリになるだろうと言うことは分かりきっていた。

他校の生徒達のタイムは到底越えられそうもないほどだが、進学校でも府大会に出てやる、という心意気だけは凄まじい。ある意味無謀だし、ある意味、アホかもしれない。けれども、芳人にとってはそこがこの水泳部の良い所だった。

先輩達はうん蓄は多いが乱暴はしないし、芳人はここでは思い切り笑い、はしゃぎ、そして語り合う友達が出来たからだ。毎日クタクタになりながらも、芳人の日々は満足だった。

と同時に、芳人の成績もまあまあで、進学校に居るにしては落ちこぼれとも縁遠い。芳人は大いに満足し、そして更なる自信を持つようになっていた。

けれどもある日の夕方、その日は部活の友達とどこかで食べた後で、帰る時間が遅くなったのだが、家に向かう天蓋付きの繁華街で、向こうから下を向いて歩いているだらしのない格好の高校生と鉢合わせになった。

「あつ」と芳人は小さく叫んでいた。「樋口やないかあ?」

樋口はなぜか逃げようとして身体を傾けたが、直ぐに諦めたのか上目遣いに芳人を見上げた。

「どうしたん? その傷!？」と芳人は驚きの声をあげた。樋口の右の頬は紫色に腫れあがり、その目の下にも頬にも引っかき傷のようなものがあつたからだ。もうかなり遅いとは言え、夏の夕刻はま

だ明るい。

「ああ、芳人かあ……」

樋口は気の無い返事をした。

「最近、連絡くれへんやったな」と芳人は畳み掛ける。「でもそんなことはどうでもええ。この傷は、樋口？」

「ああ、この傷……？ 転んだんや」

「嘘付くな！」と芳人は以前のようなヤンキーに戻ったかのように、怒鳴りつけた。

「そんなん、どこを見ても殴られたとしか思えん」

樋口はまたまた下を向いた。二人の間に、暫く沈黙があつた。ポタポタと汗の雫が、芳人の額から落ちて行く。

「な、久しぶりやし、暑いからどこかに入ろう？」

「あ……そ、そんな金、無いから……」

樋口はオドオドして言い繕う。

「金ぐらい、僕が出すよ」

「じゃ、あの、ミックスジュースでいいから」

「ミックスジュース？ お前いつになつても、子供やなあ」

芳人は樋口を引っ張っていき、近くのコーヒー店に入った。樋口は黙って付いて来ると、芳人の注文のまま、その黄色いミックスジュースを一気に飲みほした。

「誰がやった！？」と芳人は単刀直入に聞いた。樋口は相変わらず黙ったまま、とつくに無くなったミックスジュースの氷をかき回している。何か言おうかどうかしようか、躊躇っているかのよう。

「な、樋口、まさか、お前……岡元に……」

「そや。やられてもうてん」と樋口は猿に似た顔を少しだけ歪めた。「なんで？ 同じN商やけど、クラスは違うって言つたやん」

「俺……沙夜が忘れられへんで、沙夜にちよくちよく電話しててん。

沙夜は余りいい気持ちじゃないとは思ったけどな、なんか心配で……」
「それで、チクられた？」

樋口はこっくりとうなずいた。

「なんや〜！ 岡元と沙夜、まだ続いてたんかい」

「違うねん。岡元の方がよりを戻そうとしてたんやけど、俺が止めてた。それ、岡元が知って、それから俺を見たら……仲間とか呼んで……」

「いじめか！」

「な、大声出さんといて、芳人〜」

「なら小声で言うよ。けど、それって、いじめやる？」

樋口は気の毒なほどしよげていた。

「だからって、どうしようもないやんか」

「じゃ、沙夜から手を引いたらええねん。沙夜って子はなあ……」

「芳人！ それ以上は言うなよ」

と遮る樋口の声には凄みが在った。瞬間、鈍い芳人にもやっと分かったのだ。樋口は前から、中学の時から沙夜が好きだったんだと。道理で、宮本の子を堕ろした時にも、樋口は一人沙夜を庇っていた。そうだったんだ……。それなのに、沙夜には樋口の気持ちがないのだ。ちようど自分もまた、今まで気付かなかったように。

「分かったよ、樋口」

「何が？」

「いいや。とにかく、岡元の心象を害したらあかんわ。あいつ、獐猛な犬と一緒にやからな」

「盲導犬まうどうけんはいい犬やけど、獐猛犬じょうもうけんは、反対かあ」

「おいつ、冗談やないぞ」と芳人は言い含めた。「今度からは気をつけるんやで」

「うん」と樋口はおとなしく答えた。

それから二人は別の話題に切り変えたが、芳人は樋口と別れてからも、どこか気になっていた。

11 彩香の変身

11 彩香の変身

期末試験の結果を見て、友里菜は相当しよげ返っていた。思っていたよりも点が伸びないのは、両親の毎日繰り返される喧嘩のせいだと思っていたのだ。と言うよりも、そのせいにしたかった。

どうやらい値でこの家は売れそうになく、売り損だという事が分かったものの、ローンを払うのが難しく、損をしてでも家を売らなければならぬようだ。

その内に家中がシーンとした。

「友里ちゃん……とうとう、家が売れたわ」

そう言い出した母親の声が、沈んでいた。今はもう友里菜の成績の事などはどうでもいいようだ。暑い日々の台所、じっとしていても汗が流れ出てくるが、部屋の中は妙に寒々としていた。

「ああ、そう」とだけ友里菜は答えると、自室に上がって行った。どんな事情であれ、自分の家を失うのは辛い。かと言って、両親を恨んでも仕方ないのだ。これがご時勢というものだろうと、友里菜は自分に言い聞かせていた。

あと数日で一学期も終わるという次の日高校へ行くと、彩香が見事に変身していた。

「ち、茶髪！？ 彩香……！」

「別にいいやん。校則にも書いてへんし」

彩香は清々した顔つきで、啞然としている友里菜を見つめた。

「友里菜も茶髪にしたらええやんか。今流行っているしい」

「え？ ああ、うつん、でもねえ……」

「アハハ！ 所詮友里菜には無理やね、友里菜はお堅いもん」

“ お堅い友里菜 ” “ 生真面目な友里菜 ” …… その言葉は中学時代にも何度も聞いた。けれども、高校に入っても聞かされるとは！ 人間は、結局は何も変わらない、と言うことだろうか？

確かに校則は非常に緩やかで、男の子にも茶髪はチラホラ居る。けれども、友里菜は校則が怖いのはなかったし、まして他人から揶揄されるのが嫌なのでもない。

ではなぜかと言うと、多分友里菜が茶髪にして一番驚き怪しむのは、芳人だと知っていたからだ。芳人は友里菜の直毛の黒髪が好きだと前から言っていた。友里菜が茶髪になったら、もしかすると芳人が離れて行くのでは、という不安があったのだ。それでなくとも、最近友里菜は色々なことで不安だらけだったから。

ぼんやりしている友里菜に、彩香はちよつと控えめに聞いてきた。

「なあ、友里菜。夏休みには何するん？」

「決まっているじゃない。部活、部活、部活よあ。もうお、秋のコンクールの為に、先輩の方が必死になっているもんね。ちよつとでも気を抜くと、罵声が飛んでくる。んもう、嫌になってくる」

「ふうん、何か夢が無いなあ。でコンクールに勝つてどうするん？」

「ん？ そんな事言われると、確かにコンクールに勝ち進んで、結局どうするんやろう」

二人は顔を見合わせると、ふふふつと笑った。

「勝つことに意義があるんやわ」

「ま、そう思うとき」と彩香は嗤った。

「で、彩香は？」と友里菜が聞くと、彩香は急に息を潜めた。

「誰にも言わへんどいて」

「ああ、ええよ」

「わたしなあ、十三^{じゅうさん}で、焼肉店で働くつもり。つまりは、バイト」

「はあ！？ バイト！」

「何がおかしいのん？ 校則にバイトは禁止とは書いてへんよ」

「でも、何か、彩香らしくない」

「なんで？」

「だって、彩香って、お嬢さんなのに、本当は。お父さん、大学病院の外科医長なのに」

「そんなん、関係ない」と彩香は少し怒ったように反論した。「だって、お母さんだけ、働かせたくないし」

「お母さん、化粧品セールスしているって聞いたけど……」

「そんなん、わずか。実は、母方の親、つまりは祖父母から毎月お金借りてんの」

「は〜、そうかあ、現実はきついんやねえ」

二人は少しだけ黙り込んだ。始業の鐘が鳴った。

「そうか〜、この夏は友里菜にとっても、結構人生変わる夏なんだ」
彩香は思い出したように、そう言った。

「うん」と友里菜もうなずく。現実には高校生にとっても、大して幸せではないようなのだった。

けれども、それが重大な事を引き起こすとは、今の二人には考えもしなかった。

12 女子のグループ

12 女子のグループ

「ねえねえ、あのさあゝ、柿沢さん」

突然背後から声を掛けられて、友里菜はビクツとして振り返った。放課後、これから部活に行こうと言うところだったからだ。目の前には大柄な、西野茜と言うクラスの女子が居た。彼女は、友里菜と彩香が一応属している女子のグループのまとめ役だ。眼鏡を掛けた秀才で、部活は英語研究会。けれどもその身体のせいと言うよりも、どこか威圧的な雰囲気をもいつも漂わせている女子だった。

「な、何？」

「ちょっと話聞いていい？」

「うん、でも何？」

心臓がバクバクするのはなぜだろう？

「あのお、仁科さんのことだけど」

「ああ、彩香のこと？」

「最近、仁科さん変ったと思わへん？」

「ああ……うん、まあ……少し派手になったかな？ 茶髪に染めたし、それに服装もなんか大胆になったし。でもそれが？」

「はーっ、柿沢さん、何も知らないんだ」

「えっ、何？」

西野茜は、ちょっと小ばかにしたように友里菜を見つめた。

「あいつ、色気付いちゃったみたいやん」

「そう……かなあゝ？」

「ふゝん、そうかあ。仁科さん、あんたにも何も言っていないんだ」

「一体何なのよ？」と友里菜は幾分不愉快になりながら、尋ねた。

明日は終業式という日だ。今更何なのだろう？ 「色気づいたって何よ？」

茜は意味深に友里菜を見つめると、耳元に囁いた。

「仁科さん、見られたってよ」

「何を？」

「ほら、古典の先生、大河原っているでしょ？ あの30過ぎの独身の」

「ちよつと怖い先生……かな？」

ふふふつと茜は嗤った。

「そしてスケベーな奴」と茜は付け加えた。

「わたしのグループの中で見た奴が居るんだ。仁科さんと大河原、ミナミと一緒に歩いていたって。後を付けたら、暗がりですてきな男でしてたって言うからね。あおう、知ってる？ あの辺り、ホテルが多いところ。ま、あんたには無理かな？ そんな所はさあ」

「それって、ほんま!？」

「チョー、ほんま」と茜はニンマリと微笑んだ。「嫌な奴、偽善者やね、仁科さんって。親友のあんたにも言っていないなんてね。そして陰では、こっそり大河原と……。ま、大体夏休みに、墮落してしまうと言っけれど、仁科さんはちと早いわ」

茜は身を離れた。

「あのさ、うちのグループは大体、上位15番までって決まってるしい、男遊びなんかする奴は入れたくないの。茶髪だって、うちのグループは駄目なの。ちゃんとした所なんよ、うちのところは。あら、柿沢さんはいいわよ。だって、I高の子が彼氏なんですよ？」

I高のような進学校の子なら、ここではOKやから。ぶふふふ」
それから茜はもう一度念を押すように言った。

「あんたも気をつけてね、あの仁科さんには。あの子、ええかつこ

しいやから」

それから茜はスーッと離れて行った。あとには子分格の女子が一人、ちらつと友里菜を一瞥して教室から出て行った。

友里菜の心臓はまだ打っていた。ふと見ると、下位クラスの女子のグループ、これは全員が茶髪でルーズソックスなのだが、そのグループが妬ましそうに友里菜を見つめていた。

友里菜は普段は余り行きたくないコーラス部の部室へと、慌てて急いだ。

けれども脳裏には、大河原と手を繋いでいる彩香の姿が、幻のように浮かぶのだ。信じられなかった。けれども、あの茜が嘘を付くはずも無い。友里菜の心は乱れに乱れていた。

そうかも知れない、けれどそうではないかも知れない。友里菜はどっちを信じていいのか、分からなかった。唯一つ分かった事は、この女子のグループには、掟が厳然と存在していると言う事なのだ。

13 女王蜂にはなれない……

13 女王蜂にはなれない……

友里菜のクラスには、他にも女子のグループが存在していた。

ほとんど目立たない、部活にも余り入らず成績もパツとしないが大してワルでもないグループ、それから一人の美少女を中心とし、あとは取り巻きのような連中ばかりのグループの二つ。そしてそれらのいずれにも属していない、取り残されたか、或いは孤高をキツパリと維持しているような女子達が数人居た。

けれども友里菜は一応、お堅いと言われているグループに何とか属し、そして綾香と言う友達も出来た。これで満足していいはずなのだが……実は美少女と取り巻き達グループのことがいつも気になっていたのだ。

美少女、伴坂沙莉奈はこのK高校でも有名な、一年生では評判の“美少女”だったのだ。おまけに成績も友里菜よりはずっといい。茶髪ではないが、元々茶色い髪なのだと言われていた。それを信用するかしないかは、各人にかかっていたが、そんなことよりもいつも輪の中心に存在するという事が、友里菜には考えられない程の羨望だったのだ。ほとんど妬ましいと言ってもいいぐらいの。

かと言って沙莉奈は、意地が悪い人間でもなく、ツンとしているわけでもない。いつも誰かに見られ賞賛されている、と言った自己満足のせい、他人には寛容でそしてそつがなく、いつも晴れやかだ。

沙莉奈の彼氏になりたい、と思っている男子は掃いて捨てるほどいたが、けれども不思議な事に沙莉奈は今のところ誰とも付き合っ

ていないらしいのだ。子分格の取り巻きの女子達をはべらせている様は、ちょうどタカラヅカのような雰囲気だった。

けれども友里菜が本当に沙莉奈のことが気になって仕方ないのは、実は沙莉奈もコーラス部だったからに他ならない。おまけに二人ともソプラノだった。悔しいのは、コーラス部の先輩の男子達が、揃いも揃って友里菜達、雑魚（雑魚）には厳しいくせに、沙莉奈には一目置いているといった事だった。

考えると腹が立つ。けれども、沙莉奈事体には特別非がないのだから仕様が無い。元々、“女王蜂”に生まれ付いているとしか言いようが無いのだ。

友里菜が急いでコーラス部の部室に入ると、そこには冷たい先輩達の目があった。

「済みません〜！」と大声で言う（これはこの部のしきたりで…）、一人だけ、

「あ、いいのよ〜」と言う甘い声がかかってきた。一つ先輩の女子の、東美香。そして彼女こそ、沙莉奈も敵わない、本物の“女王蜂”だった。

小柄な沙莉奈とは違って、東美香は大柄で、でも決してデブではなく、スラリとした色白の肌、パツチリとした瞳の、遠めには「あれ？ カノジヨ、ハーフ？」と言うほどの美少女中の美少女なのだ！ おまけに後輩達にも面倒見がよく、決して威張らない。

沙莉奈は友里菜にとってはまだ近い感じだが、美香は完全に、「もうっ、負けたああああ〜」としか言いようが無いほど、完璧な、まさに偶像的アイドルだった。他校からもわざわざコーラス部の発表会に見に来るのは、実は美香が目当て、と言われているくらいだ。更に凄いのは、美香はソプラノの中でも一番上手いと言われている。ソロのパートがあるときは、必ず彼女であり、三年生にもこの

ようなアイドルは居ない。何もかも揃いすぎだが、世界にはそういう人間も必ず居るのだ……。

沙莉奈と言ひ美香と言ひ、そのような二人と比べたら、友里菜は自分が相当ちつぽけに感じた。これを劣等感というのだろう。

中学時代は、自分が幾らか女王っぽい所もあったが、高校に行くと、当然のことだが上には上がいる。どこへ行っても、自分よりも遥か上が居るという事を今改めて認識していたが、社会に出れば更に上が居り、競争ばかりしては限りが無い。これは本当のストレスだった。

友里菜は今、上ばかり見ており、下を見つめるゆとりすらなかったのだが、自分が家を失くした“家なき子”で、クラスでもパツとしないどうでもいい存在であるのをこれほど強く感じたことは無い。本当は、芳人と言うかけがえの無い彼氏が居るというのに……。友里菜はこの時期、自分自身に自信がなく自己を確立していなかった。徹底的に愚かでアホだったのだ。

わたし、決してあんな女王蜂にはなれやしない。あんな風に、他人を魅了するような人間なんかには、絶対に絶対になれないんだ！ 人それぞれ差があつて当然と言つけれど、何か不公平だな。

友里菜がボーっとしていると、

「ホラ、そのソプラノお！」と罵声が飛んできた。まだ先生が来ていないので、二年生の先輩の男子が、仕切っているのだ。「今度から、遅れるなよ！ 怠慢な奴は、コンクールには出されへんからな！ よう考えとけ！ 他の奴らもやで。分かったな！」

「は、は……い」と一年生達はそう答えたが、

「ちつ、嫌な奴！ はよう、1年経って出て行け」と押し殺したような声が隣で聞こえた。それは呪いの言葉にも聞こえた。友里菜は

誰かは敢えて見ようとしなかったが。

なんか違うな、この部活、と言う思いは、友里菜にいつも付きまどっている。この日、友里菜は彩香のことと、身近に存在する女王達のことと、さっぱり上手く歌えなかった。

14 夏休み、束の間のデート

14 夏休み、束の間のデート

いよいよ高校生活最初の夏休みが始まったが、友里菜はコーラス部の練習と合宿、芳人もまた水泳部の試合があると言うので猛練習に明け暮れ、二人が空いている日はほとんど無かった。

同じ部活でも、高校の部活は中学とは比べ物にならないほど厳しいとは聞いていたが、これでは自由な時間など無いに等しい。

おまけに友里菜は、八月のお盆休みに引越しが控えており、その準備もあった。方や芳人は、毎日部活が終わって家に辿り着くや否や、なんと玄関で寝てしまう有様だったのだ。

例によつて、秀才の兄雅人の嫌味が始まる。

「良い大学に入ろうと思ったら、部活なんか血道を上げるな！
つたく、お前は何か夢中になると、なんも考えずに突っ走る奴やからなあ」

「いいやないの」といつものように、母親が芳人の味方だ。

「青春は二度と来いへん。好きな事を思いっきりやるのも、又いいものや。まして男の子は、なんかスポーツするのも、一生為になるさかい」

「ふん。そんな甘つちよいいものかな？」と揶揄しつつ雅人は、玄関でボタンと倒れたまま、大鼾で眠りこけている弟を見下ろしながら二階に上がった。

さすがの母親も、芳人を揺り動かしながら、

「はよう、晩御飯、食べや。もう」と困り顔だ。

こんなにぐったりしても、芳人は毎日が満足だった。一年生で試

合に出られるのは一人ぐらいだったが、芳人の平泳ぎはかなり上手になり、昔では考えられないほどのスピードで、長距離を泳げるのだ。

又先輩達も、芳人にとっては変人揃いながら良い生徒ばかりで、芳人は母親がいみじくも言ったように、青春を満喫していた。

それでも、男としてのサガは疼き、友里菜とちゃんとデートしたいと言う思いは常々持っていた。

奇跡的にお盆の直前、二人のスケジュールが開き、一日だけだがフリーな日が出来たのだ。二人はいそいそと、双方の家族公認のデートへと出かけた。

今回二人はどこへ行くとは決めていなかった。とにかく、二人きりになり、一学期の事や色々喋りたかったのだ。

その日、友里菜は白いミニ・スカートに白いＴシャツ。けれども白いレースのヒラヒラ付いたＴシャツで、身体にピッタリとくっついたような短い上下だったので、芳人はゴクリと唾を飲み込んだ。ミニ・スカートからのぞくスラリとした脚は、芳人の目をクラクラさせそうだったのだ。もうすっかりと、女の色香が漂っている。

「なに、へらへら笑うてんの？」

「いやあ、べつにいい」と言いながらも、芳人はだれっぱなしだ。

芳人は友里菜が自分に自信を無くしている事など、微塵も感じなかった。

けれども相変わらず友里菜は芳人の肩までしか背が伸びていない。芳人が腕をかけるとすっぽりと収まりそうだ。

二人は梅田の地下街から、ミナミのアメリカ村まで、方向も行き先も定めず、ただぶらぶら足の向くままに歩いていた。歩きながら喋り、止っては喋り、そしてサテンで何かを飲みながらもまだ喋り

足りないかのように。

その内に、遅い夏の日も暮れかかってきた。

二人は港に居た。西の空が少しだけ赤く朱に染まる。

「あゝあ、明日は又部活で、次の日は引越しかあ。何か、考えたら空しいなあ」

と友里菜がポツリと言った。

「僕手伝いに行けなくて、ごめんな」

「何だあ、そんな。幾ら家族公認で言うても、わざわざ引越しなんか来なくていいから。業者さんが来てくれて、あつという間に……終わりや。ほら、これ。新しい住所。隣の隣の市だから、そんなに遠い所やない」

友里菜は寂しさを振り払うように、紙切れを手渡した。可愛い便箋に、ちまちました友里菜の字がある。いよいよ、友里菜はこの町から離れて行く。何だかあつという間だった。見染めた友里菜をストーカーのように追い回した時期が懐かしい。

けれども、もう友里菜は身近には居なくなるのだ。

「何よ、そんな顔して。芳人らしくもないじゃない」

友里菜は振り向くと、Ｔシャツの陰から、銀のハートのペンダントを取り出した。

「ほら！ いつもこれ持っているの。高校にはしていかないけど。皆には秘密やから」

「友里菜」と呼びかけながら、芳人は友里菜の肩に手をやり、自分に引き寄せた。友里菜もされるままになっている。

芳人は友里菜の頬に軽くキスをした。ここではちゃんとキスは出来ないし、今はそんな気持ちにはならないのだ。それは友里菜も気付いているらしかった。

「友里菜がどこへ行っても、僕の気持ちは変わらへんからな」

「うん」

「お互い、頑張って行こうや」

「うん」とだけ友里菜は言った。

「嫌なことがあっても、友里菜は僕の“女王蜂”なんや。それだけは覚えといてな。自信を失ったらあかん」

「うん」

友里菜は涙ぐみそうになった。

「さ、帰ろうか。もう暗くなっただし。あつ、ピッチが……」

芳人はズボンのポケットからピッチを出して耳に当てた。

「よ、芳人か。お、俺、俺は……」

「あ、樋口か？」

「芳人！ 助けてくれえ！ 」

「どうした、樋口？」

けれどもピッチは無情にもそこで切れた。

「どうしたん？ 樋口君？」

「あ、あのアホ、なんかに巻き込まれたらしい」

「どうすんの？」

「うゝん。でも何も言っただけでよかったし、場所も分からへんし。とにかく、うちへ帰ろうか。何かあったら連絡してくるやる」

「うん。でも何か心配」と友里菜も言った。けれども二人は二人だけの世界に入り込み、もう恥じることなく堂々と同じ電車に乗って帰ったのだった。

15 陰惨ないじめ

15 陰惨ないじめ

芳人は帰宅した早々は、友里菜とのデートの余韻を噛み締め、にまにましていた。けれどもやがて、ほとんど悲鳴に近い樋口の通話が妙に引かなかった。

樋口は母一人子一人で、どうやら彼の母は、どこかのお妾さんだと言われていた。いわゆる婚外子という奴だ。

芳人は今まで樋口の家庭環境などほとんど気にもしていなかったものの、樋口の母親はひ弱で、どこかのスーパーのレジ係であるけれども、そのパートの仕事も時々休む、という話は聞いていた。

樋口の口癖は、

「金持ちはええなあ。俺んところは、公団アパートやし、もっと広いうちとかあ、すごいでつかいテレビとかあ、それに外車なんか乗り回してみたいわ」だったが、芳人はそれを聞く度に、『何をほざいてんねん』と聞く耳を持たなかった。

だから樋口は高価なPHSなど持つてはいない。どこかの公衆電話から電話してきたのか、それとも家からか……。それは芳人にも分らない事だった。

「んまあ、いいか。その内、あいつのことやから、又かかってくるやろ」

と芳人は軽い気持ちで、先程まで一緒に居た友里菜の淋しそうな瞳がうつるむ様を、うつとりと思い出していた。

「芳人〜！ 芳人〜、電話！」と言う母親の声が階下からしてきた。「ほら、樋口やな〜、ったくあいつ、人騒がせなやつちゃ。それと

も、友里菜かな〜?」

芳人があれこれ詮索していると、

「何してんのん!? はよう出て! 樋口君のお母さんやて」とがなる母親の、どこか切羽詰った声がした。

「えっ、樋口のおカン!?」

何だか嫌な予感がする。芳人は慌てて、だらしないパジャマのまま階下に降りて、むすっとした母親から受話器を受け取った。

「はい、もしもし、僕大久保ですが……」

受話器の向こうから、シューシューという息が漏れているような音がした。

「あ、大久保君? あのう、こんなこと聞いてなんやけども、うちの子知りません?」

「いや、ええつと、樋口君とは今日は会ってませんが」

「あ、そうなん? どうも、ごめんなさいね。今晚は、わたしの誕生日やから一緒にファミレスに行くって約束してたのに、どこにも居てへんなんて。あちこち電話したけど、どこにも居なくて、ひよつとしたらそっちにお邪魔しているのかもと思って……でも、違ってたんですね」

ちよつと沈黙があつた。

「それじゃ……」

「あ、待って下さい。あの……あいつから、電話がありました」

「えっ!? 正浩から?」

芳人は始めて樋口の名前を知ったように感じた。樋口、樋口、といつも呼び捨てで、本当に樋口の人格を認めていたかどうか、自分でも恥ずかしい思いがする。

「はい、ええつと……夕方の七時か七時半ぐらいやったかな〜?」
「あのう、どこからか分かります?」

「いや、どこからかは。ただ……」
「ただ？」

芳人はその時、真実を告げて良いのかどうか、少し躊躇したが、母親には黙ってはいられない。

「なんか、あの、“助けて”とかって……」
「た・す・け・て……？」

向こう側では、凍りついたような母親の声がした。

「済みません、それで切れてしまって」

「わ、分かりました。ごめんなさいね、こんな夜遅く」

微かに震えているような声がしたと思うと、ガチャンと電話が切れた。

あいつ、ほんまに何かあったんやろうか？ それやったら、僕はあいつを見殺しにしたのかな？

芳人は胸がチクチクと痛んだ。何も無ければいいのだが……。

翌朝、芳人がまだクーラーの利いた涼しい部屋で眠りこけているとき、今度はピッチが鳴った。相手は大谷で、以前大阪城公園に友里菜と沙夜と行った事もある（*【中学編】9話参照）中学時代の仲間の一人だった。大谷は高校は違っても、今でも樋口とは仲が良いらしい。

「なんやねん、朝早くから」と芳人は寝ぼけ眼で、ぶつぶつ言う。
「大変や！」

「何が？」

「樋口。あいつ、今朝早く、淀川河川敷の公園で見つかったんやで！ 全身殴られて、下半身は何も着てへんで……」

大谷の声音には恐怖とそして悔しさが滲んでいた。

「それで、肋骨折れたとか、一つ睾丸つぶれてしもうたとか……」
大谷の声は次第に泣き声になって行つた。芳人はガバツと飛び起きた。今日は部活だ。けれども、人生にはそれよりも大事な事がある。

「で、で、で、病院はどこや!？」

「東淀川区のH病院……」

そこまで言うと、大谷は泣き出した。

「な、睾丸潰れたんやでえ! 酷いやんか! 今あいつ、重症や。意識も無いし……うつつうつつうつつ……」

「しっかりしろい! んもう、泣くなよお! 僕もその病院へ行くさかい。で、誰がやった!？」

「多分……岡元とそのパシリ達やろ……うつつうつつ」

大谷は泣いてばかりでさっぱり要領を得なかったが、とにかく芳人はどこか自分にも非があるように感じていた。

「おかん、僕ちよつと行つて来るわ」

「行つてくるつて、どこに?」と怪訝そうな母親に、芳人は怒鳴るように告げた。

「友達……リンチにおうたらしいから、病院へ」

「ち、ちよつと、朝御飯は?」と呼びかける母親の言葉にも耳を貸さずに、芳人は飛び出していた。

16 沙夜との再会

16 沙夜との再会

芳人がH病院に行くと、樋口は集中治療室に居た。そのドアの前にある椅子には、うなだれた中年女性と、少し離れてウロウロしている大谷の姿があつた。

「あつ、芳人おお~~~~！」と大谷は情けない声で近寄つてきたので、樋口の母親も顔を上げた。どう見ても健康そうな感じではなく、痩せて、血の気がない上に、息子の事で気もそぞろといった表情だ。

「あ、あのう、僕、大久保ですが」

「ああ……大久保君やつたん？ まあ、なんか、見違えてしもつて……わざわざ来てくれはつて……」

樋口の母親は、それ以上言葉が出てこないらしい。

「どないやねん、樋口は？」と芳人は仕方なく大谷に聞いた。

「ああ、何とか命だけは大丈夫やと、医者が言つてたわ」

芳人はそれを聞いて、ふーっと大きな吐息をついた。

「で、誰や、こんなことしたんは？」

「樋口は、気絶してたし、手術中は麻酔してたさかいに……でも多分」

「岡元か？」

大谷はうなずいた。

「どうも、沙夜ちゃんのことらしいで」

「分かつとるわい」と芳人はむしゃくしゃして言った。樋口の母親は、そんな会話はどうでも良いようだ。

向こうから看護婦が近寄って来た。

「あつ、お母さんですか？ 身内の人なら少しだけ面会していいそうですね。入ります？」

「ええ」と力なく言うと、母親は中に入っていく。大谷はその若い看護婦に、馴れ馴れしく聞いた。

「あつ、俺達は？ 看護婦さん」（＊当時はまだ看護婦と言う呼び方でした）

「あんた達、患者さんの何！？」とそのきつそうな看護婦はきつと振り返った。

「友人っていうかあゝ」

「面会は近親者だけ。ここで待ってても、面会は出来ませんよ。でも明日ぐらいから、一般病棟に移れるでしょうから、明日来たら？」

「明日！？ せっかく来たのになあ」と諦めきれない大谷。

「ま、いいやん。明日又来ようや」と芳人は大谷をせっついた。大谷は不服そうだが、芳人に従った。

樋口の母親が集中治療室に入って行った後、二人はガチャガチャと自動販売機から何か飲み物を買ってくると、無機質な病院のベンチに座って飲んだ。そろそろ、外来の患者達の診察が始まる頃だ。

「やっぱり、原因は沙夜かゝ」

「うん。よせば良いのに、あいつ、沙夜ちゃんに何度も電話して、岡元とはよりを戻すなって言ったらしい。岡元は、N商でもワルとしては一年生ではトップクラスやて。それで沙夜ちゃんは、もう岡元とは会わない、と告げたそうや。したらさあ、岡元が逆恨みしやがって、樋口を呼びつけた。

でもそれまでも、岡元は樋口が自分の子分格にならないので、ひどく怒っていたらしいで。それで嫌がらせとか、色々やっていたそうや。いつかはこんなになるんや無いのかなゝと、俺物凄く心配してたら、こうや」

ふ〜んと、芳人は言うつと、ぐいつとペットボトルを飲み干した。

「大谷、お前、沙夜と同じ高校やったな」

「うん」

「沙夜、なにしてる？」

「それどういう意味？」

「又誰かひっかけてたんとちゃうか？」

大谷はしばらくぶすつと黙って、ペットボトルをくるくると掌の上で廻した。

「分かる？」

「そりゃあ、分かるさ」と芳人はチツと舌打ちしながら言った。「あいつは、そういう奴やから。又男も寄ってくるような所があるからな」

「うん、サッカー部のイケメンに少しのぼせてるな」

「やつぱし！」

芳人は苦い思いに浸された。いい男を追い掛け回してばかりの沙夜が、樋口のような貧相な男の子を好きになるわけがないのに、樋口も懲りない鈍臭い奴だ、と半ば呆れていたのだ。

「さあ、会えへんのやつたらここに居てもしやあない。とにかく無事でホツとした。僕はこれから、部活に行くからな」

芳人は立ち上がった。

「そやつたら、俺も」と大谷も立ち上がろうとしたその時、ドアが開いて、一人のぎよつとする格好の女の子が入って来たのだ。

メッシュに染めた逆毛を立てた髪、これ以上は無いと言うほどの物凄いどでかいルーズ・ソックスに、あと少しでショート丸見えかと言うほどの短いスカート姿。

「あつ、沙夜や！」

大谷が素っ頓狂な声を上げた。

「随分変わったな」と芳人は冷静に答えたが、それでも芳人は沙夜がここに現れたことに驚いていたのだ。

17 いじめられた過去

17 いじめられた過去

沙夜の様子は、患者達で一杯のH病院の中でも、特に目立っていた。けれども、時には面会する者も居る中では、そういう女の子が居てもおかしくは無いかもしれない。

けれども沙夜も又、呆けたように突っ立っている芳人と大谷を見つけて、そのアイコンを引いた大きな瞳を啞然として開けていた。ちよつと見ると、どうみても16歳ぐらいには見えず、もう成熟した女の雰囲気を漂わせている。

「なんだよ、あんたたち！」と沙夜は叫んだ。「何で居るのよ、ここに？」

沙夜はそう非難がましく言いながらも、芳人にさり気なく流し目を送る。友里菜を愛している芳人も、それには男としてぞくつとてしまうのだ。

「久しぶりやな」と芳人が言うと、大谷は芳人の陰に隠れた。「ここでは邪魔みたいやから、あの端のソファに行こうや」

ふんと言いながらも、沙夜はおとなしく二人に付いて来た。

「樋口の事やる？」

芳人から問われても、沙夜は平然としている。大谷は側でただ才口オロしているばかりだ。

「それが何やねん」

「誰から聞いたん？ …… 岡元から？」

「そや」と沙夜は投げやりに答えた。「ボコボコにしてやった、とあいつから電話があつてん。うち、ピッチ持っているさかいな」

「だから樋口を見舞いに？」

「見舞いなんかやない！ あいつにはもうほとほと参ってんのや。いちいち説教がましく電話しよって、なんか、うざいわ」

「じゃ、何しに？」

そう問われると沙夜は不貞腐れたように、ルーズ・ソックスの足首をくねくね動かした。

「どんな状態かな、と思って」

「やっぱり心配しとるんやないか、沙夜」

「あ、あいつなあ、沙夜、睾丸1個潰れてもうたらしいで」

と言わなくてもいいのに、余計なことを大谷が口走った。沙夜はきつい目付きで、大谷を睨んだ。そして沙夜は、ソファにだらしなく大股広げて腰掛けた。

「あほやな、あいつ」と沙夜は呟く。「ほんまにアホや」

その声が沙夜らしくなく、芳人は思わず沙夜の隣に座った。

「どうしたん？ ……元氣あらへんやんか」

「別に」と沙夜は言ったが、目は虚ろだった。「あそこまでしなくてもいいのに……岡元は。もともと岡元って奴、エッチの時もわたしには乱暴で、自分だけ良ければいいって感じやったけど……そこまであのアホの猿に、あんなことするなんて」

「沙夜、お前責任感じ取るとちゃうか？」と芳人は聞いてみた。

沙夜はネイルした手を組んだり解いたりしていたが、ゆっくりと口を開き始めた。

「樋口って、苛められキャラなんや。なのに……。あのさあ、芳人、あたしも昔はそうやったんよ」

「沙夜が？」と少し驚きながら芳人は問いかけた。「ほんま？」

「うん。小学校の時。芳人とは小学校、違ってたから知らへんやつたやろ？ あたしな、小四や小五の時、クラスの男子に苛められてた。」

学校帰りによう待ち伏せして、あたしを殴る蹴るや。それでも、親は離婚するしないとか言っていて、あたしが怪我してても知らん顔やったわ。って言うよりも、気付かなかったんかなあ。

そして、女子はあたしをシカトしてたしな。遠足なんかあるやろ？ そんな時も、あたしと一緒にご飯食べてくれる子おなんか、一人も居てへんで。

だからなあ、中学校で友里菜と仲良くなった時は、ほんまに嬉しかったん。友里菜って、今時珍しいくらい正義感が強くて、お堅い子やろ？ あの頃、ほんま楽しかったなあ。」

芳人は暫く言葉を失っていた。こんな事実は全然知らなかった。けれども沙夜は、何か言いたくなっただろう。そして樋口のこと、やはり真から心配になったに違いない。

「ねえ、樋口、ほんまに大丈夫なん？」

「うん、一応。でも今日は見舞いできへんで。今は集中治療室に居るから、オカンだけしかはいれへんそうやし」

「そうか」と沙夜は残念そうに言う、下げていた袋から何かこそごそ取り出した。飴とかチョコレートとかティッシュとかだったが、どうも見舞いに持ってきたらしい。

「あいつには、花とかおかしいやろ？ でも飴とかなら食べられるんや無いかな」と思っ

て、そう言う、と再び沙夜はそれらを引っ込めた。

「樋口は、ひよつとしたら、もうN商に通うの無理かもな。岡元が居る限り……。ね、芳人、警察沙汰にはしないんやろ？ したって一緒や。N商の先生らは、いじめなんかありません、って言うに決まってる！ 先公なんか、皆チヨ―汚い奴ばっかしやから」

沙夜は立ち上がった。

「なあ、芳人。友里菜とは上手く行ってる？」

「う？ ん、まあな」

「な、エッチやった？」

「そ、そんな事はまだ……」

「ほうら、芳人の顔が赤くなつた！ その調子なら、まだみたいやね。第一、友里菜って子が、手強いもん。鉄の鎧を被つた子やから」

「ま、その内」と芳人はたじたじになりながら言った。「そう焦らへんでもいいやんか」

「そなら、うまくやりや！ 大谷も、さいなら」

沙夜は、外来患者達のジロジロとした好奇の目をあざ晒うかのようにつて行つた。

「な、芳人お。沙夜ちゃんつて、ほんまは優しい子なんやるか？ それとも、真逆？」

「僕にも分からへんわ、あいつの本心は……」

外は糞暑い真夏だ。大阪の夏は湿度が高くて暑い。友里菜の明日の引越しは大丈夫なのだろうか、とふと芳人は思った。

17 いじめられた過去（後書き）

この話の、沙夜ちゃんが話しているいじめは、私が受けたものです。私は沙夜のような感じの人間ではないけれど、いじめの体験は沙夜に語らせました・・・。

18 友里菜の居ない家

18 友里菜の居ない家

友里菜の引越しの日、芳人はわざと遠回りをして友里菜のうちに寄った。

既に2トントラックは横付けされ、慌しく何人かの男達が汗びっしょりになりながら、幾多の箱をそして家具を運んでいた。

芳人はその場に数秒だけ佇んだ。余り長く居ると、不審人物に思われそうで嫌だったのだが、どこかチラリとでも友里菜の姿がないか、と目で探し回ったのだが、あいにく友里菜はその場に居なかった。それとも、室内で掃除でもしているのだろうか。

いずれにせよ、愛する人の引越しの風景は、見ていて気持ちが良いものではない。慣れ親しんだ町、道路、隣近所から、離れて行くのを見つめるのはわびしいし辛い。

例えば友里菜が近くの市に引っ越したとしても、家を手放した事には変わらないのだ。今度の友里菜のうちは、賃貸マンションだと言っていた。時代がそうさせているとは言え、友里菜一家もその波をもろにかぶった者達なのだ。

芳人は未練を振り払うように、高校へと急いだ。もう直ぐバスが出る。今日も暑い日だ。

「あれ？」と友里菜は自室の窓から、去りゆく芳人の背中を見送った。何か声を掛けたかったが、掛けた所でどうなるものでもない。映画や物語のように、永遠に別れるのでもなく、戦場に行くのでもない。

けれども心には風が吹き抜けた。暑い日だというのに、冷たい風

が……。

友里菜は自分の空になった部屋を見つめた。所々家具の跡のシミがある壁や、家具の形をした床板。少し前まで、永遠にここに居ると思っていた。家は普遍的にあると思っていた。けれども現実はどうではなかった。

父の仕事の都合とは言え、友里菜はこの町を離れなくなかったし、芳人の住むここから別の場所に行きたくはなかった。

別の場所に行ったからと言って、芳人との絆が切れるわけではない。けれども、どこか芳人が遠く感じられる。こうやって行くうちに、もう芳人とはいつか本当に別れてしまうのではないだろうか？ 芳人は友里菜への自分の気持ちは変わらない、と言ってくれた。

けれどもそれが仮に真実だったとしても、時間は残酷だ。いつか芳人の気が変わり、その言葉も忘れ果て、二人は離れて行くのでは……？

ああ、嫌だ嫌だ。なに考えてんのよ、わたし。今こんなに忙しいと言っのに！

友里菜は知らなかったのだ。あの電話の後、樋口が重症を負った事や、沙夜がこっそりと樋口を見舞いに来た事など。知ったとしても、もう友里菜自身には何の関係も無いかもしれない。友里菜にとって大事なのは、これから行く場所で自分の生き方を見出せるのか、ということ、そして将来の不安だけだった。

とりあえずマンションは見つかったものの、父は不機嫌で母はわざとらしく明るく振舞っているが、内心では憤懣やるかたないといった有様なのを、友里菜は悟っていた。マンションでは、今までのようにピアノは弾きにくいだろう。歌も大声では歌えないかもしれ

ない。

音楽の方面に行きたいと思っていたのも、ほんの束の間だった。事実上、友里菜は金のかかるクラシック音楽の勉強は、やめざるを得なくなった。

昨日の暗い夕食は、出前だったが、それを食べながら友里菜は母に告げたのだ。

「お母さん……わたしもう音楽の進路はやめた！　なんか別の道を探ってみるわ」

母は複雑な微笑を微かに返しただけ。賛成も反対もしない。多分娘の進路どころではないのだろう。

「そう。あつ、お母さんも何かパートとかの仕事、考えてるのよ」友里菜はそれを聞いて、ただ「うん」と答えただけだった。父は遅くまで帰らず、箱が積みあがったダイニングでの淋しい食卓だった。

芳人はボーっとしてプールの端に座っていた。

「おいっ、泳がへんのか？」と先輩が声をかける。

「こいつ、例のカノジョが今日引越すんで、ぼんやりしてるんですよ」

と言わなくてもいいのに、ニヤリと笑いを浮かべて鈴木亮平が先輩に告げる。

「なんだよ！　そんなん関係ない。今度のレース、考えていただけやんか」

「無理すんなって。どうせ今度の試合、お前は出れねえんだからさ」と亮平は続けた。芳人はそんな亮平をどーんとプールに突き落とした。

部活からの帰り道、既に薄暗くなっていた友里菜の居た家の通り

はひっそりとしていた。もう友里菜の姿も気配もせず声も聞こえない空っぽの二階建ての家が、ジリジリした夕焼けに照り返して、ひっそりと建っているだけだ。

今度どんな人達が越してくるにしても、もう芳人には関係が無い。もう二度と、芳人は回り道をする事はないだろうし、この通りに入る事も無いだろう。

中学時代の峻烈な思い出の名残だけが、芳人の脳裏にあった。

さようなら、今朝まで友里菜の居た家……。

芳人は反対の方角の家路に向かって、歩き出した。

19 見てしまった！

19 見てしまった！

引越しの翌朝、狭い賃貸マンションは箱だらけだった。既に父親は出勤し、疲れた友里菜は寝過ごしてしまった。

「ねえ、楽譜のバインダーはどこ？」と友里菜はどこかにポンと置いた、コーラス部の楽譜のバインダーを血眼になって探しながら、遅く起きた母親に尋ねた。答えは既に分かっていたのだが……。

「そんなん、知るはずが無いでしょう？ 大事なものだったら、枕元にでも置けば良いのに」

「こんな狭い部屋のどこに置くと言っのよっ！？」と友里菜はヒステリックになって叫んだ。

「だって、昨日越してきたばかりじゃない！？」と母親も言い返す。「自分のせいでしょ！」

「いいよっ、もう尋ねない。行つて来る！」

「楽譜は？」

「借りる」

「朝御飯……」

「いないっ！」

そう叫ぶなり、友里菜は何も持たずに駆け出した。駅までは徒歩で、約20分もかかる。バス通学ではないが、初めての道、初めての駅が友里菜の足を阻んだ。

結局譜面も持たず、それでも友里菜は遅れてしまった。

遅刻した部員には、先輩達は容赦はしない。冷たい目が、遅れて入って来た友里菜に注がれた。あとの一年生達は、唾をぐつと飲んでただ固まっているだけだ。

「済みません、昨日引越しで、楽譜を忘れました」

「引越しがどうしたちゅうねん!? その後輩、たるんどるぞ」

「柿沢です」と友里菜は、精一杯そう怒鳴った男子の先輩に言い返した。「名前はちゃんとあります」

「そんなこと、どうでもいいねんて! 一年生に名前なんて要らん! ちゃんと遅刻せずに来て、歌えばいいのや。おまけに楽譜まで忘れるやなんて……」

「ほ、ほら、柿沢さん。貸すから……」

いつも隣で歌っている同じソプラノ仲間の斉藤と言う子が、びびりながら自分の楽譜を差し出した。

「ええねん! お前、帰れ! そんなたるんだ奴は、この部では要らんのや! もう帰れよ!」

友里菜の体内で何かがメラメラと燃えた。頭がカットし、真っ白になった。引越しの後で、この暑い中をやっとの思いで来たと言うのに。もともと血も涙も無い先輩達ばかりだとは思っていたが、「帰れ!」と言う言葉は、友里菜の何かを弾け飛ばした。

少し離れて、沙莉奈がじつと友里菜を見つめていた。沙莉奈は、何事によらずそつがなく、受けがいいのだ。美少女ゆえの優越感が、そうさせているのだろうか?

「あのう、先輩、今日だけはいいと違いますか? 昨日引越しかで……」

1年上の東野美香が、やっと口を出したが、もう遅かった。

「言い訳は言いません! わたし、帰ります!」

そう悲鳴に近い叫び声を上げると、友里菜はさっと部活の部屋を出た。背後でざわめきと、先輩の怒鳴り声などがしたが、友里菜は風よりも早く、廊下を抜け、階段を駆け降りて行った。惨めな涙が、どつと頬を伝うのを素早く拭い、下足箱に急いだ。悔しさと悲しさ

と怒りが、疲れと共にどつと押し寄せ押し流す。

けれども友里菜の激情もピタと止まった。向こうからそつと入ってくる人陰があったからだ。それは、なんと、彩香だったのだ。ジーンズのミニ・スカートに、白いＴシャツに、キラリと光るピアス。まるで別人のような、ろうたけた彩香の姿だった。

友里菜はさつさと階段の影に身を潜めた。一体彩香は今頃どこに行くのだろうか？ 遠く四階の音楽室から聞こえて来る歌声が、微かに響く中、暑い大気以外何も無い昼前だというのに。

彩香は手ぶらで真つ直ぐ突き当たりの階段に進み、それから静かに二階に上がって行く。反対方向からのコーラスの響きはもう既に聞こえない。

彩香、なにしに学校へきたんやろ？ 『読書同好会』などの同好会は、夏休み、校舎で活動はしないというのに。

彩香に気付かれずに後を追うなんて、何だかスパイになったような嫌な気がしたが、背後から呼びかけるのも躊躇われるほど、今の彩香はすでに高校生の彩香ではなかった。彩香はスタスタと、けれども猫のように、目指す場所へと向かっている。

どうやら目的地は、茶道部や華道部などが使う、八畳程の畳部屋らしいのだ。

何も気付かない彩香は、ポケットから何かを取り出すと、やはり（！）畳部屋の扉をガチャガチャ言わせた。畳部屋には、廊下側には窓は一つしかない。辺りはシーンとしている。

あいつ、なにしてるんやろ？ こんな日にこんな所で。

友里菜はそつと窓の方に耳を近付けた。

「先生……」と呼びかける綾香の声がした。友里菜は心臓が飛び出しそうになった。

「わたし、来ました」

と彩香は静かに言っているつもりなのだろうが、その声は震えていて結構甲高い。友里菜は帰ろうかな、と踵を返そうとしたが、「彩香、来たのか」と呼ぶ、甘ったるい大人の男の声で、ぎくつとしてその場に立ち止まった。その声は、大河原先生ではなく、イケメンで女子生徒に人気のある英語の西原先生さいはらの声だったからだ。

暫く声はないが、なんとも知れないごそごそした物音がしていた。

ええーっ！？ まさか？ 彩香が？

余り背の高くない友里菜は背伸びして窓をのぞいた。けれども黒いカーテンがかかり、おまけにすりガラスなのだ。けれども唯一箇所、10cmほどの裂け目があった。ぼろいカーテンなのだ。そしてそこは、ちょうど窓枠と窓枠の間で、2cmほどの隙間が……。

友里菜は目をこらした。

そして見たのだ。綾香らしいスラリとした白い両足が開かれ、西原先生の背中が見えた。二人は無言だった。そして覗かれているとも知らず、こつそりと秘事が進んで行くのを。

友里菜はそつと静かに後退ると、階段を駆け下りていった。

この日あった二つのショッキングな出来事……。それは友里菜に、大人の世界を嫌でも見せつけてしまったのだ。

20 あなたにだけは……

20 あなたにだけは……

「あ、あの、芳人？ 芳人お？」

切羽詰ったような友里菜からのピッチへの声で、芳人は眠い目を見開いた。

「おおつ、友里菜か？ どうやった、昨日の引越し無事に済んだ？」

「うん、ええつと、そうやけど……」

「どうしたん？ 何か、今日の友里菜、おかしいで」

友里菜は街頭からの公衆電話からかけていたのだが、堪えきれずに泣き出した。友里菜の嗚咽が芳人の小さいピッチから切れ切れに聞こえ、芳人は何事が起こったのかと仰天してしまう。もう時刻は夜の10時だ。

「友里菜！？ どうした！？ 今、家から？」

「ううん、違う」

「じゃ、どこ？」

「知らん……」

「知らんって。友里菜、一体何があつたんやあ？」

芳人の眠気は一辺に吹き飛んだ。

「ここは、ええつと、みなみ。梅田から、地下鉄に乗って、それかなんかフラフラしてしまつて、家に帰るのが嫌なん、わたし！

あんな家、我が家とは違う！」

友里菜はヒステリックに血を吐くように言い放つ。その言質が余りにも激しいので、芳人は友里菜が今までにこういう言い方をしたことが無かつた事に気付いた。よほどのことがあつたのだらうか？

「友里菜、なあ、友里菜。落ち着けよ！ いまどこ？ 僕、迎えに行くよ。どこだか教えて？」

友里菜は泣きながら、近くのタワービルの名前を言った。

「じゃ、そこで待ってて！ 一時間で行くさかい」

「芳人」

「なに？」

「ごめんね、ごめん……」

「いいよつ。友里菜が僕に助けを求めるなんて……なんかびっくりやけど、でも嬉しいような気がするんや。なんか、変な気がする。じゃーね、そこにじっとしてて。いい？」

「うん、分かった」

今にも消えそうな友里菜の声がしたが芳人はピッチを切ると、猛烈な速さで家を出て行った。起きてテレビを見ていた両親が何かを言いかける暇もなく……。

友里菜は電話が切れると、その場にへなへなと座り込んだ。やはり何かにすがりたい時には、芳人しか居ない……その事が良く分かったのだ。芳人が来てくれると聞いて嬉しくもあり、情けなくもあった。ここがどこか、友里菜にははつきりしないが、ビルには各階に怪しげなイルミネーションが毒々しく輝き、夜遊びの若者達や、酔っ払ったおじさん達の群れがせわしなく行き来して行くその光景は、別世界のようだった。

この群れの中に、沙夜は彷徨っていたのだろうか？ そして彩香も？

今日見た彩香のあの白い両足は、フラッシュバックして友里菜を痛みつける。あの時の茜の眼鏡の奥の目がキラリと瞬き、意地悪げに、

「な、そうやる？ 仁科さんって、ああいう子やったんよ。これで

分かったやろ？」

と言う声が聞こえたような気がして、友里菜は両手で耳を覆った。

「ねえねえ、カノジョー、今一人？ お茶でも飲まへん？」

誰かに声を掛けられて、友里菜はハツとして顔を上げた。目の前に、二人連れの少年達が居た。見た感じでは、高校生だか大学生だか、それとも無職なのか分からないが、明らかに友里菜にターゲットを絞っている目付きだ。

「ね、カノジョー、寂しいんとちゃう？ 俺らやったら、相手してもいいよ。あつ、何にもせえへんから、ただ飯でも食おうよ。もう遅いし。俺ら、映画の帰り」

「あ……あの……わたし……人を待ってるから……」

「今頃、人待ち？ そいつとしけこむの？ ちえっ」

舌打ちすると、二人組は去った。けれども、人々は歓楽の町を何事もないように彷徨う。

「ちっ、結構かわいい子やったのになあ」と言う声が聞こえた。

二人組は別の女の子を物色しているようだ。

友里菜は時計を見た。まだ11時まで間がある。なんでこんなことをしたのか、自分でも分からない。再び、苦い涙が滲んできた。

「あのう、そこのお嬢ちゃん？」と今度は中年の恰幅のいい男が声を掛けてきた。

「オジサンと遊ばへん？ はずむでえ」

友里菜は横を向いた。相手は脂ぎった、そして肉体的にも老けた身体をもてあますように近寄ってくる。

「あつ、嫌です。興味ありません」

「可愛い子やなあ。オジサンの好みや。どや？ 三枚やつてもいいで？」

「三枚!?」

何を勘違いしたのか、そのオヤジは懷から分厚い財布を取り出し、中から三万円を抜き取ってヒラヒラさせた。友里菜の中で、猛烈な怒りと恐れが沸き起こった。

「わたし、人を待っているんです！ 彼氏を！」

「なんや、そうかいな。なら、そう言いや。人をこけにしよって」そのオヤジは急に怒りだし、ペツと唾まで吐いて去って行った。

今の友里菜はどこから見ても、家出少女か物欲しげな女の子にしか見えないのかもしれない。苦い後悔が押し寄せたが、この場所から去るわけには行かない。

友里菜は、髪をかき上げると、目を凝らした。ネオンの先に何が見えるかと……。

芳人、早く来て！ あなたにだけは……あなたにだけは、抱かれてもいい。今、初めてなの、そう感じたのは。あとの人は嫌っ！ みんな、嫌や！ でも芳人は汚らわしくない、わたしにとって……。

誰かが肩を叩いた。友里菜が振り返ると、如何にも遊び人風の若者が一人立っていた。

「さ、もう俺とどこかのホテルに行こ？ 結局、人を待ってるって嘘やろ？」

友里菜は一言も声が出ず、その一見王子風の若者の前で、蛇に睨まれた蛙のように固まってしまっていた。

21 アホやな、友里菜は

21 アホやな、友里菜は

友里菜は王子風の若者の前で、言葉もなく立ち尽くしていた。自分が“物欲しげな淋しい女の子”や“援助交際”をしたがつている女子生徒に見られたことが悔し過ぎるあまり、言葉すら忘れていたのだ。

けれども数秒後、友里菜は言った。

「わたし、彼氏を待っているんですけど」

「そこに一時間も立っていたくせにい、あほ言わんどき。なあ、俺とどこかで楽しもうや」

「でも、本当に……」

その王子風の若者は、つと近寄ると友里菜の華奢な腕をむぎゅつと掴んだ。

「嘘つけえ〜！ そんなもんが居るはずが無いやん！ 居たら、とつくに来て、君としけこんでいるさ」

「そんな彼氏とは違う！」と友里菜は叫んだ。道行く酔客が、ちらつとこつちを見つめた。若者は焦っていた。友里菜の腕を無理やり引っ張りながら、どこかへ行こうとする。どこか暗がりへ、そしてその奥のホテルへと。

友里菜は限らない恐怖感に冒された。こうして沙夜も又、岡元と無理やりどこかへ行かされたのかも知れない……。そう思うと、沙夜に対する自分の意識が少し違ってきていた。

誰か、誰か、助けて……。芳人、お父さん、お母さん、誰でもいい。助けて〜〜！

交番のお巡りさんでもいい、そうまで思った。こんな底知れぬ恐怖は初めて体験する。

「やめて！ やめてや〜！」

「いい子ぶるなって……なあ、可愛い子ちゃん。俺が優しく、可愛がってあげるからさあ。君の心と身体を……」

「それがなんやて〜!!」

突然王子風若者の肩にがっしりと手が置かれた。そしてクルリと身体を向かせたその少年の姿は……。

「あつ、芳人お〜！」

友里菜は歓喜して叫んだ。そして腕を振りほどくと、芳人の胸に向かつてまっしぐらに飛びついた。

「だ、だれやあ、お前〜!？」

「お前こそ、誰やねん！」と言い返す芳人は、昔のヤンキーに戻ったような口振りだった。相手はびくつとして、後退りする。

「僕のカノジヨに何すんねんや!？」

「え？ あ、はい。いや、別に。なんか淋しそうやったから、つい……」

王子風若者は、途端に従者へと変貌した。体格がよく背が高い芳人は、この暗がりではとても高校一年には見えない。

「ちえっ、彼氏居てたんってほんまやったんか。なら、さいなら。お前、カノジヨを待たせ過ぎや!」

精一杯ふてぶてしく言っていると、その王子風若者は遊び人っぽい足取りで、去って行った。

友里菜は芳人の胸にひたすらしがみ付いているばかり。

「芳人〜」

「アホやな、友里菜は!」

最初に出た言葉はこれだった。友里菜は半泣きになりながらも、その瞳を上げて芳人を見上げた。芳人はちよつと怖い顔で友里菜を

見下ろしている。

「こんな所に一人で突っ立って！ 今何時やと思うてんのや！ 親には知らせたんか!？」

「うっん」

そう首を振るなり、友里菜は号泣し始めた。さすがに芳人は言い過ぎたと反省した。友里菜がここまでするには、何か訳があったに決まっているからだ。

「ごめん……友里菜」と芳人は言うと、泣きじゃくる友里菜の背中をさすった。「ごめんな。つい、語気を荒げてしもうて。だって、友里菜がこんなことするなんて、信じられなくて」

「うっうっうっ」と友里菜は何も言えずにただ泣くだけだ。

「な、まず親に知らせようよ、友里菜」。ねえ、泣かせてごめん。でも僕、本当に心配でな」

「いいの、わたしがアホやったんやから」と友里菜はやつとのことです、そう答えた。

「ホラ、ピッチ貸してあげるから、親に連絡し」
「うん」

友里菜は溢れ落ちる涙を拭いながら、恐る恐る電話を掛けた。恐らく父親はカンカンに怒っているだろう。それでなくとも、リストラと家売った事で、こここのところずっと機嫌が悪かったからだ。
「もしもし……友里菜です……」

「あつ、友里ちゃん!」と向こうで母親の大声がした。「一体、なに……あつ、お父さんに代わるわ」

「お父さんに?」

友里菜は嫌な感じがした。

「あつ、友里菜。友里菜かあ?」と父親の切羽詰った声がした。
「どこに居るんや? もう家出かと思って、心配していたやないか」

そう尋ねる父の声は、思っていたよりも怒気が少ない。むしろ、気弱な感じさえた。

「ここ、みなみ。ごめんね。でも、大久保君が来てくれて、これから帰るから……」

「友里菜……」と父親の声は、涙ぐんでいるようだった。「ほんま、良かったわ。ここんとこ、友里菜の顔も見んで引越しも手伝わんで……そいで、友里菜が家出したんかと思ったから……」

「まさかあ、違うよ。わたしが悪かったの。ごめんなさい」

ごめん、という言葉が素直に出た。友里菜もまた、父親を避けていたのに気付いたのだ。父が怒るのではなく、自分の事を本当に心配していたのを知って、友里菜の心は少し晴れた。

「じゃ、すぐ帰るからね」

「あ、僕大久保です。送って行きますから、大丈夫ですよ。ちょっとなんかあったらしいみたいやけど」

「済まんね、大久保君」と父親は受話器の向こうで頭を下げているようだった。

「いいんです。それじゃ」

ピッチが切れた。

「ごめん、芳人。訳があつてつい出て来たけど、わたし、ほんまに……」

「もういいんや。友里菜が無事だっただけで、僕はホツとしたし、嬉しいから」

芳人は友里菜を抱き締めた。

「おっ、お二人さん！ なんや、見せ付けてくれるやんかあ」と言いかける、酔っ払ったサラリーマン風の男が、手をあげて二人に笑いかけた。

22 友里菜のう치가、小さくなって

22 友里菜のう치가、小さくなって

芳人は友里菜の手をしつかり握り締めながら、地下鉄に乗り、そして電車に乗りこんだ。その間、友里菜はしよげ返ったままだった。けれどもターミナルから始発の各駅停車の電車に乗って座った途端、やつとホツとした表情を浮かべた。人心地が付いたのだらうと芳人は察する。

「今日は友里菜の新しいうちまで送って行くわな」

「新しいうち、だなんて……。とても狭い賃貸のマンションなのに。なんや、恥ずかしい」

「なんで恥ずかしがるねん？」

「だって……」

「家の大きさとかそんなんは、人の価値にはならへんで」

「それは、芳人がそんな経験がないからよ。でも、もういいわ、そんなことは」

各駅停車が動き出す。

「それはそうと、ただそれだけで家出したとは思えんなあ」

「やだ、家出、だなんて！」と友里菜は初めて声を荒げた。「家出やない」

「じゃ、なに？」

友里菜は指を絡めながら俯く。

「コーラスの先輩から、出て行けと怒鳴られて……」

「なんで？」

「だって、遅刻したし楽譜もどこに置いたか忘れてもったし。それに……」

友里菜の脳裏に、生々しい彩香の白い両足が浮かんだが、さすがにその事だけは芳人には言いたくなかった。

「それに、なに？　なんか、もつとあつたん？」

「いいや、やっぱりわたしが弱気になったからやね。どこをどう歩いたのかさえ、はつきりしないし。援公の女子に間違われたのは悔しいけど、でもあんな場所でこんな時間にウロウロしてたら、やっぱり間違われてもしいわ」

友里菜は微かにだが、苦々しく微笑んだ。

「わたしのこと、嫌いになった、芳人？」

「まさか！　友里菜から電話があつた時にはほんまびくりしたけどな。でも何もなくて良かったよ」

芳人は心から安堵のため息を吐いた。

「ごめんね」と再び友里菜は謝った。「でも芳人の胸板、厚くなつたわねえ」

「こんな時に何言うてんねん。でもな、てへへ、やっぱり水泳のせいやろな」

芳人……あなたにだけはいつか抱かれてもいいと思つたし、それは今でも変わらへんのよ。でも、そんなことはまだ先やね、わたし達は……。

「なあ、友里菜」と今度は芳人が深刻そうに話しかけてきた。ぼんやりと夢想していた友里菜は、ハツとして横の芳人の横顔を見る。

最近の芳人、イケメンになってきたみたい……。

「あつ？　いえ、なに？」

「実はな、樋口が」

「樋口君が？ ああ、この間電話があつたよね、南港で」

「うん。樋口、岡元とその仲間から酷い苛めを受けて、それも結構重症でな、今はH病院に入院中や」

「えー……っ!？」

さすがに友里菜も自分の事も忘れて、大声を上げた。夜遅くだといふのに、まだ満員に近い電車の乗客が、じろつと友里菜を見つめる。

「大声出すなよ」

「ごめん。んで、樋口君大丈夫？」

「いや、あんまりようないなあ」

「それで？」

「僕が行つた時、大谷も来ていたんやけどな、次にそこに来たのは誰やと思う？」

「え？」

「沙夜や」

「へー、これまた驚き！」

「ど派手な格好やつたけれど、やっぱり樋口の事が心配になった見たいやつたな」

「あの二人……分からへんわね」

しばし二人は沈黙した。確かに沙夜の心情は、二人には理解しがたかつたのだ。

けれどもやがて友里菜の引越し先の駅に止まり、芳人は友里菜の背を庇うように降りた。あたりは真っ暗だ。

「あ、芳人、ありがとう。もうここでええから」

「いや、ちよつとこの辺り寂しそやないか？ 送って行くよ」

「でも……うちには入らないでよ」

芳人を見上げる友里菜の目付きがきつくなつたのを、芳人は感じた。

「ああ、いいよ。入口で失礼するから」

「芳人って、ほんま大人になったんやね〜」

友里菜は初めて心底から笑った。

やがて友里菜の引越し先のマンションに着いた。三階建ての、こじんまりとしたマンションで、以前の家に比べたら確かに狭そうだ。「じゃ」と友里菜は言っと、芳人の手を離れた。芳人は黙ったまま手を離し、友里菜をじっと見つめ、それからくりと背を向けた。

「もう二度と、家出なんかせんときや」

「うん、もうしない」

「約束やで」

「うん……約束する」

「誰でも辛い時はあるよ。樋口もそうやし……。でも頑張れとしか今は言えへんな〜」

もう一度こちらを振り返りながら、芳人はそうきっぱりと言うと、手を挙げた。

「それじゃ又いつか、な。友里菜！」

「有難う〜〜！」

バタバタと階段を誰かが降りてくる音がして、父が現れたので、友里菜の身体は硬直した。けれども父親は友里菜をしっかりと抱き締めると、何も言わなかった。友里菜は生まれて初めて父親の愛を知った。そしてその痩せてゴツゴツした肋骨も……。

「ごめんね、お父さん、あのう、わたし……」

「いや……いい……無事やったら、それで」と父は切れ切れに言うただけだった。

慌てて去って行く芳人の胸に、友里菜のマンションの残影が脳裏を横切る。

友里菜のうち、ほんまに小そうなっってしまったなあ……。

23 彩香、シラを切る

23 彩香、シラを切る

新学期が始まった。

もやもやした思いを抱いたまま、それでも友里菜は何とかコーラス部は続けていた。辞めてしまったら、「負けた」とか「弱虫」と言われるのが嫌だったこともあるが、元々罵った先輩男子は皆からも嫌われていた存在だったのだ。それに、コンクールも近付いて来ている。辞めるタイミングは外れてしまった、と言うのが本当のところだろう。

部活はそれで何とかけりはついたものの、彩香の事だけは今でも友里菜の心を蝕んでいた。

新学期最初の日も、彩香はさり気ない様子で現れると、邪気の無い笑顔で友里菜に近寄って来たのだ。相変わらず茶髪に少しケバい格好だ。黒のオフショルダーのシャツから、眩しい小麦色の肌を露出している。

「あゝっ、友里菜、夏休みどうやったあ？」と彩香が話しかけてきたとき、不覚にも友里菜の心臓はビクツとした。それでも友里菜も既に16歳。自然な様子が出来るほど、ずる賢くなってきた。

「あつ、彩香。元気そうやね。うん、わたしは引越したかコーラスでこの夏休みは終わってしまった。横浜にも行けなかったし……」

「マンションでしょ？ でも以前より高校には近くなったやん」

「ん？ まあね。で、彩香はどう？ ずーっと、十三でバイトしてたん？」

「うん、結構大変やったわ。夏は厨房は暑いしさ」

「で……学校とかには一度も来てないの？」

こう尋ねた瞬間、あのほの白い彩香の妖艶な両足が頭に浮かぶと、友里菜の耳たぶが自然と赤くなった。けれども彩香はそんなことは露知らず、ニツコリと笑う。

「はははは！ 学校なんて！ もうバイトとかで忙しくて、ぜんぜん。部活も無いしなあ」

嘘つき！ わたしは知ってんねんよ、彩香！ こっそり来たくせに。西原先生と……。ああ、不潔っ！ 不潔！ て言うよりも、こうもいけしゃあしゃあと嘘こく人つてこと、知らんかった……。人は見かけに寄らないんだ。でも……なぜそんなことを？

「はあ？ 友里菜、何見てんの？」と訝しげに彩香が言った。

「いやあ、彩香って肌が焼けたな〜って」

「うん、ちよつと海に行つて来たん」

海！？ …… ってことは、西原先生と？ それとも、古典の大河原先生？ まあどつちでもいいや。所詮、わたしには関係ないし……でも、気になる。ああ、嫌な自分！

けれども友里菜はそれ以上は詮索しないようにした。今学期にはコンクールとか、文化祭とか色々ある。成績ももう少し頑張らなければならぬし、新しいマンションにも慣れなくてはならない。

いつもツンツンした母親を見ているのは、むしろくしゃして嫌だった……。それから芳人と今度会う日取りも決めなくては。芳人とは、相変わらずFAXとか電話とかで連絡し合っていたのだが。

「ねえ、友里菜」と突然彩香が真面目な素振りで近寄つて来た。「なに？」

「夏休みは、人生の曲がり角って言うけれど、ほんとかなあ？」

「何言うてんのよ。ヘンな事ばかり」

「友里菜はいいよな。もう彼氏が居て、結局あの彼氏と一緒に
るんでしょ？」

「そんな、先のこと……。だって、まだまだ高校生同士だよ。あ…
…何かあったん？」

「いや、別に」

そう言つと、彩香は離れて行つた。

彩香の背を見つめながら、友里菜は溜息を付いた。

やっぱり、綾香、シラを切りとおしやつたな……。

その頃、やつと樋口は退院した。もちろんその日まで、沙夜は一
度も見舞いには来ていなかった。

24 文化祭の前に

24 文化祭の前に

退院後樋口と初めて出会った時、「あいつ、変わったな」と芳人は思った。それも悪いほうに、だ。

無理も無いと思う。酷い苛めを受けて一つの睾丸を失ったというのに、学校側からは見舞いの言葉もなかった。担任の先生も一度も来てくれなかった。

逆に、やった方の岡元とその手下級の奴が三人、来なくても良いのに「お見舞い」と称して病室まで来ては、樋口の読んでいた漫画の本をパクってしまったのだ。母親が持ってきたお菓子類も全部頂いてしまう。

それでも樋口は何も言えなかったし、母親も結局警察には届けなかった。

退院後も、樋口は一度も高校へ出席しなかった。そしてじつと家の中に籠ったきりだ。いわゆる“登校拒否”とでも言うのだろうか。と言うよりも、樋口は高校へ戻れば、再び岡元とその子分格が、再び苛めを始めだすのは分かっていた。下手をすると、今度は本当に殺されかねない。だから母親も、樋口に学校へ行け、とは言わなかった。

時々芳人は樋口のうちに電話を掛けてはいたが、遂に雨で水泳部が無い時に樋口のうちを訪れた。

樋口のうちは、公団の三階だ。

用心深くなったのか、樋口はなかなかドアを開けなかったが、芳人だと分かるとサッとドアを開け、そして素早く閉めた。

芳人は樋口の余りにも変わりように少々驚いていたが、持ってい

たカバンを玄関口に置いて座り込んだ。樋口はゴロンと横になったままだ。

樋口が寝転がっている向こうのベランダからは、シトシトと降る秋雨が、洗濯物に今にも掛かりそうになっている。けれども樋口はその鉛色の空も、雨も何一つ目に入ってはいないようだった。

「おい、樋口……お前、大丈夫か？」

そう呼びかけても、樋口は背中を向けたまま、黙っている。

「まだ病院へ通院している？」

「別に……」と言う樋口の素っ気無い返事がした。

「だけど」

「どうでもええやん！ もうお金あらへんし。それに俺、もう高校へはもどらへん」

突然樋口が怒鳴った。

「でも……」

「芳人はええわな」と樋口は皮肉っぽく言い継いだ。「オトンもオカンも居るし、オトンはちゃんと働いている。秀才の兄貴かて居てる。頭もええし、身体もでかいから、誰も苛めようなんて思わへんやろ？ それに、カノジョだってちゃんというやんか。」

そやけど、俺は小柄やし、力弱いし、何も持ってない。弱虫と言われたってええ。もうあの高校には二度と行きたくないんや！」

暫く芳人は何も答えられなかった。確かに、自分がもし樋口の立場だったら、怖くてとても高校には行けないかもしれない……。

「でも、お前のオカンはなんか言うてるやろ？」

「いいや、別に。もう何も考えてない。今、パートに出かけているけどな」

「じゃ、別の高校へ編入する？」

「まさか！ どこへ行っても、同じ事の繰り返しや」

「そうかな？」

「そうや！ お前とは違うで。俺は、もう中退するつもりや」

「中退……」

芳人は言葉を口の中で反芻した。

突然樋口がクルリとこちらを向いた。

「芳人…… お前には世話になったし、感謝してる。けれど、俺に係つて、岡元とかに嫌がらせさせられたりするのを、見たくないんや。お前は、自分の道をちゃんと行つて、そして友里菜ちゃんと幸せになればいいんや。俺の事はもうほつといて欲しい」

樋口その目は真剣で、痩せてもつと猿に似てきたその顔は、陰しかった。

「俺な、オカンと誰が知らん男の間の子やねん。オカンは、身体弱いし、スーパーも休んでばかりや。時々、その男からお金をもろうてカツカツ生活している。なのに、世話ばかりかける高校なんかに行つても、しゃあないやろ？ もうお前との生活とは違うんやで」とそう言う今日の樋口は饒舌だった。「俺…… 働くわ」

それは16歳の独立宣言のようにも聞こえた。芳人は、自分が如何に子供なのか、そして普通でいるように実は恵まれていたと言う事を、今更ながらに認識してしまったのだ。

うつむいた芳人に向かって、樋口は初めて口調を和らげて言いかけた。

「でも、見舞いに家まで来てくれたんは、お前だけや。嬉しいよ、ほんまに。友里菜ちゃんは、今どうしてるん？ ちゃんと、護ってるんか？」

「ああ、友里菜はこの前合唱コンクールに出たけど、府大会で負けてしまったつて。でも逆にそれでホツとした、と言つてたわ」

「ふ〜ん」と樋口はあぐらをかきながらうなずいた。「お前ら、いいカップルやな〜」

芳人はもう少しで、『沙夜との間はどんな？』と聞くとこらだったが、やめておいた。今の樋口はもう取り返しがつかないほど、傷ついているらしいのだ。身体だけではなく、心の方がもっと……。「ほな、帰るわな」と芳人は立ち上がった。樋口は黙ったまま、芳人を見上げる。それっきりだった。

芳人は、逃げるように公団をあとにした。そぼ降る雨が、冷たく感じる。

今始めて、芳人は人生の残酷さと切なさをキリキリと感じた。樋口とはもう会えないような、いや、会いたくないような気がしてきたのだ。住む世界が違う……。いや、そういう下世話な事ではなく、もっと深い溝のようなものを感じてしまったのだ。

芳人はこのことを友里菜には内緒にしておこうと思った。多分、友里菜には分からない世界だと思ったからだ。

友里菜の家も小さくなった。けれども両親がいるし、お金もまだある。けれども樋口には、もう切羽詰ったものしか残っていない。これからの樋口の前途を思うと、見たくないという感覚が芳人を罪人のように苛んだ。

こめんな、樋口。僕、もうお前とは友達にはなれないかも知れん……。

25 文化祭で出会った人

25 文化祭で出会った人

友里菜の高校の文化祭と、芳人の文化祭の日は一緒だった。それで二人は、お互いに会えそうもなかった。残念だが仕方が無い。友里菜は二日目に、コーラス部の発表があり、芳人は水泳部として焼きソバの模擬店を出さなければならなかったのだ。

最近の二人と言えば、電話はするものの、忙しくてデートをする暇が無く、顔を合わせたことが無かった。時々無性にお互いに会いたいという思いで、どちらも苛々していた。声だけでは物足りない。会って話したい。いや、遠くからだけでも会いたい……。それは二人とも思いは一つだが、それが出来ないもどかしさの内に、いよいよ文化祭当日がやって来た。

友里菜は彩香と今でも仲良くしていた。あの夏の出来事がひよつとしたら幻ではなかったのか、と言うほど、今の彩香にはその妖艶さの欠片も無いように感じる。

けれどもこれだけは分かる。彩香のほうで、自分よりもずっと“大人”だということだ。

「I高のカレシ、来ないの？」とある日彩香が友里菜に尋ねた。

「そんな暇なんか、あらへんわよ」

「ふうん、残念やわ。どんな人か見たかったのにい」

「大したことないって」

「そうかな？ 背が高くて、結構イケメンなんでしょ？」

「そんなことないわよ」

そう言いつつも、自然に友里菜の気持ちはほっこりとし、微笑んでいたらしい。

「ほらほらほら。ニタニタして、いやらし」

彩香は茶化すと、自分の模擬店に入って行った。

「そんなら、これからわたし、たこ焼き焼かなきゃ」

「じゃね」と友里菜は手を振ると、コーラスの練習までの少しの間、ブラブラと一人で模擬店などを回っていた。

良い日和で、生徒達の家族や兄弟姉妹、友人達などで広い校庭も賑わっていた。けれども友里菜は芳人の居ない寂しさを胸に秘めながらも、いそいそと模擬店や展示場などを見てまわる。さすが高校は中学とは違って、文化祭もかなりレベルが高い。

NPOや社会情勢のコーナーなどもあるし、漫画研究会の漫画は、プロと言ってもおかしくない、コミケでも直ぐ売れそうな手作り雑誌などが置いてある。

友里菜はふと、ある教室で目を留めた。壁一杯のポスター、大昔から現代に到るまでの映画のポスターだ。

ぼんやりと一人それらを眺めていると、

「君、一年生？」と呼びかける声に、ハッとして顔をそちらに向けた。のつぽで眼鏡の、一見秀才肌の男子が、こちらを見ていた。物腰は柔らかく、そして声も甘い。

何年生なのだろう？ 少し大人びてはいるが……。

「あ……はい、一年生です」と友里菜は思いがけない呼びかけに、少し顔を赤らめながら答えた。その男子はニッコリと微笑みかける。「映画、興味あるの？」

「え？ はい、ええっと、少しは」

「少しは？」

そう言つと、その男子はおかしそうに笑う。

「済みません」と友里菜は謝った。「でも、映画は好きです。あんまり見る暇がないだけで」

「何か部活に入っているの？」

「ええっと……はい、コーラス部」

その男子は首をすくめて見せた。

「コーラス部か……。それじゃあ、時間は無いよな」

「でも、コンクール、府大会で落ちたから、幾らか楽になるかな？」

ハハハと又その男子は笑った。白い歯と白い肌が印象的だ。芳人とは真逆の容姿……そして、雰囲気。

「お茶あるから、飲む？」

「え？ はい、飲みます」

「そんなにガチガチにならなくてもいいよ、一年生」

そう言えば今日は暑いくらいだ。秋と言うよりも、まだ残暑の名残がする。

「あのう……先輩、ですよね？」

「ああ、僕？ 僕は2年。石黒龍也。たつは龍、ドラゴンね」

「石黒先輩、ですか」

友里菜はどこか懐かしい響きがすることに気付いた。

「あのう、石黒先輩は」

「石黒君でいいよ」

「はい。石黒さんは、関東の人？」

「へえ？ なぜ分かったの？ うん、中学の時にここに越して来たんやけど、やっぱり分かる？」

「ええ。わたしの母も、関東人だし。アクセントが、ちょっと……」

「ハハハハ、やっぱりばれるか。そうだな、うんまだ慣れない所があるね。ふうん、君も関東の人か」

「と言うより、ハーフ」

「ハハハハ、おかしい後輩だ。名前は？」

「あの……柿沢、柿沢友里菜です」

「ゆりな？ 百合の花？」

「いいえ、ちょっと漢字が難しいですけど」

友里菜と龍也は、直ぐに打ち解けたことをなぜか不思議に感じながらも、次々に言葉が出てくるのにも驚いていた。友里菜は、芳人以外の男子と、こんなにもお喋りが出来るのを、妙に感じた。

やはり龍也のアクセントのせいだろうか？ いや、どうもそれだけではないようだ。自然と友里菜も段々笑みが出てきて、龍也が説明するポスターをじっと見つめたり、ペットボトルのお茶を飲んだりした。

時間が直ぐに経ってしまふ。

「あつ、いけない！ もう練習の時間！」

「もう行くの？」と龍也は、少し残念そうに言った。「でも、コーラス部は厳しそうだからね」

「明日、講堂でコンサートが少しあるんです」

「それじゃあ、聞きに行くよ。何時から？」

「えつと、一時」

「じゃあ、前の方で聞いていようかな」

「あ？ はい、いいですよ。でも、少し恥ずかしいなあ。わたし、端っこなんです、前列の。背がそんなに高くないから」

「じゃあ、なおさらいいじゃん」と龍也はサラリと受け流す。その目付きが、眼鏡越しに涼しげだ。なぜか心臓がドキドキ波打つのが分かった。

「いいね、じゃあ、明日！」

「あ、はい！」

「コンサートのあと、又来てね」

「え？ ええ……来ます」

「映画上映するから、きつと」

「ええ、きつと来ます」

2年生の龍也は、再び微笑んだ。

友里菜は急いで音楽室に向かいながらも、どこか人生が薔薇色に輝いて行くのを感じた。

芳人には悪いと思いながらも、でも別に何もしないんだからいいや、という軽い気持ちで……。

汗臭く男っぽいというよりも、爽やかな龍也という先輩に、なぜか好ましいものを感じてしまうのだ。これは罪だろうか……。

26 映画上映会

26 映画上映会

翌日のコーラス部のコンサートの為に、講堂に立つた友里菜は、確かに龍也の姿を、それも前から数列の所に認めて、我知らず頬を赤らめた。そのことに気付いている生徒達は誰も居ないはずだ。

友里菜が龍也の方をチラツと見ると、龍也は目で合図を送ったような気がした。おかげで、指揮者である教師の指先を余り見もせず、友里菜は夢見心地で歌い始めていた。

今日のソロ・パートは、やはり（！）東野美香だった。名は体をあらわすというが、美香と言う名の通り、美しく香る薔薇の花……そんな雰囲気と綺麗な甘い声を持っている。逆立ちしたってかないそうに無いほどの色香と、カリスマ性。

今日聴きに来た男子生徒達の大多数は、美香を拝みに来たと言っている。又、女子生徒の中にでさえ、あたかもタカラヅカのツカ・ガールを拝みに行くような、そういうレズ的な女の子も居た。友里菜は美香を見つめる度に、そういう存在には一生なれないだろう、神様は不公平だ、と思うことがしばしばだった。

けれども今日だけは少し違った。石黒龍也はおとなしく座り、じっと楽曲に耳を傾けている。その目はコーラス部員全体を見ているようでもあり、友里菜だけを見ているようでもあった。

それは友里菜にとっては、芳人以外の異性に見られているという、妙な気取りと驕りがあった。

わたしにだって、注目してくれている人は居るんやわ。芳人だけじゃない。この高校にだって、居て不思議はないんだ……。

五曲のコーラスが終わり、友里菜は宙に浮いているような足取りで、回れ右をして退場した。

仲間達は「もしもそれが“仲間”と言えるのならば」自分達の順番が終わったので、次の英語研究会の芝居はそっこのけで、ワイワイガヤガヤと出て行つた。英研の芝居を見る聴衆は、僅か半分に減ってしまった。

友里菜は再び一人になり、「来てね」と龍也に言われた通り、映画研究会の教室に足を向けた。行つてはいけないような気がして、胸の中は躊躇する。けれども、今頃芳人もI高で青春を謳歌しているに違いない。自分だけが、いい子ぶつていても仕方ないのだ。

何か用事があると言つて、母も見に来なかった。両親は二人揃つて、どこかへ出かけたらしい。最近やつと、両親の間が、元通りになりそうになっていた。新しい仕事にも、父親は少し慣れた様だ。けれども今の友里菜にとっては、両親のことなどどうでもいいのだ。

友里菜が映研の教室に入ると、そこは少し薄暗くなっていた。窓ガラスには黒い幕が張られ、小型のスクリーンが黒板を覆っている。既に数人のヲタクっぽい生徒達が、椅子に腰をかけていた。

友里菜は目で龍也を探したが、薄暗い光源だし、余りキョロキョロするのもはばかられて、黙つたまま後ろの席に座つた。多分龍也は前のスクリーンの方が、真後ろの映写機のほうに居るのかもしれないし、もしかしたら昨日の言葉を忘れてしまつて、どこかへ行つているのかも知れない。

何かを期待している自分が馬鹿みたいだった。けれども時間も空いているし、友里菜はぼんやり座つたまま、映画が始まるのを待った。

それは古いフランス映画だった。後方で、カタカタとテープの回る音がする。

白黒モノクロームのその映画は、友里菜を別世界へと誘って行く。最初退屈に思われたが、段々と友里菜はその古めかしい映画の中に引き込まれていった。

前列の誰かの首が垂れ、確かに“舟を漕いで”いる様子だ。隣の誰かが欠伸を噛み殺しているし、数人の男女生徒がすーっと出て行った。

結局最後まで残ったのは、10人足らずだった。映画は2時間もないぐらいの長さ。

それは、自殺した男女の話で、結局男は死に切れずに逃げてしまふのだ。女性のほうも何とか命だけは取り留め、ある男性から思いを寄せられるが、結局もとの男の元へと走る。矛盾しているが、今の友里菜はそのストーリーを理解できるだけの聡明さと経験と想像力を持っていた。

窓の幕が払われてカーテンが寄せられると、映画の中とは違って、明るい秋の陽光が教室に溢れていた。友里菜は少し筋肉が引きつったかな、と感じて席を立とうとした。

「柿沢さん、来てくれたの？」と言う声がした。振り向くと、龍也が居た。

「うん」と友里菜は少しホツとしながら、光を浴びて目を細めた。「なんか、渋い映画やったね」。マニアックと言うか、ヲタクというか」

「うん、まあね。クラシックでしょう？ 退屈しなかった？」

「しなかった、と言うのは嘘」と友里菜は言ってから、少し微笑んだ。「でも、気持ちは分かるわ。なんか……捨てられても、やっぱり好きな人のところへ行くって、アホらしいと分かっているけれど、

でもわたしは何となく理解できるな」

「『北ホテル』」と龍也は言った。

「なに？」

「北ホテル、というタイトルの映画。戦前の」

「戦前？ イラン・イラク戦争？」

「違うよ。第二次世界大戦」

「そうかあ。道理で」

アハハハと、龍也は上品に笑った。その笑いは、友里菜には心地良かった。

27 誘い

27 誘い

友里菜と龍也は、映画上映会が終わると、二人で模擬店の方へ出かけることにした。

「あ、先輩は誰かと一緒じゃないんですか？」

「いいや、こんなヲタクと一緒に歩いてくれる女の子はまだ居ないなあ。君こそ」

「い、いいえ。この高校には、誰も」

「じゃあ、どこか別の高校にカレシがいるの？」

「もしも居たら、ここに来てくれるはずですよ」と友里菜は芳人に対する微かな怒りを込めて、答えた。昨晚ですら、芳人からは何の連絡も無かったからだ。

「まあ、カレシって訳じゃないけれど、ちょっと幼馴染みたいなのは居るけれど」

と友里菜は妙な言い訳をした。

「ま、でも何か食いたいよね」と龍也の関東弁は、ポンポンと耳に心地良く響く。

「関西のたこ焼きはやっぱ大きくて美味しい」

「そーですかあ？」と友里菜は少しおどける。龍也と居ると、なぜか気持ちが良いし、言葉もスラスラ出てくるのだ。

「そう、たこ焼き食べようか！？」

「コーラス部、来てくれたんですね。有難うございます」

「ああ、あれね。ちょうど上映前だったし、君んとこのコーラス部は、やっぱり府下で二位だけあって、上手いよね」

「今年も、全国大会は逃しましたけど」

「一生懸命歌っている君は、何だか別人みたいやったしね。瞳がキラキラ輝いて」
「そっかな？」

その時友里菜は誰かの視線を感じて、そちらに顔を向けた。たこ焼きの模擬店に立って居る彩香が、目を大きく見開いてこちらをジロジロ見つめているのだ。その目には、明らかに驚きの表情がある。友里菜はその視線を無視したが、龍也は何一つ気付いていないようだった。

「君だったらどうする？ 心中しようと誓ったのに、男は怖くなつて逃げて行つた。そんな男でも、いつまでも待っている？」

「あの女優さん、綺麗ね」と友里菜は話をはぐらかした。

「ね、どうする？」と龍也は尚も迫る。

「さあ……わたしだったら、どうするかな？ 分かんない」

と友里菜は正直に答えた。

「ごめんごめん。まだ後輩の君に、こう言う男女の色恋沙汰を聞くなんてね」

「でも、現代とは時代が違つし、案外他の人と一緒になつちゃうかも」

二人は石のベンチの上で、たこ焼きを食べた。

「なんか……友人に見られちゃった。なにか言われそう。フッフ」

「ね、柿沢さん」と急に龍也は真面目な顔で言いかける。

「え？」

「僕の同好会に入らない？」

それは友里菜にとって、衝撃的な誘いだった。そしてそれが龍也の、部員を集めたいがための発言なのか、それとも単なる思い付きか、それとも個人的な誘いなのか、友里菜には判断できなかった。

「は……いや、でも、コーラス部もあるし」

「いつもせつせと来なくていいから。開いている時だけでも」

「うん……ええっと、どうしようかな」

「じゃあ暫く考えてからでもいいから。あ、これは僕のピッチの番号」
そう言つと、龍也は紙皿の切れ端にさらさらと自分のピッチの番号を書き、そこを破つて戸惑う友里菜に渡した。

「じゃ、僕はこれから次の映画上映の準備があるから行くよ。気持ち
ちが固まつたら、電話して。その気になつたらね。いつでも大歓迎
だから」

「あの、部長さんは？」

「アハハハ。部長は僕！」

その明るい響きのある言葉を残すと、龍也は空の紙皿を捨てて、
去つて行つた。

「友・里・菜っ！」と言う声で我に返ると、何時の間に来たのか彩
香の姿があつた。口元には悪戯っぽい笑みが浮かぶ。

「隅に置けへんなあ。あの子と一緒にやなんて」

「え？ ああ、あの人……」

「映研の部長、二年生の石黒龍也、でしょ？」

「えーっ！？ 何でそれを？」

「あいつ、結構もてるんやで。でも、それでいて案外薄情なの。そ
れが、よりもよつて、友里菜に近寄るやなんて」

「近寄る？ ううん、わたしの方が、映研の部屋に入つていったの」

「まあまあ、いいからいいから。友里菜って意外に“男殺し”なん
やね。初めて知つたわ」

「そんな言い方、せんどいて！」

なによあ、あんたこそ“男殺し”のくせに。それも、大人の先
生達を手玉にとって。それに比べたら、わたしなんか大したことな

いわよっ！　まだ肉体まで与えてはいないわっ！

生まれて初めて、友里菜の女としての闘争心が沸いた。彩香と自分、どちらが女っぽいのか、色気があるのか、それを知りたいという悪魔の声が囁いたのはその時だった。友里菜は確実に“女”に近付いて行く。

28 『北ホテル』

28 『北ホテル』

友里菜が龍也という先輩に心が揺れていた頃、何も知らない芳人は一年生として、水泳部の模擬店の焼きソバを朝から晩まで作り続けていた。友里菜が文化祭に來れない事は知っていたが、どこか淋しいし残念な気がする。けれども仕方が無いのだ、同日なのだから。第一日は余りにも疲れてしまって、友里菜に電話を掛けることも出来なかった。

二日目、そろそろ焼きソバ作りにも慣れてきた頃、中学時代の友達や芳人の母親が友人と共に現れて、気恥ずかしい思いをしてしまった。母親の友人は、口元に微笑を浮かべながらも、目ではジロジロと見つめている。母親は母親で、芳人が自慢の息子である事を示したいのだろう。

早く消えてくれよ、おつかあゝ！

芳人は一人冷や汗をかいていた。

やがて部員が交代して、芳人はやっと自由になれた。自分で自分の部の焼きソバを買って喰らいついているときに、肩を叩かれて振り返ると、目の前には沙夜が立っていた。あの夏の日、樋口の病院以来だ。芳人は思わず焼きソバを喉につかえて、咳を出した。

沙夜が益々女っぽくキュートになっているのに、芳人は少々驚いていたが、反面怒りもあった。あのまんま、樋口の見舞いには結局一度も来なかった事に対して、いつも通り沙夜の自分勝手さに呆れていたのだ。

けれどもそのジコチューなのが沙夜の信条なのだから仕方ない。それを許しても良いと思うほど、今の沙夜には色香が漂っていた。

「沙夜かぁ！ 何しに来てん？」

「ただ、遊びに來ただけやんか、それにあたしにもダチがいるしな」
沙夜が目で示す方向に、2、3人のどう見てもダサイ女の子達がたむろしていて、こつちを見ているような見ていないような妙な仕草をしていた。

「僕とお前のこと、変な風に誤解されるなよ！」

と芳人は少し強く言ったが、沙夜はアハハと少し嗤っただけだった。

「そんな心配要らん。あたしには、好きな人が出來てるさかい」

「またかー！」

芳人は呆れて、焼きソバの紙皿から顔を上げた。

「お前、なんぼほど好きになるねん？ もう何人目や？」

「いいやん、別に」と沙夜もシラを切る。「あんたに、何人目とか数えてもらいたくないわよ」

「じゃ、樋口は？」

「あんな奴、別に何でもない。ただの……ただの、何と云うか、仲間やった人。それだけ」

「でも樋口はあれ以来、学校に行つてへんぞ」

「そんなん、あいつの勝手やないか！」と沙夜は激烈に言い放った。
「あの時、病院にちよつと行つた位で、変な目で見んといてや、芳人！ あいつが学校辞めようとうしようとうと、あたしの知つたこつちゃない。ただ……」

「ただ？」

「岡元のことでは……何か悪いことしてしまつたような気がしてでもあたし、あんな岡元みたいながさつな奴とは、もう何の関係もないから」

沙夜は無意識に、そのルーズソックスの足で、地面を蹴っていた。

「今の彼氏って？」とやつと焼きソバを食べ終わった芳人は、おもむろに聞いてみた。

「それがカッコいいの！ 同じS高のバスケットの先輩で、背が高くて……ええつと、芳人よりも高いで、そしてすごくハンサム！ まるで、モデルみたいやわ」

「でも又その内……」

「言わんどいてよ、芳人！ もうあたし離さへんから。もう心変わりのいいへん。岡元なんかより、ずっと良い人や。気持ちも優しいしな」

それから沙夜は悪戯っぽい目付きになった。

「友里菜は？ カノジヨ、来ないの？」

「ああ。友里菜は、同じ日に文化祭やから」

「つて、芳人、友里菜にも気いつけてよ。ムシが付かへんのかな、とか思わないの？」

「そんな！ 僕達に限って……」

「アハハハハハハ！ 芳人ってほんまにアホや。でもま、そんな所が、あんたの良いところ。けど、気いつけてよな。友里菜、ああ見えて、結構色っぽいんやから」

そう言つと、沙夜は目で仲間の、というよりも、パシリ達に合図して「バイバイ」と去って行った。

「あつ、焼きソバ」

「そんな不味そうなもん、あたし達はいらんわ」

沙夜の仲間達は、チラチラと芳人を伺いながら人ごみの中に消えた。

友里菜に別の男が付くつて……そんなこと、あるんやろうか？ あのおぼこい、っていうか、おぼこ過ぎるぐらいの友里菜に……。

その日の夕方、友里菜は帰りの電車の中で、疲れて眠りこけていた。古びた『北ホテル』が白黒のはずなのに、毒々しい極彩色で、そして自分と芳人が心中しようとしているのだ……。まず芳人が自分に睡眠薬の入ったワインを差し出す。自分はいくつと飲む。けれども芳人はいつまで経っても、睡眠薬を飲む気配はない。

“ 芳人？ 芳人……何で飲まへんの？ わたしだけ、死なせるつもりなん！？ そんな！”

はつとして友里菜を目を覚ました。今までの恐怖が全て夢であった事に、友里菜は安堵のため息をついた。けれども一方では、どこか芳人に対する違和感の残像が、いつまでも脳裏に漂っていたのも事実だった。

29 友里菜、映研に入る

29 友里菜、映研に入る

文化祭が終わったが、とうとう芳人は友里菜には電話が出来なかった。二日目終わった後には後片付け、そしてその後には「打ち上げ」が待っていたからだ。まだ未成年の芳人達は、近くのカラオケ店に行つて、コーラやジュースで乾杯すると夜遅くまで歌いまくった。芳人は幾らか友里菜が気になつてはいたものの、カラオケでかなり歌っている間に、いつの間にか友里菜のことも忘れ果てていた。初めての文化祭は、焼きソバばかり売っていた様な気がしたが、男ばかりの水泳部は新鮮で楽しく、すっかり部に溶け込んでいた。友里菜のことも、今日訪ねてくれた沙夜の事もぶっ飛んでしまうほどに。

一方友里菜はどこか浮かない顔で、帰途に着いた。新しい土地のマンションにはまだなかなか馴染めず、街角も自分の町と言う気がしないのだ。帰宅しても、両親の姿は無かった。メモだけが残り、両親は夜遅く帰ると言うことだった。

友里菜は芳人からの電話を待っていたが、それは来そうも無かった。かと言って自分から芳人のピッチに電話する事も躊躇われる。ふと友里菜は龍也が紙皿に書いたメモを取り出した。それはクシヤクシャで、たこ焼きのソースのシミがまだ付いている。

友里菜は子機を取り、ただただ寂しいと言う思いだけで、番号を押す。そんな時の友里菜は友里菜ではなく、別人の人格になったような気がした。

長い数秒の後、「もしもし」と言う龍也の声がした。

「あつ、あのう、石黒先輩ですか？」

「え？ ああ……柿沢さん？」

龍也が自分の名前を覚えてくれていた事に対して、友里菜はなぜか嬉しく感じた。

「はい。あのう、わたし……」

「そうか！ 来てくれるんやね」

「え？ は・い……」

これが自分のまことの本心なのだろうか、と友里菜は自問自答した。けれどももう乗りかけた舟だ。今更否定は出来ない。それに龍也の声が妙に懐かしく聞こえる。

「そう？ 部活は月曜日水曜日土曜日の放課後。いつでもいいからね、2年5組の部屋で。待っているから、柿沢さん」

「でも、両立出来るでしょうか？」

「それは君次第だな」と龍也はどこか冷たく言った。「合間でも良いし。ま、いつでもいいや」

投げやりな言い方だ。けれども友里菜は受話器にしがみつく。

「はい。わたし、出来るだけ行きますから」

友里菜はそつと受話器を置いた。それが悪魔の誘いだったのか、それともこれからの新たな出発なのか、今の友里菜には分からない。

とにかくむしゃくしゃしていたのだけは確かなのだ。友里菜は最近自分に対して自信を失い、目的を喪失し、幸福感に著しく欠けていたのだ。芳人は一応“カレシ”として存在してはいるが、やはり別々の高校と言うのは遠い遙か彼方の人という感じがする。

それに比べて、龍也はやはり同じ高校に居るし、会おうと思えば直ぐに会えるのだ。

ばっか、友里菜！ 自分を何様だと思っているの？ お姫様で

もなくアイドルでもなく、男子から憧れるような存在でもないのに。多分石黒先輩は、部員が欲しいだけなのよ。そうと分かっているから、なぜそんなに気になるの？　どんな人でも良いから、自分の存在を認めて欲しいからだというの？　映画にもそんなに興味がないくせに……映研に入るだなんて！　バカバカバカ、友里菜のどアホっ！

友里菜はどつと脱力感に襲われて、ソファに腰掛けた。その時電話が鳴った。どうせ、両親からだろう……。

「はい、もしもし」

「あつ、友里菜？」と呼びかける芳人の声が明るく響く。「なんや、そんな暗い声出してえ」

「ばかつ！」と友里菜は思わず叫んでいた。それはまるで道に迷った子供の悲鳴のように聞こえる。

「ゆ、友里菜？　どうしたん！？」

「だって、何で電話くれへんの？　待ってたのにい、わたし、待ってたのに。芳人からの電話を！」

勝気な友里菜が泣き出したので、芳人はこの間プチ家出した友里菜が、みなみの繁華街で号泣した時以上に驚いた。なぜなら、あの時は見知らぬ町で、家出した心細い友里菜が芳人を見つけたから、という状況だったのだが、今の芳人には友里菜の立場が分からないのだ。何で友里菜が泣き出したのか、怒り出したのかそれが理解ではない。

多分友里菜も楽しい文化祭を過している、と信じていたのだが、どうやらそれは勘違いだったらしい。

「友里菜……ごめんな。連絡取れなくて。でも、何かあったん？　文化祭で嫌なことか」

「嫌なことじゃないの」と友里菜はしゃくりあげる。「でも、淋し

かった。とてつもなく淋しくて……」

「コーラス部でうまくいっていないんやろ？」

「うん、そうじゃない。でも……」

友里菜はそれ以上は説明できなかった。自分でも分からないのに、なぜか泣けてしまうのだ。本当は芳人の胸の中で思い切り泣きたいのに。手が届きそうで、全然届きそうもないところに居る芳人。

「芳人は、芳人は……あの、一緒に自殺しようと言ったら、わたしに先に毒を飲ませてから、急に怖くなって逃げたりしないよね」
「何言うてんのや!？」

芳人は驚愕した。友里菜が何のことを喋っているのか、皆目見当がつかなかったからだ。けれども友里菜が少しずつ変化してきているのは、何となく勘付いていた。

「もちろん! 友里菜だけ死なさへんって。当たり前やろ」

「うん、分かった。安心したわ」

「……」

「ごめんね、変な事言っけしもうて。ただ、何だか狂うほど淋しかったから」

“狂うほど淋しい”……この言葉のいじらしさに、芳人はクラツと来た。

「な、いつか又デートしようよ、友里菜。僕達、離れてばかりいるのは良くないと思うんや」と芳人は芳人で、今日の午後沙夜に言われたことを思い返していた。「どこかで、二人だけで会おうよ」

「うん、嬉しい」と初めて友里菜は女らしい素直さを出して答えた。

「じゃね、約束やよ」

「うん、約束や」

受話器を置いた友里菜の顔には、どこか安らぎがあった。

やっぱり芳人が居ないと、わたしは駄目になる。芳人、会いたい！
会いたいの……。

30 寂しさに負けそう

30 寂しさに負けそう

デートの約束はしたものの、一向に実現しそうになく、友里菜は発狂しそうだった。相変わらず電話とFAXのみの通信では、どうにも収まらなくなったのだ。

「ねえ、わたしにもピッチ買つてよ」

とある日、友里菜は久しぶりに一家団欒の夕食の時に、思い切つて言い出した。両親は「ほら、来た」とばかりに、顔を見合わせる。

「友里菜……なんやなあ、ちょっと早いんとちゃうか。お父さんの仕事、もう少し慣れたら、幾らか収入も増えると思うんやけどな」と父親はやりわりと否定する。

「でも……このままじゃ……」

「なんや?」

「あなた。友里菜にはどうもボーイ・フレンドがいるらしいの」と母は、うつむいてご飯の手を止めた。

「はあ、とうとうそうかあ。友里菜にもなあ」

「何言ってるんですか、あなたは」

「じゃあ、ピッチでなくても良いから、子機はどう?」

と友里菜は提案した。「今は子機付きの電話、当たり前じゃないの。それくらいいいでしょ、ねえ」

「子機か……そうだな、電話も古くなつたし、ついでに電話番号表示付きのもあれば買つか!」

「ああ、嬉しい! ありがとう、お父さん!」

「だが、クリスマスまで待てや」

「なあ〜んだ。でも仕方ないわね、まっ、いいか」

「あなたって、友里菜には甘いんだから。この間の、家出騒動の時から」

と母だけが難色を示している。けれどもぐずぐず言っていた母も、さっさと先に食事を済ませると、パイとテレビのある居間に行ってしまった。

「何だか、お母さん怒っているよね」

「いいじゃないか。子機ぐらい買う余裕はあるよ。その内に……又自分の家も持つから」

と父はまるで自分に言い聞かせるように言った。

友里菜は、自分もバイトぐらいいしなくては、という気持ちがあったが、今のコーラス部と映研の掛け持ちでは、とてもその余裕もないし、第一プライドの高い母がそれには反対するだろう。

ともかく、クリスマスには子機を買ってもらうことが出来る。そうすれば、自室で寝転がりながら、思い切り芳人や友達と電話が出来るのだ。少しウキウキした気分になってきた。

けれども……それまでの間、芳人とは会えるかどうか分からない。デートしようと言いついたものの、それは一向に実現しそうに無かったのだから。

二人とも、お互いに忙しかったのだ。勉強だけではなく、部活、友達関係、イベント、そして家庭的にも色々。身体も疲れ、夜になると自然に目が閉じてしまう。

10月末、一時的にコーラス部がやや暇になった。イベントやコンクールも無くなり、新たな新譜をもらうことも無かった。その間、隙間をぬうように、友里菜は2年5組の映研の部屋へと、足しげく通うようになった。

女子は一年が三人のみ、あとは男子だけの僅か7人のこじんまりした同好会だ。女子の中で、亜紀と言う女子と幾分仲良くなったが、

けれども友里菜は相変わらず、何とも言えない“疎外感”に悩まされていた。

「なあ、今度いい映画の券、3枚ほどもらったんやけど、誰が行かへんか？」

と龍也が3枚の前売り券をヒラヒラさせながら、言い出した時、

「あ、わたし行きます！」と亜紀が手を差し出した。

「それじゃ、わたしも」と友里菜も後に続く。どうせ今度の日曜日には何の予定も無い。一人でじっと、あの狭いマンションに居るのは耐えられない。

「じゃあ、3人で行くかな、僕と田辺さんと柿沢さんとで。どうせ、アクシヨンじゃなく、恋愛ものだから、男子は行く気ないやろ？」

そう言った龍也の言葉に、男子達は嗤った。

「なんや、Rすれすれとか言っていたけどな、所詮前評判倒れやろな」

龍也は含み笑いをしただけだった。

「そんなら、3人で行くか、な？」

亜紀と友里菜は互いに顔を見合わせた。けれども龍也が何を企んでいたか、亜紀も友里菜も知る由も無い。

31 暗闇の中で

31 暗闇の中で

その日は、曇天だったが、映画を見るのには全く関係が無い。

友里菜は待ち合わせ場所で待っていたが、亜紀は来そうになかった。少しばかりお洒落して、ジーンズのミニスカートにキラキラ輝くスパンコールが少しだけ付いた薄手のセーターを着ていた友里菜は、手持ちぶたそうにその場所をグルグル廻っていた。

そこへ、息せき切って龍也が走って来た。遠目で見ると、眼鏡を掛けたいかにも秀才然とした若者と言う感じ。

「あつ、柿沢さん、待った？」

「いえ、ええ、待ちました」と友里菜は正直に言っていると、龍也は腕時計を見た。

「ほんとだ！　ねえ、僕、田辺亜紀さんには、2時からって言ってしまったんだけど」

「今、3時半ですね。そうかあ、亜紀、帰ったのかな？」

「これだから、ピッチでも持っていないと連絡がつかないんだよな」

「亜紀もまだピッチ持って居ないし、まして携帯電話なんか……」

「僕もハラハラしていたんだよ、君がもう帰ったのかなと思って」

「いいえ……いいんです」

「ごめんね、僕のせいだね。あとで田辺さんには、謝っておこう。で、どうする？　あと10分しかないけど、早く行こうか」

龍也は有無を言わせないように、友里菜を強引に誘った。友里菜は何だかカップルと見られるのが嫌だったが、けれどももう時間が無い以上仕方が無く、龍也に従った。

二人はほとんど駆け足で映画館に滑り込んだ。地下で狭く、マニ

アツクな映画館だ。だから指定席などはない。

二人は右奥の端に座った。ちょうど長々と広告が入っているとこ
ろだった。

「あの……この映画、先輩は知っているんですか？」

「先輩？ ああ、僕のこと？ もう先輩なんて言い方やめて欲しい
な」

「あ……じゃあ石黒さん？」

「龍也さんとも呼んで欲しいけど」
妙に馴れ馴れしい。

友里菜が躊躇していると、辺りが本当に暗くなった。

「始まるね」

「はい」

「ポップコーンでも買えばよかったかな」

「いいえ、別に」

友里菜は緊張し始めた。そして並行して、何となく後ろめたくも
感じた。

映画は確かにヨーロッパの恋愛映画だが、自分のもとの恋人を貶
めようと、さる貴族が謀りごとをめぐらせる、という少し陰気なも
のだった。

ロココ風の雰囲気似合わず、内容は陰惨でエロチックだった。

ほとんど全裸に近い若い女性が、罪の葛藤に悩み苦しんでいる様は、
友里菜には理解しがたかったが、人を引きつけるその女性は大層綺
麗だった。

その時友里菜は違和感を感じた。自分の膝に置かれた龍也の掌が、
少しずつ臀部の方へと進んで行く。

「あ……あ……」

「シィッ」と龍也は何気なく言う。こちらに顔も向けずに。「ねえ、
こっちへともう少し寄ってよ、柿沢さん」

「あ、でも」

「僕が嫌い？」とくぐもった声で、龍也は友里菜の耳に囁きかける。

「そんな……嫌いではないです……けど」

「けど？」

友里菜は後ろを振り返ったが、こんなマニアックな映画を見る者など、ほとんど居なかった。全部でも、10人そこそこだ。

龍也の手は、臀部から更に奥に進む。

「あの……」

「君って……処女？」

「ええっ!？」

達也の魔の手は、更に遠慮なく友里菜のミニスカートの奥に進んで行くのだ。友里菜はぞつとしたが、逃げられない感覚が押し潰される。ふと、彩香のことが頭に浮かぶ。

「気持ち良くさせてあげるから……ねえ」

恐怖が押し寄せてきた。全身に怖気が振るう。

「あの……やめて下さい」

「まあいいさ、どうやら君は正真正銘の処女らしいからね」

龍也は手を引っ込めた。暗闇の中、得体の知れない魔物が棲んでいるような気配すらした。

ふと横を見ると、少し離れた席でカップルがキスをし合っている。そして自分の胸もまた、龍也は触りはじめ、もむようにするのだ。

「どう？ 気持ちいい？」

「ま……まさか……」

冷や汗が滴り落ちる。これが芳人なら、とそう想像すると、快感のようなものが幾らか感じられた。が隣は芳人ではなく、龍也なのだ。

芳人、わたしどうしたらいいの？ さつと席を立てて出て行くべき？ それとも、このまま身を任せるべきなの？

はっと気がつく、龍也が自分の顎を向けさせ、キスを強要していた。友里菜はされるままにキスをしてしまう。

「君って可愛いね。ふっくらした唇もいいし」

「あの……」

「何だ、カレシとこんなことしたことないの？ まさかあゝ」

「ええ……」

消え入りそうな声で、友里菜は答える。

目の前のスクリーンでは、激しい二人の絡みが写っていた。けれども友里菜はとうとう出て行く事は出来なかった。心臓が激しく動機を打つ。

32 芳人の馬鹿！

32 芳人の馬鹿！

「君、もう16でしょ？」と囁く龍也。
「ええ」

「経験無いなんて、希少価値だね」。でも自分がどれ程可愛いのか分かってるの？そして僕みたいに、狂わせちゃうのを」

「せんぱ……いえ、龍也……さん。映画見ましようよ？」

こいつ手馴れているな、と友里菜はどうやら理性を取り戻していた。恐らく彩香もこのように、いやもつと激しく艶かしいことをやっていたのだ！

「なんでミニスカートなんか穿いて来るんだよ？僕を狂わせるつもりだった？」

「ま、まさか……。そんなつもりなんて……」

「否定する君もまた可愛い。その大きな瞳も、まるでアイドルみたいだ。自分では気付いていないなんて、信じられないなあ」

その言葉が嘘かどうかなんて、今の友里菜には皆目分からなかった。ただ、どこかで『注意しろ！』と叫ぶ自分が居たのは確かだ。

友里菜は身を引くと、

「やだ、カレシに怒られちゃう」と龍也に耳打ちし、冷たい素振りで見つめ続けていた。

「ふん」と言う龍也のせせら笑いがしたが、友里菜はもう早くこの映画が終わって、席を立ちたくてたまらなかった。

やっと映画が終わった。邪悪な主人公は、見目麗しい音楽家によって斃されたものの、後味はすこぶる悪い。クレジットが流れてい

るにも係らず、友里菜はさつさと席を立って、外に出た。そして慌てて自分を追いかける龍也に向かって、「トイレ」と言うと、女子トイレに駆け込んだ。そして大きく息を吸う。

恋人達の中で、ニセモノのカップルは自分達だけだと思うと、おぞましい気がするし、又何かしら罪悪感におかされる。鏡の中の自分も、醜い女に変わってしまった様だ。

でも、わたしだけが悪いんじゃない。スキのあったわたしも悪いけれど、でも芳人がなかなかわたしを誘おうとしないから……そうなのよ！ バカバカバカ、芳人のバカ！

友里菜が偽りのトイレから出てくると、龍也は手持ちぶたそうに腕組みして待っていた。

「さ、じゃあ、どこかサテンにても行く？」

「わたし、帰ります。だって、亜紀が来ないで先輩と二人だけで、サテンには入れへんし」

「いいじゃない。せつかく来たんだから」

「わたし、勉強もあるし……やっぱり帰ります！」

「あ、映画どうだった？」

「やらしかった」と友里菜は正直に答えた。

「やらしい？ 君だって、結構やらしかったぜ」

龍也は友里菜の手を繋ごうとする。けれども友里菜はその手を振り払い、少しだけ振り返ってバイバイすると、駅の方へと向かった。スラリとした脚がまぶしい。

誰かが振り返って友里菜をチラッと見たが、友里菜は何も気付かず、電車に飛び乗った。苦い後悔が後から後から押し寄せてくる。

友里菜は火照った自分の頬を、電車の窓ガラスに押し付けた。

芳人のバカっ！ でも、キスをしてしまったのは、やっぱり事実やわ。なぜあの時……？

とぼとぼと帰り道を歩いている内に、ふいに涙がこぼれそうになる。弄ばれた、というほど大袈裟ではないが、龍也が自分を心から愛していない事だけは確かなのだ。

ただいま、も言わずに戻ると、中から母親の顔が覗いた。手には受話器がある。

「あれ？　今帰ったとこですよ、大久保君。じゃあ、友里菜に換わりますね」

「芳人！？」

母親は目でうなずくと、さつと受話器を友里菜に押し付けた。友里菜はぶすつとして、その受話器をひったくる。

「もしもし、芳人！？」

「あー、友里菜か？　今日、映研の人達と映画に行ってたって？」

お母さんの、バカっ！

「うん、まあね、大した映画じゃなかったけど」

と友里菜は精一杯、カッコをつけた。

「なあ、友里菜。最近どこにも出かけられへんから、怒っているんや無いかな」と思ってたさ」

「わたし……」

友里菜は声が詰った。そして辺りを見回し、母が聞き耳を立てていないかと調べ、母が台所に居ると分かれると、突然声を荒げてしまふ。

「わたし、怒っている！　だって、いつまで経っても、芳人はわたしのこと、どこにも誘ってくれへんやん！」

「ごめん」としょんぼりした芳人の声がした。「だけど、11月には、試験の後京都に行こうよ、良い所見つけたさかい」

「京都！？ バカっ、芳人のバカっバカっ！！」

「どうした、友里菜？」

「あほ！ わたしをそんな観光地なんかに入れて行かないでよ。もつと、もつと……」

「もつと？」

「もういい！」

「あつ、友里菜。そんな稚拙な所やないんやて！ 浄瑠璃寺、浄瑠璃寺知ってるかな？ そこに連れて行くんやて」

慌てふためいた芳人の声がしてくる。

「そこでな……」

思わず芳人は声を潜めてしまった。

「すごく、静かで、友里菜もきつと気に入るしいゝ、それに、あの……」

「芳人の馬鹿っ！」

ガチャンと友里菜は電話を切った。なぜか知らないが、訳も無く腹立たしく泣けてくるのだ。

友里菜は自分の部屋に駆け込むと、ベッドに身を投げ、わつと泣き出した。芳人は龍也よりもずっと子供だ。だからこそ、気が置けないのではなかったのか？ けれどもその反面、どこか物足りない。自分を女として愛してはくれないような気がして、友里菜は泣き続けていた。

33 もう一度……聞いてくれ

33 もう一度……聞いてくれ

「友里ちゃん、大久保君から又電話が」と母親が廊下から怒鳴った。

「知らん！ 切って！」

「だからって、ほんま、いいの？」

「いいから、切つ……いや、今行く……」

泣き疲れた友里菜はゆつくりと起き上がった。涙で腫れた臉を、母親には見せたくない。友里菜は顔を伏せたまま、訝しげな母親から受話器を受け取った。

「友里菜！」と言う半分怒気を含み、半分配そうな芳人の声がした。「どないしたん？ 又なんかあったんか？」

「ご、ごめん。わたし、芳人に八つ当たりしてしもうて……」

ある程度理性を取り戻した友里菜は、幾分恥ずかしくなって謝った。

「わたし、どうかしていた……ごめん」

「分かってる」と芳人は始めて沈んだ声で言った。「友里菜をいつまでもほったらかしているからやる？」

友里菜は無言だった。

「な、高校が別々ってことは、僕達にとっては大変な事は知ってるつもりやった。けれど、こんなにもむずいことだったとはな」

芳人の溜息が聞こえて来る。

「でも、もう一度……聞いてくれよ、友里菜。ちゃんと」

「うん」と友里菜はかろうじてうなずいた。

「そんな困難を乗り越えなくちゃ、僕達の愛は二セモノだったって、ご都合主義だったって言われなかなあ。離れているカレシ、カノジヨは全国に幾らでも居るよ。な？」

「わたしも悪かったの」と友里菜は、今日の嫌な出来事を思い出しながら、頬を染めて言った。「色々。あつたし……芳人にも言えないことが」

「そっかー。色々とね」

「でも、わたし、芳人が居なくちゃ嫌なの！ 芳人だけなの、好きなのは！」

「信じたいけどね」と芳人はニヤリと笑いながら答えた。

「信じてよっ」と友里菜は言う。強く！

「だったら、今度のデート、浄瑠璃寺でいいよね」

「うん、どこでもいい。芳人と二人になれるんやったら」

「はは……結構淋しいけれど、それは請合つよ。良い所、そして……え」と

「なにい？」

「それは秘密」と芳人は朗らかに言った。友里菜の機嫌が直つたのを察して、嬉しくなったのだ。自分は単純な奴だ、と芳人は思う。

「11月のあそこの紅葉は綺麗なんやて」

「紅葉？ 風流ね」と呆れて友里菜は言ったがその顔には微笑があつた。

「芳人に会えるんなら、どこでもいい。わたし、わがままばかり言ってるね」

電話は切れた。芳人の手には『恋人と行く、京都の絶景』と言う雑誌が握られていたのを、友里菜が知るはずも無い。

「てへへ……これで友里菜の機嫌も直つたし、そこで僕は……」
と一人にやけている芳人だった。その友里菜が、先輩と映画でキス

したことを、芳人が知る由もないのだった。

34 困った立場に

34 困った立場に

「ちょっと！」と言う幾分怒気を含んだ声を掛けられて、友里菜は廊下で振り返った。田辺亜紀が、その細いからだを震わせるようにして立っている。

「なに？ 田辺さん」

「なに、やて？ しゃあしゃあと言うなあ、柿沢さんは。その楚々とした姿に似合わないわよ、ふてぶてしいんやから」

「なんのことよ！？」と友里菜も声を荒げた。友里菜はマンションに越してから、性格がかなり変わった、と自分でもそう思う。ふてぶてしい、と言われたが、案外当たっているかもしれない。

亜紀が手招きしたので、二人は廊下の端にある木のベンチの置いてある休憩室に進むと、座り込んだ。

「ねえ、あんた先輩の石黒さんと二人だけで映画に行ったん？」

「ああ、あれね」と友里菜も苦い思い出を掘り返されて、むくれていた。「確かに、二人で行ったけど。でも、あんたが遅れて来たからでしょ？」

「遅れたらあ！？ 嘘ばかり。二人でわたしを罨に落としてからに」

「罨？ ふん、なんのことよ」

友里菜は白いブラウスの胸に手をやった。

「あたし…… 2時って言われたのよ、石黒先輩には。だけど、本当はあの映画、3時過ぎだったのね。ああ分かった。先輩、あんただけ、本当の時間を教えたんだ。あたしは呼びではなかったってわけか」

「それは違ふと思うけど。多分、先輩のミスでしょ」

「結構、やらしい映画で、エッチシーンも一杯あったって、友達が言ってた」

「だから？ わたしは、あのあと、直ぐに戻ったから」

「ふーん、ホテル直行、じゃなかったのか」

「何てこと言うのよっ！」

友里菜は怒りに身を震わせて立ち上がった。そんな友里菜を、亜紀は小気味良さそうに見上げている。

「一人で帰ったって言うのは、本当みたいね。だって、柿沢さん、I高にカレシが居るんだものね。でもさ、評判になっっているの、知ってるの？ 映研の他の奴らは、みんなあんたたちがデートしたって言ってるよ」

「してない！」と友里菜は即座に答えた。「それは、石黒先輩だって、否定しているでしょ？」

「それがさあ、否定も肯定もしないで、一人ニヤニヤしているんだって。柿沢君は、チョー短いミニスカートでやって来たんだぜ、って。あんたって、意外とやるじゃない？ 学校では、如何にも初心って格好で居るのにさ」

友里菜は又座り込んだ。困ったことになった。映研で噂していることは、結構学校中に広まる可能性もある。まさか、I高にまで広がるとは思わないが、自分が無防備だった事に、今更ながら後悔が走った。

「男なら、むらむらして当然だよ、って先輩は言ってたって」

「今度のミーティング、休む」

「休んだら、それが真実って事になるわよ。それでいいん？」

友里菜は龍也の小賢しさに、そしてその術中に落ちてしまったことに、愕然とした。自然に首が垂れて行く。

「ふん、みんな、あいつに騙されるんだよね。石黒先輩って、如何にも良家のお坊ちゃん、爽やかな秀才って感じだから。でも、根はエッチ丸出し。柿沢さんだって、映画館で何されたか……ま、どうでもいいか。どうせ、わたしは女だと思われて居ないんやから」

亜紀は両手をあげて欠伸をすると、ツンと先に行ってしまった。ぼんやりとしている友里菜の耳に、昼休み終了の鐘が聞こえてきた。何となく、嫌な予感がする。友里菜はよろよろと立ち上がった。五時間目は、最も嫌いな漢文だ。

クラスに入った途端、「友里菜」と呼びかける声が……。彩香だった。

「むふふふ、ねっ、友里菜って結構やるじゃん」
と囁きかける彩香の声。

友里菜はきつと振り返る。

「何のこと？ まさか……」

「映研で……むふふ、むふふ、むふふ」

彩香は漢文の教科書を出しながらも、なおも嬉しそうに嗤っている。

「ああ、あの女垂らしの先輩のことかぁ」

「知ってたのか、石黒のこと。でも、二人でやらしい映画に行ったのは本当よね」

「騙されたんよ、わたしは。騙されたのっ！」

「いいから、いいから。で、なにかやった？ キス？ それとも、色々？」

友里菜は無言で彩香を見つめた。彩香はもう経験者なのだ。大概の事は知っている“女”だ。想像している事は、明らかだった。
「わたし、カレシが居るから、何もしてない。だって、もう直ぐカ

レシとデートやもん」

「うっぐ。じゃあ、カレシとも、やる？」

「やる、ってなによ？」

彩香は教科書で友里菜を叩いた。

「しらばっくれて！ あっ、先公が来た。退屈な授業やなあ。あとで色々聞かせて」

聞かせてって、それはあんたの言う台詞じゃないやろ？ わたしが、聞きたいわよ。先生達との、色々な秘め事を。

友里菜は何か言おうとしたが、ちょうどずんぐりした漢文の教師が入って来たので、やめた。けれども、この噂はもう広がっているらしい。

柿沢さんの清純さは、噓。本当は、やらしい女なのよ……。彩香の目がそう告げている。

35 卑怯な男

35 卑怯な男

友里菜は、龍也と映画に二人だけで行ったことを芳人に知られてしまうのではないかとビクビク暮らしていた。我ながら小心者だとは思うが、芳人に変に誤解されたくは無い。だからと言って、自分から、

「先輩と、映画館でキスしてしまいましたあ」とのほんとと言える筈が無いのも事実だ。結局は自分がお馬鹿だったからだが、けれども初心な自分を弄び、騙されたのだが……。芳人は信じないかもしれない。

そう思うと夜も寝られない。

映研の今度のミーティングには参加しないであろうと思ったが、このまま黙っているのもシヤクで、思い切って出ることにした。コーラス部と重なっていたが、コーラス部の方は欠席した。もう今ではどこで何を言われようと構わない、という切羽詰った自分が居たからだ。

それもこれも龍也憎し、の感情からだった。最初に声を掛けられ、頬を染めた初心な自分が信じられない。それに、龍也のあの“爽やか少年”と言う外見に騙されていたのも、自分の経験がまだまだ浅いからだろう。

その点、芳人はすっかり色も浅黒く、とても秀才というタイプではないが、けれども外見に似合わず繊細だ。そして何よりも、“卑怯な男”ではない。そして案外頭もいいのかも知れない。少なくとも、龍也よりは数倍は男らしい人物なのだ。

友里菜は肝に銘じた。幾ら淋しいからって、ちょっと他の男の子に気を許したのが間違いの元だった、と。離れていてもじっと我慢するのが、自分に課せられた義務のはず。それなのに……。

ああ、淋しい！ 早く会いたい！ 会いたい、芳人に……。

映研のメンバーは、友里菜が知らぬ振りで堂々と出て来たので、やや驚いていた。龍也は微かに鼻で嗤っただけだったが、それでも「やあ、柿沢さん、この前はどうも」とわざとらしい言い方だけは忘れなかった。どこまでも、嫌みな奴だ。他のメンバーは、下を向いてクスクス忍び笑いをしている。

「いえ、別に」と友里菜も普通に答えた。

「楽しかったよね」と龍也。

「そんなに……」

「だって、結構面白い映画だったしい」

「今度は、もっとマニアックなものにして下さい。もっと……芸術的なとか、実験的映画とか。いつそ、宮崎駿のアニメの方がいいけど」

「宮崎駿か、いいなあ！ それ、頂きー！」と同じ二年の小柄な大崎という男子が甲高い声を上げた。どのクラスにも居る、『あんたは、吉本に行きや』と言われるタイプの軽〜い男子だ。

今までは鼻にもかけなかったが、友里菜はほっとしてその大崎を見つめた。

「今度、『もののけ姫』だったかな、作っているんやって」

「なんや、もののけ？」

「化け物ってこと？」

メンバー達がガヤガヤ言い始めたので、龍也と友里菜の関係の話は、どっかへすっ飛び、友里菜はいい気味だと思った。

ミーティングが終わって友里菜が教室を出た途端、
「友・里・菜」と呼びかける亜紀の声がした。友里菜は振り返らない。

「柿沢さん、怒ってるのとちゃう？」

「別に」

「別に、別に、って、その言葉いいよね。案外大胆なんだ。そりや
そうだわ、I高にカレシが居る人は、どこか違う」

初めて友里菜は振り返る。

「なんか、見直したよ、柿沢さん。あいつに恥かかせたやない？
結構小気味よかった」

友里菜は肩をそびやかした。以前の友里菜がしなかった行動だ。

「本当は、せんぱい、サイレント映画は如何ですか？　っていう
所やったわ」

「ハハハ、サイレント映画かい？　それは、おもしろいっ」

その時、ふと振り返った友里菜は見たのだ。教室に居残っていた
もう一人の一年生の女子に、龍也が近寄って何か囁いているのを。
その横顔は、比類ないほどノーマルに見えるが、中身は腐っている、
と友里菜は思う。

話しかけられた女子は、普段は無口な子なのだが、何かぼそぼそ
と言っている。龍也はさり気にもその子の肩に手をやった。

卑怯な奴！　けど、わたしは辞めへん。映研、長々と居てやる
から！

友里菜につられて、亜紀も振り返って覗き込んでいた。

「あいつ、卑劣な奴やな」。凝りもせず、あんな子にまで手出し

て」

「ほんと。わたしも……アホやったけど、でももう今は何とも無いから。だって」

と友里菜は続けた。

「今度のテストの後、彼氏と二人でお寺に、それも鄙びたお寺にデートするつもり」

「そやな。やつぱり、カレシは大切にしなきゃだよ、柿沢さん。わたしも、結構しつこく、うざいと言われるまで居るつもりやさかい」

初めて二人は目を見交わし、微笑んだ。

「それにしても、あの子……気の毒……」
と友里菜はつぶやいていた。

36 高校一緒だったら良かった

36 高校一緒だったら良かった

近鉄のずらりと並んだホームの雑踏の中に、友里菜はポツンと立っていた。その姿を二ヶ月ぶりに見つけた時、芳人は友里菜が余りにも淋しそうに一人佇んでいる様を見て、驚いていた。

友里菜は遠くから芳人が見つめているのにも気付かず、どちらかというと暗い顔で人ごみをぼんやり眺めている。すぐに行って抱き締めてあげたい、という思いが、芳人を襲ったが、逆に言うと、友里菜の別の姿を垣間見たような気がしていた。

大勢の人ごみに飲み込まれそうな、華奢な友里菜。そこだけが、どこか空間が開いているような、他人を寄せ付けないようなその姿だったのだ。

一番最初に見初めた時に感じた、淋し気な雰囲気は相変わらず友里菜から離れていなかった。けれども、いつまでも眺めているのに、我ながら苛々し出した芳人は、

「友里菜っ！」と思い切り叫んでいた。

友里菜がハッと振り返る。その顔には既に儚く侘しげな面影はなくなり、パツと清らかな白薔薇が咲いたような気がした。

「はあっ、友里菜、待った？ 早く来てたんやな」

「いつもより、早く出たみたい。京都って言うから、ほんまの京都かと思ったら、奈良やったなんて」

「浄瑠璃寺って、実は奈良から行くんやったんや。場所は京都なんやけどな」

「田舎って感じ？」

「多分」

「なあんだ、芳人って何にも知らないじゃない？」

と友里菜は近寄って来て、芳人に擦り寄った。その甘えたような仕草……以前には無かったような気がする……。

「いいところだって事は、聞いているから大丈夫や」

「ハハ、又先輩からの伝授？」

と友里菜は、先ほどの淋しげな様子が嘘のように、はしゃぎながら目を上げた。芳人はその友里菜の手をしっかりと握った。瞬間、二人の周りには誰も居なくなっただような気がした。騒がしい雑踏も、ホームを出たり入ったりする電車の音も気にならなくなった。『世界は二人だけのためにある』などという気障な文句も、なるほどと思えるような瞬間を、二人は同時に味わった。

友里菜のいでたちは、高校生らしいジーンズに白いニット。その上から、今日の曇った空模様に合わせて、真っ赤なパーカーを羽織っている。11月の奈良となれば、やはり少し肌寒い。けれどもその赤い色のパーカーは、色白の友里菜に非常に似合っていて、芳人にはグッと来た。

芳人はと言えば、やはりジーンズに、高校生らしいチェックの厚手のシャツを重ね着していた。それは、幾分ケバイが、背の高い分厚い胸をした芳人には、ピッタリ合っている。

友里菜はまるでじゃれている猫のように、芳人の掌に絡みつく。

「芳人、又背が伸びたんとちゃう？ わたしは、もう成長が止ったみたい。これ以上は、背はのびへんし」

「友里菜、今何センチ？」

「158。もうちょっと、背が欲しいけれど」

「僕は、友里菜がチビでもノッポでもかまへんけどな」

二人の背の差は、20センチ以上はあるかも知れない。けれども

二人にとっては、その他愛も無い会話さえ、久しぶり様な気がした。これが同じ学校なら、こうまで新鮮には感じなかっただろうが、逆を言えば、もっと自然に気負わずに付き合って行けたのに、と友里菜は思った。少なくとも、中学一年の時に最初に好きになった文也君みたいな、如何にも秀才然とした龍也に心を動かされる事も無かっただろうに。

やがて夢うつつの状態で、電車は発車して行く。

「ねえ、芳人」

「ん？」

「わたし達……」

「なんや？」

「高校が一緒なら良かったのにね」

「何言っねん、今更」

「わたし、もっと勉強してI高に入ればよかった。だったら、こんなにどこかしい日々を過さずに済んだのに。いつも、芳人と会っていられるのに」

このいじらしい友里菜の言葉に、芳人は思わずニンマリした。

うん。この調子なら、今日はいけそうや！

思わず芳人は不遜な事を想像して、ふと自分の意識の低さに自分で恥じ入っていた。

電車はやがて振り出した小雨の中、一路奈良に向かって走っていく。

37 秋、浄瑠璃寺

37 秋、浄瑠璃寺

近鉄奈良駅から加茂行きのバスは、二時間に一本ぐらいしかなく、二人はバス停で30分は待たされた。

最初はウキウキしていた友里菜だったが、芳人がなぜか都会よりも郊外の寺社仏閣を好むのが理解できなかった。そう言えば、誰だったかクラスの女子が、「カレンが小豆島に行きたいなんて、いや」とぼやいていたのを思い出した。

女子は綺麗なレストランや、ロマンチックな夜景とかを好むものだ。なのに男子は、案外、古代の浪漫を秘めたような寂れた場所を好むのかもしれない。

まして芳人は亀山の豪農の出だという。横浜生まれの友里菜とは感性が少し違うのかもしれない。

関西には、古い名所旧跡が吐いて捨てるほどあり、そういう場所に行くとしたら色々迷ってしまうものだが、横浜には古いものなどはほとんど無い。歌などで喧伝されているような、港の見える場所も少ないし、デートをするとしたらおのずと限られてくるのだ。

けれどもここでは、図鑑や教科書に載っているような建造物や場所が、目の前に在るのだ。だからといって、友里菜は不満だった。

「寒い。早くバス来ないかなあ」

「その内、いつかは友里菜を乗せてドライブに行くよ。それまで待っててな」

芳人はまじで、すぐ近くで真っ赤な外車に乗っている、馬鹿っぱい二人を羨ましそうに見ていた。所詮、高校生。財布の中身は限ら

れているのだ。

「ね、芳人。わたし、今度クリスマスには、自分専用の子機を買ってもらうことになったん。やっとね」

「へえ、そうかあ、だったら誰にも聞かれずに電話できるんやな」

「まあ、あの狭いマンションやったら、耳を澄ませば聞こえるんじゃない？ でも、親達は、そんな姑息な事はしないと思う」

「友里菜の親、仲良さそうやからな」

「なによお！ 芳人の所だって、結構親達、仲がいいんでしょ？」

二人がワイワイやっているところに、やっとバスが来た。

バスは、ゴトゴトと田舎道を走って行った。時折、マイカーや軽トラックなどがバスを追い抜いて行く。その様を眺めていると、自分達は如何にも都会から来た観光客、それもお金の無い観光客という感じがした。まるで、高校の『歴史研究会』という気もする。

「ねえ、浄瑠璃寺ってそんなにステキなところなの？ なんか、ものすごく淋しそうな場所みたいじゃない？ 昔、滝口寺に行ったよね？ でも、あそこの方がまだマシって感じだよ」

「あの、吉祥天女像があるところや。春と秋しか後悔しないんやて」
「なんか……美術の時、図鑑で見たような気がするけど」

と友里菜はそれほど期待していない。けれども、芳人はかなり興奮していた。

「なあ、平安時代から在るお寺や。それにその吉祥天女像も、一度は見たほうがええよ。美と幸福の女神やそうやから」

「美と幸福？ まるで、ビーナスみたいなの？ ふうん、それを見たら、わたし達も幸福になるのかなあ？」

「まっさかあ。でも、そうなればいいけどな」

二人の会話はどんどん続くが、それにしても山深い里だ。こんな都から遠く離れた所に、なぜそんなお寺を作る必要があったのか、実は二人にも理解できなかった。

けれどもやがてバスは浄瑠璃寺前で止り、二人は数少ない観光客と共にそこを下りた。さすがここまで来る団体さんは居ないらしく、門前の店も余り人氣が無い。何よりも、ド田舎なのだ。

けれども田舎には田舎の良さがある。なぜなら二人は誰はばかることなく手をつなぎ、心なしか友里菜は以前よりも芳人にピッタリと引っ付いた。そして、相合傘の下で、さもいちゃいちゃしているカップルにしか見えないことに、二人とも気付いていない。

少し細い道を歩くと、向こう側、所々朱に染まった木々の間に、三重塔が見えてきた。小雨の中で、その塔は紅い紅葉に反映して、絵のように美しい。歩く道々には、その紅葉が散り、紅い模様の絨毯のようだった。

「うわ〜、めっちゃ綺麗〜！」と友里菜は珍しくはしゃいだ。

「何が？ あの塔が？」

「ううん。この道が」

「へえ、そうかなあ？」と芳人は女心が少し分からない。けれども思っていたより友里菜が喜んでいいるようなので、芳人はほっと胸を撫で下ろした。

以前、知恩院に行った時の様に不愉快な顔をするのではないかと気が気でなかったのだ。そうでなければ、ここを推奨した林先輩の顔を思い切りぶん殴ってやる所だったのだ。

古典が好きで、どこか抜けていて、ちと変わっている林先輩は大好きだったが、けれども時折、現代にはそぐわないトンチンカンなことをのたまうのも、林先輩の悪い癖だったのだ。

「おいつ、大久保っ！ 今度デートするんやったら、浄瑠璃寺がい
いでえ。この前、春に一人で行ったんやけどな、ほんまいい場所や
ったわ。その上、境内の中でチューするカップルもおってな、俺
はな、“チクシヨ、いつかは俺もカノジヨを作ってここに連れて
くるんや”と誓ったんや」

それを鵜呑みにした芳人も芳人だったが、どちらも朴念仁である
ことには変わりなかった。けれども、友里菜の笑みが芳人を安堵さ
せた。

よく眺めると、確かに紅葉の中の三重塔は、どこか浪漫をそそら
れる。ふつと見ると、友里菜がこちらを見上げていた。

「友里菜……」

芳人は突然襲ったてきた衝動を抑えることが出来ず、友里菜の唇
を奪った。友里菜も目を瞑ると、それを静かに受け止める。

直ぐ側を、リュックを背負った初老のオバサン二人が、目を丸く
して通り過ぎたのにも、今の二人は気付かなかった。

「ええな、今時の若い子は」とその内の一人が呟いた。

「ま、ええやん。若いときは二度と来いへんのやから」ともう一人
のオバサンは、微笑みながら相手に囁いた。

38 将来の夢

38 将来の夢

浄瑠璃寺は三重塔と、阿弥陀堂の二つの間に池があり、その水面に小雨が雨脚の跡を付けていた。阿弥陀堂の中は薄暗く、九対の阿弥陀仏が静かに静かに鎮座していた。

友里菜と芳人は、余り口も利かずゆっくりと周囲を見回った。先ほどすれ違ったオバサン二人も、その中に居た。

吉祥天女像は、その中程に位置しており、以前は華やかな色彩だったのだろうが、今はくすんで見える。けれども、美と幸福の女神は、嫣然と微笑んでいた。

「何だか、もっとおっきいのかと思っていたけど」と友里菜が囁くように言うと、

「案外小さいんやな」と芳人も相槌を打った。

「もう外に出ようよ」と友里菜の幾分退屈した声がしたので、芳人も逆らわずに出た。

二人は最後に三重塔をぐるりと廻った。裏側には誰も居ない。もとも小雨の肌寒いこの日には、余り観光客も居ないのだ。

「友里菜……なあ、もう一度」

「なによお、仏様が見てるじゃない」

「だって」と芳人はまるで駄々っ子のように言った。「友里菜が欲しいけれど、でも今はお預けにしたい。仏様はでも、許してくれると思うけどな」

芳人は友里菜の腰に手を廻し、片手で黒い大きな傘ですっぽり覆うようにした。腰に回した手が、友里菜の形のいいこりこりしたお尻に触った。友里菜はビクリとしたが、けれどもそのままじっとしている。そして濡れた潤んだ瞳で、芳人を見上げた。

精神だけではなく、肉体の悦びというものの欠片を、友里菜は今知った。芳人も又、男としての欲望をどう自制しようか、その処理に突き当たっていた。

僕は、高校生。でも、ただそれだけじゃない……。自制と欲望と、その間をどうすればいいのか……。我慢するのも、愛なんやな、きつと。

わたし達は、一線を越えてはいけないんだわ、まだ……。でも少なくとも、その過程を楽しむべきではないやろか……。

芳人ががっしと抱き締めて深い深いキスをしたので、友里菜もそれに応えた。芳人の手が友里菜の穢れていない身体を服の上から探っている、友里菜はただそれに任せているだけだった。

「友里菜、いつかは友里菜を欲しい」と芳人は喘ぎながら耳元で囁く。「早いようやけど、いつかは、友里菜と一緒にになりたいんや。けど、まだ早いから……大学にもお互い行かなくてはならへんし」友里菜から密着した身体を離しながら、芳人は今まで溜めていた思いのたけを言った。

「でも一緒になる前には、僕はもっと勉強したいんや。留学とかもしたいし、友里菜だって、将来に何かなりたいていう夢があるやろ？」

友里菜は陶酔から目覚めた。芳人の逞しい身体から身を離すと、横目で芳人の伏せた目をチラッと見つめた。

「まだ、何をしようとか決めてないの。芳人は？」

「お金がもらえるようになる内は……友里菜とは……」

「なに？」

「なるだけ、綺麗な関係でいたい」

それを聞いて、友里菜は微笑んだ。けれどもそれは、複雑な微笑だ。

「わたしも、どうせ大学には行きたいし、だから勉強しているんやし。でもさっきの言葉、信じていいの？　わたしと一緒にになりたいって、ほんまのこと？」

「うん、誓う」と芳人はキツパリと答えた。「だけど、その前にしたいことがある」

「ん？」

「出来るだけいい大学に入って、いい就職をしたい。兄貴には、負けたくないんや！」

芳人はつと身を離した。

「今はそれだけしか言えへんけどな。待っててくれる？」

「芳人……！」

そう小さく叫ぶと、友里菜はがっしりしたガタイの芳人の胸に両手を回した。友里菜の長い黒髪が、小雨に濡れているが、友里菜は全く意に介しなかった。友里菜の身体の体温が、じかに芳人に伝わってくる。

「絶対やよ、絶対！」

「もちろんや、友里菜。それまでは、自分達を高めたいんや。な、友里菜だって頭良いし、きっと何かしたいはずやから」

「何か……したい事って」

今の友里菜にはその思いは分からなかった。けれどもいつか、それ

を見つけるかもしれない。二人の夢を、二人で一緒に追い求めたい。今はただそれだけ……。

「さ、バスの時間や。二時間に一本しかない。はよ、行こ！」

芳人は我に返ると、自分の腕時計をさっと見た。

「めっちゃ綺麗な、もみじの絨毯を走って行く？」

と友里菜も、普通の高校生に戻ってお茶目に言う。その姿がいじらしく、芳人はもう一度抱き締めた。今度はもっとそっと……。

帰りのバスで、又あの二人の初老のオバサン達と一緒にになった。

二人は、目で挨拶を返した。

「感じええ子達や。ほんま、絵になるわな」

「ははは、あんた、ひよつとして大昔を思い出した？」

「やめてえな、あほらし」と一人は肘で相手を突く。

その席からかなり離れて、友里菜と芳人の頭が見えている。友里菜は芳人の肩に頭を載せていた。お互いに手をしっかりと握り締めながら……。

二人の夢が本当に実現するかどうか、それは今はまだ何も分からないのだった。

39 疑い

39 疑い

期末試験も終わり、クリスマスも間近なある日、芳人は部活の水泳部の冬季陸上練習の帰りに、わざと皆と別れ、友里菜に渡すつもりでクリスマスのギフトを買いに商店街を歩いていた。

芳人は気分良かった。まだ秋の浄瑠璃寺のデートの余韻が微かに残っていたし、期末の成績も割りに良かったし、気分上々だったのだ。もう直ぐすると、友里菜は自分専用の子機を買ってもらえそうで、そうなれば気兼ねなくお喋りできる。

何事にも楽天的な芳人は、ニンマリと微笑んでいた。ただ一つ不満なのは、友里菜に渡すギフトに費やすお金が余らないことだった。両親を尊敬してはいるが、実はかなりケチで自分には余り小遣いを渡してくれない事で、芳人はぶーたれていた。

けれどもそんな我が儘は言っていられない。バイトもする暇の無い自分には、確かに余分なお金などないのだった。けれどもそれは友里菜も知っているし、なによりも友里菜は高価なギフトを欲しがるような、さもない人間ではない。

それでも何とか友里菜が喜びそうな可愛いものを求めて、芳人は商店街をウロウロしていた。男兄弟しか居ない芳人には、女の子が何を喜ぶのか、先輩や友達の意見に従うほかは無かった。

けれども良いと思ったものには、あと一歩で手が届かないのだ。芳人は心なしか焦っていた。商店街には、クリスマスのイルミネーションが明るく瞬いてはいるが、冬至に近いこの頃は、もう辺りは真っ暗だ。

「あれ？ 芳人？ 芳人やない？」

その聞き覚えのある声で、芳人はハッと振り返った。案の定、沙夜が一メートルとは離れていない所に立っていた。

沙夜は背が伸びていた。以前はチビだと思っていたのに、今は友里菜よりもずつと背が高そうだ。そしてどこか幼さを残している友里菜と比べ、私服の沙夜は既に女子大生と言っても通るほど、色っぽいのだ。

「おっひさ、芳人元気にしてたん？」

「なんやあ、沙夜かあ」

「あゝら、悪うござんしたわね、友里菜じゃなくて。そうそう、友里菜ってもうこの町には居ないんだったな」

「お前、背えが伸びたやんか」

「うん、恋をすると背も伸びるのかなあ」

そう答えると、沙夜は嫣然と微笑む。

「ね、何してるの？ キティちゃんの店の前で。なんか、不釣合いで笑いたくなるけど」

「うん……まあな、色々」

「友里菜へのプレゼントとかあ？ あっ、赤くなっただな。やっぱりそうやったん？」

「いいところやったな、お前女やろ？ だったら、友里菜の好きそうなの選んでくれよ」

沙夜はフンと肩をすくめて見せたが、次の瞬間さーっと芳人の方に擦り寄ってきた。

「な、なんや」

「あのな、その友里菜の噂、知ってる？ あ、その顔つきやったら、何も知らへんねんな」

「噂？ 噂ってなんや？」

なぜか寒い風が胸を吹き抜けてゆく。

「あのなあ、わたしのダチのカレシがI校の二年生やけど……その同じクラスに、なんや、すごい女垂らしが居るねんて」

「へえ、それが？」

「そいつ、映研の部長してて、容姿端麗、眼鏡の秀才でいいこのお坊ちゃん風……」

「それがどないやねん!？」と芳人は思わず怒鳴っていた。

沙夜は面白そうに芳人を眺めていたが、おもむろに口を開いた。

「そいつが自慢そうに言うには、映研に居る後輩の女の子達、皆落としたってさ」

「落した……？」

「ははは、芳人って相変わらず鈍臭いんだ。それって、“寝た”ってことじゃないの？」

「“寝た”……まっ、まさか」

けれどもそう否定する芳人は、目の前が真っ暗になった。心臓が張り裂けそうにドキドキする。もはや、クリスマス・ギフトどころではない。

「でも、友里菜ったら、そいつと二人だけで映画館にデートしたことは確かみたい。あれ？ 聞いてなかった？　へー、友里菜って意外にやるんだ。あんな顔しててさあ」

「そんな……何も聞いてへん……」

そう言えば、浄瑠璃寺での友里菜のキスは、いつもと違い尋常ではなかったような気がした。今までの恥じらいとか、躊躇いなどが微塵も無く、友里菜はピッタリと自分に身体を押し付け、自分の身体に手をまわしていたではないか……。

「あらっ、芳人ったら、なんか気分が悪そ。そーか、初耳なんやね。」

ね、何も無かったら、友里菜、ちゃんとあなたに言っただけじゃない？ 黙っていたなんて、やっぱりおかしくない？ 秘密にしたかったのかな？」

思わせぶりな沙夜の言葉に、芳人は心底狼狽していた。そして、疑いが芳人を蝕んで行く……。

40 大喧嘩

40 大喧嘩

芳人はどこをどう歩いていたのか、全く覚えていない……。

もうクリスマス・ギフトの事など、頭から飛んでいた。沙夜の毒を含んだ言葉に、完全に幻惑されていたのだ。

沙夜は別れ際に、樋口の消息を語った。今樋口は、あちこちの仕事を転々としながら、ある暴走族の団に入ったと言ったことだった。樋口の口癖は、復讐してやる、見返してやる、金持ちになつてやる、と言ふことばかりだという。

さすがに沙夜でさえ、愛想をつかしたというが、芳人にとって樋口が存在などもうどうでも良かった。心に渦巻くのは、女々しい思いではなく、狂乱、嫉妬、疑いと言った類の言葉でしか表現しようの無い“嵐”……そして苦悩だった。

いつ沙夜と別れたかも覚えていない。今までそれ程までに自分は友里菜を信じていたのだ、アホみたい……。情けない思いが胸を塞ぐ。

芳人は知らず内に、ピッチを取り出していた。友里菜のうちに電話を掛ける。すると思いがけなく、親ではなく友里菜の弾んだ声が聞こえてきた。

「あつ、芳人？ 芳人なん？ ……違った？ 誰？」

言葉一つ出ない芳人に向かつて、ピッチからは友里菜の声が響いてきていた。

「変やなあ〜」と独り言を言っている友里菜の小声まで、今の芳人を狂わせる。

「ぼ、僕や」

「なんや、やっぱり芳人やったん？ わたし、今日始めて子機を使っているから、もう故障でもしたのか、と勘違いしそうやったじゃない」

その声はいつもよりも生き生きとし、上ずってもいた。

「わたし、とうとう自分の子機を買ってもらったんよ！ 今は自室に居る。ベッドに上で、寝転がって……でもちゃんと聞こえるんやね」

友里菜の声はあくまでも、無邪気だ。そんな友里菜を信じられない自分が惨めに感じた。

「な・あ・ゆ・り・な」

「なによ、その声。なんや、ロボットみたい。どしたの？」

「友里菜……ほんまのこと言うてや。誓う？」

「何のこと？ 今日の芳人、変だよ」

友里菜のくつくつと笑う声だったが、芳人にはそれはまるで自分をあざ笑っているようにしか聞こえないのだ。

「友里菜……」

「なによお」と友里菜も少し苛々してきたようだ。「はつきり言うてよ」

「映研の部長のこと……」

「ああ……石黒先輩のこと？」

「友里菜、あいつとデートしたんやって！？」

「デートを！？ 何言ってるのよ、芳人ったらあ」

そう受け答えしながらも、友里菜の心臓はピクリと波打った。まさか……。

「嘘つくなよ、ほんまの事言えよ」

「何よ、きつい言いかたして！ デートはしてないけど、映画に行

った事はある……けど……けど、最初は3人で行くつもりやった……」

「嘘やろ、友里菜!」

「怒鳴らないでよ! でも何でそんなこと、聞くの? 誰かに聞いた!?」

「何で僕には言えなかったんや!?!」

「そんなこと、いちいち芳人に言う必要がある!? だって、うちの高校での話やんか!」

友里菜もカツとして、言い返した。

「それに部活での事だし、それがどうしたって言いたいのだよ!」

「デートやな、それって。ほんまのデートや……」

「違うつて! 部活だから仕方なかったし、もう一人が来なかったからやんか」

「やっぱり!」

「何がやっぱりなの? そこまで束縛するつもり?」

「デートの後……どうした?」

「そのあと、って何の意味? ただ映画見ただけやん」

それが嘘である事で友里菜はどこか後ろめたかったが、けれどもそれ以上のことは確かに何もしていない。キスをしたのは、あれはものはずみだったのだ……。

「そいつ……友里菜と……」

「何が言いたいのよ、芳人! わたしを信用していないの? 信じていないの!」

「そいつと、寝た?」

瞬間冷たい風が、電話越しにサーツと二人の間を通り抜けたようだった。凍えそうな冷たい風が……。沈黙が長い間支配していた。

「今、何て言った、芳人?」

「だから……」

「バカっ！ 芳人、わたしのこと信じていないんだ！ そんなやらしいこと、わたしが芳人に黙ってするわけがないじゃん！ 何でわたしが信じられないの！？ 誰がそんな下らないことを」

「沙夜や」

友里菜はショックの余り、子機を落しそうになった。

「あいつ」

呪詛の言葉が、友里菜から漏れ、芳人は2度びっくりした。

友里菜は確かに変わった。高校に行ってから、親が家売ってマンションに引っ越してから、大人しげな友里菜の中には、燃えるような激しい炎がメラメラと燃えていることを知ったのだ。

「沙夜ったら、わたしのこと、今でも嫌ってるんだ。芳人との仲を裂こうとしてるんや……！ 芳人のアホ……！ もう大嫌い……！」

友里菜は絶望的に叫ぶと、持っていた子機を思い切り壁に投げつけた。子機は目茶目茶に壊れ、部品が部屋中に飛び散った。

「友里菜！」と怒鳴りながら母親が入って来たが、気が狂ったように泣き喚いてる友里菜を見て、沈黙した。

芳人は突然切れた電話を持ったまま、呆然として街角に立ち尽くしていた。結果的に友里菜を信じていなかった自分を、今殴りつけたい衝動を抑えるのに必死だった。

友里菜、友里菜を失いたくない……友里菜……。

41 失いたくない

41 失いたくない

もうクリスマスなんてどうでもいい……。

芳人の心の中には、寒い風がビュービュー吹いていた。友里菜を失いたくない。けれども友里菜はいつの間にか、自分の手の直ぐ届く所には居なくなつたのだ。それは二人とも別々の高校に進学し、別々の人格を形成して行つたのだから仕方ない事だつた。

それなのに芳人はいつまでも、最初出会つた時のようなストーカの心境を続けていたのだ。

失いたくない……けれども、そこには厳然と壁がある。それは距離の壁であり、心理の壁であり、そして年月の壁なのだ……。

そしていつまでも友里菜を自分に縛り付けておく事なんて、出来ない事だつたのだ。だのに……。

「おい、大久保、どうした？」と鈴木亮平の呑気な声が後方からしてきた。誰とも話したくないし、一人で帰リたかつたのに。昨日のあの衝撃的な出来事から、未だに芳人は逃れられなかつたのだ。電話は切られたのではなかつた。そういう音ではなく、何か壊れてしまつたような激しい衝撃音だつた。あのあと慌てて何度も電話したが、誰も出なかつた。

「さあ、あと数日で冬休みやなあ。と言つても、僕は補習塾に行くんやけど、大久保はどうする？」

芳人は顔も向けず、ただただ無言だつた。

「おかしいで、今日の大久保はあ」と亮平は不服そうに言つた。「朝から心ここにあらずって感じで。帰るまでどこか彷徨っているよ

うな感じやった。なあ、聞いてんのか？ 大久保っ！」

「聞いてるわい！ うざいよ、お前は」

「もとヤンキーか……うん、今のお前、そんな感じ」

芳人は振り向くと、このうるさいハエのような亮平を追っ払おうとしたが、結局やめた。反対に、この能天気な友達に何もかもバラしたくなったのだ。

芳人は立ち止まるとハーッと溜息をついた。

「な、ちよつとマックに立ち寄ってくれへんか？」

「マック？ ああ、いいよ。そーか、お前、腹減ってんのか」

「あほ」と芳人は喚いた。亮平は本当に鈍くさい奴だ。

「違うつて。ちよつと話を聞いて欲しいねん」

「やっぱそうか。何かあるとは思ってたけどな。いいよ、僕は口が堅いから」

嘘付け、と芳人は心中で罵ったが、自分からマックの店内にさっさと入っていった。

そして二人は注文を終えると、トレイを持って端のほうに陣取った。

「なあ、大久保。さっきから溜息ばかりやで。ひよつとして……力ノジヨのこと？」

「うん」と芳人はあっさり認めた。

「喧嘩でもしたか」

「大喧嘩」と芳人。「もしかしたら、修復不可能かもしれん。そう思うと、頭が真っ白や」

そう言つと芳人はかいつまんで話し始めた。亮平は興味津々と聞いている。

「……て、こいうわけ」

「で、お前、まじ『寝た?』なんて聞いたんか?」

「う、うん」

「お、お前、ほんま、アホちゃうか。底抜けのアホやで!」

「やっぱし、そうやるな」

亮平は呆れて両手を頭の後ろに持つていつて、反り返った。

「飯にやで、飯にや、カノジヨがほんまにそいつと寝たかな、と疑つていたとしても、そういうことは湾曲に聞くもんや。そんな聞きかたしたら、誰だつて怒るでえ」

「なんで、カノジヨの居いへんお前がそんなことを」

「カノジヨは居てへんけど、姉がいるさかいな」

と亮平は片目を瞑った。「女が怒ると、怖いで」。まるで夜叉やな」

「てか、メデューサみたいや。昔の友里菜は大人しい子かと思ったけど、最近ではどこかヒステリック……ちゅうか、気が強くなった」

「でも、お前が悪い」

「うん、分かつてる。でも、友里菜、あれから電話にも出ない」

「こうなつたら、文でも書くか?」

「ふ・み?」

「ハハ、林先輩の言う、文、^{ふみ}すなわち手紙やな。電話やつたら、ついカーツとなるけど、手紙だつたら落ち着いて書けるかもしれんし」

芳人は気にいらなそうに、コーラのストローを銜えた。かといって、他に名案はない。

「手紙か……古臭いけど、それがいいかもな」

「にしても、お前、そのカノジヨ、信じとらんの?」

芳人は黙り込んだ。

「信じたいよ。それにあの時の友里菜の怒りようやつたら、何もなかったと思う」

「ハハ、又お前、もう一人の沙夜って子に騙されたとちゃうか？」

「僕も妙に嫉妬してしまつて。でも、こうも思ふんや。別々の高校に行つてまで、相手の私生活をあれこれ考えていたら、身がもたへんつて。僕も友里菜も、ともに大学の志望校に行きたいし、これからも色々やりたい事がある。」

だから……お互いに、縛るのはもうやめようと思う。でも、友里菜を失いたくない。これからも、ずっと……」

「そうか、そうやったら、ま、それでいいんとちゃう？」と亮平はあつけらかんと言つた。

他人事だとおもつて、と芳人は少し腹立たしかつたが、少なくとも幾らか気持ちが悪く着いた。

そして早や、手紙をどう書くかと思案していたのだつた。

42 クリスマスに届いた手紙（前書き）

この話で、前半は終わります。

42 クリスマスに届いた手紙

42 クリスマスに届いた手紙

『友里菜へ

どう書いていいのか分からないけれど、でもあえて書きます。

この間の電話、きつと物凄く怒っているんだろうな、と僕は思う。友里菜のことを信じられなくて、つい聞いてしまったこと、今ではとても愚かだったと感じています。

あんなに怒った友里菜を、始めて知ったような気がする。ごめんな、ではとても許してもらえないかも知れない。けれども、改めて謝る。

ごめんなさい！

けれども僕ももう一度色々考えてみた。別々の高校だし、いつも一緒に居るわけじゃない僕たちのことを。僕たちはまだ家族に養われていて半人前だし、その上まだ学業半ばだと。友里菜も僕も、大学に行きたいと思って、勉強しているんだと。

だから僕は、もう友里菜がK高校で何をしようと、誰と仲良しであろうと考えない事にした。それは友里菜を嫌いになったのでも、そして、そして、そして、友里菜と別れるということでもない。そこを間違わないで欲しいんだ。

正直、僕は今でも、そしてこれからも友里菜が大好きだし、少し照れるけど、『愛している』ときっぱりと言うことも出来る。でも無責任に愛しているという事は、簡単には言えない。

なぜなら、愛するという事は、友里菜を僕に縛りつけることでもなければ、所有欲でもないから。愛するからこそ、友里菜を自由に

させたいし、僕自身もI高校で自由にありたい。

分かるかな？ 僕は文が下手だから、言いたいことの半分も友里菜に伝えられないのではないか、と危惧するけど、でもお互いに束縛せずに、でも例え離れていても、愛し合えたらいいな、とそう信じている。

甘いかな？ 本当なら、クリスマスの時期だから友里菜にものすごく会いたいんだけど、でもお互い塾だよね。

新年には僕は亀岡に帰るし友里菜も色々忙しいだろうから、又当分会えそうもない。

だけどどんなに離れていても、いつも僕の心の中には友里菜が居る。友里菜がずーっと居るんだ。

高校生活はお互い忙しいから、大学に入学したあとは、僕は友里菜と思い切り一緒に居たい。それまでは、この不自由な生活をお互い辛抱し合おうよ。お互いの夢や目標に向かって、今は頑張る時期だと、僕は思った。だから、今友里菜にそれを伝えたい。

電話だと言っていていいか分からないし、混乱するから手紙にしました。

この前のことは、本当にごめん。

でも僕は友里菜を信じているし、友里菜も僕のことを信じて欲しい。まだあと2年もあるけど、何が起こっても僕は友里菜を信じているし、もう一度言うけど（しつこいかな？）『愛している』 友里菜を僕は愛している。それだけは信じて欲しいんだ。

何かあったら、又僕に連絡して欲しい。どんな手段でもいいから。そして、数は少ないけれど、又友里菜に会いたいし、その時を待っている。

返事はしてくれてもいいし、してくれなくてもいいよ、友里菜。

それじゃ、これでペンを置きます。手紙なんて、久しぶりだよ。何だかドキドキするな。クリスマスまでに届けばいいな、と思って急いで書いたから、所々おかしいところがあるかもしれないけれど、許して欲しい。

それじゃ、また。

12月22日

芳人

㊦

友里菜はその手紙を静かに折りたたんだ。もう何度も読んだ。芳人の言いたいことは分かるし、自分もその気持ちがあつたのだ。

お互い信じあうという事が、如何に大変かを知った夜。それがクリスマスだった。

友里菜は子機を壊した事で、父にひどく怒られた。そして後悔もしていた。最近何故自分が直ぐにカツとなるのか分からないし、ひどくむしゃくしゃしてしまうのも。

けれどもそれは多分、自分が大人になっていっているという証拠なのだろう。疑い、疑われ、そしてそれらを乗り越えていかなければ、本物の愛は育たないと友里菜も思っていたから、芳人からの先制パンチのような手紙は、正直言って嬉しかった。

友里菜は星空を見上げた。

芳人……ごめんね。わたしだって、芳人のこと、愛している。離れていて淋しいからって、ぐじゃぐじゃ言つてごめん。

お互いに、目標や夢に向かって、今は辛抱し頑張る時だね。う

まくいかなからって、芳人に当り散らすなんて。離れているから
って、嫌いになったりしない。絶対に！

この手紙はどんな贈りものよりも、嬉しい。ほんとだよ。メリー・
クリスマス、芳人！

【中編】 43 新たなる年の初めに（前書き）

やっと、この「中編」で、第二の人の出現があります。お待ちせし
て済みませんでした。

【中編】 43 新たなる年の初めに

43 新たなる年の初めに

1997年の元旦。友里菜は、奇妙にしらけた気分で迎えた。

結局、芳人との関係は、“ライバル以上カレシ未満”の、元通りの関係に戻ってしまったような気がしたのだ。

心から愛してはいるが、もうそれ以上の付き合いは出来ないような気がする。芳人の、良い大学へ行くためには、友里菜との交際をも犠牲にするつもりなのだ、という態度は友里菜にもビンビンと伝わっていた。

少し悲しかったが、妙なことに自由な感じもする。一人のカレシに縛られる事なく、それでも慕い続けて行きながら、こっちはこっちで好きに出来るという、この不思議な心地良さは、一体何だろう？ 遅く起きた友里菜と、形ばかりのおせちを食べた後、両親は二人だけで初詣に行ってしまった。その日友里菜は、炬燵に寝転がり、つまらないテレビ番組をぼんやりと見ていた。

『今年の抱負は？』とテレビ上では、タレント達がちゃらちゃらした着物を窮屈そうに着て、言い合っている。

自由って、つまんねえ。でも束縛されるのも嫌やし。わたし、これから何を目標にすればいいんやろ？

不貞腐れたような友里菜の耳に、電話の鳴る音がする。

「もしや」と友里菜が慌てて受話器を取ると、

「あっ、友里菜？ わたし、瞳。覚えてる？ 中学三年の時の」と懐かしい瞳の声がした。

瞳とは親友とまでは行かなかったが、今でも時々連絡する友人だ。京都まで、私立の女子高に通っている。

「もちろん！ この前電話したんは、確かあ」

「10月ぐらいやったかな？ なあ、友里菜、今ひま？」

「うん、たつた一人。つまんないところ」

「あれ？ 大久保君とデートでもしているのかな、と思ったけど」

「ああ、それ……」と友里菜は言いよどむ。「最近、あんましデートはしてへんの。っていうかあ、高校も別々やし、なかなか会えへんで」

「でも、続いているんでしょ？」

「うん……相変わらず、ライバルとしてね」

そう答えた友里菜の心が、チクチク痛む。

「そつかー、じゃあ良かった。明日、うちに来いへん？ 三年の時の、山田とか肝付、後藤とかも来るんだ。わたしと、友里菜だけが女。両親は明日は居てへんし、おせちが不味いけど、何かワイワイやらへん？」

「ミニ同窓会？ わー、なんか面白そう！」

「そう？ あちこち誘ったけど、まさか友里菜がそう言うなんて思わへんかったわ。良かった、待ってるからね。うちの住所は知っているよね。一度来たでしょ？」

そんなこともあったのかな、と友里菜は今更ながら中学時代を思い出していた。山田、肝付、後藤などと言う男の子達とは、ほとんど話した事もないが、今の友里菜は誰かと特別に親しいわけでもない……。そんな淋しいような、嬉しいような、泣けてくるような奇妙な心境だったのだ。

「乗った〜！ 明日行くね」

「じゃあ、11時ぐらいにうちに集合ね！ 弟も居ないし、皆で騒ごうよ」

瞳も楽しげに言うと、電話を切った。

友里菜は急に楽しくなり、そわそわし出すと、明日何を着て行くかとまで思案していた。

夕方帰宅した母は、「着物になさい、着物に」としつこく言い張った。

「着物？ 面倒やな」

「女の子だからと、わざわざ京都まで行って買った、京友禅の振袖があつたでしょ？ 御所車の模様で、淡いピンクの。一度は着て欲しいと思つて、買つていたんだから」

「それって、まだ先の成人式用のじゃない？」

「ううん、成人式にはもつと良いの買つてあげるから」

なぜだか、母までウキウキしていた。けれども、母はポツリと言う。

「でも……大久保君とは、会わないのね」

「ああ、あいつ？ 亀岡まで帰るって言つてたから。それにいつもあいつと一緒になくても、いいやんか」

「ええ、そうね」

母親は嬉しそうに、箆笥の奥から、京友禅の着物を取り出した。そして友里菜に当てて、うっとり自分の娘を見つめる。

「あらあ、よく似合うわね。匂い立つようよ」

「なんだよ、おかあさんつたら。気色わる」

そう言いながらも、鏡に映る自分の姿を、友里菜自身も面映く見つめていた。この姿を、芳人に見せられないのが残念だが、仕方が無いのだ。芳人だったら、着物を着た自分を見て、何と言ってくれるのだろう……。

44 ただ知らせたいだけ

44 ただ、知らせたいだけ

次の日、友里菜は母に手伝ってもらって、新しい振袖に手を通した。滅多に喜怒哀楽を出さない父親も、カメラを持ってマンションの外に出ては、振袖姿の友里菜をパチパチと撮りまくった。

友里菜もまんざらではなく、恥じも忘れてまるでモデルのようにポーズを取った。同じマンションに住んでいるオバサンが出て来て、「あら」という表情で、着飾った友里菜と、嬉々としている父親を見つめ、にんまりとした。

「あ、おめでとうございます」と父親は至極満足そうに、その主婦に挨拶する。

「あら、はい、おめでとうございます。どこかへお出かけですか？」と主婦。

「いや、わたしらは昨日神社へ行ってきましたが、今日は娘が友人の所へ行くんですわ」

「はー、若い子はいいですね。それに、とてもお綺麗ですよ」

それがお世辞かどうかは知らないが、とにかく父親の顔はデレーっと締まらない。友里菜は、何か面映い感じがした。

「それじゃいいでしょ？ もう行くね」

と友里菜は言うのと、どうにも歩きにくい草履を履いて、小さな日本的なバッグを持って勇んで出かけた。

道々、通りすぎりの人達が自分をチラッと見ているのを、恥ずかしさとそして反対に満足感とで、自分でもニタニタしそうになった。

ギクシャクした足取りではあるが、久しぶりに以前住んでいた街

に行く電車、そしてバス。懐かしい町並みが見えてきたとき、友里菜の胸はキュンとした。そして、ふいに芳人の顔が浮かんた。

芳人の所に行くのならいいんだけど……。ちょっとあそこを曲がれば、芳人のうちなんだけど……。でもいいや。いつまでも、未練たらしくしているなんて。

そもそも芳人のうちになんか、入ったこともないんやし……。アホやな、わたしって。今芳人達は、亀岡に行っているんだろ？から居るはずなのに。顔を見なくてもいいの。だけど、ただ知らせたいて……。そんな気持ち。

友里菜の足はピタツと止った。けれども一瞬の逡巡の後、友里菜は瞳の家の方へと、くるりと踵を返して歩いて行った。

友里菜が瞳の家に行くのは、今度で二回目だった。何の変哲も無い二階建ての家で、小さな庭と言った中流の中の中流だ。けれども今の友里菜にとっては、そんなこじんまりした家でさえ、微かな嫉妬を覚えてしまう。

けれどもそうした下らない嫉妬心も、瞳が扉を開け、すぐに中から元の3人のクラスメート達が飛び出してきてからは、消え果てしまった。

「ふあゝあ、友里菜。その格好は、まるでお姫様や」

と瞳が挨拶も忘れて言うと、田中が目を丸くしてどもりながら言い継ぐ。

「ひえええええゝ、あの柿沢さん？ お堅いと思っとなんだけど、その姿見たら考え変えたわ」

「女は、着物着ると又別人やなゝ」と、後藤も言う。ただ肝付だけが、もじもじと黙り込んでいたが、それでも、友里菜を見つめて

いる目は、漫画なら瞳の奥にキラキラと輝く星を描いた事だろう。

友里菜は今始めて、虚栄心というものを知った。そして羨望の眼差しを受けるのが心地良い事も。

「こんにちは、あ、久しぶりやね、みんな」

「早く上がつてよ。今皆で下らないテレビ見ながら、御節を食べてたところ。御節と言っても、結局は親が料亭に頼んだものやけど、そんなに美味しいないわ」

友里菜が上がると、直ぐのリビングには御節とコーラ、そしてビールが あった。

「あつ、ビールなんか飲んでいいのお？」

「いいやんか、今日は正月三が日やよ、友里菜。そんな、お堅い事言わへんでもいいやん」

と瞳が言つと、

「そやそや」とあとの3人の男子も言う。

「そうやね、今日は大いに騒ごうか」としゃなりしゃなりとしたわざとらしい仕草で、友里菜は艶然と微笑みながら相槌を打った。

3人の男子達は、呆けたように友里菜を見つめている。その視線がたまらなく快感だったが、けれどもどこか心の隅では、芳人の顔がちらついていた。

芳人に、この女王様のような自分を見せてあげたいわ！ だけど、ただ知らせるだけでも良かったのかな？ ううん、もういいや。

チラツと思つたものの、もはや友里菜には罪の意識は無かった。今芳人は、友里菜から幾らか遠い存在になつていたのかもしれない。

45 友里菜、カラオケで騒ぐ

45 友里菜、カラオケで騒ぐ

友里菜はお酒は強くない。にも係らず、父親からは子供の頃から、何かの折にビールや日本酒を、ちよっぴりだが勧められた事が多い。本当はいけない事だそうだが、家庭内だから、こっそりと未成年に飲ませている親達は結構いるらしいのだ。

だから友里菜はビールだけは何とか飲めた。以前父親から、さる外国の有名なウイスキーを飲まされたときは、余りの不味さにペツと吐いてしまった。父親は飲んでいるせいか大笑いしていたが、内心友里菜は『冗談じゃないわよ!』と怒っていたのだ。

けれども、『赤信号、皆で渡れば怖くない』との例えもあるように、友里菜は5人の仲間達とワイワイ騒ぎながら、ビール缶を飲み干した。

瞳の述べたように、御節はちつとも美味しくなかった。けれども久しぶりに、元のクラス・メイト達という油断があったのか、それとも今までのストレスを払拭したかったのか、友里菜はまるで自分ではないみたいに騒ぎ立てた。

それに乗じて、あとの4人も一緒になって騒ぎ出す。

「なあ、柿沢さんがこんなに愉快な人とは知らなかったわ」と後藤が感に堪えたように言った。友里菜にとって、中学三年の時には、既に芳人の存在しか頭に無かったから、今喋った後藤や肝付、そして山田と言った男子達は全く眼中に無く、彼ら3人が居たことすら忘れ果てていた。

そして幾ら思い出そうとしても、彼らがどういう人物だったのか

思い出せないのだ。

けれども、幾らか小賢しくなった友里菜は、この3人のうちの誰かが、瞳に気があることを感付いた。自分とあとの2人の男子達は、その目くらましらしい。

だからといって、友里菜は全然怒る気もしなかった。と言うより、もう今の友里菜は半ばヤケクソで飲めないビールを飲んで騒いでいる、全くの別人格のような気がしたのだ。

「な、どこかへ出かけへん？」とややあつて瞳が提案した。

「どこへ？」と幾分トロロンとした山田が、半分寝転がりながら尋ねる。

「うーん、近くのボーリング場の側の、カラオケ店はどう？」と瞳は即座に答えた。最初からその気だったらしい。

「な、友里菜。あんた、今のK高ではコーラス部やったな。綺麗な声していたし、歌やったらいいんじゃない？」

「歌~~~~？」とかなり怪しい口レツで友里菜は繰り返す。「歌か」。はん、あんな部活、ちつとも面白くな〜いっ！でも、行く行く。面白そうやから」

立ち上がるうとして友里菜はぐらりとしたが、直ぐ近くに座っていた肝付がさつと友里菜を支えた。

「あつ、気をつけて！ 柿沢さん」

「あら？ ありがと。おおきに〜〜いっ」

アルコールで気分が高揚し、かつ肝っ玉もでかくなった友里菜は、肝付にしなだれかかる。けれども肝付は嫌な顔一つしなかった。

「じゃ、決まった〜！ 行くか〜〜〜〜〜！」

の瞳の一声で、総勢5人の高校生達は、瞳の家から5分位のカラオケ店に出かけた。

幸い一つの部屋が空いていた。従業員は、皆が少し酒臭いのは知っていたが、何も言わずに部屋に通した。ただし、こう告げるのを忘れずに。

「ここでは、アルコールは禁止。飲み物は、コーラ、ソーダ、ミックスジュース、紅茶にコーヒーのみ！」

「ふん、つまんねえ」と後藤は言ったが、瞳につねられて慌てて口を濁した。

「じゃあ……あたし、クリームソーダ。アイスクリームたっぷりだね」

「瞳……又、でぶるぞ」と山田が茶化す。

「いいのよ。どうせあたしはデブです、デブですよおお」

瞳はそう言いながらも、少しだけ頬を染めた。山田が本命かな、と友里菜は思ったが、自分にとってそんなことはどうでもいい。

「わたしはあ、もう冷コー（＊アイス・コーヒー）でいい」

「それじゃあ、僕もそれ」と肝付が言った。

「ふん、肝付、あんた怪しいよお」と瞳が茶々を入れた。

「何でだよ」

「だつてえ」

「まあ、いいじゃん、そんなこと」と上機嫌の友里菜は2人の間に入った。「楽しめればいいじゃん」

「そやそや」と後藤も相槌を打った。

飲み物が来ない内に、5人達は歌詞表を奪い合いながら、てんでに歌い始めた。が、皆下手だった。

けれども友里菜が「天空の城ラピュタ」の中の「君を乗せて」を歌い始めると、あとの4人はポカーンと口を開けたまま、その歌声に聞き惚れていた。

「やつぱり、柿沢さんは上手いつ」と後藤が誉めても、肝付はただ黙って頷くばかりだ。

調子に乗った友里菜は、あれこれと歌い始め、遂には酔いと興奮でまるで別人のように笑い、騒ぎ、お喋りし、横に座る肝付にしなだれかかるといふ有様。

ようやくお開きになったときには、友里菜は芳人の姿の力ケラさえ、脳裏から消失していた。着物も少し乱れている。

「よろよろしているやんか、友里菜。友里菜のうちは少し遠いし、誰か送って行つてよ」

と命じる瞳に答えたのは、肝付だった。「僕が……」

「けどお前、方角反対や」と山田。

「いや、別にいいんや。帰つても、誰も居らへんし」

「ならあ、肝付、あんたに任せたさかいな。友里菜もそれでええわね？」

「ワタシ……なら……一人で帰レルウ……」と友里菜は廻らぬ舌で言う。

「無理やつて、友里菜。ここは肝付のお供を連れよし。まあね、大久保君に気兼ねするならいいけど」

「あんな奴、わたしのカレシなんかじゃないしい！」と突如友里菜が口汚く罵った。アルコールのせいで、遂に本音が出たらしい。

あとの4人は啞然として、友里菜の半べそをかいた顔を見つめていた。

46 仮初めのカレシ？

46 仮初めのカレシ？

「寒くない、柿沢さん？」と肝付が友里菜の顔を覗き込むようにして、言いかけた。友里菜はうつむき加減で、先ほどの酔いもかなり醒め、今は恥ずかしさで一杯だ。

本音を漏らしたことでスーッとした反面、呆然としている仲間達を見て、友里菜の酔いは急激に醒めていた。

そして今、夜も更け、電車に乘ろうと駅に向かって歩いている友里菜は、どことなく後ろめたい気持ちに陥っている。

「べ、べつに」。今日つて、暖かいし」

と友里菜はか細く答えた。今側に居る肝付が、中学時代どんな男子だったかなんて、何も思い出せない自分が、少し肝付には悪い気がする。

「肝付君つて……どこの高校だっけ」

「ああ、私立K学院」

「西宮の？」

「うん」

「あのう……確か、ミッション系だったよね」

「そう、男子ばかり」と肝付は笑いながら答えた。

どんな子だったっけ？ でもあんまり聞くと、悪いような感じもするし。昔は、もっと小柄だったのかな？

「肝付君つて、少し変わったような気がするんやけど」
と友里菜は当たり障りの無い言い方をした。

「うん、昔はチビだったからな」。一年前と比べて、背が10センチ

「チ近く伸びたから、皆も驚いているかもしれへん」

「ああ、そうだったよね！」

と言ったが、実は友里菜は全く覚えて居ない。と言うより、眼中に無かったのかも知れない。

「今は、結構背もあるし、なんか1年って、あつという間やけど、色々変っていくんやね」

「うん、今の時期はね」と肝付は、真っ直ぐ線を引いたような眉を寄せながら言った。

「なら、柿沢さんだって」

「え？ わたし、変った？」

「うん、そりやすごく！」

“すごく”と言っ言葉を、肝付は強調した。

「女は、変るんやな」

「なによ、それって」

「着物着ているから、尚更なのかも知れへんけど、急に女っぽくなつて」

「あら？ じゃ昔のわたしは……」

「もっと幼い感じがした。そして、頭いいけどお硬くて近寄りにくくて」

「やゝだ」

「でも、可愛くて」

暗がりだというのに、肝付の頬がポツと赤くなったのを、友里菜は確かに見た！

「可愛い……？」

「うん。でも、柿沢さんは、誰かさんのカノジョだと思っていたから。でもさっき、そうじゃない、と柿沢さん言ったよね」

芳人の顔が浮かぶ。けれども今、芳人は少し遠い存在だ。

「本当のカレシとは言えないと思う。やっぱり、高校別々だからかな。会う機会もあんまりないし」

肝付の前でスラスラと言える自分に、今更ながら友里菜は驚いていた。

「大久保君は、男っぽくて秀才で……僕なんかとは違って……」

「なによあ。カレシと言うよりライバルやったし、今でもそっちの方が強いかも。だって、芳人は、いや大久保君は、今は何を一番にするかと言うと、勉強する時やからと言っているし」

「仮初めのカレシ？」

「ははは、おもしろいこと言うんやね、肝付君って！」

友里菜は上目使いに肝付を見上げた。芳人は精悍だが、けれども美形ではない。美形という点で言えば、肝付は案外美形の方だ。

「ジャニーズ系なんだ、肝付君って」

「いやあ……そんなこと、女子に言われた事ないけどなあ」

「当たり前やん。男子校やから」

「ふっふっ、柿沢さんって、見かけよりも面白いんだ」

「見かけ？ わたしって、そんなにお硬く見えるのお？」

甘えたような声を発したのは、芳人以外では肝付が始めてかもしれない。又そう言わせる雰囲気何かを、今の肝付は持っていた。ミッシェンの男子校独特の雰囲気って、こうなんだろうか？ どこか優しい、そして汚れの無い無垢な部分を持っている。

肝付が、神に祈っている様を、そして讃美歌を歌っている様を想像して、友里菜は妙に納得し、クスリと笑った。

電車の中でも、2人は色々話していた。話は尽きないように感じた。それでいて肝付は、石黒龍也のような、“いやらしさ”が微塵も無い。自然なのだ。

駅を降り、マンションへの道すがらも肝付は友里菜の手を握ろうとしたり、触ろうとしたりは何もしなかったが、その眼差しの真摯さだけは真剣で、それは友里菜にもビームのように感じた。

「それじゃ、あのマンションが今のうち。小さいけど、何とか……」

「ござつぱりして、綺麗なマンションやんか」

と肝付は言ったが、それが全然嫌味に聞こえない。

「じゃあ、今日はありがとう、肝付君」

友里菜は長い袂たもとから、手を振った。

「ね」と突然肝付が声を掛ける。

「なに？」

「電話していい？ 僕は携帯電話持っているけど、柿沢さんは？」

「あ……」

友里菜は一瞬声が出なかった。

「ごめん。気を悪くした？」

「ううん、違う。わたし、携帯もピッチもまだ持っていないの。でも家の電話でいいのなら」

「いいの？」

そう念を押す肝付は、心から嬉しそうだ。

「うん、いいよ」と友里菜は答えた。「話すの、楽しいもん」

「あは」と肝付は意味の無い声を発すると、ニッコリ微笑んだ。友里菜は手帳の切れ端に、現在の電話番号を書いた。肝付はそれを握り締めると、手を振った。

飯初めのカレシ、か。今はどっちが、そうなんやろ？

47 本当のカレシはどっち？

47 本当のカレシはどっち？

正月に出会って以来（本当は、中学のクラスメートだったのに）、肝付は積極的だった。

ほぼ毎日電話かFAXが届き、友里菜の母親は訝しんだ。

それに比べ、芳人はなんともゆっくりペースで、亀岡から帰ってきて始めて友里菜に電話を掛けた。もう冬休みはほとんど残っていないというのに。

芳人の、会えないかな、という問いに友里菜はすげなく、無理だと答えた。冬休みは短いし、塾の補講も残っていて、正直とてもデートなどする暇はなかったのだ。

けれども芳人が呆気なく諦めて電話を切った時には、友里菜は多少とも腹立たしく思った。正月、自分が如何に淋しい思いで居たか、それを両親の実家で羽を伸ばしてきた芳人には理解できない鈍臭さが、どうにも納得できなかった。

そう言う日に限って、肝付からは電話が入ってくる。

肝付は、少し遠慮がちにそんなに長電話はしないものの、どこか執拗なところがあるようだった。

「一体、どっちが友里菜のカレシ？」と、電話が終わると母親が聞いてくる。

「どっちも違うけど。」

「だって、最近……」

「何が言いたいのかよっ！？」 どちらも、単なる友達、そしてライバルみたいなものだからあ！

いちいちうるさいんだよ、お母さんは！」

むしゃくしゃして友里菜は、母親に当り散らした。

「反抗期かしら……」

そう呟く母親も、なぜかうざい。この歳になったら、男の子の一人や二人居ても不思議は無いと言うのに、母親にはそれが分からないらしいのだ。

実際の所、友里菜の交際相手はどちらも他所の高校生だ。なぜ今の高校には誰も出現してこないのか……。それを考えると、友里菜は苛々してくる。

かと言つて、彩香のように、教師とらぶらぶになることはとても考えられないのだ。友里菜にとつては、教師は幾ら若くても、結局はオジサンにしか見えない。あんなオジサン達を相手にし、そして身体まで与えるなんて！ 彩香は本気で、あんなことを続けているのだろうか？ それとも、単なる遊び？

どっちにしても、友里菜はまだまだそこまで成熟してはいなかったし、成熟する気も無かった。ただ無性に淋しい、と感じるときはあり、その時には芳人や肝付と喋っていると楽しいのは事実だ。

しばらくして、肝付から手紙が来た。中には、男の癖にどちらかというと女性的な文字で、「僕と付き合ってください」という旨の文言があつた。

『もしも、大久保君と深い仲ではないのなら、そして大久保君とはライバル以上の関係ではないのなら、僕と付き合っても、罪にはならないと思います……』

と言うくだりには、友里菜は思わず噴出してしまった。

『罪にはならない』という言い方は、如何にもミッシェン系の男子高校生が言いそうなフレーズだ。けれども、友里菜はその陳腐な言葉に、妙な新鮮さを感じてしまっていた。

芳人ならそんな言い方はしないだろう。もっと単純に「僕と付き合ってくれ。真剣なんだ」とストレートに言うに違いない。そういう芳人が友里菜は好きだった。

けれども今、迷いの中にある友里菜は、『罪にはならない』という表現を使いこなす肝付も又、違うタイプながら少し魅力的に感じた。何しろ、ビジュアルで言えば、問題は無い。芳人ほど長身ではないものの、肝付には芳人には無い柔らかさ、上品さ、ピュアな雰囲気 が漂っていたからだ。

『もしも付き合ってくれるのなら、僕のことを、隼人^{はやと}と名前で呼んで下さい。こういうの、電話では言いにくかったので、手紙で失礼します』とそれは結ばれてあった。

「隼人かあ、肝付君って、隼人って言うんだったのか……」

頬杖を突きながらも、友里菜の口元は緩んでいた。そして友里菜は、晩秋にやっと来た、中学時代のアルバムを持ち出して、昔の肝付隼人を探していた。

集団写真の右端に座っているのが、隼人だ。けれどもその映像は、随分昔に感じた。ほんの、一年半前ぐらいに撮った物だと言うのに！

自分が変わるはずだ。そして隼人もまた。

隼人は、ミッション系では関西でも有名な美しいキャンパスとチャペルを持つと言うK学院に行つて、ずっと洗練されてきたもののようにだ。

女子禁制のキャンパス……緑の芝生に映える、素晴らしいチャペル。古風な雰囲気^{雰囲気}の学院の各クラス。そしてその中で学び遊ぶ少年達……。

「あゝあ、如何にもK学院って、ボーイズラブの雰囲気なのに……肝付君って、やっぱり男だったんだ」

ええんや。芳人が各々自由にしよう、と言い出したんやから、わたくしが隼人と付き合っても、文句は言えっこない。それに隼人って、野獣のように襲い掛かることもないだろうし、龍也先輩のように、涎を垂らして女の子を追い掛け回すこともないんやわ。

何だか、隼人って、まるで随分昔の時代の男の子みたい。けど、どこかステキ！

友里菜はボールペンを取ると、さらさらと返事を書いた。

『付き合ってもいいです。でも、あくまでも、正直に正々堂々と出来るのなら……そして罪になるようなことをしないと云う約束なら』

もちろん、返事は直ぐに来た。

手紙が着いたと思われる三学期初めのある晩、肝付隼人からウキウキした電話が来たのだ。二人はやっと晴れて長電話をすることが出来た。

楽しい友里菜の背中を見つつ、「ねえ、あなた」と友里菜の母は夫に耳打ちした。

「ぼちぼち、友里菜に携帯電話がピッチ、買ってあげてもいいんじゃない？ あの子、もう大人の領域に入っているようよ。わたし達は、もうこれ以上縛る事は出来ないんじゃない？」

父親はむっつりと黙り込んでいた。

48 バレンタインデーの出来事

48 バレンタインデーの出来事

芳人はある意味馬鹿だった。アホだった。

あんな手紙を書いておきながらも、友里菜を信じきっていたのだ。というよりも、“甘えていた”のかもしれない。

とは言え、書いた事は真実であり、友里菜を愛しながらも、というかもうその歳でほとんど友里菜を将来の伴侶としても考えていたにも拘らず、芳人は今大切なのは将来に備えて勉強する事だ、と信じて疑わなかった。

そして芳人の過ちは、友里菜と同じ心境であり、だから浮気などするはずが無い、と思い込んでいたことだ。ある意味、幸せな男……と言うよりも、単純素朴な人間なのだ。

だから芳人は、友里菜がミッションスクールの、洗練された肝付に心揺れているとは、想像もしなかったのだった。

けれども、思わぬところで芳人にも転機がやって来た。

1997年（平成9年）のバレンタインデーは、金曜日だった。

朝早く芳人がクラスに入って行くと、自分の机の上に紙包みが置かれてあった。可愛いピンクのリボンまで付いている。

芳人はぼんやりとしてその箱を手にとった。

「おい、大久保。それって、誰からや？」

と次にクラスに入ってきた山路と言う比較的仲の良い男子が、ニヤニヤ笑いながら問いかけてきた。もちろん、山路にはそれが何かお見通しだが。

「何やる？ 今日は何かの日？」

「あほくさ。今日は2月14日やないか！」

「って？」

「そやから〜、バレンタインデーやろって」

「それじゃあ、これチョコ？」

「決まってるやんか。あゝあ、ええなあ、もてる奴は！ 知らん振りするのも、ええ加減にせんかい」

山路は本気で憤っているようだった。芳人もやっと気が付いた。

「ああ！ バレンタインデーやないかつ」

「当然やろ？ 今更、何言うてんねん」

「へー、誰やろ？」と芳人は首を傾げる。芳人は今の今まで、友里菜以外の女子にはとんと興味が無かったからだ。だから、相手が誰なのか全然見当も付かない。

「ま、ええわ。もうとこ」

言いつつ、芳人はカバンに入れ込んだ。この時まで、芳人は自分が他の女子にもてるなどと、全く思いもしなかったのだ。

けれどもその日はそれだけではなかった。

そのチョコの主が誰だか知らないが、芳人は1個もらっただけで、何だか嬉しくなってきたのだが、更に追い討ちがかかった。

昼休み、廊下を歩いていると、隣のクラスから小柄な女子がふいに姿を現すと、突き出すようにして両手を差し出した。その掌には、今度は赤い包み紙に薔薇の造花の付いた箱が鎮座している。

その女子は隣のクラスの女子で、秀才として鳴らしている赤井晴香^{はる}と言つきつい顔立ちの女の子で、よもや恋だの愛だのとは関係無さそうな女子だったからだ。

「はいっ、大久保君。これ」

「ええええええっ!？」

「もらって!」

「えっ、はいっ、はい」と芳人は度肝を抜かれて答えた。明らかに、今朝のようなこっそり型ではなく、昼間人前で堂々と渡すその姿は、“本命”と見られても仕方ない姿だったのだ。

事実、芳人の近くに居た男子も、晴香のクラスの生徒達も、びっくりして目を丸くし、2人のやり取りを見つめているのだ。

「早う!」

「あ、ありがと。そのう……」

「わたし、赤井晴香です」と晴香はテキパキと答えた。

「あ、赤井さん、それじゃ頂きます」

「そんな、ガチガチにならんでも。それじゃ」

糞真面目そうな晴香は、クスリと笑いもせずさつさと手渡すと、直ぐにクラスに引っ込んだ。周囲の啞然とした視線には全く頓着せず。

「す、すつげえやんか! ああ秀才女子も、所詮女やっただけだ」と言ふことやね。それも、彼女は、大久保みたいな男子が好きだったとは! 直ぐ近くに居た鈴木亮平が、2組の窓から顔を出しながら、えへへへと嗤った。

「どうすんねん? K高のカノジョに見つかったらあ」

「見つかりっこない。もらうのは勝手やろ? それに僕は、あんながり勉できつついい女は好きや無いしな」

「ふふふふ。まあ、もらえるものはもらっていいか。にしても、大久保って案外モテモテなんやなあ」

亮平はニタニタしながら、一方では一つもチョコをもらわなかった我が身を嘆き、羨ましそうに言った。

48 バレんタインダーの出来事（後書き）

この物語の44篇　ただ知らせたいだけ、がスパムブログに盗用されている、というご報告がありました。スパムブログとは、ブログに見せかけた広告宣伝などで、今では全ブログのうち、四割はスパムではないか、と言われています。

これは勝手に著作権を踏みにして盗用しているもので、この小説だけではありません。

もしも他のいかかわしいブログに私の物語が載っていても、それはスパムブログだとお考え下さい。勝手に関係の無い文字から、別の場所にリンクされますので、お気をつけ下さい。

by 著者

（ご報告くださった方、ありがとうございます）

49 秀才女子の告白にタジタジ

49 秀才女子の告白にタジタジ

今の今まで、芳人は赤井晴香などと言う女子には全く興味が無かった。けれども、彼女は高校の女子の中でも、5本の指に入るといふほどの秀才だったし、毎試験後入口に張り出される長い長い、嫌味丸出しの成績表の紙にはいつも晴香の名前が、上の方にあつた。それに比べて、芳人は中間よりは少し上位ではあつたものの、晴香よりも、それこそ“遙か”下でしかない。

それなのに、女の気持ちは分からないものだ。あの気の強そうないつもツンとして見えるように見える晴香が、とても“義理”とは思えないチヨコを、廊下の真ん中で堂々と芳人に手渡したのだから。晴香は、ツンデレの代表格のような人物なのかも……？

分からへんなあ、女子の気持ちは……。けど、二つも本命っぽいチヨコをもらうなんて、ちつとはいいい感じだ。中学の時には、皆が僕と友里菜との仲を認めていたから、誰もチヨコなんて渡さなかったのかもしれない。僕って……案外、モテ男？ そんなにハンサムとは言いかねるんやけど……。

芳人は帰宅途上もニマニマしてしまい、電車の中では、他の乗客に気味悪がられていたのも知らなかった。

そして芳人は、何でもない振りをして家に入るのに、約一分はかったのだった。

「ただいま」もそこそこに二階に駆け上がり、カバンの中からゴソゴソと二つのチヨコの箱を取り出して、しげしげと眺める。物を

もらうのって、いい感じだ。気持ちいいいいい~~~~っ！！

そして芳人はハタと手を止めた。そう言えば、友里菜が芳人に何かやっただろうか？ 芳人の方は銀のハートのネックレスをあげたが、友里菜からは何ももらっていないことに、今頃気付いていた。かと言つて、「欲しいよお」とせびるのは、全く男らしくない。それでは、ヒモだ。クズだ。

「ともあれ……本命チョコって、こんなに嬉しいとはな~~~~」
呟きながら、芳人は最初の箱を開けてみた。可愛らしい熊さんの形をした、ちよつとおぼこい感じのチョコが並んでいるが、あとは何も無い。

結局誰がくれたのか、芳人には想像できなかった。
朝早いから、朝練のスポーツ系の女子かもしれないが、朝練ならブラスバンド部もやっている。あれこれ想像してみたが、これと言った女子は見当たらない。

「ま、いいや。それじゃ、お次！ あのガリガリのがり勉の女子はどうやる？」

芳人は丁寧に包装紙を外し、中を覗いて、今度は自分がのけぞった。中には、まさに（！）大きなハート型の一枚のチョコが鎮座していたのだ。

「うつそ〜！ あの女子が！？ 信じられん。これだから、人間は外見ではない、というのかいな？」

その上、チョコの下には何やら白い紙片がのぞいている。それを取り出して、もう一度芳人はのけ反った。そしてまさにベッドの上にひっくり返ってしまったのだ！

紙片はどうやら便箋で、それも周囲には薔薇かたどの模りがしてある優雅なもので、しかも香水がプンプン匂うのだ。友里菜でさえ、この

ような女らしい便箋など持っているとは思えない。

中にはびっしりと、晴香の几帳面な字が書かれてあった。明らかに、告白だ。

ざっと読むと、晴香は最初から芳人に目が行き、実は夏場からプールサイドでの半裸状態の芳人の姿を凝視していたらしいのだ。

『わたしには、勉強しか脳の無い男子は、全く興味ありません。大久保君はどこかに彼女が居る、と聞きましたが、私はそんなことはどうでもいいのです。少なくとも、大久保君には、このI高には好きな子は居ないはずですし……』

この自信満々の単刀直入な書き方に、芳人は完璧にダウンしてしまった。が(！)、かと言って友里菜を今でも愛していて、どうもこの晴香を直ぐには女としては見られないのも確かだ。

『恋というよりも、私はまず大久保君の友達になりたいと思っています。これが恋かどうかなんて、それはこれから分析すればいいことですし。』

とにかく、是非大久保君の気持ちを知りたいです。返事はこの下にある、私のピッチに掛けて下さい。それが嫌なら、古風なお手紙でもいいです。お待ちしています。

晴香』

京大か阪大、はたまた東大に行くかも、と思われている女子とはとても思えない字面で、芳人は頭を抱え込んだ。

友里菜は好きだし、愛している。けど……晴香という頭のいい子はどんな女子なのか、付き合いたって気もするよな。やっぱり、僕の男の血が騒ぐっていうかぁ。

ああ、あかんあかん！ そんなことしたら、友里菜を裏切る事になる！……んやろうか？ 別に、晴香って子とらぶらぶするわけでもないし。肉体的には、もち、友里菜のほうがいいに決まってるやんか！ けどな〜、どないしよう……。

コクられて嬉しい悲鳴とはこのことかもしれないが、その晩、芳人は悶々としてさっぱり宿題が進まなかった。そして、夢の中で誰かに追いかけられている、苦しいような嬉しいような夢を見てしまったのだ。

50 どちらも浮気？

50 どちらも浮気？

「ねえ、一度どう？ 神戸に来ない？」

二月末のある晩、隼人から友里菜に電話があり、やはり来たか、と言う感じのデートの誘いがあった。

二年前の、阪神淡路大震災の爪あとがまだ残っている神戸だったが、2年経ってどうやら落ち着いてきたようだ。けれども、やはりその前のような華やかさは、まだ神戸には無かったし、それに芳人達と出かけたボランティアのことが、頭をよぎった。

まだ汚れを知らない、キスすらしたことのない、幼い自分が居た、あの神戸……。

「神戸……？」

「あ、と言うよりも、六甲とかいいかなと思って。ちょっと寒いけど。試験、もう終わっているやる？」

「そっちは私立やから、もう入試も終わったんやね」

「あ、そうか。公立とは違うんだ」

「いいよ、こっちももう終わったし。でも日曜日しか嫌だな」

「あ、日曜日？ 困ったな、本当は教会に行かなくちゃならないけど、あ、でもたまにはさぼろう」

「へー？ 隼人って、クリスチャン？」

「じゃないけど、母親が熱心で。まあ、行くのはたまにだけど、学校も勧めているしね。春休みとかには、絶対に教会に一度は出席して、レポート書かされるんだよ」

「ふうん、ミッシヨンの男子高って、やっぱり違うんだあ」

友里菜は妙な新鮮さを覚えていた。

隼人とは気が合っていた。どちらも私服通学だったし、何を言っても、隼人の受け答えはおとなしくて優しい。言葉遣いも、ギンギンの大阪弁ではなく、どちらかというと関西の中では標準語に一番近い神戸風だ。

公立と私立との違いはあっても、それが又芳人には無い新鮮味を感じさせてしまう。けれども、友里菜はやはりどこか隼人には物足りないものを感じていた。

それが何かは今分らなかったものの、友里菜は快く返事をした。

「それじゃ、次の日曜日」

「良かった！ 柿沢さんに断られるのかと思っていたから」

と言う隼人の言葉には、偽らざる喜びが溢れている。

「何で？」

「いや……だって、大久保君のことがあるし……」

「だからあ、わたし達ってまだそこまで行っていないんだってば！

2人ともお互いを縛らないって約束なんだから」

友里菜は拗ねたように、答えた。

「あ、ごめんごめん。じゃあ、ちつと寒いけど、六甲でいいよね」
「うん」

「だったら、厚着してきて。あ……君なら何でも似合うと思うけど。この間の着物姿も良かったけど、普段の君の姿も見たいから」

「なによお、その言い方は」

「君のスタイル抜群だから、って言いたかっただけ」

とはにかんだ様な隼人の声が、受話器から聞こえてきた。友里菜はついニヤリとしてしまった。

一方、芳人はホワイトデーに、買ったこともない泰迪・ベアの乗ったキャンディ・ボックスを買おうと画策していた。終業式

前だから、手渡そうと思えば手渡せるのだが、芳人はそのことだけで一人懊悩していた。

チョコをもらって以来、晴香は露骨に芳人に目配せするようになった。遂に芳人は、晴香のピッチに電話を掛け、しどろもどろながら礼を述べたのだ。

「で？」と晴香はキリリとした声で問いかける。

「なに？」

「わたしと交際してくれるん？ それとも、やめる？」

「こ、交際と言ってもなあ、大したことは出来ないと思うんやけど」

「あら、わたし何かを要求した、大久保君に？ わたし、物とかそんなの要らへんの。わたしが求めているものは、あくまでも大久保君の意志だけなんやから」

「好きとか嫌いとか、まだ分からへんしな」

「それは、交際してからでいいのよ。最初から、答えを出す必要なんてないんだから。交際は、試験でもテストでもないのよ。分かるでしょ？」

理路整然と言う晴香に芳人は気圧され、つい、「なら、ええかな」と口走ってしまった。

「まあ、ほんま、ありがと。おおきに！」

「別に僕は赤井さんには、何も出来ないと思うけど」

「いいのよ、それで。わたしのこと嫌いでなければ」

晴香の声は、あくまでも乱れが無かった。

「じゃーね、大久保君」

晴香のピッチは切れた。

芳人は後悔の様な、けれども嬉しいような奇妙な気持ちを味わっていた。

2人とも、やっている行為自体には邪気が無いのだが、これが“浮気”なら、そうなのかも知れない……。なぜなら、物はあげないが、心はあげているのだから。

51 六甲での寒い寒いデート

51 六甲での寒い寒いデート

友里菜と隼人のデートの日は、よく晴れてはいるがかなり寒い日だった。おまけに六甲は山なのでもっと寒い。赤いダウンにジーンズの友里菜と、黒いスエードの高価そうな上着を羽織った隼人の2人は、それでも寒さに震えてしまった。

けれども、六甲山頂へ登るケーブル・カーに乗り込む時には、2人がかなりはしゃいでいたのは確かだ。

「わたし、なぜか六甲は始めて。もちろん摩耶山も行ったことない」「ふうん、神戸の方面には興味ないの？」

と隼人と友里菜は2人そろって腰掛けながら、談笑していた。「ていうか、あの時の地震の怖さがまだ残っていると思うんだけど」

「でも住んでいたのは、大阪やる？」

「いや……実はあの時、ボランティアに行ったの、わたし」

隼人はそれを聞くと、改めて友里菜の横顔を見つめた。

「へー、すごいな、柿沢さんって。あのボランティアに志願したなんて、知らなかったな」

「そう？」

「大久保君も……行っただ？」と隼人は控えめに尋ねた。

ガタンという振動がして、ケーブル・カーはスルスルと登り始めた。

「え？」と友里菜は聞き返す。すっかり外の景色を見ていたのだ。

「物凄い急斜面ね」

「大久保君、行ったのかな、と思って」と隼人は繰り返した。

「ああ、芳人、て言うか、大久保君も来てたよ。あいつが来てたんで、びつくりしたけど」

「すごいね、君達」

「なんでえ？」

「僕なんか、ちっとも勇気がなくってさ。行きたいような気がしたけど、なんか関係ない気がして。お袋は勧めたんだけどね。僕って主体性がない人間だよな」

「なによ、変なこと言っつて。肝付君は、ちっともそんな感じじゃないから」

友里菜はスルスルと上って行くケーブル・カーに気を取られていた。摩耶山のケーブル・カーはまだ再開されてはいなかった。例の大地震で壊れてしまったらしいのだ。

地震の傷跡は、まだ神戸を覆っていた。ここに来るまでの電車の中から見ても、まだまだ沿線の地域は荒廃していた。所々、真新しいコンクリート製の建物が建っており、友里菜はそれらを無言で見つめていた。

家を無くした人達から見たら、今の友里菜の状況などまだマシな方なのだ。

「だから、まだK学院に行つて良かったと思つている。ね、聞いている？」

と隼人は友里菜の耳元で囁いたので、友里菜はハツとして我に返った。

「あ、ごめん。考え事してた」

「何か考えている君つて……憂いありげで、とても……」

そこまで言つと、隼人は言葉を切った。

「ね、肝付君、K学院も地震で壊れなかった？」

「うん、結構壊れたんじゃないかな。今では、かなり復興したけど。綺麗なキャンパスだからね。あ、学生も何人が死んだかな……」

そう静かに言う隼人は、結構イケメンだな、と友里菜のほうは思う。

頂上に着くと、寒さはもつと厳しくなった。友里菜はチェックのマフラーを首にグルグル巻き、ブルブル震えている。隼人はそんな友里菜にそっと寄りそう。そしてためらいがちに、静かに肩を抱いた。

友里菜はビクツとして、振り向いた。どうも芳人のように自然には振舞えない。けれども、まだ付き合っただけなのだから……と友里菜は自分に言い聞かせたが、心のどこかがチクチク痛むのを、覚えていた。

隼人は友里菜が拒否しないのでホツとしたようだ。けれどもそれ以上は、友里菜を強く抱き締めることもなかった。あくまでも、控えめなのだ。

山頂は日曜日だというのに寒いせいか、人影はまばらだ。上から下を見下ろすと、自分達の住んでいる地球は、こんなにも狭いのか、と感じてしまう。大阪湾が向こうに見渡せる。遥か沖合いに小さな船が見え、山肌にしがみつくように家々がびっしりと建ち並ぶ神戸。

「さ、ロープウェイに乗ろうか。いいところ、あるんだよ」

と隼人は明朗に言うと、友里菜を誘った。

2人はロープウェイに乗り、遥か有馬や六甲の山並みの下を覗きこんでは歓声を上げ、そして訳もなく興奮していた。

着いた六甲ガーデンで、友里菜は可愛らしいお土産品とか、綺麗な物を見たり、少しロマンチックなレストランで食事したりした。そういつときの隼人の態度は完璧そのもので、洗練されていて申し

分ないのだ。

けれども……友里菜はどこか、芳人に対して申し訳ない気持ちをいつまでも持ち続けていた。

芳人はガサツだが、もつと自分をオープンに出来る。隼人には…

…やっぱりどこか偽りの自分しか見せられない。

けれども、この寒い日のデート自体は、楽しかった。

恐ろしい二学年の前の、束の間の一時とも知らず……。

52 晴香と同じクラスとは！

52 晴香と同じクラスとは！

春が来て、鈍臭い芳人にも、友里菜が電話での話しぶりが、どことなく空々しいのを感じていた。

言葉は発しているものの、心ここに在らずのようだったし、笑い声などはとってつけたような、あえて言えば“作り笑い”に近いのだ。

ま、まさか、友里菜……本当にカレシを作ったんじゃないだろうか？ 自由にしていいと言った本意は、“自由にカレシを作っていい”っていう意味じゃなかったんだけだな。

そういう束縛から、自由に行動しよう、ってことだったんだけど……あれ？ って結局一緒か……。あゝあ、もしもそうだったらどうしよう？

なーんて言っている僕だって、この間ホワイトデーには、赤井さんにテディ・ベア付きのキャンディー・ボックスをやったじゃないか。あれがテディ・ベアという名前の熊の人形なんて、今頃始めて知ったぜ。

何しろ、友里菜はそんなの興味なかったしな。あんな熊の縫いぐるみ、一体どこがいいんだか……？ だけど、赤井さんは、びつくりしたけど、ああいうのが意外に好みだったんだな。女子の気持ちや嗜好は、外見では皆目分からへんわな、僕には。

確かに、芳人から廊下の隅で贈られた赤井晴香は、そのきつい顔を珍しくニンマリさせて笑顔を作り、「ありがと」と簡潔に述べたのだった。ただそれだけだったが、芳人は呆気にとられていた。

超秀才の女子でも、贈り物は嬉しいらしいという単純な心理を、

芳人はまだ理解していなかった。

けれども、これでお役目ごめんだと思った芳人は浅はかだった。なぜなら、二学年の始業式前の張り紙に、同じ2組に自分と晴香の名前があったからだ。幸か不幸か、鈴木亮平とは又もや同じクラスになったが、逆に亮平に常に見張られて突っ込まれそうで、嫌な感じがした。

「おいっ、大久保く！ 僕とまたまた一緒になったな。あの、このクラスはどうやら理系に行く者達ばかりだそうやで。それに」と亮平はくっくつと忍び笑いをした。「あの赤井さんと、一緒なんてなあ。うっひっひ」

亮平は芳人の分厚い胸をドーンと突く。もともと図体のでかい大人っぽい芳人だったが、もう2年になると、もっと大人びて見えた。

「ほらほら、噂をすれば、赤井さんが……くくくっ」

芳人がその方を向くと、晴香が全く臆する様子もなく、芳人に近寄って来ていた。晴香は他人の目とか噂とか、全然気にしないタイプのようだ。小柄だが、堂々としているようにも見える。まさに、女王様っ！

「あら、大久保君。一緒のクラスになったわねえ。これって運命の悪戯かお導きでしょう。っていうより、確率的にもかなり良い線だったのかもよ。ともかく、これからよろしゅうお願い致します。

あ、キャンディー、美味しかったわよ。おおきに」

晴香はキラリとウインクラしきもの（？）をしたので、芳人の顔は真っ赤になった。なにもそこまで、と芳人はありがた迷惑していたのだ。

けれども、横に立つ亮平は、笑いを堪えるのに苦労している。亮

平はドンドンと芳人の背中を叩いた。

「おいおいおいっ！ あの鋼鉄のようにお堅い女子をものにするなんて、お前も隅におけんなあ。その上、K高には別のカノジョが居るつてのに、お前贅沢過ぎ。お前つて、そんなにオーラがあったんかいな？ そのオーラの一欠けらでも、僕に分けてくれよおお」

「るっせえ！ こんなこと、誰にも言うなよ」

「言うなつたつて、その内ばれるさ。何しろ、同じクラスだものな。これは、めっちゃ見ものやあ。二学年も楽しくなってきたぞあ。くくくくく」

「その、ものにする、つていう表現も気にいらへん。ただ、ホワイトデーのお返しただけやんか」

芳人は亮平とは反対に、苦々しい気がしていた。

晴香は確かに小柄できつい顔立ちだが、まあまあ美人の方だ。それに案外率直で、ストレートなところが気に入った。だからといって、別に女として晴香を好きになる……？ そんなことは考えにくい。

友里菜のことよりも、自分の立場の方が怪しくなった芳人はとにかく右往左往するだけだった。

けれどもその頃、友里菜は超浮かない顔をしていたのだ……。

53 二年は良い年、それとも厄年？

53 二年は良い年、それとも厄年？

友里菜は散々迷った挙句、結局文系兼芸術系のコースを取ることになった。

それは前の晩、隼人との電話中に隼人から質問されて、思わず「歴史とかいいかな」と言ってしまったからだ。

「うん、柿沢さんは英語や歴史が好き見たいやから、やっぱり文系取れば？」

と隼人に言われてしまった。

「ねえ、英語だったらうちの大学の英文かもいいかも。柿沢さんが来てくれたら、同じキャンパスになるし」

「って、肝付君、やっぱり同じK学院大に行くの？」

「ああ」と隼人は曖昧に言った。「僕って、他大学受験するほどの実力なんてないし」

「で、コースとかある？」

「うん、まあね。多分僕は……K大では経済とか、哲学、もしかすると神学かも」

「し、し・ん・が・く？」

「ええと、神の学問。つまり神学部」

「ああ、そんな学部もあったんだ」

「だって、ミッション系やもん」と向こう側で、隼人は控えめに笑っているらしい。

「なんか、別世界」

「そうでもないよ」

そう言つと、「もう遅いから」と隼人は電話を切った。

友里菜は静かに受話器を置くと、階段を上がろうとしたその時、「友里ちゃん」と言う母の声がするので、仕方なく居間に入った。

居間にはニコニコ笑っている父の姿があった。

「高校2年になったから、友里菜にも携帯電話を買ってやるよ。もうそろそろいいかな」と思ってたからなあ」

「ええーっ!? ほんま!？」と友里菜は飛び上がった。

「5月は友里菜の誕生日でしょ。もう17歳になるんやねえ」。早いもんやわ」

と母親は珍しくしみじみと言う。「だからね、ちよつと早いけど、誕生プレゼントにいいかな、と思って」

「わあああ、ありがと!」

友里菜は久しく味あわなかった歓喜に浸されていた。これで好きな時に色々な友達と電話が出来る。

「友里菜をある程度大人だと認めているから、買ってやるんやで。

だからな、節度ある使い方してもらわへんと」と父親がやんわりと釘を刺した。

「そりゃ、もう!」

普段は口も利きたくないすっかり白髪交じりのオジンとなった父親だったが、今回ばかりは抱きつきたくなる。

「夜中とかはいつまでも電話は駄目よ。それに新聞で読んだんだけど、電話しすぎて、一月に10万以上お金が掛かった子もいるそうやし」

「それにこの間、子機を壊したようなことはせんどいてや」

と父親は、友里菜の最弱点を付いた。このことに関しては、友里菜は反論できないのだ。

「うん、分かった。もうあんなあほな事は、絶対にしいへん。大事

に大事に使うさかい」

「んなら、今度の日曜日にでも、買いに行くかな」

と父親はヘラヘラ笑っている。少し溜飲が下がったようだ。

友里菜はルンルンと、自室へ入りしばらくその場でぼんやりしていた。

と言うのも、その事実はすごく嬉しいのだが、今度のクラスの生徒達が気に入らないのだ。彩香とは遂に別れたが、“女王様”の伴坂沙莉奈とまたまた一緒になってしまったからだった。

沙莉奈は、音楽コースを取っていて、どうやら本格的にどこかの音大を受験するらしいから、同じクラスになっても仕方ないのだが、どうも友里菜はしっくり来なかった。

いつもいつも、沙莉奈の側に居るのは、自分が沙莉奈のしもべか引き立て役のような気がして、嫌なのだった。

多分、わたし、嫉妬しているんやわ。嫌な自分だけど……。

それだけではない、映研の田辺亜紀と同じクラスになったのはいが、亜紀はお喋りだ。何だか更に嫌な予感がする。

それから、意地が悪いという評判の足立リカと言う女子とも同じだし、バリトンの嫌味な男子、岸辺晃あきひらと言う、友里菜の余り好きでないデブも一緒だった。どうやら、晃も又音大に行く気らしいのだ。

とにかく、変人奇人の集まり、というのが友里菜の正直な感想で、またしても、ちゃんとした友達など作れそうもない雰囲気だった。

親友なんて、この世に本当に居るんだろうか？ コミックとか小説では、生涯の友とか、親友とかいつも登場するけれど、実際の現実ではどうなんやろう？ 少なくとも、わたしにはできっこない気がする……。

この友里菜の勘は、不幸にも確かに当たっていた。

54 隼人の優しさに……

54 隼人の優しさに……

「柿沢さん、ちょっと来て」

突然背後から呼びかけられて、友里菜は振り返った。同じクラスの女子、宮崎かなえがぶすつとした顔つきで、立っていた。その周りには、黙りこくった女子が数人……沙莉奈の“親衛隊”だ。

「え？ なに？」

「なに？ って、随分しおらしい言い方やん。でも、あんた、伴坂さんの後釜狙っているってほんと？」

「何のこと？ 何言うてんのか、わたしには分からへんけど」

「ばつくれるのも、うまいんや、柿沢さんって」と、かなえ。

「ちよつと男子にもてたからって、このクラスの女王面せんというや」

と別の女子も嘴を入れた。

友里菜は本当に何のことか、皆目分らない。もてた？ 沙莉奈の後釜って？

「じゃあ言うけど、あんた今度のコーラス部45周年記念音楽会で、ソロをやるって手をあげたってな〜！」

「手をあげた？ わたしが？ そんなことしてへんけど」

「んもうっ！ ソロは伴坂さんがやるに決まっているやんか！ あの人のほうが、声が綺麗だし、歌も抜群。それに、音大にいくんやで」

「誰がそんなこと言ってるん？」

そう問う友里菜は、怒りの余りブルブルと小刻みに震えていた。

「岸边君が」とかなえは即座に言う、顎をしゃくった。窓辺にデブの岸边がいて、こちらを向くとへらへら笑っている。

「あんた、コーラス部でも生意気って評判やてな」

「それはどうか知らんけど、わたしは手なんてあけてない。でも、あつ！」

友里菜は急に思い出した。

それは昨日の部活のこと。伴坂沙莉奈は風邪で居ない時だった。

ソロのパートの時、ボイス・トレーナーの三年生が、

「誰か、代わりの子おらんのかい！」と怒鳴ったとき、友里菜の横の、別のクラスの吉沢と言う余り話したことの無いソプラノの女子が、友里菜の腕を取って、無理やり上げたのだ。

「ちよつとお！ なにすんのよお！」と友里菜は小声で怒鳴ったが、吉沢という女子はフンと言う顔つきで、

「ここに居ますう！ 柿沢さんが！」と勝手に大声を上げたのだ。

この女子は、かねてから沙莉奈を恨んでいると言う嫌な噂のある女子だった。

「いいやんか。あいつの次に上手いのは、あんたやから」

「でも、そんなん……」

「おつ、柿沢か。じゃあ、今日は代わりにソロ・パート歌え！」

と先輩は呑気に言いつけた。

友里菜は拒む事もできずに、その場限りのつもりでその部分を歌ったのだが、周囲の者達は、一部友里菜の声に聞きほれていたのは確かだ。

「ほうお、案外柿沢って上手いやん」とその先輩も少し誉め、少なくとも友里菜はその時ちよつとだけ自己満足に陥ったのだ。

けれどもそれが躓きの原因とは！

「あれは戯れに上げただけ……」と一応友里菜は謝った。けれども直後に物凄い嫌悪感に陥ってしまったのだ。そして、沙莉奈とその親衛隊達に対する猛烈な憎しみで、今にも発狂しそうになった。

そこまで自分を卑下する必要など無いと言うのに、かなえ達親衛隊に負けてしまうとは……。自分が情けなかった。

その晩、買ってもらったばかりの携帯電話が鳴った時、友里菜は飛びつき、多分芳人だと思って、「もしもし」（*人名表示の無い時代です）、あのなあ」と泣きついた。

「どうしたの!？」と応答したのは、隼人だった。

「あ、肝付君? ごめん。なんか変なこと言った?」

こみ上げる涙をすすりながら、友里菜はベッドに寝転がった。

「泣いてるの?」と隼人は繊細な言い方で尋ねる。

「うん。ええ? ああ……そうかも……。今日ね、学校で嫌なことがあって」

「え? 嫌なこと? イジメとか、シカト?」

「まあ、何と云うていいのんか……嫌がらせ、みたいなものかな」
隼人の声を聞くと、友里菜はなぜか自然に甘えてみたくなる。芳人の時のような、肩肘張った感じはしない。それは、隼人が自分のライバルでも競争相手でも、ましてやカレシでもないからこそ、なのかもしれない。

まるで隼人には、男や女のジェンダーを超えた、単なる友人のような存在として接していかれるかのように。

「大丈夫?」

「ん、まあ、平気よ。何か、誤解などもあったみたいだし」

友里菜は少し強がった。けれども、今のクラスには友里菜の味方は、誰一人存在して居ないような不安感は拭えないのだ。

隼人は優しいが、けれども違う高校だし、直ぐ身近に居る訳では

ない。

「ならいいけど。今度の連休、もしも君に日が空いてるならどこかへ行きたいな」って。あの寒い日以来からね」

「今度の発表会の練習とか在るけど、一日ぐらいいは空いていると思う」

「それじゃ、どこかい場所探しておくよ。一度は、僕のK学院に来て欲しいんだけど。芝生に寝転がるだけでいい気持ちやし。大學生も多いから、目立たないし」

「いいのかな？」

「あつ、嫌だつたらいいんだ」

隼人はあくまでも優しい。包み込むように、そして相手をいつも気遣っている優しさだ。本物の優しさ……。

友里菜はやっと少し気持ちが落ち着いていた。

55 青天の霹靂「おかん……」

55 晴天の霹靂「おかん……」

芳人にとつて、2年生のクラスは、いいのか悪いのかさっぱり分からなかった。

毎朝、赤井晴香は芳人に会う度に、「おはよう!」とはっきりと声をかけてくる。芳人も仕方なく、「ああ、お、おはよう」と小声で返す。

横では亮平が、常にこちらを見張っては、くすくす笑う。芳人は何だかこそばゆい気持ちだった。

だからと言って、晴香は芳人にベタベタとくつつく事などはなかった。時々、

「ねえ、ここ分からへんのやけど、あんた分かるう?」

などと言いながら、教科書などを持って来て、芳人の机にそれをドサツと置き、自分は頬杖を突いて、芳人を促すぐらいだ。

だから、晴香は“カノジョ”とまで言うほどのことはないものの、それでは「違う!」と否定できる女子でもなかった。中途半端なのだ。が、それが晴香にとつては心地良い関係らしかった。

少なくとも芳人は、友里菜をほったらかして、晴香とくつつく事はありません……と本人は思っていた。

芳人は今度のGWは、必ず友里菜に会わなければ、と心に決めていた。幾らなんでも、もう何ヶ月も会っていないのだ。芳人は気も狂わんばかり友里菜を求めている。夢の中ではキスだけでは済まず、何度も交わっていたのだが……。

けれども目が覚めれば、それは単なる“夢”に過ぎないのだ。余りにも友里菜を放っておけば、何か変な虫が付くかもしれない……

そう言えば、最近携帯電話を持っているはずなのに、掛かってくる回数が少ないような気がした。

芳人は今日こそ友里菜に電話をしよう！と、まなじりを決して帰宅した。

二階に駆け上がろうとして、ふと台所が暗いの気付いた。今頃はもう、母親はいつものように、夕食の支度をしているはずだ。

母は居ないのだろうか？ けれども、台所の隣のソファに誰かが座っているような気配が……。

「おかん？ いや、お袋？」

芳人はそろそろと近寄った。

「は？」と言う力ない声で、その人物は振り返った。

「なんやー、お袋やないか。そんなところで何してるん？ あ……何かあった？ 身体がしんどいと違う？」

芳人は少し前まで母親と一緒に並んで歩くのも、喋るのも嫌な時があったことを思い出していた。けれども2学年になってからは、そういう反抗期もどこかへ過ぎて言ったような感じた。

「いや。別に何でもないねん。ああ、もう日が暮れてるわ。はよう支度せんとあかんや」と母親は起き上がったものの、どこことなく頼りなげだ。

「どないしたん？ 気分悪かったら、今日は何か店屋物でもええけどな」

「いや。買い物はしてきたから。ははは、芳人ったら、心配せんでもええがな」

そう言つと、やっと母親は立ち上がって、電気をパチンと入れた。けれども、その笑い声はどこか空しい響きがした。

もつと驚いたのは、なんと父親が直ぐに帰宅した事だった。今まで父親は、仕事仕事で夕刻に帰ってきたことなどは、ほとんどなかったというのに……。どこか、変だ。

そう感じたものの、芳人は友里菜のことで頭が一杯で、すぐさま二階に上がって行つた。（＊この年1997年のGWは、2008年と全く同じ日付となっているけれども、六日だけは、休日ではありませんが）。会うとしたら、三日、四日、五日の三連休がいいかなと、芳人はカレンダーを見ながら、一人ニマニマしていた。

芳人が携帯を取ろうとしたとき、階下から父親の呼ぶ声がした。それもどこか真面目で、つかえたような声音だ。

「ああ、直ぐ行くから！」

芳人はとりあえず下に降りることにした。電話はあとでもいい。

芳人が階下に降りると、両親が居間のソファでかしまっていた。テレビはついてているが、どちらも見ている風ではない。料理も半分ぐらいしか出来て居ないらしい。

「なんや〜？」

「まあ、座れ」と父親。母親は黙りこくっている。なんか叱られるのかな、それとも、父親の会社が倒産したとか……とにかく余り良い話ではないのは確かの様だ。

芳人は、もう一つのソファに座った。

「なんやねん？」

「あいな……」

そこまで言うと、父親は口ごもった。

「わたし、来週入院するねん。手術もあるから、あと頼むわな」と母親が乾いた声で言った。

「えっ！？ おかん、どこか悪かった！？」

「ガンや。子宮ガン」

母親の声は、結構あつけらんとしていた。

「嘘やつ！」

驚いて飛び上がり、うるたえたのは、むしろ芳人の方かもしれない。

「嘘なんか言うてどないすんねん。あほ」と母親は気丈に言つて、少し苦笑いした。

「医者と言つには、幸い間に合うそうや。手術は早い方がええと言うから、即座に手続きしてきたそうやで」と父親の声のほうが、当の本人の母親よりも震えている。

「そんなくくそんなく」と芳人の声が次第に小さくなつていった。

「大丈夫やて。心配せんでもええから。それよりも、家事とか出来へんようになるから、入院中は頼むからね。ゴールデン・ウィークあとの、14日に手術。13日は縁起悪いさかいな。ま、もうわたしは子宮は要らんし」

「そんな意味やないんとちゃうか……」

芳人は激しいショックを受けていた。だからと言って、それをどう表現していいか分からない。今の今まで、こういう重い病気など、他人だけの事だと思い込んでいた。浅はかだったのだ。人生には何が起こるか分からない。

「雅人には、あとで言うから」と父親がやっと搾り出すような声で言つた。

「ああ……分かつた……」

芳人は呆然と二階に上がった。が、もう友里菜への電話の事は頭からすつ飛んでいた。

芳人生まれて以来の、最大のショッキングな出来事だった。

56 芳人の苦悩も知らず……

56 芳人の苦悩も知らず……

長い間芳人から、何の連絡もない……。

友里菜は実は暗澹たる気持ちになっていた。けれども、自分から電話するのも、何だかシヤクだ。友里菜はそう言う素直になれない自分が、我ながら嫌だった。けれども、持って生まれた性格は、なかなか代えられそうも無いのも事実なのだ。

反対に隼人からは毎日のように、携帯に電話が掛かってくる。そして、連休の間一日だけ、2人は又デートをすることになった。

待ち合わせは、梅田駅にある大型書店の前。そこは待ち合わせの場所として、様々な女の子達や男の子達がたむろしている。ある者はじつとうつむき加減で、ポケットに手をやったまま。ある者は常にキョロキョロして、カレシ或いはカノジョを待ち、ある者は静かに買ったばかりの本を手にし、そしてある者はしょっちゅう腕時計やらケータイやらを覗き込んでいる。

友里菜はそのどれでもなかった。友里菜は今日は珍しくスカートを着て黒のメッシュの靴を履き、その長い髪をレイヤーに切つて、じつと一方を見つめていた。

いつも先に来ている芳人とは違い、隼人は時間ちょうどに来るはずだ。

「ねえ、カノジョ」と横に居た若者、多分大学生風の若者が声を掛けてきたので、友里菜は少しだけ緊張した。

「待ち人、来いへんの？」

「もう直ぐ来ると思います」と友里菜は丁寧にお断りした。けれども、その若者は舐めるような目つきで、友里菜を見つめながらしつ

こく付きまとう。

「もう直ぐって、かなり待っているやんか。今日は僕とどこか行かへん？」

「いいえ、結構ですから」

「へえ、こんな魅力的なカノジヨをほったらかしにしているカレシって、信用置けへんな」

と若者は皮肉を言うと、次のターゲットの女子に的を絞って移動した。

わたし……ナンパされちゃった……。

半ば嬉しく、半ば気味が悪い。でも、遅いな～と感じていると、向こうから走って来る隼人が見えた。白いポロシャツに、高価そうな黒いジーンズ。清潔で非の打ち所がない姿だ。

さっき友里菜をナンパしようとしていた若者が、隼人をチラッと見て、チツと舌打ちしたようだった。友里菜はどこか誇らしくなる。

「ごめん、ごめん。又遅れちゃった〜！」と隼人は邪気のない声で叫んで近寄った。

「待った？」

「うん……少し、かな」と友里菜はわざとむくれて見せた。この頃友里菜は、自分を偽ったり、少し芝居がかった行動を平気でとることが多くなっていた。もう無邪気で清純なだけの女子高生ではないのだ。あんなクラスに居るのだから、ずるくならないと日々過して行けやしない……。

隼人との再会は楽しかった。日々鬱憤が溜っていた友里菜は、隼人の爽やかな笑顔に随分癒され、心落ち着いた。

隼人が連れて行くという阪神間にある小奇麗な美術館に行く間、

2人はひっきり無しに電車の中でお喋りしていた。誰が見ても、2人はカレシ&カノジョそのもの。けれども、実際はそうではないという事は、2人とも分かっていた。

隼人が連れて行つた美術館は坂道の途中にひっそりと存在し、中にはロマンチックな喫茶店もある。2人はそこで今見た、どちらかと言うと宗教的な絵画の数々について 特に、隼人の方が雄弁だったが 色々話していた。

隼人は見た目もイケメンだし、マナーも良く、全く非の打ち所のない“カレシ”となるかも知れない。けれども、友里菜は隼人は大好きだし何でも打ち解けて話せるものの、全くときめかないことに気付いていた。萌えないのだ。

友人として存在する男子と、萌えるカレシとは、全く違うものなのかも知れない、と友里菜は悟つた。100%ステキな男子が彼氏になるとは限らない。むしろ、欠点が多く見た目もまあまあ鈍臭い芳人の方が、男として魅力的なのだ。

不思議な感覚だった。

どんな美人であっても、男子から見たら、全然“萌えない”という女子が居るかもしれない。ただ、棚の上に奉って眺めるのはいいが、けれどもカノジョにはなれない、という女子が……。

だったら、わたしはどうなの……？ 隼人が来る前にナンパされたくない、わたしって。特別物凄い美人じゃないけれど、最近そういう事が多くなったのはなぜ？

「何考えてるの？」と隼人の柔らかい優しい声がした。

「うん？ 別に」と友里菜は答えてニッコリ微笑む。

「ねえ、チラッとうちの高校見物してから帰る？」

「K学院か。チラッとならね」と答える友里菜。

静謐な雰囲気。休日だというのに、キャンパスには大学生らしい若者達がチラホラと居る。GWの喧騒からかけ離れた、あえて言えば修道院のような高校とキャンパス。向こう側には十字架のついた、大きなチャペルが見える。

「ステキね」と友里菜は、K学院の門から覗き込むと、正直に印象を述べた。「こんな所で勉強しているなんて、なんか羨ましい」

「そうかな」。あ、それより今度柿沢さんの高校のコーラス部の記念コンサートがあるんだってね」

「へえ、知ってた？ うん、6月に」

「見に行っていていいかな」と隼人は控えめに言いかけた。

「え？ ああ……いいけど」

そう答えつつ、友里菜は芳人に来て欲しいと思っていたのだ。2人とも来てはまずいのだろうか？ けれども芳人は何も知らないはずだ、隼人のことなんか。

大体、最近芳人からは何の連絡もないじゃない！？ 今晚電話してみよう……時には自分からも。もう待てない！

友里菜と隼人は駅で別れた。とうとう手も繋がなかったが、それでいいと行楽客で満員の電車で揺られながら友里菜は思った。途端、どうしようもない寂寞間が押し寄せてくる。

芳人……芳人……よ・し・と・お……！ どうして側に居てくれないの！？ もうわたし待てないよ。芳人無しじゃ、もう嫌だよ。

57 隠す芳人

57 隠す芳人

「もしもし、芳人？」

友里菜は携帯を持ち出すと、隼人とのデートの帰り道で芳人に電話を掛けた。芳人はぼんやりと自室にいる所だった。母親の為に自分ができるか……それを考えると憂鬱だったのだ。

6月には沖縄に宿泊野外活動（他校では修学旅行と言うが）が四泊五日の予定になっていて、手術のあとにしげしげとお見舞いにも行けない。母親は、気丈なのかそれとも鈍臭いのか、告知した後は案外けろつとしているのだ。

けれども息子である芳人は、とてもそんな気にはなれない。だからといって、「おかん、大丈夫か？」などと言う臭い言葉は、死んでも掛けられない。

芳人は悶々としていた。そんなときに、友里菜から電話があったのだ。

芳人はのろのろと携帯を持った。（＊当時は二つに分かれていない）

「あー、もしもし」

「あつ、芳人お？ わたし、やけど、今いい？」

「なんや、友里菜か」

「なんやゝはないでしょ。何だか、うざそくに聞こえる」「別にうざくなんかないよ。何か用？」

これを聞くと、友里菜はムツとして携帯を離し、しばらく息を整えた。せっかく芳人に甘えようと思って電話したのに、相手側は何だか素っ気無い。

芳人はやつと気持ちをチェンジした。友里菜から掛かってきたのは、本当に久しぶりなのだ。芳人は友里菜の性格から、友里菜自身が掛けてくる時には何かある、と気がついた。

「ね、ね、友里菜」。聞いている？ 友里菜？」

「う、うん」

「ちょっとぼーっとしていたんや。ごめん」

「いや、わたしだって、別に用なんかあるわけじゃないけど、でも何か芳人の声聞きたくなって」

「なんか、ざわざわした音がするけど、今外？」

「あ……今、駅なの。駅降りたところ」と友里菜も慌てて言い繕った。今日ね、友達とちよつと買い物に行つてて」

「あ、そうか……」

また沈黙が続く。友里菜は切ろうかと思つたが、少し気になつて喋りかけた。

「今日の芳人、何かヘン」

「そうかな、いつも僕つてヘンなんじゃない？」

「そう言い訳するところが、何だか芳人らしくないっ。もう切るね」
芳人は一瞬ぼんやりしたが、次の瞬間猛烈に友里菜に会いたくなつたのだつた。

「あ、友里菜。友里菜！ 切らんといて！」

「なによお」

「今日の駅？ 僕、そっちへ行くよ」

「え！？ だつてえ、今からだと40分ぐらい掛かるんじゃないの？」

「駅前のマクドで、待つてくれない？ いいやろ。友里菜に会いたいんや、ほんま、今すぐ会いたい。そやから」

芳人に「会いたい」と必死で言われて、友里菜は思わず微笑んで

いた。そう言えば2人は、ずーっと長い間、直に会ってはいなかったのだ。

「もう日が暮れるよ。でも、いい。40分だけ待つから」

「すぐ、すぐ行くから」

芳人は携帯を切ると、そのまんまの姿で家から飛び出した。

「芳人……夕食は？」と背後から聞く母親の声を今だけは無視して、芳人は駅まで走った。

狐につままれたような友里菜は、けれどもおとなしく自分のマンションのある駅前のマクドに入ってシェイクを頼み、ずっと待っていた。

例え騙されていたとしてもいいのだ、このまま真っ直ぐマンションに戻るよりは。何か消化不良のようなそんなデートだった。楽しかったが、ただそれだけだった。

やはり隼人は、ただの友人にしか過ぎないのだ。でも、でも、芳人は違う。芳人には抱き締められたい。そして、キスもしたい……。そんな相手なのだ。他の誰でもない、芳人に抱き締められたい……。

「友里菜、待った？」

うつむいている友里菜の肩越しに、野太い声がした。友里菜はパツと顔を上に上げる。芳人がこっちをじっと見下ろしている。

「芳人……」

「へへへ、早かったやろ？ たった34分で来た」

芳人は肩で息をしていた。水泳をやっているせいか、肩幅がずっと広くなり、浅黒い肌はもっと黒くなっている。男らしいそのキリリとした瞳が、友里菜の心を揺さぶった。

「芳人お」と友里菜はほとんど半泣きになっていた。

「なんや、どうしたん？」

「ただ、声が聞きたかっただけなのに」と友里菜はもうほとんど溶

けてドロドロになったシェイクを握り締めながらつぶやく。「だ
ど、本当は会いたかった」

「僕も」と芳人は、妙にしっかりと答えた。「今日ほど友里菜に会
いたくなつたことは無い。不思議だけど」

「なんか……あつた？」と友里菜は、上目遣いになって聞いた。

「別にい。なんか、感じるの？」

「ちよつと……沈んでいるかなって気がして」

芳人は敏感な友里菜に驚いたが、けれどもそれは嬉しい驚きだっ
た。

「何でもないよ。あ、腹減つたから、僕も何か頼むわ」

友里菜は愛しげにニツコリ微笑んだ。

2人は食べ終わつた後、わざとゆっくりゆっくりと坂道を登つて
行く。辺りはもうすっかり薄暗い。芳人はいきなりぎゅつと友里菜
の手を掴んだ。そして自分に引き寄せると、坂道に誰も居ないのを
確かめて、一瞬のキスを奪つた。

友里菜はバッグを持って居ない片手だけ、芳人の背に廻す。

「ごめん……いきなり……」

「ええの」と友里菜は暗闇に紛れた芳人の横顔をチラツと見つめな
がら答えた。「わたしも……欲しかったから」

「今日の友里菜……なんか、めっちゃ可愛い」

「なによお、今更」友里菜は拗ねてみせる。そういう友里菜を
自分にしっかりと抱き止めながら、芳人は一時の甘い香りを嗅いで、
現実を忘れようと思う。そしてそれは友里菜も同じだった。

幸せな一時だったが、一抹の不安が2人を覆っていたのだ。けれ
ども芳人は結局何も言えず、友里菜のマンシヨンの前で、友里菜が
マンシヨンの入るまで、そして足音が消えるまで佇んでいた。

58 ソロ・パートはわたしなの？

58 ソロ・パートはわたしなの！？

伴坂沙莉奈は最近ずっと登校していなかった。噂では、何かの病気がそれとも家に籠ってしまっていると言う。

登校拒否？ いじめ？ 様々な噂が飛び交っていたが、女子達は表向き、何も知らない振りをしていた。その実グループになると、その仲間達の間ではあれこれ根も葉もない事を喋っていたのだ。知らないのは、仲間の居ない少数の生徒ぐらいだった。

その中には、友里菜も居た。友里菜は沙莉奈が欠席している間、ずっとソロ・パートを歌っていた。自然、他の部活の連中からも、少しは一目置かれ始めていたが、逆を言えば友里菜に腹を立てている者も居るのは確かだ。

それは沙莉奈の親衛隊を勝手に自認する、宮崎かなえ達だった。

「柿沢さん、あんた最近嬉しそうやね」。そんなにソロが歌えて嬉しいの？ このまんま、ずーっと伴坂さんが来ない方がいい、と思っでんじやないのお？」

とある日、かなえと数人の女子が、友里菜を囲んで嫌味を言い始めた。

「もうすぐある、創立記念の音楽会にも、ソロ歌うのはもしかしてあんたじゃない？ なんか、伴坂さんにヘンな手紙がきたって言う噂だけど……それって、あんたとちゃうか？」

かなえの二番手のようなもう一人の女子が、もつとわざとらしくネチネチと尋ねた。

「知っでんねやろ？」

「えー！？ そんなこと全然」と友里菜も驚いて言った。「知らない

かった……」

「なによ、しらばくれて。どうせ、文字とかで誰か分かると思うけど、伴坂さんがくじろぎ轟木君を奪った、っていう内容だったんやて」

「轟木って誰よ？」と友里菜。

「コーラス部に居る男子じゃない！？」と、かなえが呆れて言った。
「妙な嘘はつかんでいいのに」

「轟木？ とどろきい？ 知らんへんな」

「テナーの子だって」

「え？ でもテナーも10何人もいるし」

「こいつ、あくまでもシラを切るつもりみたい」

と、もう一人の女子がかなえに憎々しそうに言った。

「誰か知らんけど、わたしにはちゃんとカレシが居るから」

「みたいね、柿沢さんって、男狂いだもん」と第3の女子が卑屈に囁くと、くつくつと不愉快な嗤いをした。

「わたしのカレシは…… K学院の子で、今度のコンサートにも来てくれるっていうから、その時に見たらええやん」と友里菜は思わず隼人を引き合いに出してしまった。こうなったら、嫌でも隼人に来てもらわなければ！

「K学院！？ ふゝん、ミSSIONのお坊ちゃまか。来るんやったら、見てもいいけど」

「結構イケメンだしさ。その轟木って子よりも、多分」

と友里菜は精一杯強がって言った。

「んじゃ、わたしもう部活に行かなくちゃ」

友里菜は立ち上がりながらも、轟木って誰？と考えていた。どうも、今のコーラス部ではまともに話せる生徒が居ないばかりか、顔や名前さえ覚えて居ないようだ。自分自身もいい加減な気がした。

それにしても、あの沙莉奈が、麤木という男子と仲がいいとは到底思えない。けれども、沙莉奈は美少女だから、誰かに恨みを買われたのかもしれないし……。

友里菜には何も分からなかった。

とにかくコーラス部に行こうとして、廊下に出ると、

「このおおお〜！ 待て〜〜！」と言う罵声が響き、数々の足音が乱れて響いてきたので、身がすくんで立ち止まった。

あの嫌味かなえ達でさえ、その場に呆然と突っ立っている。

「一体なんやの、あの音とか怒鳴り声は？」

「なんか怖い〜！」とかなえグループがごそそと話していると、向こう側からこっちに向かって、誰かが死に物狂いで走ってくるのが見えた。

「あつ、あれ、先生や！ 西原先生や！ 英語の！」

とかなえが素っ頓狂な声を上げると、あとからもう一人が追いかけて来た。

「あれは、大河原先生やない！？」ともう一人が叫ぶ。友里菜も慌てて自分のクラスに戻った。その途端、イケメンの西原先生に追いついた大河原先生が、西原先生のポロシャツを掴み、ぶん殴ったのだ。西原先生は、ドバーっと鼻血を流して廊下に転がった。

「きゃあああああ〜〜！！」と言う誰かの悲鳴が起こった。

けれども友里菜は漠然と判断がついていたのだ。この二人の先生の殴り合いは、多分彩香のことに関するものに違いない、と。

殴り合っている二人の先生が、他の先生達に取り押さえられている間、友里菜はしらじらしくその場をあとにして、コーラス部へと向かった。

部室の音楽室へ入ると、今まで近寄った事もない女子が友里菜を見つけて、楽しげに近寄ってくるではないか！

「あっ、柿沼さん、ソロ・パート、あんたやて！ おめでとうさん」

「わたしが、ソロ・パートなの？」

つい今しがたの先生の乱闘よりももっと驚いて、友里菜は思わず立ち止まった。

「うそっ」

「うそじゃないって。だって、今日刷り上ったプログラムにあなたの名前が書いてあるよ」。見る？」

差し出されたピンク色のパンフレットには、確かに友里菜の名前がソロの部分に載っていた。

芳人に言えばよかったかな。

友里菜はそのことばかり後悔していた。

59 二股愛の果て

59 二股愛の果て

古典の教師大河原と、英語の教師西原の2人のみつともない殴り合いの大喧嘩は、たちまちの内に学校中の噂になった。けれども、校長からは何のコメントもなく、幸いメディアにも露出しなかったせいか、何となくうやむやになってしまった。

けれども、学内ではあちらこちらで、生徒達が噂をしていたのだ。

友里菜とはクラスが分かれて以来音沙汰なかった仁科彩香は、たちまちの内に学内中の白い視線を浴びるようになった。

彩香の通る所、誰かがヒソヒソと耳打ちする。それは友里菜にも否応なく聞こえてくる。彩香が原因であると言うことは、2人の教師の言葉で分かったし、確かに彩香の軽率で欲求に任せた行動は非難されても仕方がないが……そうではなく、『進学校』と言うブランドに傷が付いてしまった、と言う生徒や親や先生達の恨みもあったかも知れない。

友里菜はそういうK高が、益々嫌いになってしまった。しょんぼりと一人ぼっちになってたらずむ彩香が、何か見世物のようでかわいそうにもなった。けれども、去年の夏休みにチラリと覗いた、あの生々しい出来事を目撃者である自分の脳裏から、その白い彩香の下肢のビジョンが離れないのだ。

そういうことにいつまでもこだわっている自分も、また嫌になっていた。この頃、何もかも自己嫌悪に結びつく。

「ね、ね、知ってるう、友里菜あ？」

と例によって、亜紀が身を寄せて来る。又何かの新手の噂を仕入れ

てきたらしい。それにしても、他の生徒達はよくぞそんなことまで、
と言うほど、下らない事を知っているものだ！

「何よ？」

「あのさあ、西原先生、遂にキレたつてよ、隣のクラスの授業中
に」

「キレたつて、何が？」

「それがね、むぶぶぶぶ」と亜紀は、まるで噂好きな主婦のように、
くぐもった声で嗤うのだ。「誰かが、“先生！ 例の子とセックス
したんですか？”なんて聞いたんだつて。それも、学内でのセック
ス」

「へー？」

「ね、ね、学内でするなんて、物凄う大胆やない？ 仁科さんつて
子、凄腕なんやね」

「で？」と友里菜はドキドキしながら、聞いてしまった。

「知りたい？ へー、友里菜も結構スノッブなんだ。そしたら先生、
“あー、したよ。愛していたからしたんだ。どこが悪い！”つてき
たんだつて！ 皆、そこまで率直に告白するとは思ってへんかった
から、もー、びっくりでね」

「……！！」

「それから、西原先生、チョークを叩き付けて、出て行ったんだつ
てえ」

「はー？ それ、ほんま？」

「チョーほんま」

「何か……彩香、かわいそう」

「かわいそう？ そうか、友里菜、以前のクラスでは仁科さんの友
達だったんやってね」

と亜紀は、斜に友里菜を見つめた。

「ね、ね、学内のどこでしたんやろ？ そんなとこ、あるかいな？」
「ま、探せばどこがあるんやないの？」

「立ったままとかあ？ あー、やらし〜」

どっちがいやらしいのだ、と友里菜は思った。知らず知らず彩香をかばっている自分が、また厭わしい。知っているのに知らん振りをするので、結構大変なストレスなのだ。けれどもその事は口に出して言うとは、自分も穢れるような気がした。純愛、とは信じたくなかったのだ。

友里菜はこういうハナシは、芳人にも隼人にもできない、と感じた。男と女の間は難しい。まして、教師と生徒なんて、よく恋愛小説にあるパターンだ。けれども現実には、それほどロマンチックではないのではないだろうか？

結局、大河原先生が負けた、ということになった。彩香はやはりイケメンで若い西原先生を選んだのだ。けれども、西原先生は辞表を出したと言う。

どっちが誘ったのか知らないが、後味の悪い事件だった。それでも彩香に近づく者は誰も居なかった。友里菜でさえ、彩香を避けていた。自分が目撃した、ということは絶対に言わないでおうと誓ったものの、どこか心が疼く。そして、驚いたことに彩香が妬ましい。

この相反する気持ちは、やはりこの時期なのだからかも知れない。完全な大人でもなく、そしてもう子供でもない宙ぶらりんな気持ち。フクザツで、そして艶かしい気持ちは押さえようが無いのだ。それは男子もそうで、彩香をからかいながらも、どこか羨ましさを覚えているらしかった。

芳人は、そして隼人はどう反応するのだろうか？ 友里菜は聞きたか

ったが、結局辞めた。けれども、コンサートのことはいつか話そうと、携帯電話を握り締めていた。

自分もまた、二股掛けているような罪悪感が抜けられない。

わたし、本当に芳人と隼人の二股掛けているのかな？ でも、単なる友達って感じだし、あんな大胆なこと、わたしには出来へんし。でも……やっぱり、これって二股愛かなあ？

友里菜には分からなかった……。

60 届かぬ想い

60 届かぬ想い

雅人が新しいパソコンに向かって、あれこれ検索している。どうやら20数万（＊当時、パソコンは高価だった）は掛かったらしいパソコンは、けれども雅人にとっては必需品だった。

雅人は雅人で、病気について色々調べているらしいのだが、決して芳人には自分の弱みを見せない。母親が心配だ、などとは口が裂けても弟には言いたくないのだ。

それは芳人も同じだった。

芳人の母の手術は、どうにか無事に終わったが、その後の抗癌剤投与で、入院は長引いていた。おまけに、芳人はその期間、沖縄に修学旅行だったのだ。

やっと戻って来たが、見舞いに行くには遅過ぎた。肝心な時には、自分は居なかったという思いは、芳人にとっては悔しかったし、兄がうざく又偽善者を感じた。芳人は母親の愛を、天秤にかけていた節がある。

けれどもその事は、友里菜には未だに内緒にしていた。その事を言くと、友里菜からも非難されるような気がしたからだが、修学旅行はもう決まっていたのだから仕方ない。

芳人は、母親への土産には、沖縄の魔よけの人形を買った。

芳人が母の六人部屋に入ってみると、左には如何にも具合悪そうな女性が眠っていた。母は一番左奥で、ベッドに座り点滴を受けながら座り、ぼんやりと外を眺めていた。

その時初めてと言っていい程、芳人は母親の存在理由を強く感じた。今までは存在して当然と言った感じだったし、親はいつまでも生きているものだと思っていたし、又多少うざい存在でもあったけれども今の母親の背中、心持丸くなり、やっぱり歳や病いには勝てない、というどこか霞んだ風情がある。芳人は母親が急に愛しく感じた。それは、友里菜や友達などには感じない、“何か”だ。

「お袋お……元気？」

けれども芳人は、それとは悟られないようにわざとぞんざいに声をかけた。母親がクルリと振り向き、息子を認めてニツコリと笑う。

「ああ、芳人かいな。まあ、元気やよ、わたしは」

「それは良かったやん。修学旅行、やっと終わったよ」

「気にせんでもいいのに。お前らしくもない言い方やね」

と母は、さも見透かしたような言い方をしたので、芳人はドキツとした。

「楽しかった？」

「うん、まあな」

「そりや、良かったわ」

「お袋は？」

「わたし？ わたしはまだあかな。この薬が終わらんなあ」。

やけど、何かこれやると、しんどいんやわ。食欲もいまいぢやし。

ま、何とかなるやろ。それよりも、お父さんも雅人も、男所帯で大変なんとちやうかいな」

母親は、すこし面白そうに微笑んだ。

「お土産、あるんやけど」

「へー、あんたから何かもらうんは、初めてやな。明日、大雨が降るかもしれへんで」

「これ、シーサーと言って、沖縄の魔よけの人形なんやけど」

芳人はカバンからそのみやげ物の小さなシーサーを出すと、ちょこんと窓辺に置いた。

「これで、病気からおかんを護ってくれるんじゃないかな？」

「ハハハ、そうやったらいいけどな」

そう言いながらも、母親は嬉しそうにそのみやげ物を手に取った。「ありがとさん」と母は言った。

病院からの坂道で、芳人はふと母親が居る大部屋を振り返った。けれども大きな窓には誰も居ないようだ。何だか心が塞がる。誰かにこの思いを伝えたくなくなる。

芳人は友里菜に電話した。留守電だった。

「ま、いいか。まだ、部活があるんやるな」と芳人は独り言を言う。

けれども、電車に乗る前にケータイが鳴った。友里菜だった。

「なんや、芳人？　なんかあった？」

「別に用なんてないけど」と芳人はむつとしながら答えた。その言葉が知らないうちにきつくなっていたのだろう。友里菜は暫く、ケータイの向こうで黙っている。

「ごめん。なんか強く言い過ぎてしまつて」

「最近の芳人、なんかヘン。何か隠してない？」

「別にい」と芳人はばっくれた。「友里菜こそ、何かあるんとちゃう？」

「別にい」と友里菜も同じ言葉を使う。

あのな、友里菜。実はおかんが大変で、ああ平気そうにしているけれど、その胸の内を思ったら、僕、なんか心配でな。

と芳人は心の中で叫ぶ。けれども、言えない。

「ま、元気そうやったらそれでいいねん」と芳人はあっさりと言っ

た。

「そうお？」

ね、芳人。わたし、ソロ歌うことになったん。だから、今度のコンサート来て欲しいんやわ。それに、その事で色々嫌がらせ言う人も居てて、わたし正直あんまり嬉しくないのよ。だから……。

互いに心の中では言いかけながら、そして欲しながらも、何も言えずすれ違う2人。相手を思いやり過ぎてしまつて、お互いが見えていない芳人と友里菜。

「んじゃ、またな」

「うん、そいじゃーね」

2人は同時にケータイを切る。もやもやした虚しい思いを抱きながら、とぼとぼと道を歩み出す。

61 コンサートの日

61 コンサートの日

結局友里菜は、芳人にコンサートの日を告げなかった。

けれども芳人は、ひょんなことからそれを知り、愕然としたのだ。
った。

ある日、滅多に見ない玄関先の広報板の前を通りかかった時のこと。いつもは通り過ぎるのだが、中間テストが終わって、なぜかホッとした芳人はふとその板を覗き込んだ。

芳人は高校に入ってから、大体上位を維持していた。兄雅人のように、このI高でもクラスで一番か二番と言うわけには行かなかったものの、ものの見事に落ちこぼれてしまったり、墮落したり、何かの理由で不登校になったりする生徒達を尻目に、中学とは見違えるほど、“優秀で態度も立派な”生徒になっていたのだ。

今では、芳人が昔ヤンキーだったと知る者は、ほとんど居ない。部活の水泳も、いつもビリながら熱心で、先輩からも後輩からも慕われていたし、教師から見れば申し分のない生徒に化けていた。

そんな芳人を、母親はとても自慢にしていた。その母親が助かれば言うことはない、と芳人は殊勝にも考えるような、大人に成長していた。

その芳人が、掲示板にベタベタ貼り付けてある、ポスターとか新聞の切抜きとか、何かのチラシを見ていると、『K高校 十周年記念合唱コンサート』の文字が飛び込んで来た。

そして驚くべきことに、友里菜の顔が、芳人のぼんやりした脳裏に突撃してきたのだ！

ゆ、友里菜〜！ なぜなぜなぜ？ あ、ソリスト4人の写真
かいな〜。てことは、友里菜、今度のコンサートのソリストに抜
擢されたんやないか！ んなのに、僕には何も言わへんとは、一体
何事やねん！？

そう言う自分も、母親の病気を隠していることに、芳人は身勝手
にも気付かない。そう言えば、友里菜は中学の時から、声楽の先生
に時々歌を習っていたことを思い出した。ソリストに抜擢されても、
本当はおかしくはないはずだ。

芳人は腹が立って友里菜を問い詰めようと思ったが、ふと考えて、
こっそり行つて友里菜を仰天させようと謀^{はかりて}をめぐらした。そして
手帳にその日付を書くと、ニタリと嗤ったのだった。

コンサートの当日は、あいにく梅雨時で蒸し暑く、曇り日和だ。

芳人は結構早めに場所である市立会館に行き、そつと前から3列
目の一番左端に座った。こんへんてこりんな席には誰も座らないだ
ろうし、ソプラノからは一番近い。

芳人が座ってから、段々客席が埋まり出した。皆、生徒達の親と
か友人達とか、その他学校関係者が多そうだ。芳人は、K高生では
ないので、一人うつむいていた。I高の関係者達には会いたくなか
ったからだ。

あと数分ぐらいで始まるかな、と思われたその時、隣の席に誰か
座る気配が……。芳人がチラッと見ると、相手もこっちを見返した。
「あつ！ あ、あ、赤井さん！！」

晴香は嫣然と微笑んだ。

「ちょうど席が開いてて、良かったわ〜。大久保君も、音楽に興味
があるんやなんて！」

「い、いや、そのお、知っている人が居るもんで」

「あらあ、誰？ 友人？ それとも、もしかして大久保君の、カノ
ジヨとかあ？」

芳人の頬は真っ赤になった。

「あ、赤井さんは、ど、どうして？」

「わたし、4才からピアノ習ってるの。結構音楽も好きやし、音大
に行くかもしれへん」

「音大！？」

友里菜も音大に行きたい、と言っていたではないか。奇妙な附合
だ。

「けど、赤井さんやつたら、阪大でも京大でも、どこでも入れるん
やない？ なんか、もったいないなあ」

「そうかな？ あんた、音楽って軽蔑してるん？」

晴香の目が、キーツと吊り上った。けれどもちようどアナウンス
が入ったので、2人は別々の思いを抱きながら、正面の舞台を見つ
めたのだった。

友里菜は、前日からそわそわして落ち着かず、けれどもどこか大
胆な自分が居て、始まるアナウンスが鳴っても、それほど動悸はし
なかった。

カーテンが開いて、いよいよ合唱が始まった。

実は舞台からは、客席が良く見えるのだ。市立会館だから、照明
も明るく尚更良く見える。

友里菜はちようど真正面に、隼人の涼しげな顔を見つけた。

あつ、肝付君、来てくれてる！ やっぱり！

なぜか心が躍る。

けれども、ちょうど4人のソロが入る楽曲に来る直前だった。何か視線を感じて、ふと左そでを見ると、なんと客席には芳人が。そして、その芳人にしなだれかかるように、1人の少女が座ってるではないか！

あっと思う間もなく楽曲が始まり、友里菜は曲に集中し始めて、ソロを歌い出した。心中は決して穏やかではなかったが、相手が見せ付けるなら、こっちも、という反抗心がむくむくと湧き出たのも事実だ。

これでは、お互いに真のカレシとカノジョには成れるわけがない。いつまで経っても、2人はライバルのままなのだろうか……。

62 誤解の解き方は

62 誤解の解き方は

無事にコンサートは終了したが、勢大な拍手とは別に、友里菜も芳人も狼狽していた。

友里菜は思う。隼人はきつと友里菜が出てくるのを待っているだろうし、多分芳人は隣の女子と共に立ち去っているだろう。いや！是非とも早く立ち去って欲しい！

友里菜は自分の事は棚に挙げ、芳人の隣に居る女子のことばかり考えては、腸が煮えくり返るような思いに捕われていた。

多分、これが“嫉妬”というもののなかも知れへん。今まで、嫉妬に狂う人を見たりしたら、嫌な感じがしたものだけど、今度は自分がその身になるなんて！

片や、もしも芳人が隼人の存在を知ったら、芳人も又嫉妬に狂うだろうか？ そんな男女は醜いと思っていたけれど……。醜いのはうちらだったんやわ。

けど芳人って、わざとあんなに直ぐ側に女子を連れてきたんや。もしかして、本命は彼女？ わたしのこと、嫌になったの？ そんな！ まさかああああ！

友里菜の心は千々に乱れ、気もそぞろになってくる。

一方の芳人は友里菜の懊悩も知らず、終了のアナウンスがあった途端、直ぐに立ち上がって出口に急いだ。

「ちよ、ちよっとおゝ、大久保君ゝ！ そんなに急がへんでもいいやんかゝ！」

慌てて晴香は芳人のあとを追って、そのＴシャツを引っ張った。

「な、何すんねん？」

「もう帰るの？ 誰か待つつもりやなかった？」

意地悪そうに晴香は、言いかけた。とすると、晴香はもしかして友里菜の存在を、と言うかK高のコーラス部にカノジヨが居る事を、事前に察知していたのかも知れない。

「まっさか！ 皆が出るのを待っていたら、日が暮れるよ。それに誰を待つねん？」

「そつか。じゃあ、駅までわたしと一緒に、どうおおお？」

芳人にはその言葉が、おどろおどろしく響いた。晴香の釣りあがった大きな瞳が、どこか怖い。

その上、舞台上の友里菜と目が合ったのも恐ろしい経験だった。

友里菜は歌いながらも、自分を睨みつけていたのだから。

ああいう芸当が出来るのも、さっすが友里菜やゝなんて、呑気な事言っでどうする！？ この誤解は直ぐに解かなければ！ ああっ、人生つまくいかなあゝ！ 最近……。

芳人は空を見上げて嘆息した。もうすっかり日が暮れている。

「な、わたしを送ってもいいやんか。この際、同じクラスやろ？」

見下ろすと、ピッタリ引っ付いて離れない晴香は、実は友里菜よりも背が低いことに気付いた。

「な？ 大久保君？ それとも、わたしと一緒に見られたら、なんかまずいこともあるの？」

「い、いいや、別にいい」

そう言つと、仕方なく芳人は晴香の肩に手をやった。

「そなら、行こか」

ふと背後に視線を感じると、会館の出口からコーラス部員達があ

やがや言いながら出て来ており、その中に友里菜もいるのだった。そして友里菜は、こつちをチラリと冷ややかな目で見つめている。

やべえ！ と芳人が思っただのは、ほんの一瞬。すぐにそれは嫉妬へと変わって行く。

1人のスラリとした、どう見ても公立生と言うよりも、洗練された私学風男子が、可愛い花束を持って、友里菜に近寄って行ったのだ。

目が点になったのは何も芳人だけではない。例の友里菜を意地悪くからかった、沙莉奈の親衛隊を“勝手に”自認する、宮崎かなえとその仲間達もだった。

「やあ！ ソロ、良かったよ！ 柿沢さんには思わぬ才能があるなんて」

そう爽やかに言うと、隼人はさっと花束を差し出した。如何にも気障な素振りだが、隼人がそれを見ると、全然気障には見えないどころか、極めて自然なのだ。まるでテレビドラマだ。

「あ、ありがと」と友里菜は、今度は芳人の冷たい視線を感じながら、そうしどろもどろして言った。それが隼人には、余計初々しく感じたのかも知れない。隼人はニツコリと微笑むと、

「それじゃあ……あ、打ち上げとかあるんなら、僕はこれで」と如何にも控えめに言うのだ。

「打ち上げはありません。ね、柿沢さん？」

とかなえが、どこからかやって来て、横から嘴を入れた。どこで聞いているのだろうか？

「う、うん。そう……みたい」

「ちよちよっとおゝ、やつぱりカレシが居たって本当だったん？ 確かにK学院って感じやわあ。へー、結構ジャニーズ系じゃない？」

わたしはてつきり、吉本系かと思ったけど」

そう友里菜に皮肉っぽく囁くと、かなえとその一派は作り笑いをしながら、プイと去って行った。

「打ち上げないの？ それじゃあ……僕とどつかへ寄らない？」

「え？ あ、あ、ああ、いいけど」と友里菜も又精一杯の作り笑いをして答えた。

「どうしたの？ 大丈夫？」

「あ？ もち、大丈夫。じゃあ、行くかな。あ、花束、素敵」

そう言いながらも、先ほど芳人が立っていた場所を見ると、もう芳人は豆粒ほどになっていた。そしてそんな芳人にぶら下がりんばかりの晴香が、踊るような足取りで付いて行く。

「打ち上げ、派手にやりたいっ」と友里菜は悔し紛れに言う。

「そう？ じゃあ、いいお店知っているから、今日だけは僕がおくるよ」

と、何も知らない隼人は言った。そして何気なく、友里菜の手を握った。目でいいだろ、という合図。友里菜も、うんと頷いた。

友里菜と隼人。だれが見ても、良い仲のカレシとカノジョのように見える。

そして片や芳人は思い出していた。

ちっ！ あいつ、中学一年の時に同じクラスやった、肝付隼人やないかつ！ あの鹿児島男児が、あんなイケメンになるとはなあ。それにいつ、友里菜と仲ようになったんやろ？

素直になれないばかりか、誤解は誤解を生んでしまつらしい……。

63 本当に好きなのは、やっぱり！

63 本当に好きなのは、やっぱり！

友里菜はまるでぶら下がるようにしながら、隼人に付いて小じやれたレストランに入った。中はイタリアンだが、少年少女でも入れそうな明るい店内だ。

二人はいそいそと席に付くと、1000円以内で全てが揃っている、如何にも大阪風のスパゲッティ・セットを頼んだ。

「うーん、ステキなレストランやね」と友里菜はうつとりとつぶやくと、隼人からもらった可愛いミニ薔薇の花束の匂いを嗅いだ。

「いい匂い」。本当に、肝付君って気が効くんやね」

「そうでもないよ」と隼人はもじもじしている。「女子には何が良いのか、先輩に聞いてきたから、そんなもので良かったら……」

初々しい肝付を、友里菜は今晚ほど素敵だと思ったことはない。

けれども直ぐに、誰か知らない女子と帰って行った芳人のことを、ふと思い出している自分が居た。

あの女子は誰！？ ちょっと見、誰が見てもわたしよりはいいとは思えない、チビなのに！……それとも、芳人、I高で既にあの女子と……できてんのかな？

ああ、いやだ、いやだ！ わたしって、一体なに想像しているんやろ？

それでも友里菜の頭には、芳人とあの女子がキスをしている妄想が離れないのだ。

「ねえ、何考えてるの？」と隼人が斜に構えて、問い詰めた。

「あ、いいえ、別にいい」

友里菜は取り繕うと、スパゲッティを口に運ぶ。でも、何の味もない。気にしたくなくても、気になって仕方ないのだ。電話したい。けれども、出来ない……。なんて頑固なわたし……。

「柿沢さん」

「え？」

「もう進路決めた？」

「あ？　へ？　い、いや、まだ……」

「志望校はどこ？」

「ん？　まだ」

「なんか、心ここにあらずって感じやね」

とさすがの隼人も、どこか友里菜がへんなのに気づき出した。

「もうぼちぼち決めなくちゃならない頃やない？」

とさり気なく、隼人は話を進めて行く。「僕はもう決めているけれど。学外の大学は無理みたいやから、やっぱりK学院かな」

「肝付君って、どこか大人だな」と友里菜は心底つぶやいた。「先のこと、色々考えていて、そしてどこかわたしの兄貴みたいで」

「兄貴……かあ？」

隼人の言葉は途切れ、淋しげに見えた。

気まずい沈黙。

けれども突然友里菜の携帯電話が鳴り始め、友里菜は肩をすくめると、慌てて取った。多分、夜遅くまで帰らない友里菜を心配している母からだろうと思って、

「もしもし、な～に？」と気安く受ける。

「もしもし！　友里菜！？」

その野太い声は、まごうかたなき芳人そのものだ。

「あつ」と思わず驚きの声を上げてしまった友里菜。訝しげな隼人の目が、こちらをのぞく。

「あ、待って！ ちょっと、向こうで」

どちらに向かつて言っているのか混乱して、友里菜は答える。

「だれ？」

「母から。あ、わたし、あっちで掛けるね」

後ろめたい思いを抱きながら、友里菜は携帯を持って、レストランの隅に向かった。

「なんやガヤガヤ音がするけど、今どこ？」

と芳人のぶすつとした声がする。

「どこでもいいやん！」と負けずに友里菜も言い返す。「なによ、今頃」

「友里菜のことが気になって。さっきは……あー、なんにも言えなかったから。本当は、声を掛けたかったけれど、でも誰か男子がいたやろ？」

「そっちこそ、女子が芳人にベタベタくっついてたじゃない」

芳人はしばし沈黙したが、思い切って言い始めた。

「それって、嫉妬？」

「なによ、その言い方！」

「嫉妬だろ？」

「だーからあ」

「僕は嫉妬している」

ズバツと芳人は答えた。うつと詰る友里菜。

「ごめん、友里菜。今まで放っておいて。実はな、おかんがガンになってん。それで今、まだ入院中。何だかそれを言いくくって、だから……ああ、あの女子は、晴香と言って学校一、二を争う女子の秀才。けど、僕とは何の関係も無いから……あっちから近寄って

は来ているけど……な」

友里菜は携帯を握り締めたまま黙っていた。

「怒ってる？ でも僕は友里菜と一緒に居る男子のことは、何も問
い詰める気は無いから。僕が友里菜を放っておいたのが悪いんやか
ら」

「芳人……」

流れ落ちる涙と共に、友里菜の怒りも嫉妬も溶けて行く。

「なぜ……なぜ、黙っていたん？ お母さんが病気だった事」

「心配させたくなかった。だけど、それは間違いやったんや。本当
のことを言うべきだったって今頃分かったってわけ。」

なあ、友里菜、本当に好きなのは友里菜だけやから！ それだけ
は信じてや。だから、僕も友里菜を信じる」

友里菜はこちらを見ないようにしている隼人の視線を、けれども
背中に感じていた。

「わたしも、芳人が好きだから、だから今の男子とは、何でもない
から。今の、肝付君とは」

「僕も信じる。愛している……友里菜。それだけ伝えたくて」

携帯が切れた。友里菜は、どこか違う空間に漂っている気がして
いた。

やっぱり好きなのは……芳人！ あなただけ！

64 友里菜、最大のショック！

64 友里菜、最大のショック！

友里菜は、遂に音楽大学に行くことに進路を決めた！　そして芳人は、国公立の理系の学科に行くと言う。二人の目標は定まった。友里菜は本格的に声楽を勉強し、苦手だったピアノのレッスンも再開した。

けれども、友里菜にとっては最大の屈辱、そして絶望的な出来事が起ったのだ。それは、一学期末テストの数日前だった。

その少し前から、やっと伴坂沙莉奈が、登校するようになっていたのだ。沙莉奈は少し痩せてやつれていたが、逆にもっと大人になって色香が漂い始め、クラスの男子達をノックアウトした。

登校拒否していたということで、憂いらしきものも男子達の同情を買ったのだろう。

早速親衛隊の宮崎かなえ達が、沙莉奈を取り囲んで、誰かから護るようなマネをし始めた。けれども、沙莉奈自身は、それが迷惑になっただけらしい。

なぜなら、沙莉奈は麤木と言うテナーと、やはりデキていたらしいのだ。

「柿沢さん」とある日の午後、沙莉奈は滅多に近付かない友里菜に近寄って来て、いつものように優しい柔らかい声で言いかけた。

「え？　は？　わたし？」

「うん。あの時は、ありがとう」

「あの時……って？」

大体察しはついてはいたが、友里菜は気付かない振りをして尋ね

る。

「もちろん、あのコンサートの時のソロ」

「あ！……本当は、伴坂さんのはずだったんだよね。ごめんね」
「あら、謝るなんて、そんなこと。感謝しているのに」

と沙莉奈は言つと、又そよ風のように去って行った。沙莉奈が、真実穏やかな人柄だというのは、どうやら本当らしかった。

美少女で性格もいい……だから逆に恨まれるんやろか。その点、わたしは美少女とまでは行かないし、性格もそこまで優しくはなれへん。やっぱり、あの人には太刀打ちできへんわ。

けれども、背後では誰かが自分を妬んでいて、陰湿な事を目論んでいたのだ……とはさすがの友里菜も考えもしなかった。

各クラスにはロッカーが置いてある。鍵は掛けられるが、余り鍵を掛けている者は居なかった。その中には体操着、教科書やノート、参考書、各自の持ち物など色々置くスペースが少しだけしかないからだが、友里菜は時々楽譜で重たい時や、帰りにレッスンに行く時などには、教科書を何冊か置いて帰る癖があった。

それが決定的なミスだったとは！

試験の2日前、いよいよ本腰をあげて勉強せねば、と思った友里菜は、全ての教科書を持って帰ろうと、授業後ロッカーを開けた。

何も無かった。空っぽだった。英語と化学と国語、そして数冊のノートも全て消えていたのだ……。体操着だけが残っている所を見ると、犯人は確信犯だった。

友里菜の全身から血の気が引き、頭が真っ白になって行く。数秒

間は何事が起ったかも分からず、ロッカーの側でぼんやりしていたが、素早く辺りを見渡すと、クラスで何人かが談笑しているか、廊下に数人の生徒が歩いているだけ。

全員が友里菜のシヨックなど、何も気付いていない。それとも、クラスに居る生徒達は、友里菜の今の状況を知ってて知らん振りをしているのだろうか……。

「友里菜、ねえ、友里菜。何してるん？ 早く帰ろ」

と横から、亜紀の声がした。一体何秒、いや何分その場に友里菜は佇んでいたのだろう？

「え？」と友里菜はやつと我に返った。けれども、その顔が歪む。

「どうしたん、友里菜？ 何か、顔色悪いよ。しんどいの？」

友里菜はただ「ううん」とかぶりを振るばかり。そして消え入りそうな小声で、ポツンと言った。

「教科書とノート……消えてもった……」

「はあっ！？ なんやて？ 消えた？ あらへんの？」

驚いた亜紀は、友里菜のロッカーを覗きこむ。

「確かに……あらへんわ。けど、何かの勘違いと違う？ もう家にもって帰っているんじゃない？」

「いいや！」と今度は友里菜は強く言った。「英語文法と、国語と化学、それとノートがあらへんのや」

「鍵掛けてなかったん？」

「うん、そう。わたし、アホや、アホや……」

友里菜は今にも泣き出すのを、懸命にこらえていた。

今の今まで、信用していたのに！ この学校を、この生徒を！
だのに……こんなことまでするなんて！ わたしは、特別このクラスで一番の成績でもないのに、なぜ？ なぜなの？

そして、誰なの？ 犯人は誰なのぉ！？

信じられなかった。そして友里菜は、自分の油断さ、お人よしさをこれ程後悔した事は今までになかった。崩れ折れそうな自分を何とか正すと、

「先生に言いに行く」と告げて、職員室へと向かって行った。

65 犯人は誰？

65 犯人は誰？

職員室と言うのは、生徒から見るとことなく入りにくい場所だ。けれども友里菜はズカズカと職員室に入って行く。そして真っ直ぐに、担任の秋山先生の机に向かった。

「秋山先生！」

「おう。どうした、柿沢か」

と先生は顔を上げて、ここに来るには珍しい生徒、柿沢友里菜を見上げた。

「先生、お話があつて。いいですか？」

「進路の事か？ この間言っていたこととは、考えが変わったか？」

秋山先生は、50がらみのオジサンだ。どこか呑気な風貌で、友里菜の顔色が悪いのも余り感じていないような、鈍感な性格らしい。

「進路の事じゃ……ないんです」と少し震える声で友里菜は言った。実は友里菜のあとを付けて来た亜紀が、じつと入口で伺っていたの知らず。

「じゃ、何や？」

「実は……盗まりました」

「盗まれた！？ 何が？」

「ロッカーに入れていた教科書やノート、全て。体操着以外なんですけど」

「ほう！？」

初めてやつと秋山先生は身を乗り出してきた。かと言って、それ程切羽詰った様子ではなく、どこことなく他人事のような顔色だ。

「誰が盗んだか、それは知りません。でも、もう直ぐテストだし…教科書がないと、わたし……」

「新しい教科書は、テストのあとにあげられるがな、今はちょっと無理や」

「それじゃあ、教科書無しでテストを受けると言っんですか」

友里菜は悔しさの余り、どういう口調で迫ったのかも覚えていない。

「そっやなあ」と先生は腕組みする。「今はしゃあないな。ま、柿沢が鍵掛けていなかったから仕方ないし」

「だって！ 盗んだ人を探す気はないんですか！？ ずるいじゃないですか！ テスト前に教科書やノートを取るなんて、卑怯やないですか、そいつ」

「だからって」と先生は小さな目を、上目遣いに友里菜を見上げる。

「犯人探しをしたってなあ、捕まらんとするで」

「じ、じゃあ、わたしだけが馬鹿を見るってわけですかっ！」

「ま、柿沢。これから注意することだな」

「もういいです！」

友里菜は一礼すると、さっさと職員室を出た。亜紀が驚いたように目を剥き、友里菜を凝視している。

「な、友里菜、先生、なんて？」

「先生なんか！ あんな、当てにはならへん！」

友里菜は今にも喚きそうになるのを、必死で堪えていた。

「友里菜……大丈夫？」と心配そうに亜紀は言いかける。

「いいよ、もう」

そう言いながらも、ふと「亜紀かも？」と言う疑いが頭をもたげる。心配そうにしながら、その実心の中では、ふふふっとほくそ笑んでいるのかも知れない……。

いや、もしかしたら、あの沙莉奈かも知れない？ 非の打ち所のない物腰と言い方。そして美少女。

けれどもその内面は誰にも分からないのだ。暫く引きこもってはいたが、それも麤木と言うテナーの男子との軋轢が引き金だった。何を企んでいるか分からないではないか！

それとも沙莉奈の親衛隊を自認している、あのかなえなのか？？いや、それともこっそりと友里菜を妬んでいた、“誰か”かも知れない。

一体誰を信じ、誰を疑えばいいのか！？ 確かに秋山先生の言う通り、犯人探しをしても、決して犯人は現れないだろう。

「わたしがやりました」などと言う間抜けがいるはずがない。今頃、誰かが友里菜の教科書とノートを、どこかへ捨てているか、自分の家に持って帰って、多分ゴミ箱に捨てているに違いない。

男子だって信用が出来ないのだ。犯人が女子だ、と決め付けるのも良くない。友里菜はただ深い溜息を付いただけだった。

「友里菜……何とか頑張ってみいへん？ ノートならわたしが貸すから」

と亜紀は言ってくれたが、亜紀は成績も友里菜より下だし、他人のノートを借りても仕方ないのだ。この始末は自分自身が負わなければならない“試練”なのだ。

そうは言っても、友里菜の足取りは重かった。携帯が鳴った。

「あ、はい、もしもし」

「友里菜かあ？」と、場違いなほど間の抜けた芳人の声がした。

「あ、芳人……」

「どーした？ 声に力が無いなあ。ところで、いよいよ、テストや

な」

「わたしの今度の成績、きつとひどいと思うよ」
と友里菜は奇妙なほどキツパリと言った。

「え？　なんで？」

「わたし……化学と数学と国語の教科書……盗まれたん……」

「えええっ！！　誰がっ！」と芳人は携帯を落しそうになった。「誰やねん、そんな卑怯なことする奴はあ！　見つけたら、僕がそいつをぶん殴ってやる！」

「いいの」と友里菜は妙にしらけて遮った。「わたしが油断してたんよ。皆を信じていた……イジメなんてないと、思ってた。有頂天やったんやわ、わたし。だけど、だけど……」

友里菜の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちた。

「友里菜……」

「わたし、アホやったんやわ。世間ってさ、こんなものやったんやね。これが現実なんやったんや……」

「友里菜、しっかりせいや！」

「うん、もういいの。わたし、これからはしっかりするから。家に持って帰るのを怠った罰やったんや。だから、何とかする。成績落ちても、又這い上がるから」

「友里菜は強いから、大丈夫や」と芳人は真面目な声で言いかけた。
「テスト終わった後、どこかへ行こうよ、僕と」

「お母さんは？」

「おかんはやつと退院した。元気そうや、ちょっと安心したから。でも、本当は友里菜に会いたいんや。約束やで、友里菜」

「うん」と友里菜はかすれ声で答えた。芳人の声を聞くと、少しだけ気が晴れて行くのが分かる。辛い試練だが、けれども芳人が居る限り乗り越えられる、そう友里菜は信じた。

66 初めての海

66 初めての海

一学期末試験の結果は、やはり散々に終わった友里菜は、躊躇いもなくコーラス部に退部届を出した。犯人は見つからなかったものの、どこかコーラス部関係の匂いがしたのだ。ソロを歌って恨まれるような場所には、もう居たくなかった。

仮に犯人がコーラス部とは無関係だったとしても、もう友里菜には躊躇いが無い。自分の行く道は、大学の『音楽部』だからだ。

そうと決まると、中学で何となく止めていたピアノの練習の再開や、本格的に声楽を習わなければならず、とてもコーラス部と映画同好会の二つを両立させる事はできない。

けれども友里菜は、なぜか映画同好会だけは残しておいた。これはクラブではなく、同好会だし、やっぱりどこか息抜きが欲しかったのだ。

試験の結果は良くなかったが、直ぐに芳人と海に行く約束をしていたので、気が晴れ晴れとしていた。もうその事は、忘れようと思う。

男子と二人だけで海に行くのは、実際は少し早いかなという気がしていたが、けれども沙夜や彩香なら、「そんなの、どうってことないやんか」とせせら笑った事だろう。もう17歳の青春真っ盛り。嫌なことは何もかも忘れ果てて、ただ好きな人と海に行くのも悪くは無い。

ただし、友里菜の母親は、幾分気が進まなさそうだった。けれども相手が、かつて知ったる大久保芳人だと知ると、まあいいかな、

という気分が変わった。友里菜の母親は、芳人が好きなのだった。なぜかは知らないが、信用が置けると見ていたのだ。

もとヤンキーだが、今はれっきとしたその地域では一番の進学校に進んでいるし、実際はお金持ちのお坊ちゃんである。反対する理由は無。もしもあるとしたら、それは友里菜の初体験を心配しているからだ。

けれども面と向かつては、娘にはそう言えない。

友里菜はいつものスクール水着ではなく、一人で新しい水着を買いに行った。

パルコには様々な水着が売っていた。ふと友里菜は、こういう場所と一緒にしてくれるような友達が居ないのに気付き、淋しくなった。

学校での友達は、所詮学校だけの友達。女子だけでいちゃいちゃしてみたい……という思いは、実は前からあったのだ。

一人っ子の友里菜には姉妹が居ない。同性同士の、気の置けない友達が欲しかった。水着を選びながらも、友里菜は突如、「女子大に行きたい！」と言う強烈な思いに捕われていた。

「あら、それとてもよくお似合いですよ」と最新流行の服に身を包んだ店の売り子が、わざとらしい嬌声を上げる。それが、お世辞と分かっていても、何だか気持ちがいい。

「じゃあ、これっ」と友里菜はその結構ハイレグのワンピース水着を突き出した。本当はビキニにしたかったのだが、まだ高校生だという意識が友里菜を縛っていて、とても買う勇氣はなかった。

えへへ、芳人はどう思うかな？

水着の包みを抱えながら、友里菜は一人ほくそ笑む。ふと淫乱な想像が働き、友里菜は一人ドキツとした。

一方、芳人の方も水泳部用の競技水着には少し抵抗があった。競技用はギリギリの水着で、友里菜の前では何だか恥ずかしい。

そういうわけで、芳人も又別の場所で、黄色に青い線の入った無難なトランクスを買った。

行く場所は、結局これも無難な、須磨海水浴場に決めた。大阪からは行きやすいし、駅の目の前がもう海水浴場なのだ。そしてお洒落な海の家などもあり、家族連れも多く、水質はともかくとして、非常に当たり前なのだ。

2 kmの砂浜は、多分人で一杯だろうが、逆に妙な気持ちにならなくて済む……と芳人は浅はかにもそう思っていた。

けれども違った。

約束の場所で落ち合い、久しぶりに友里菜に会った途端、芳人はもやもやした卑猥さに襲われていた。

けれども、二人は電車の中では学期末試験の結果や、互いの志望校などについて喋り、どこから見ても、健全な『高校生』そのものだったのだが……。

駅近くの海の家にある着替え室から出てきた友里菜を一目見た途端、芳人の欲望が疼き始めた。

思ったよりも大胆な紫色のハイビスカス柄のハイレグに、友里菜の白いスラリとした細い足や、長い黒髪が映える。そして、色つぼ

い。

芳人のジュニアが、はち切れそうになる。それを何とか隠そうと、芳人は無駄な努力をしていた。トランクスでよかった、とつくづく思う。

い、いかん。まずい。どうしよう……。目の毒やがな。

芳人の周りには、もはや大勢の人の姿は無かった。ただ友里菜だけが、眩しい王女様のように煌きらめいているのだ。

「なに、ポカーンとしているん？」と友里菜は茶化した。その実友里菜もまた、芳人の半裸の逞しい身体を見て、ポツと頬を染めてしまった。

いつもの二人で居るのは、かなりきつかった。服を着ているのとそうでないのとは、こうまで違うのだろうか？

一体水着を取ったら、どういう感じい？ と二人は良からぬことをどうしても想像してしまう。

「何や芳人、スケベな目付き！」

「だってえ、友里菜は結構ポインで色っぱいんやな」と今頃分かったからやで」

「何言つてんの！？ 海水浴場では、皆裸やないのお？」

「うん、まあ。ほな、浜辺に行こうか！」

「うん！」

二人は人ごみをかき分けながら、砂浜を走り出した。小波が生暖かく、そして塩の匂いが辺りを包み、海水は心地良かった。

67 肌と肌を合わせて

67 肌と肌を合わせて

友里菜と芳人は、最初波打ち際でキャツキャツと他愛も無く戯れていた。その内に水泳部の芳人は、クロールで泳ぎ始め、友里菜も平泳ぎで付いて行く。けれども、もちろんだが、水泳部の芳人にはとても太刀打ちできない。

少し沖の方で芳人は心配になって立ち止まり、こちらを伺った。沖の方と言っても遠浅の海だから、芳人の胸ぐらいだ。けれどもブイは直ぐ近くだし、この辺が限度と言うところだった。

芳人は必死で泳いでいる友里菜を、微笑ましく見つめた。友里菜は何とかして、早く芳人の元に近付こうと泳ぐが、小学生の時にスイミング・スクールで習っただけだから、そんなに速くは無い。時々塩辛い海水を飲んで、「うぐっ」と吐き出したりしていた。黒い髪が、波間に漂い、思わず芳人はうっとりとおぼつかない泳ぎ方の友里菜を見つめていた。

まるで、人魚や……。泳ぎは下手やけどな……。

「やだー、こんなに遠くまで来るなんてえ」と友里菜はやつと芳人の元に来ると、足を付こうとした。けれども足を付くと、友里菜はすっぱり波間に沈みかかる。そんな友里菜を、芳人はガツシリと受け止めた。

芳人の胸に顔を埋めると、自然に足が浮いて行き、友里菜は立ち泳ぎに変えた。

「危ないやんか！ 早く戻ろうよ」

「僕が居るから大丈夫や。こう見えても、僕は水泳部なんやから」

「ぶはっ。そうやったね」

「友里菜……」

そう静かに囁くと、芳人は自分の裸の胸に友里菜を抱き寄せた。

友里菜は自然と両手を芳人の分厚い胸に触る。

「はあゝ、遅しい」

「友里菜の肌が欲しい」

「え？」

「友里菜の肌が……」

友里菜は察した。そして何気に、肩のストラップを外すと、初めて自分の乳首を露出した。

「わたしの、ペタンコ」

「そんなことない」

露出した乳首を芳人は自分の胸に押し付けた。

「ずっとこうしていたいんやけどな」

「何、あほなこと言うてんの！？ 水面下で見えないからって、もうこれぐらいでいいじゃない？」

芳人は友里菜を抱き寄せながら、両手で友里菜の細いウエストを支えた。それから突如沸き起こった欲望と制御、本能の疼きと理性との葛藤を、芳人は強烈に感じた。

このまま友里菜を離したくない！ 友里菜の肌と自分の肌が水の中で触れあい、もつれ、真から友里菜を自分だけの者にしたい、と渴望する心があった。

そして一体になりたいと……。

友里菜は、永遠に僕のものだ……。

芳人は黙ったまま友里菜に強引にキスをすると、海水に沈めた。二人は母の胎内の羊水のような海の中で、その姿勢のまま貪るようにキスを続けた。遂に友里菜が、息が出来ずに苦しそうに海面に顔を出すまで……。

友里菜の心にも、産まれて初めて“男に抱かれない”という気持ちが、自然に湧いていた。それは原始の昔からの営み、そして男と女の拭いがたい愛の行為なのだ、と気付く。

けれども今はまだその時ではない。友里菜は直ぐに、水着のストラップを元に戻した。

「はあはあはあ……ああ、苦しかったあ！わたし、あんたみたいにいっつまでも潜れるわけやないんやからね！さ、もういいでしょ。戻る」

友里菜は先に平泳ぎで、浜に向かって泳ぎ始める。ボーっとしていた芳人も、直ぐに追いつくと、友里菜と同じペースでゆっくりと平泳ぎで付いて行った。

「えへへ……いい経験してもうた」

「エッチ！スケベー！だけど気持ちよかった……」

「え、ほんと？」

「んもうっ、それ以上、言わせないでよ」

直ぐ隣りに、小学生の男の子が、ど下手糞のクロールで近寄り、友里菜の顔に勢い良く水を被らせた。

「うっぷ。危ないやんか。ああ、塩辛い……！」

「ここまで来ると、もう人で一杯やな」

二人は浜に上がると、空いている砂浜にドーツとへたり込んだ。特に友里菜は、かなりエネルギーを使ったらしく、うつ伏せになった。

芳人は静かに友里菜の側に横たわると、頬杖を突いて片方の手で友里菜の濡れた髪をいじくった。太陽が眩しい。

「いつか……友里菜が欲しい……」

「え？ なに？」

「友里菜が欲しいんや」

「あほっ！ 直ぐにはあげないからあ」と友里菜は顔を上げて、意地悪げに答えた。

「直ぐにあげたら、芳人、わたしのこと、飽きちゃうかも」

「そんなこと、あらへんって！ そんなこと、絶対に！」

友里菜は黙って、芳人の頬を叩く振りをした。そこには輝くばかりの笑みがあつた。

68 夕日を見つめて

68話 夕日を見つめて

泳ぎ疲れた友里菜と芳人は、誰はばかりことなく手を繋いでいちゃついていたが、やがて海の家で力キ氷を食べた。

「あー、冷たい〜。めっちゃ、美味しい！ 何や、昔に返ったみたい。子供の頃の夏に」

「友里菜、海なんて久しぶりやったん？」と芳人が上目遣いに、しつとりと濡れた髪、妖艶な友里菜を見上げながら言う。

「わたし、一人っ子やもん」と友里菜は少し寂しげに答えた。「家族と海に行ったんは、ああ〜、もう小学生ぐらいかなあ〜。でも、そんなに楽しくなかった」

「僕は、兄貴と泳ぐ競争をいつもしていた。裏日本の海は綺麗やっただな〜。けど、いつも負けてばかりや」

「ハハハ、だから水泳部に？」

スプーン越しに、友里菜は悪戯っぽく言いかける。そのゾツとするほどの色つばさに、再び芳人は、先ほどの海の中での出来事を思い出していた。

「なあ、友里菜。いつか……どう？」

「何が？」

「言わせるなよあ」

「そうやね〜」と友里菜は気を持たすように、微笑んだ。「もう少し大人になつてからかな」

「充分大人やと思うけどな〜」

「そうかな〜？ でも、場所はどすんの？ あれが精一杯。楽しいことは、後にとつとこうよ」

「場所かあ……」

確かに、友里菜とらぶらぶする場所など無かった。芳人は友里菜をホテルなどには連れて行きたくは無いし、第一そのお金も無い。仮にお金があつたところで、友里菜をいかがわしいホテルで奪うことなど、絶対にしたく無かつたのだ！

もつと素晴らしい所……思い出に残るような初体験をしたい、と
思っていた。

「あのね、実はさあ、一年前同じクラスだった彩香って子が居たの。で、その子、先生とデキてたのよね。」

「ハー！ K 高にもそんなませた子が居るんかいな！？」と芳人は驚いた。

「それでさあ」と友里菜は、もうほとんど氷水と化した力キ氷の残りを突いた。

「なんやねん？」

「わたし、見たの」

「見た！？……って、あの、そのおお、あの場面？」

芳人は一重の目をパチクリと見開いた。

「うふふふ。そ、その通り」

「えーっ。っ。ムドムド。」

「それがね、学校の中」

[illegible]

友里菜はプツと噴出した。けれども同時に、あの時の艶かしい彩香の裸の脚の幻像が、再びパツと頭に浮かんで、複雑な気分になっていた。

「少しも綺麗とかじゃなかった」と友里菜はトーンダウンして、し

らけて言った。

「学校内はまずいよな、そりゃ」と芳人も相槌を打つ。「でも、どこで？」

「ほら、日本間の部屋とかあるでしょ、あそこ。チラッと見ただけけど、もついいや！」

友里菜はサツと立ち上がった。

「海に戻る？ それとどこか行く？」

「友里菜のハダカを想像するのもいいけど……それじゃせっかく来たからどこかに寄るかあ」

「なによお、もうあれで充分でしょ？ 高校生のくせにい」

「そつだな、高校生らしく、学問的なところに行くか」

「ん？」

「須磨海浜水族園」

「ああ、あれ？ ちとお堅い所やね。でも、行った事無いし、行く行く！」

「そ、高校生らしいやろ？」

「てか、少し子供っぽいけど、面白そう」

二人は立ち上がると、着替えに砂浜を歩く。もちろん手を繋ぎながら。

芳人は友里菜との生活を、既に夢見ていた。お気楽でお人よしと言え、その通りだが。将来どうなるか分からないのが人生だというのに、青春の輝きはそれを凌駕してしまうのだ。

それからは二人の会話と云えば、芳人の母親の病状とか、お互いの進路の事とか、かなりシリアスになって行った。

着替えて2kmほど先の『須磨海浜水族園』まで歩きながら、二人は進学高校の生徒らしい話題しかなかった。

再び、優等生的な友里菜に戻り、芳人は芳人で逞しい良家の少年と

言う感じのまま、二人は水族園で様々な魚達を見つめながら、そして実はほとんど見つめているように見てはいないのだった。お互いだけしか見えなかったのだから……。

水族園を出て直ぐに、

「あ、夕日、綺麗〜！」と叫んだ友里菜の先を見ると、確かに真夏の太陽が沈む所だった。

「この夏、二度と忘れへん」

「そうや、嫌なことは全部忘れてしまおう。今日のことだけ思い出して」

と芳人はそつと囁くと、友里菜の耳元にキスをした。

「いつかピアスする」と友里菜は振り返る。

「そうやな、きつと綺麗やで〜」

夕日が二人を照らしていた。青春の紅い夕日が。

69 夏の終わり

69話 夏の終わり

夏休みの間中、芳人は進学塾の夏季講習で毎日勉強に明け暮れているか、それとも水泳部の府大会に出ているかのどちらかで、遂に友里菜とはデート出来なかった。

以前のように近所に住んでいる時には時々出会えても、もう離れているこの距離は、芳人にはとてもなく遠く感じる。

けれども、須磨の海でのあの艶かしい友里菜の肌と、水着に隠れた肢体を思い出しては、時々ペンが止まることがあったし、果てはとんでもない夢、妄想になって出てきたりした。

あかん、あかん！ なに考えてんねん？ 今は勉強の時。そして来週は、水泳部の府大会。大した成績は残せんやろうけど、今は友里菜のことを想像しては、でれでれしている頃やないんや！

芳人は慌てて頭を振って、正気に返る。夏休み中ゴロゴロしていた母親が、最近は張り切って手料理を作ってくれることが、こんなに嬉しいことだとは！

母親はいつまでも居てくれて、手料理を作ってくれるものだとかかり思っていた。けれども、そういう平凡な幸福も、あつという間に崩れるときがあると言う残酷な事実を、芳人は知った。そう、知らなければならぬ年齢になったのだ。

水泳部の府大会の日は、友里菜には教えていなかった。友里菜が声楽やピアノや聴音などで、これまた忙しいのを知っていたからだ。毎日のようにメールはしていたものの、お互いにこの間の海での出来事は、あえて触れなかった。

「頑張ろうね、芳人」

「うん、頑張ろう」

たとえ短いメールでも、二人の心はいつも繋がっていたはずだったのだが……。

芳人は府大会の平泳ぎにエントリーしていたが、そこには将来はオリンピック選手かも、と言われているぐらいの猛者がいて、一番はおるか下手をするのとビリけつかかもしれないという危機感があった。そもそも進学校だから、スポーツは後回しと言う校風なのだ。先輩達も、負けようが勝とうが（勝つことはほとんど無かったが）、そんなことはどうでもいい、「出場することに意味があるんや」とやせ我慢をしていたから、芳人はのんびりした気分で出場することにしたのだ。

案の定、芳人は必死で泳いだもののやっぱりビリケツで、それも断トツのビリだったので、逆に暖かい（？）拍手が起ったほどだった。

やっと水から上がると、プール脇では坊主頭の一番や二番の高校生達が、冷ややかな視線を芳人に送っていた。

勉強は負けるが、スポーツではやるでええええ〜！ って感じなのかな、ったく。

タオルを頭に被って、これで夏も終わりやな〜という感慨に耽っている、誰かが狭い観客席から手を振っているのだ。白いブラウスが、少し眩しい。

「あれ？ あれって、もしかして……」

「大久保く〜ん！！ こっちこっち！」と手を振り黄色い声を上げたのは……なんと、晴香なのだった！

「うつそお〜！ 誰にも知らせてへんのかなあ。いや、待てよ？」

ふと振り返ると、えへへという含み笑いの同級生達が居た。

「おまえらかぁ、赤井さんに知らせたんは」

「せやかて、赤井さんは、一応お前のカノジヨってことになっているもんな」

「カノジヨ〜〜〜!？」

芳人がうぐつと声に詰っていると、いつの間にか晴香が芳人の側に來ていた。

「大久保君って、カツコいいんやねえ」

「ビリケツやで」

「そんなこと、かまへん」と晴香は、辺りが燃えるように暑いのにもかわらず、さも涼しげに答えたのだった。そして色っぽい目配せまでするのだ。

「今日、これから暇なんですよ?」

一方、友里菜は苦手なピアノを克服する為に、一日に数時間は練習をしていた。一時はツエルニーまで行っていたのに、中学1年の時に止めてしまったのが悔やまれる。

音大に行くには、声楽科であろうとバイオリン科であろうと、最低ソナチネ（小さなソナタの意）ぐらいは弾きこなせないと、現役合格は無理だ。

ふーっと友里菜は溜息をつく。先は長い。

アップライトのピアノの上のケータイが鳴った。

「あ、もしもし」

「はい！ 柿沢さん？」

「あっ、肝付君？」

「相変わらず、忙しいの?」と隼人はいつどんなときでも優しい。

「うん、今ピアノの練習してた」

「えらいなあ」と、明らかにお世辞ではない口調で、隼人は言う。

「えらくなんかない。止めたから、仕方ないの。自分で決めたことやし」

「何か、時間が無い？ 僕と……会っ」

「あ、ええっーと、そうやねえ」

「あつ、無理しなくて良いから」

「声楽の先生、西宮なの。なんかその辺なら、帰りにでもいいかなつて」

友里菜のもう一人の声が、「なんで、なんでえー？ 芳人が居るのに、なんでなの？」と囁くが、友里菜はどうしても隼人の誘いを断り切れないのだ。

「今度のレッスン、いつ？」

「夏休み最後の日」

「ああ、本当に夏の終わりって感じやね。でもいいよ。その辺りで「それじゃあ……」と友里菜は隼人からのデートを受けた。

夏の終わりが……。ほんと、須磨ではあと一歩つてとこだった。だけど、わたしの心は、まだまだだつて言っている。芳人、ごめんね。完璧に芳人だけのものになるなんて……わたしにはまだ到底出れないの。

友里菜はケータイを切ると、再びクーラウ（＊バロックの作曲家）のソナチネに向かった。旋律は甘く、時には哀しく響く夏の終わりの……。

70 優しすぎて……

70話 優しすぎて……

友里菜と隼人は、阪神間のさる駅で落ち合った。

隼人はこの辺りの地理には詳しいらしく、少し坂道を歩いて行くと気付かないような小さくて瀟洒な教会や、どこか洒落ているが古めかしい奥まった喫茶店、そして小奇麗な美術館などを案内した。

8月最後の日は暑いけれど、けれども隼人は相手にどこか涼しさを感じさせる。パツチリした睫毛の長い目元とか、夏とは思えぬ白い肌がそう思わせるのだろう。

二人はその美術館に入った。中はひんやりと冷房が効き、人も余り居ない。その館内には、大きな絵が所々掛かっていて、隼人はしばしその前で足を止めて、じつくりと眺めている。その横顔は、もとヤンキーだった芳人のようなバンカラさはなく、あくまでも清涼感が漂っている。

隼人はとある絵で足を止めた。目の前の絵は、どこかで見たような絵画……どこか茫漠として淋しげな男の顔の絵だ。

「ルオーのキリスト……」と隼人はつぶやいた。

「何だか淋しそう」と友里菜も言った。

「そう思う？」

「うん……わたしにはよく分からないけれど、でもそんな感じ」

「僕はね、僕は……」

隼人は珍しく言いよどんだ。

「なに？」

「柿沢さんは頭いいから、きつとどんな大学でも入れると思うけれ

ど、僕は今のK学院の大学にそのまんま行くつもり」

「それじゃあ、入試とか無いんやね！ いいなあ」

「いや、形ばかりだけれど、入試はあるよ。でも僕ならそのまま入れるな」

「で、何の学部」

「神学部」

「えー？ し・ん・が・く・ぶ？」

「そ、神学部。だからって、聖人になるわけじゃないよ。行きたい学部が無かったし、いつも少人数だから」

友里菜は、隼人が静かな礼拝堂で祈っている姿を想像した。

「なんか、ピッタリって感じ。でもすごいな。将来牧師さんになるの？」

「まだ決めてはいないけれどね」と隼人はハニカミながら答えた。

「だからって、恋もするし酒も飲むし、ただの大学生だよ。君だって、音楽部に行くんだってね」

「ええ。入試に失敗しなければね。まだどの大学とは決めていないけれど、来春早々課題曲とか発表になるから、その時に決める」

「柿沢さんが音楽部に」

「そして肝付君は、神学部？ どっちもどっちだよ」

と友里菜は言うのと、隼人の腕をつねった。

「肝付君は優しいから、きっと牧師は似合っていると思うな、わたし」

その言葉にも、隼人はただ少しだけ微笑んだだけだった。そしてそつと友里菜の手を握り締めた。

「だからって、君が好きだってことは止められないんだ。男ってみんなそつだよ。職業は関係ない」

これは告白なのだろうか？ 友里菜は今日、隼人に別れを告げる

ために来たのだ。なのに、この調子ではとても別れなんか告げられそうも無い。そして芳人と激しく求め合ったが、結局行くところまでは行かなかった、この間の海を思い出していた。

そういう場面は隼人には似つかわしくないような気がした。そしてなぜか頬が赤くなる。

「てへへ、とうとう告っちゃった。言わないつもりだったのに、多分君が嫌だというと思って」

「そ、そんなことないよ」と友里菜は言い繕う。「だって、そう言われる価値なんてわたしにはないもの。だけど、嬉しい……とても」

友里菜は静かに自分の頭を隼人の肩にもたれた。隼人はそんなに背が高くないから、ちょうど友里菜の頭が隼人の肩に来るのだ。

その格好で居ると、別れ難くなってくるのだった。隼人からは、まだまだ離れられそうに無い。どこか罪の呵責を感じながらも、芳人にはない優しさと柔らかさに包まれているのは心地いいのだ。

「そう……良かった」

隼人は友里菜の方を向くと、ごくごく自然に友里菜の唇にキスをした。友里菜は少し驚いて目をパチクリしながら、辺りを伺ったが、この静謐な部屋には誰も居なかった。

友里菜は目を瞑ると、芳人とは違う隼人の唇の感触を味わっていた。なぜか知らないが、身体の中からふつふつと欲望が沸き起こる。不思議だった。芳人を愛していると思っていたのに、隼人のキスを拒むどころかそれを味わっているとは！ 自分は己が思っているよりも、“小悪魔”なのかも知れない……。

それから二人は美術館を出て、かなり小高い場所の喫茶店に入った。隼人はバルコニーの席を取り、そこからはガラス越しに海が少しだけ見える。

「見つかったぞ

なにがだ？ 永遠

太陽と手をつないで行った海」

隼人は小声でつぶやく。

「なに、それ？ なんか……ステキ」

「ああ、これはランボーの『地獄の季節』と言う詩集の中のワン・フリーズ。それしか知らないんだ。頭悪いから、全部覚えられない。確か、『永遠』と言う題だったと思うけど」

友里菜は手を組みながら、ハーッと溜息を付いた。同じ海でも、感性の違いでこうも違ってくるものだろうか！？ 芳人との海は、自分の持つ原始的な欲望を再認識したし、隼人は海の中に、永遠のロマンを感じているとは。

そしてそのどちらをも肯定して受け入れる自分は、二重人格？ それとも、そのどちらも愛しているのかも知れない。ずるいようだけれど……。

「二学期になったら、柿沢さん、忙しくなるね。当分会えないかな」
「うん、多分」

「でも、メールはいいよね。電話も」

「あ？ うん、いいわよ」

「さっきの……キス……夢みたいだった」と隼人が耳元で囁いた。
「本当？」

「ごめんね、急にあんなこと」

「ううん。わたしも……嬉しかったし」

多分優し過ぎるのだ、隼人は。だから離れられないのだ、と友里菜はその時気が付いたのだった。

71 映研のボスは、わたし!?

71 映研のボスは、わたし!?

又、灰色の高校生活の二学期がやって来た秋、三年生の石黒龍也は部長を辞めることになり、映画研究同好会のミーティングが9月末に開かれた。

龍也は、友里菜が堂々と居座っている事に、ある種の嫌悪感を持っていた。それは以前映画館で拒否されただけではなく、この頃最初は初心だと思っていた柿沢友里菜という後輩が、やたらと生意気で反抗的に見えてきたからだ。

ある意味、龍也の勘は間違っではいなかった。

友里菜は変わったのだ。ふてぶてしくなり、妙な色気が出てきて時にはオーラまで感じる。そんなに背は伸びなかったが、チビでもないし、確かにプロポーションはいいほうだと思う。

みんなの憧れの的のマドンナ的存在ではないが、けれども誰かが必ず一目置いてしまう、と言うタイプになった。それは友里菜の自信の表れかも知れない。そういうことは、自然と態度になって、現れてくるものだ……。

龍也は復讐したくなっていた。

「それでは、新しい部長を決めることにします！ 一体誰がいいかな？」

と龍也は例によって清々しい風情で、辺りを見回した。口元には微笑が浮かんでいる。

「今の2年生は女子ばかりやな。男子は1年に二人居るけど……どうする？」

「僕は、田辺亜紀さんがいいと思うけどな」

と、3年の大崎がチラツと亜紀を見ながら、ぼそつと言う。亜紀は、
フンという顔付きだ。

「わたしも！」と友里菜も賛同した。「田辺さんがいいです」

友里菜は映研には残ったものの、これからのレッスンやその他で
とてもじゃないが、同好会に割ける時間など無かったのだ。

「でも、あたしはあゝ」と、もう一人の2年生の女子、荒井鏡子
が、チラチラツと上目遣いで龍也を伺いながら、おずおずと声を出
した。この鏡子という女子は、龍也のカノジョだという噂で、既に
デキた仲だとも言つ。

「なあに、荒井さん？」とにぎにぎしく龍也は聞くが、どこことなく
芝居がかつている。

「あたしはあゝ、柿沢さんがいいな」と

「へえ！？ わたし！？ でも、わたしは……」と友里菜が驚いて
言いかけると、

「ぼ、僕も柿沢さんがいいと思います！」と一年生の男子が大声を
上げた。友里菜はキツとそいつを睨みつける。

「どうして、柿沢さんの方が？」と、優しく龍也は聞く。

「だってえ……あ、あのう……柿沢さんは、映研のボスやから！」

「なんでえよっ！？」と友里菜は叫んだ。「ボスって、わたしのこ
となの？」

「つ、つまり、あの……何でも出来そう、って言う意味ですっ」

と、つつかえながらもその一年生の男子は言い張るのだ。

「ボス……？」

呆然として、友里菜は口ごもる。

「んじゃあ、そうしていいですね、皆さん？」

と如何にも紳士的に、龍也は念を押した。亜紀まで黙り込んで、下

を向く。

「田辺さんは？」

「え？ はい、ああ、いいですよ、柿沢さんで。ピッタリだと思うし」

「何だよ、亜紀までえ〜」

友里菜はムカついた。けれども瞬間的に、これは全部仕組まれた罠だと気付いたのだ。

つまりは、自分はここに居残るはずがないと、みんな思っているらしい。追い落とすか、それともボスになるか……。

「んじゃ、わたし、部長にならせて頂きます！」

その友里菜の一声で、ぐるになつていた一年生や、荒井鏡子は愕然として友里菜を見つめた。龍也だけがニタニタ笑っていた。

龍也には分かっていたのだ。排斥しようとするほど、友里菜は残るはずだと。静かな佇まいとは別に、奇妙な反骨精神が友里菜の中に存在していることを、龍也は見抜いていた。

「決まりですね〜」と龍也は言うのと、立ち上がった。「それでは僕は、これから進学塾の時間なので、失礼しますよ。柿沢さん、頑張ってくださいね〜」

ぶふふふふ、ぶふおつふおつふおつ〜と言う含み笑いが、龍也の口元から漏れた。チラッと、二セのカノジョである鏡子が、心配そうな視線を投げたがそれを完璧に無視し、龍也は去った。

友里菜の体内には、虚脱感だけが残っていたが、むらむらと闘志が沸き起こって言った。

「それじゃあ、この1年頑張らしましょう！ 部長のわたしから、です」

パチパチと言うまばらでしらけた拍手がわいた。作り笑顔の男子や女子の顔が、引きつっている。

「あ、新しい部長の承認をしていいですね」と大崎が念を押した。みんな、無言で頷く。

「それじゃあ、決まりです！ 映研の新規部長は……柿沢友里菜さん！ 将来の、ディーバでありま〜す！」

ちつ、余計なこと言いやがって。大崎先輩め〜！ ちょー、むかつく〜〜！

こうして、友里菜は“映研のボス”になった……いや、ならされたのだった！

72 『太陽と月に背いて』

72 『太陽と月に背いて』

全くアホな見栄を張ってしもうた……。

友里菜は後悔した。けれども「後悔先に立たず」の諺通り、もう時間は戻せないのだ。精一杯やるしかない。

まず一番最初の仕事は、文化祭だ。去年の文化祭に、あの憎つき龍也にそそのかされ、つつい入ってしまったのが運のツキかも知れない。

けれども、友里菜にはふと思うことがあった。

やるとすれば、アレしかないな、アレしか……。

とにかく人を呼び込むのは大変な事だ。友里菜にはある確信があった。それは、あの隼人がふと口ずさんだ詩から出ていた。

「見つかったぞ なにがだ？ 永遠”……か。そう、ランボーの映画。あのディカプリオの出ている映画！ 何だか、年末には『タイタニック』と言う映画も公開されるし」

「へえ、ディカプリオ？ タイタニック？ あれっ、それがこのポスター？ ああ、なんかステキな人っぽい」とお気楽な亜紀が、『タイタニック』のポスターを広げながら、ポツリと言う。

「でも、相手の女優、なんか太ってない？」

「そんなことより、こっちこっち」と友里菜は、借りてきたビデオを突き出した。

「『太陽と月に背いて』……なに、これえ？」

「これ、ディカプリオが出ているの。ランボーの役で」

「ランボー？ ああ、詩人かあ」

「亜紀、読んだ事ある？」

「うん」と亜紀はのんびり答える。「わたしが詩なんか読むはず無いでしょ」

「確かに。でも内容が凄いよお」

「だって、ランボーでしょ。つまんない？」

「これって、ヴェルレーヌとの、つまりアレ……ボーイズラブだよ。あ、ボーイズラブって、ヴェルレーヌは少年じゃなかったわい。おっさんでね。でも……」

「ひえええ、BLなのお？ そんなにすごい？ ね、高校なんかで上映していいのかなあ？」

「いいんじゃないの。文芸映画だよ。貸すから、見といて」

「うん、いいけど」

どうも亜紀は気が無さそうだ。けれども、友里菜には勝算があった。

案の定、次の日亜紀は柄にも無く感激して、友里菜にそのビデオを返したのだった。

「どうやった？」

「す、す、凄い……。って言うか、それよりも、ディカプリオ……綺麗……。可愛い……。ああ、知らなかったわ。ランボーとヴェルレーヌの仲のこと。ステキ……」

「ちよつと最後がね、可哀想だけど」

「Total Eclipseって」

「皆既日食のこと。どうやら舞台だったらしいよ」

「あゝあ、これ絶対にいいかも。それでいて、『タイタニック』の前売りチケットを売れば、売れるよ」

「文化祭は、それで決まり、だよな」

二人は目を見交わすと、ニツと笑った。

「それにしても、映画はどうなるか分からへんけど、このディカプリオ

リオって、絶対に人気出るわよ、ね、友里菜」

「だったら、わたし達、先見の明があるかも。ぶふふふふっ」

かくして、出し物は決まった。

けれども、帰途友里菜はハッと気付いた。もしも芳人が来たら、この映画についてどう思うだろうか？ まして、隼人は自分が言ったランボーの映画だ、と気付くだろう。それが、いくら耽美的だとは言え、その映画がボーイズラブだと知ったら、どう感じるだろうか？ 二人とも、ストレート、すなわちノンケな人間だから、とても映画の芸術性は抜きにしても、理解する事は出来ないのではないだろうか？

ひょっとして、二人とも失ってしまうかも？ 二兎追うものは、一兎をも得ず、というじゃない。うゝん、どうしようかなあ、この企画。でも、ディカプリオはステキだしな〜。

どちらにせよ、二人とも文化祭には来ないだろう……と浅はかにも友里菜は確信した。芳人は今年、又しても同じ日にI高の文化祭だし、隼人は自分が嫌だと言えば、絶対にわざとらしく来ないはずだ。

それよりも、友里菜は妙な競争心で、先輩のいけすかない龍也の鼻を明かしてやりたかったのだ。そして後輩達の信頼と尊敬、あわよくば憧憬も得て、映研の真のボス（！）になりたかったのかも知れない。

帰宅してピアノに向かおうとした時、玄関に何やらチラシが一杯落ちていたのに気付いた。拾うと、それは全て住宅の折りこみ散らしだ。どうやら母親が玄関の靴箱の上に無造作に置いてしまったらしい。

「お母さん！　なによ、これ？　一杯散らかつてるじゃない！」

奥から直ぐに母親が出てきて、チラシの束を見つめた。口元には、奇妙な笑いが浮かんでいる。

「ああ、それ……」

「なにさ、これ？」

「いや、色々不動産屋を当たってみていたの」

「不動産？」

「そう。実はね、お父さんが持っていた株が、今すごい値が付いてんのよ。その上、今バブルが弾けて、中古物件が出回っているし。それで、頭金が出るかも！　ね、友里ちゃん、中古だけれど、家が買えるかもよ！　わたし達の家が！」

「家……買うの？」

「ええ、あんたが音楽精一杯できるように、二重ガラスにして、個室を持たせてあげるから」

「無理しなくても」

「無理じゃないわよ」と母親は、ムキになっていた。「わたし達だって、買ったかったのよ、長い間この時を待っていたんだから。自分達の家を失ってからでは、とっても窮屈で」

わたしの為じゃないんだわ。どうせ、親達の為でしょ？　でもいいか……どうでも。今は、文化祭のことで頭が一杯なんだから。

72 『太陽と月に背いて』（後書き）

この部分は、まだレオナルト・ディカプリオが「タイタニック」でブレークする直前の頃でした。

いま現在は、すでにディカプリオの時代は終わった・・・みたいですね。

73 来ないでって言ったでしょ!?

73 来ないでって言ったでしょ!?

ただでさえ忙しいのに、もっと忙しくなった友里菜……。けれども友里菜は妙な意地を持っていた。損だと分かっていても、やってしまふのが友里菜の性格だ。そして頑固な所も。

ただ一つ心配なのは、芳人も隼人もどちらも同じ日にK高の文化祭に来るのではないか、と言うことだった。そんな事になったら大変だ。

友里菜は芳人には隼人との交際は終わったと言い繕い、隼人には芳人の存在が大切だと言う事を言っていなかった。

「大久保君？ ああ、最近あんまり会って無いなあ」

と友里菜は隼人に電話していたのだ。

「それでね……」と友里菜は言い続ける。「今回わたしは部長で忙しいの。だから、会う機会ないと思うんだ。だから、来ないでね」

「ああ……いいけど……。でも」

「でも？」

「だったら、今回はうちの高校の文化祭に来てくれないかなあ。いや？」

「え？ K学院の？ あ……いつだっけ？」

「一週間後だけど」

「だったら、行ってもいいかなあ」

「えっ、ほんとに!？」

ケータイから、隼人のウキウキした声がした。シマッタ、思ったがもう遅い。約束は約束だ。

友里菜は苦い思いで、ケータイを閉じた。

次の瞬間、またケータイが鳴る。

「あ、僕。芳人」と野太い芳人の声がした。「三日後、K高の文化祭やなあ」

「うん、そうやけど」と友里菜はベートーベンのソナタの楽譜を閉じながら、慌てて答える。弾けなくて苛々していたところだった。

「僕、行ってもいいかな？」

「へ？ 来るの！？」

「だめ？」

「だって……同じ日、I高も文化祭でしょ？」

「あ、半日くらいやったら、来れそうやねん。ただし、午後からやけど」

あー、どうしよう？ 芳人、来るのかあ。ボーイズラブっぽい映画なんか芳人が見たら、なんて言うかなあ……。

「でも、わたし、忙しくて。今年はわたし、部長だから」

「僕の相手はできへんの？」

「うん、多分」

「あー、そうか。残念やなあ」

「ごめんね、芳人」

「んじゃあ、今年も我慢やな」と芳人は幾分がっかりしながら、言った。

「でもしやあないな。友里菜も忙しいんやろうし」

芳人も納得して、ケータイを切った。不遜だが、友里菜はホッとした。

これってやっぱり二股掛けているんやろうか？ こんなことしていいのかなあ？ けど、どちらもまだ、本物のカレシではないんやし……ま、いいか。

中学時代の、あのお堅く純真な友里菜ではなく、今の友里菜は結構狡猾になってきていた。それが“大人になる”と言うことならば、確かにそうかも知れないが。けれども友里菜はどこか割り切れない。

ま、しゃあないやん。二人が鉢合わせしたら、大変やし。

友里菜は小ずるく立ち回ろうと決心した。

文化祭初日は、あいにくどんよりとした曇り空だったが、大勢の生徒達、父兄達、そして他校からの高校生達が、どどーっと来た。友里菜の「映研」にも、思いのほか沢山の人が来てくれた。そして、何人かは薄暗くした教室内で、映画の上映を見、そしてその又何人かが「タイタニック」の前売りチケットを買ってくれた。

「大成功！」と亜紀は単純に喜び、友里菜にウィンクする。
「かしら？」と友里菜は、やはり気が気ではない。部長と言う立場が如何に大変か、友里菜は初めて思い知る事になった。けれども、後輩達を叱咤したり、あれこれ指図するのはやはりどこか気持ちがいい。

人の上に立つと言うカタルシスを、友里菜は初めて味わったのだ。

「やあ、どうお〜？」

聞きなれた声に振り向くと、やはり前部長の嫌味な龍也の姿があった。

龍也は眼鏡をさり気なく上に上げる気障な仕草をしつつ、見知らぬ女生徒を連れている。見慣れない制服、雰囲気の違い態度。

「は？ あれって、京都のN女子高の制服やよ、友里菜」と亜紀が囁いた。

「また別の女子を、からめ取ったか？」と友里菜も含み声で囁き返

す。「相変わらずやね、前部長は」

「けど、まあまあ綺麗な人やわ」

「そーかな。わたしはそうは思わへんけど。ただし、N女子はお金持ちのお嬢さんが多いとこやから」

「一体、いつあそこの女子をゲットしたんやろ」

友里菜と亜紀がひそひそ囁き合っていると、

「おっす！」と言う声がした。友里菜はパツと振り返り、そこにまごうかたなき芳人が突っ立っているのを認めたのだ。

「なんで？ どうして来たの？ 来ないでって言っただでしょ！？」

思わずきつい言葉が友里菜から発せられた。芳人は呆氣にとられて、その場に木偶の棒の様に突っ立っているだけだ。

「あれっ？ あの人……友里菜のカレシ……じゃないよね？」

亜紀も啞然として言った。

「だって、カレシはミッシヨンの……」

「ちと黙って！」と友里菜は制すと、芳人の制服を引っ張って廊下に出た。

74 口喧嘩の果て

74 口喧嘩の果て

最初、芳人は友里菜の通っているK高校に行く気はなかった。同じ市に在るとは言え、K高はJR沿線、そして芳人の通っている進学校のI高は私鉄沿線で、それも北と南と大分距離がある。

文化祭の日も同じだったし、友里菜も来てくれなくていい、と言っていた。

けれども、悪魔の声が囁いたのだ。そう、それは晴香だった。

「な、大久保君、今日は午後から少しヒマでしょ？ だったら、K高のカノジヨの所に行くんやない？」

「友里菜のことか……。あいつは、まだ僕の“カノジヨ”やないって、あれほど言うているやる？ まだまだ、あかんねん。それに、あいつも来なくていいと言ってたしな」

「そうお？」と晴香は、芳人が作った、激マズの焼きソバを突つつきながら、尚もニタニタ笑いを隠さない。

「ちょっと変やない？ 誰か、いい人が来ているとかあ？ そこまで信用していいのかなあ。ま、可愛い子やとは思っけど、オンナは怖いからねえ」

「そ、そんなこと」

そう答えつつ、芳人はほんの数ヶ月前の、海の中での友里菜の薔のような、あるいは硬いリンゴのような露出した乳房を思い起こしていた。

と同時に、あのスラリとした隼人のことも脳裏に浮かんだ。

もももしや、あの隼人が来ているから、僕はお呼びではない、

とかあゝ。まさかな。いや、そうかもしれんっ！信じたいが、あの友里菜のことや。何をしでかしているか、分からへんやんか。

芳人の妄想は膨らむばかりだ。激マズの焼きソバは、更に不味くなつていくというのに。そして遂に、芳人は手に少しばかり焼けどを負つてしまった。

「あつちつちつちゝゝ！ちえっ、もうやゝめた！おいっ、午後からはお前やろ、後輩っ！ほなら、任すからな」

芳人は全然似合わないエプロンを外し、ぼーっと突っ立っていた後輩に、焼きソバ用のヘラを乱暴に手渡すと、一目散にK高に向かったのだった。芳人の足では、30分ぐらいで着くはずだ。

「ふうん、やつぱり、大久保君、あの子の事が忘れられないんやわ。うつひひひ、これって、『オテロ』のイアーゴの役目なんだけどなあいつはそんなこと知らんやろう。

つまりは嫉妬を吹き込むってハナシを」

晴香は芳人の背中を見つめながら、不味い焼きソバをプイと捨てた。

「ま、ま、不味いゝっ、この水泳部の焼きソバはっ！」

そうして来ては見たものの、遠くから覗く限り友里菜は確かに忙しそうだし、隼人も来ていない。いつの間にか、数ヶ月見ぬ内に、友里菜には貫禄まで付いてきたようだ。肉体すら少し肉が付き、もう少女のそれではなく、17歳の成熟した娘の身体だ。

けれどもその涎が垂れそうな芳人の思惑も、友里菜にキツと睨まれてあえなく撃沈した。

友里菜は芳人を廊下の端に引っ張って行くと、その制服の白いシヤツを掴んではまくし立てる。

「あれほど、来なくていいって言ったのにい！芳人ったら、何考

えてんのよお！」

「ち、ちよつと驚かそうと思っただけやんか」

芳人は少しは友里菜が喜んでくれると思つていたので、当てが外れて怒りのようなものを覚えながら、そう言い訳した。

「だって、約束を破つたやないのっ！」

「それぐらいいいやんか。別に悪いことをしているわけじゃないし。ふと友里菜に会いたくなつたんや。そのどこが悪いんや！」

「だってえ……」

友里菜は頭を巡らせた。そしてふと、でっかく張つてあるポスターを手で隠すようにして、言った。

「この映画……ボーイズラブっぽいところがあるから……芳人に嫌われるって……そう思つたの」

「『ランボーとヴェルレーヌの禁断の愛』！？ はー、そうか。『
ちまた
巷に雨の降る如く、我が心にも雨が降る』……かあ」

「何よ、それ？」

「知らんの？ ヴェルレーヌの有名な詩やで。それをドビツシーが歌曲にしているし。友里菜……声楽やつているのに、知らないの？」

「え？ あ？ 知らん……かつたわ」と友里菜は急に小声で言つた。少し自分が恥ずかしくなつた。こんなに興奮するとは、我ながら面白い。

「別にボーイズラブでもかまへんよ、僕は。二人の芸術家の愛と憎しみは、面白そうやしな」

「じゃ、見て行く」と友里菜は少し心を鎮めながら言つた。

「おいおいおいっ、誰え？ そのガタイの大きな奴は？ あ、ひよつとして、部長のカレシい？」

背後からするその声は、あの嫌味な龍也だ。芳人はチラツと振り返ると、睨みを効かせた。龍也は咳払いをしながら、眼鏡をずり上

げる。

「誰？ あのすました奴？」

「あれが例の嫌味な前部長よ」と友里菜はひそひそと芳人に囁く。そして、

「カレシ？ ま、そんな感じの人かな」と友里菜はくりと振り向くと、素っ気無く言い放った。龍也は肩をそびやかし、そして亜紀は啞然としている。

「ミ、ミッションの……じゃないのかぁ」

「あつ、わたしちょっとこの人と、ぶらぶらしてくるから、頼んだね」

友里菜も後輩にそういいつけると、芳人を手招きした。

「やつと、機嫌直してくれたの」と芳人もホッとして言った。

「うん。せっかく来てくれたんやし」

「それは良かった。来てみて、友里菜の采配振りを見て、ちょっと見直したし」

「ふふ〜ん」と友里菜は嬉しそうに答えた。

そして二人は手をつないで、階下におりようとした。その時、友里菜はハッとして芳人に毒づいた。

「バカバカバカ〜っ！ あの子、連れて来てたの!？」

「ええっ？ あつ、嘘や〜!」

見下ろすと、アイスクリームを舐めなめしながら、晴香がこちらを見上げていたのだ。

「もうっ！ 知らないっ!」

友里菜は手を離すと、煮えくり返るような怒りを覚えながら、さつさと階段を上っていったのだった。

75 ミッションの校庭で

75 ミッションの校庭で

友里菜の家族にはもちろんクリスマスチャンは居ないし、それどころかミッション・スクールに行った者さえ居ない。

けれども友里菜は、今までに無い経験をしてみたいと思っていた。幸い、声楽の教師はミッション・スクールの講師をしているし、肝付隼人はミッション・スクールの生徒だ。友里菜は彼ら二人を通じて、初めてその雰囲気と言うものを知った。今まで両親はおろか、親類縁者の誰一人として知らない、その独特の雰囲気を。

ドタバタした挙句、芳人と口喧嘩までしてしまった文化祭も何とかその後は無事に終わり、『太陽と月に背いて』で新にディカプリオのファンになった生徒達が、今度の『タイタニック』の前売りチケットを買ってくれた。

おかげで、さすがの龍也も文句のつけようの無い収支決算が出来た。仲間達と打ち上げをして、ドンちゃん騒ぎをし、カラオケで歌を歌い、さすが未成年なのでアルコールは飲まなかったものの、最後の夜はかなり遅く帰って親を心配させた。

けれども今の友里菜は、もう昔の友里菜ではない。大胆不敵で、どこか醒め、もう半分は大人の仲間入りを果たしてしまったような、“娘”になっていたのだから。

自分でも変わったなと思う。けれども、一週間後、友里菜は再び新たな体験をしたのだ。隼人の高校の文化祭に行くと言う約束は、やはり果たさなければならぬ。どことなく気だるいが、けれども友里菜はその高校に向かって電車に乗った。

隼人の通うK学院は、関西ではかなり有名なミッション系男子高校で、大学も併設されている。いや、むしろ大学の方が有名だった。一度友里菜は、隼人とのデートの帰りに、門からチラッと覗いた事はあったが、実際にそのキャンパスに足を踏み入れるのは初めてだった。

その日はよく晴れ、門は大きく開かれて、大勢の父兄や生徒達、他学校の男子や女子、それからOBと思しき人々が、群れをなしてその坂を登っていた。辺りは高級住宅街らしく、大きな家屋敷が並んでいる。

隼人は聖歌隊の部活に参加しているので、迎えには来られなかった。けれども友里菜は一人で、精一杯ミッションの相応しいお洒落をして、その門をくぐった。

どこか世界が違う……。友里菜は瞬間的にそう感じた。

どこがどうと言うわけではないが、同じ高校だというのに、公立高とは違い建物がまず違うのだ。真っ直ぐ行くと、正面には十字架のそびえ立つ白亜の落ち着いたチャペルが見えて来た。

チラシを配ったりしている生徒達は、皆どこかの穏やかな、お金持ちで何不自由ない育てられ方をしたお坊ちゃん、と言う感じだった。奇妙に礼儀正しく、皆コミックに出て来そうな身なりや態度だ。

「あおう、聖歌隊の発表があると聞いたんですが……」

と友里菜は、たこ焼きを売っていた男子にそう言い掛けると、その男子はさっと中から紙切れを取り出して、丁寧に受け答える。チラチラと友里菜を見つめながら……。

「ああ、クワイヤの発表ね。このプログラムに書いてありますよ。それは、確か1時からだったかな？オルガンの演奏の後です。少しお祈りもありますが……聖書讃美歌持ってます？いやいや、持ってなければ備えたものがありますから大丈夫ですよ」

淀みなく喋るその喋り方は、けれどもどこかおっとりとして、隼人の口調に似ていた。K学院高校のカラーなのだろうか。

「ありがとうございます」

「あつ……お兄さんか誰かが、クワイヤに居るんですか？」

「お兄さん！？ いえ、違いますけど、その……」

「あ、ごめんなさい。それじゃ、ごゆっくりどうぞ」

その男子は素早く察して、再びタコ焼きを作り出した。深く詮索しないのも、この高校のカラーなのかも知れないな、と友里菜は思い、妙に感心した。そういえば、隼人も深く突っ込まない。それが物足りなかったりもするが、けれどもそれが妙に気が落ち着けるような気もする。

まだ時間があるのでゆっくりと歩き廻りながら、友里菜はそれらの雰囲気味わっていた。木々は豊かで、校舎は清潔。緑の芝生に、思い思いに人々が座っている。快い。心地良い。自分もこういう雰囲気の中で勉強したい！

そうだ！ 大学は公立ではなく、ミッション系が良いな！
なぐんか今の高校って嫌だ。ギスギスしているし、わたしには合わないような気がする。

それに……それに、女子ばかり、同性同士ばかりっていうのも……
……それも未知の領域だけど、案外いいかも？ いちいち男子のこと、構ってなくてもいいし、落ち着いて勉学に励めそうな気がするし……
……。

友里菜の妄想はどんどん膨らんで行った。けれどもこの思いつきは、友里菜の脳みそを虜にしていまい、すっかり聖歌隊の演奏の時間に遅れてしまったのだ。

微かに流れて来る、余り上手いとは言えないが、静謐な調べに気

付き、友里菜はハツと我に返った。

「やべ〜」

友里菜はチャペルに突進した。けれども一步入った瞬間、友里菜はその独特な雰囲気、うっと息を潜めた。

高い天井から鈍い光源のランプがぶら下がり、どちらかと言うと暗いガランとした空間だ。けれども満員で、真正面には白いガウンを纏った聖歌隊が一心不乱に讃美歌を歌っていたのだ。

いつくしみ 深い 友なる イエスは

罪 咎^{とが} 憂いを 取り去りたもう……

76 真のカノジヨって？

76 真のカノジヨって？

聖歌隊（「choir」クワイヤ）は、次々と歌い続けた。友里菜は端の方の固い木の長椅子に座り、テナーの部分に居る隼人を見つめていた。隼人はずっと手に持つ楽譜を見下ろし、友里菜には気付かない。

と、ある曲が友里菜の心を捕らえた。

主よ、わが身を とらえたまえ
さらばわがこころ 解き放たれん

わが剣^{けん}を くだきたまえ
さらばわが仇^{あだ}に 打ち勝つをえん。

そしてその曲の二番を、何と隼人一人がソロで歌いだしたのだった。

わがこころは さだかならず
吹く風のごとく たえずかわる

主よ、御手^{みで}もて ひかせたまえ
さらば直^{なお}き道 ふみ行くをえん。

（『讃美歌21』529番）

最後の高い部分に少し難があるものの、素人としてはまあまあで隼人の声は澄んでいた。そして友里菜は、隼人の精神がいつもどう

であるのかを、この曲を通じて感じ取ったのだった。
歌い終わってホッとした隼人は、友里菜の視線を捉えて、少しだけ照れたように微笑んだ。

10曲全てが終わった後聖歌隊は下がった。友里菜が尚も座り続けていると、トントンと肩を叩く者があった。振り返ると、先ほどまで歌っていた隼人が嬉しそうに合図している。

「出ようよ」

「礼拝の途中よ」

「いいんだよ。出て、散歩しようか」

「うん」と友里菜は素直に頷いた。この秋の一日は、まるで二人だけの為にあるかのように、燦然と萌えて行く……。

「あつ、肝付く、それってお前のカノジョ？」

と誰かが隼人に向かって言いかけたが、隼人は黙って首を振った。
「けど、どう見てもカノジョにしか見えないよ。今度紹介せえな」とそいつは、にこやかに言った。友里菜は隼人の真のカノジョにならない自分を、これほど恥じたことはなかった。

「肝付君って、歌上手いのね。見直しちゃったやん」

「ハハハ、君の前で歌うんは、少し恥ずかしかったけどな」

「わたしが居るの、気付いてたの？」

「もちろん」と隼人は控えめに言った。「けど、歌っている時は、それに埋没しているから」

「それが本当よ」と友里菜も言った。秋の風が、友里菜の黒髪を乱す。

「何か飲もうか？」

「うん」

二人はコーラを買ってきて、芝生に座り、人々や建物を見つめて

いた。

「これが、ミッションかあ……」

「ふふふっ、あんまり良い風に捕らえないほうがいいよ。中身は結構ドロドロしているんやから」

「それはどこの高校もそうよ」と友里菜は大人びた返事をした。

「なんか、わたし、ミッション系の大学に本当に行きたくなくなっちゃった。すごく……自分に合ってる様な気がしたん」

「女子大？」

「うん、そう。音楽部があるところがいいな」

「じゃ、ここじゃないのか。残念やな」

友里菜は隼人の涼しげな横顔を見つめた。隼人と別れる事なんて…… やっぱり出来ない。

「あの、柿沢さん？」

「ん？」

「やっぱり、大久保君のカノジョで居続けるの？」

「やゝだ。真のカノジョじゃないよ」

「真のカノジョって？」

問われてから、友里菜は始めて首を傾けた。

「ほんと……真のカノジョってなんやる？ でもとにかく、大久保君一人の者、じゃないってこと。だって、わたしまだ誰の者にもなりたく無いもん。まだ未熟だし、入試もあるしね。あの嫌いな高校に、あと一年も通わなくちゃならないなんて……それは嫌やけど、でもその間は、わたしには真のカレシは要らないの」

「だったら、友人ならいいんだ」

「そう、友人なら欲しい。わたし、一人っ子だから、ジェンダーとは関係なく、付き合いたいって気持ちはいつも持っている。それが悪いことなのかな？ 誰かを裏切っているってことなのかな」

「大学に入っても、僕のこととは忘れて欲しくないんだけど」
と隼人は控えめに言った。

「多分」と友里菜は曖昧に答えた。未来のことなんて、何も分からないし、まして自分の気持ちなど、もっと……。

「さっきの讚美歌っていうの……良かった。曲もやけど、言葉がジンと来るんやね、讚美歌って」

「『主よ、わが身を　とらえたまえ

さらばわがこころ　解き放たれん』」

隼人は小声で、最初のフレーズを微かに歌いだし、ふつと止めた。
「そうだね、僕も捕らえられたみたいだ。心を身体を、そして生き方を……神様に」

友里菜と隼人は、秋の風にじつと黙ったまま座り続けていた。

77 木枯らし

77 木枯らし

木枯らしが教室の窓ガラスを叩く頃、赤井晴香がしらつとしながらも、芳人の間近に寄って来て言った。

芳人はこの間の文化祭での晴香の行為を、今でも怒っていた。あの日以来、友里菜とはギクシャクしていたからだ。

けれどもそんなことにはお構いなく、晴香は柄に似合わない甘い声を出す。

「大久保君、この冬の補習塾決めたあ？　もち、補習には行くんですよ？」

「うん、まあな。京大に行くには、是非とも『新進ゼミナール』には行かへんと」

「へえ、京大目指してるんや、大久保君も！　実はわたしもよ」

「そんで？」

「だから、わたしも『新進ゼミナール』に申し込んだの」

目付きが鋭く、常にツンツンしている晴香は、ツンデレの代表格のような女子だ、と芳人はいつも思う。それでいて、どこか可愛い部分も持ち合わせているのだ。ただし、それは晴香が認めている人物にだけだが……。

「なら、一緒に行こうよあ、大久保君っ」

「うげっ」と芳人は思わず小さく叫んでしまっていた。

「何が、うげっなのよっ」と晴香は、そのきつい顔立ちをしかめて見せた。「わたしじゃ、不足？」

「い、いいや、そういう意味ではなく」

「ふん、あのK高のカノジョのこと？　あの人なら、音楽部に進学

するんでしょ。だから、もう一杯一杯で、補習塾なんか行くはずが無いやんか」

確かに友里菜は、もう進学のために塾には行かないだろう。友里菜自身、苦手なピアノと聴音のレッスンで週二度は潰れ、そして隔週で声楽の教師のところまで通っているからだ。どこの音大に行くのか知らないが、進路は間逆になってしまっている。

鉢合わせするはずが無い。けれども……。

「知ってるわよ。大久保君の気持ちは、今でもあのK高の子だというぐらい。でも、わたし、それでもいいねんから。ね、心広いでしょ、わたしって」

「は、はああ」

芳人はただただ呆氣にとられて、晴香を眺めているだけだ。

けれども結局、二人は『新進ゼミナル』に共に行くことになった。冬休みは、これでほとんど潰れてしまい、友里菜とは会えそうにないのが残念だったが、大学に進学することも一つの重要な事なのだ……特に秀才の集まる高校生にとっては。

晴香が心広いかどうかはともかく、12月初め、芳人と晴香は連れ立って入塾テストを受けに行った。その帰りのことだ。

12月の夜の帳は直ぐにやって来る。晩秋の夕暮れはつるべ落としなのだ。

まだ7時だが暗い坂道、それも人気の無い場所だったが、後ろからバリバリバリという猛烈な音を立てて、バイクの一団、すなわち暴走族がやって来て、二人を追い越した。

と見るや、Uターンして今度は二人を取り囲むようにグルグル廻り出したのだ。さすがの気の強い晴香も、ぐぐつと芳人の身体に身を押し付けて呟いた。

「こ、怖い」

芳人の方も、幾らガタイがあるとは言え、暴走族は苦手だ。昔のヤンキー気質も、今はもうどこかへ飛んでいた。

二人は身構えた。暴走族たちは、煌々と明かりを灯したただグルグル廻って威嚇して行く。

「おいっ、お暑いやんけえ、そこのお二人さんっ！」
と、やつとじらすように誰かが蛮声を張り上げた。

「ど、どうしよう？」と晴香は女らしく、震え出した。

「黙って！ こいつらの挑発に乗るなよ。その内、誰かここを通して助けてくれるって」

「かな〜？ チョー、怖いっ」

晴香がそう情け無さそうにつぶやいた時だった。

「あれ？ お前、芳人やんけ？」と言うどこかで聞き慣れた声があった。「はー、ほんとや。芳人や、こいつ俺のダチやった奴やでえ！」

「樋口？ もしかして……樋口!？」

「なんや、まー坊のダチか、こいつら」と族の中の親分肌のごつつい少年が、つまらなそうに言った。「こんな、いいとこの子と仲がよかったんか。へえ」

「まあな」と樋口は、誰かの改造バイクにタンデム乗りしていたが、頭をかいた。その額にはそりを入れ、猿のような顔に凄みが増しているが、確かにそれは樋口だった。

「樋口……いつの間にこんな族に……」

「こんな“族”って悪かったなあ」と親分格は怒鳴る。「これでも、『浪速疾風隊』というれっきとした名前があるんやで。結構、この辺りじゃ有名な族やんか。知らへんのか？」

「知らんわ！」と芳人は、晴香の手前精一杯虚勢を張って、怒鳴り返した。

「へえ、威勢がいいやん。そやけど、あれっ、もう友里菜ちゃんとは別れたん？ その子、誰や？ 新しいカノジョ？ もう浮気したんか、芳人も結局ただのガキやったな。もう少し、骨があるんかないな、と思うとったけど、案外……」

樋口は、バイク上から見下ろしながら、ぐははははと軽蔑したように嗤った。芳人の頬は、真っ赤になっていた。それは憤怒のせいではなく、恥のせいだった。

「こんな奴は、殴るのもどつくのもおこがましいって感じやな。ほな、行くか。ドライブ、ドライブ！ サツの奴らを、今晚もここん引ッ掻き回そうぜ……！！」

と親分が氣勢を上げると、

「ほんじゃな、弱虫で女垂らしの芳人お」と樋口も一声言ってから、一団は再びバリバリという雑音を響かせながら、去って行った。

この間、僅かの時間だったのだろうが、物凄く長く感じた二人だった。

「あー、良かったあ。もうどうなることかと、えろっ心配したわ。にしても、大久保君って、ほんまに例のカノジョとは、もう縁切ったん？ ふふ、嘘でしょ。ま、いいか。助けてもらうて、おおきにいやからね」

皮肉なのか感謝なのか、晴香はそう言つと、以前よりもっとピタッと芳人にくっついたのだった。けれども芳人の心は晴れなかった。

やっぱり、あいつ、暴走族になってしまっていたんか……。でも、しゃーないな。誰でも、ちゃんとした生活を送れるわけや無いし。でも、なんか淋しいな。

折りしも、木枯らしが吹きぬけて行く、寒い寒い晩秋の夜だった。

78 ルミナリエ

78 ルミナリエ

中学時代のダチだった樋口正浩が、遂にと言うか、とうとうと言うか、やっぱり言うべきか、どっちにせよ暴走族になってしまっていた、という事実を、芳人は友里菜には言わなかった。

逆に、晴香とのがバレてしまうのではないか、という浅はかな思いが芳人の口に蓋をしていたのだ。

芳人は友里菜には、『新進ゼミナール』の入塾テストに合格した、ということだけは告げていた。けれども、もちろん晴香もテストに合格していたのだ。

「共に、K大に合格しよう！」と晴香の方は、意気軒昂だったが、芳人はなぜか浮かない。

「はー、良かったやんか」という友里菜の言葉にも、なんだか本気が入っていないようで嫌だった。けれども、脛に傷を持つ身だ……仕方ない……。

「な、友里菜」。クリスマス前後には会えへんかな？」

と芳人は友里菜のケータイに詰め寄った。

「クリスマス！？ わたしなあ、クリスマスのあとには、声楽の発表会があるの。神戸で、やけど。それでピリピリしてんねん」

「そっかー。じゃあ仕方ないなあ。んじゃ、正月にでも」

「うん、考えとくわ」

そうそつなく言うと、友里菜は切った。夕暮れの校庭だ。

「大久保君」と突然背後から晴香の声がした。「あつ、ケータイなんか学校に持ってきてるんだあ」

「別にいいやん」

「まあまあ、そう不貞腐れんていいやんかあ」
と、晴香は柄にも無い甘え声で迫る。

「ねえねえ、震災以来ルミナリエって言うのが、神戸でやってるんよ。知ってる？」

「ルミナリエ？ うーん、確か新聞か何かで読んだような読まなかったような」

「それって、めっちゃ綺麗なんやて！ わたしはテレビで見た」

「だから？」

「もち、決まってるやんかああああ」

「うっ、すげえ甘えた（「甘えんぼ」）」

「そう！ 行こ、行こ」

「えっ、そんなヒマある？」

「塾の帰りにでも、ちらつと寄ろうよ。それとも、わたしとじゃいやなん？」

「い、いいや、いいけど」

「じゃあ、決まりい！」

晴香は勝手に自分で納得し、自分で日にちを決め、そして満足したように芳人の腕に自分の腕を絡めた。

「良かった。わたし、待ち通し」

芳人からの電話を切ったあと、友里菜はどこかしょんぼりした。声楽の発表会があると言うのは確かに本当だが、そのあとデートしようと思えば幾らでも時間は作れるのだ。それなのに、妙な意地をまたぞろ張り出してしまって……。

あああ、わたしっていつまで経っても、素直になれへん……。

幾ら受験生とは言え、たった一人のクリスマスは淋しい。そう思っていたところだった、隼人から誘いがあったのは。

「あの……ルミナリエにでも、行かへんかな」と思つて、例によつて控えめな誘い方だが、逆にそつちの方がそられるのだ。

「クリスマスのあとはダメだけど、でもその前には発表会のことでもキリキリしているかも」

との友里菜の言葉には、

「だったら、尚更あの綺麗な光を見て、気を落ち着けたら？　心が洗われるよ」

と返す隼人。「それに神戸でやるんやったら、一度下見をしておかないと」

「ん？　まあ、そうだね。でも時間が」

「短い間でもいいよ。声楽の先生、神戸に近かつたやろ？」

「うん、夙川^{しゅくがわ}」

「だったら、直ぐだよ。レッスンの帰りに、一時間！」

「一時間かあ、それぐらいならいいかな」

「少しは息抜きしないと、柿沢さんは」

ケータイの向こうの隼人の笑い声がした。

「そうねえ、じゃあ」と友里菜も又囃らずも、ルミナリエに行く約束をしたのだった。そしてその日は、芳人と晴香も神戸へ行く日だった！

神戸へ来てみて正解だと友里菜は思った。三宮で友里菜を待つ隼人は、すっかり神戸の町に溶け込んでいる。その風情は洗練された、少しお洒落な若者像だ。

少年でもなく、まだ青年でもない、初々しく脆い、けれども若さの輝きが辺りを照らしているような感じがした。

芳人は大阪が良く似合う。けれども、隼人は神戸が似合っている。猥雑な大阪駅周辺の、人ごみがゴチャゴチャしている慌しい街は、

芳人。そして、六甲を後ろに控えた坂道の多い港町神戸は、隼人。なんだかそんな気がするのだ。

そしてルミネリエは、写真よりもテレビよりも、実物の方がもっと良かった。寒空に輝く鎮魂の光たち……。その一つ一つが、震災で亡くなった人々の魂のような気がする。

「綺麗……めっちゃステキ！ でも、どこか儚いな。なんか、神聖な……」

「さすが、柿沢さんだね」と隼人は友里菜と歩きながら、耳元で囁いた。誰かが振り向く。知らない人だが、友里菜と隼人のカップルをチラッと見つめた。ステキなカップルだと感じたのかも知れない。

「手を繋いでいい？」

「もちろん！」

「それじゃ」

思いのほかぐいつと隼人は友里菜の腕を取って、強引に引き寄せた。その時友里菜は、清純そうな隼人も、結局は“男”なのだと思いついた。

ルミネリエを見上げる通りで、隼人の手が友里菜の頬を撫でる。

雰囲気を押されたのだろうか、それとも本気で？ 隼人はあつという間に、電光石火のようなキスを友里菜の凍える唇にした。

「あつ」

「……ごめん。気を悪うした？」

「いや、いいの」と友里菜は微笑んだ。

その頃晴香は芳人の腕を力づくで引っ張りながら、ルミネリエの真下に居た。

「なあなあ、こんなところまで来たんやから、ちょっとはロマンチックになれへんのお？」

「む、無理やて、そんな」

「そうやね。こんなに人ごみが多いなんて！ 他の恋人らもうじや

うじゃ居るし、なんや気を削がれるなあ」

「何を期待しとるんや？」

「別にい」と晴香は涼しげに答えた。

二組のカップルは、通りの右端と左端に居たのだが、遂に遭遇することもなく、別々の方角に別れて行く……。その上には、神々しい天上の輝きの様なルミナリエがあった。

79 暮だ、暮だ――！

79 暮れだ、暮れだ ！

暮れも押し迫っているというのに、友里菜の両親はこれから買うという中古物件に友里菜を連れて行った。友里菜は渋々従ったが、その実大して嬉しくはなかった。けれども、友里菜もピアノ室は必要だったし（今までは、狭い居間で練習していたのだ）、両親の嬉しそうな顔を見ると、反抗は出来なかった。

何より気に食わなかったのは、その家は芳人の住む市よりも更に遠くの市であることで、次にはその家は、少し高台にありかなり急な階段があることだった。けれども両親は、かえって音が響かないというし、その眺めは「絶景だ」と言い張る。

結局友里菜の意向などあつて無い様なもので、養われている未成年の間は「イエス」と言うほかは無いのだ。

友里菜は仕方なく「いいんじゃない」とひとこと言った。たちまちの内に、連れて来ていた不動産仲介業の青年は、本部にケータイで電話を入れた。

「柿沢さんの件ね……OKなんですつてえ。ええ、今日はお嬢さんも一緒だったし、物凄く気に入ってくれましたわ」

その青年には笑いがあつた。パチンとケータイの蓋を閉じると、ニツコリと営業用の笑顔を向けた。

「それじゃいいですね。これから、契約に向かいましょう。いい中古が見つかったですよ」

良かったと思うのは、てめえだろ？

と友里菜は不貞腐れた顔付きで、その青年と両親を冷ややかに見つ

めているだけだった。

「本当に、この家でいいの、友里菜？」

どこか勘が鋭い母親が、友里菜に向かって尋ねる。

「ああ、いいよ。別に、不服言っても仕方ないし」

「一階の四畳半の部屋は、ペアガラスにしてピアノ室にしよう」

と、頭の薄くなった父親も嬉しそうに言う。結局本当に喜んでるのは、両親だけなのかも知れなかった。

夜、友里菜は芳人に電話を掛けた。

「あ、芳人？ 今日ね、新しいうちを見に行った」

「へえ、遂にあのマンションともオサラバか」

「2DKで狭かったからね。今度は、ちゃんとピアノ室もあるよ、中古だけど」

「それは、良かったやん」

「でも」と友里菜の声は沈みがちだ。「又芳人から遠くなっていくの」

「何だよお、同じ大阪だろ？」

「うん……だけど……」

「それよか、今度の新年は絶対に会おうぜい」

「うん、いいよ」

「でさ、大晦日から元旦にかけて、言うのはどうか？」

「えーっ！？ それって深夜じゃない」

「いや？」

「じゃなくて、親が許すかな」と思って」

「大晦日から元旦は、電車もずっと運転してるし、人も多いし」

「大丈夫かなあ？」

「ふふっ、友里菜は相変わらずお嬢さんやなっ」

「んまっ」

しばらく友里菜はケータイの向こうで、ふくれっ面をしていた。

「どうした、友里菜？ ごめんごめん。そのお嬢さんっポイのが、友里菜の良い所やったんやな」

「両親には何とか許してもらうけど……一体どこ行くの？」

「うーん、四天王寺は？」

「あー、行ったこと無いけど、でも芳人が良いと言っんなら」

「そっかー！ ああ、良かった！ 今度こそ、デートやあ！」

芳人はケータイを持ちながら、飛び上がった。どーんと言っ音がする。下に居る両親は、一体何事か、と訝しがっているかも知れない。

芳人が歓喜にむせている時、晴香からも電話が入った。

「ねえねえ大久保君。大晦日はどうするん？」

「もち、彼女と神社やで」

「そっか。いけず（＝意地悪）」

「だって、君とは塾でいつも一緒やないかあ」と芳人は呆れて見せた。

「なら、ええわ。ま、わたしは大晦日も勉強に励むさかい」

プツンとケータイが切れた。少し残念な気がするのは、なぜだろう？ けれども芳人は直ぐに、階下からの両親の声に呼ばれた。母が言う。

「ええか、芳人っ。明日は30日。大掃除するさかい、手伝ってや」

「なんや、つまらん」

「暮れやろ？ しゃあないやんか」

「そっか、暮れだな、もう暮れなんやあー！」

芳人は今更ながら、年月の立つのは早い、そう始めて感じたのだ。もう青春時代の若葉の頃も、後わずかなのだと思ひ知ったのは、自分が大人になりつつあるのかも知れない……。

80 大晦日

80 大晦日

1997年の最後の日、いわゆる大晦日。

芳人は電車の駅で、そわそわしながら友里菜を待っていた。改札口には、あと一時間で新たなる年が明けるというのに、引きも切らせず人々が押し寄せていた。皆、深夜運転の電車に乗り、京都や大阪、果ては遠く奈良や神戸まで、年越しの詣でに出かけているのだ。

こんなに深夜まで外に居るのは、芳人がグレていた中学生の時以来だった。昔はヤンキーで鳴らし、親に心配をかけていた“問題児”だったとは、今の芳人の様子には全く見られない。あえて言えば、どことなく不敵な面構えとがっちりとしたガタイが、微かに昔の面影を留めている。

けれども今の芳人は、既に自分に自信を持った、堂々とした若者だ。愛する人も居る。ちと早いが、結婚したいとまで想っている力ノジョが……。

感慨に耽っていた芳人は、向こうから来る楚々とした、どこか目立つ女の子を見かけた。

あ、あれ、友里菜や。なぐんや、着物は着てきていないんやな。ま、しゃーないわ。今時、着物着てくる女の子なんて、見たことないしな。

けれどもこちらにやって来る友里菜は、普通のジーンズにベージュのロングのブーツを履き、黒っぽいダウンにチェックのマフラーを巻いているものの、その何気ない格好は、けれども芳人の心に火

を付けた。

「ゆ・り・な〜！　ここ！」

友里菜はその声を聞いたのか、顔をこちらに向けて、口を開けずに微笑むと、ポケットに入れていた片手を少し挙げて合図した。

うつつ、色つぽ〜い！　た、たまらんな〜。

「さぶー。やっぱり、深夜は寒い〜」

挨拶代わりに友里菜が応えようと、すーっと芳人の懷に近寄った。

その姿は、もう誰が見ても“カノジョ”そのものだ。

「友里菜、元気やった？　風邪ひいてない？」

「もちろんやわ。それより、待った？」

「待つのも、結構楽しいもんやで」

「よう言っわ」

そう答えると、友里菜はすっぱり芳人の腕に収まる。

「はよ、行こ」

「うん、そやな」

二人は寒さも何のその、そして周囲の人ごみも一切気にせず……
と言っよりももう何も見えず、改札口へと入って行った。

四天王寺は、友里菜が言ったように、昔聖徳太子が建立したお寺だ。そして大阪人だったら、一度は行くような有名なお寺でもあるけれども、大晦日に行く人は少ない。何しろ、広すぎるし、お寺であって神社ではないのだから。

それでも、除夜の鐘を聞きに行く人は結構居るものだ。お寺の除夜の鐘を聞いて、そして神社に初詣……。よく考えると少し変だが、芳人にとってはそんなことはどうでもいいのだった。

ただっ広い境内だが、余り人が居ないと言うのも、どこか不気味

だが風流だ。特に恋人達にとっては、怖いものなど何も無い。

JRから歩く参道を歩くと、石作りの鳥居がある。お寺に鳥居があると言うのも、どこか妙なのだが、芳人と友里菜にとっては、そんなことはもうどうでもいいことだ。

「あ……除夜の鐘が」と友里菜は芳人にピッタリ寄り添うように囁いた。

「もうすぐ、1997年も終わりやなあ」

「やな年だった。早く終わんないかな、新しい年に期待してるのに」

「友里菜にとっては、嫌な年やったんか」

「そうよ。じゃ、芳人は？ 結構楽しんだ年だったの？」

意地悪く友里菜は言って、芳人の脇腹を突いた。

確かに芳人にとっては、この過ぎ去り行く1997年と言う年は、存外悪い年でもなかった。高校生活は楽しいし、勉強すればするほど成績は上がるし、女子にもなぜかモテモテで……。

ふと、晴香の顔が浮かぶ。その瞳が、キツと芳人を睨み付けている様な気さえするのだ。

いかんいかん。友里菜とデートしているし、こんな神聖な？時に、晴香の顔が浮かぶとは！

「ねえ、芳人はいよいよこの大学に行くのか、決めるんやね。わたしは、三学期終わったら引越しやし、なんやゴチャゴチャうるさいわ」

「今度こそ、友里菜と同じ大学に行きたいけど……無理やな、所詮」

「わたし……女子大に入りたいの」

とさり気なく友里菜は言ったつもりだったが、芳人は幾らかショックを受けていた。

「女子大か……。そこの音楽部、とか？」
「うん、多分」

友里菜は実は母の生まれ故郷である、横浜の女子大に受験しようと思っていたのだった。既に、その女子大の音楽部の助教授に声楽を習う為に、来年早々から一月に二回、新幹線に乗って、その助教授の家に通う手はずを整えているのだった。

その助教授を紹介したのは、母の友人だという。けれども友里菜は、今はその話はしなかった。

「友里菜っ。あと数秒で、新年やで」

「その時計、合ってるの？」

「うん。電子時計やから。ほらほら、あと11秒。カウントダウンや！」

「10秒、9秒、8秒、7、6、5、4、3、2、1つつつつつ！」

二人同時に数えていたが、遂に新たな年、1998年がやって来た！

どこかで、うおーという雄たけびが聞こえ、静かに詣でているまばらな人々はチラツとそちらを伺う。けれども人々の顔には、やはり喜びがある。けれども人生の先のことは、何も分からないというのに。

「うわー！ こんな場所で新年迎えるのって、始めて！」

「なあ、友里菜」

「なに？」

「外国では、この時には恋人達はキスするそうや」

「ふふん、そう言うと思った」

その瞬間、友里菜は芳人の首に腕を絡ませた。そして、二人は何も見えず何も聞こえない二人だけの世界で、熱きキスを交したのだ

った。この時ばかりは、聖徳太子も弘法太子（＝空海）も、もう何も関係ない。

8 1 暗い三学期

8 1 暗い三学期

四天王寺で、真剣に参っていなかったせいか、三学期はお互い散々な時期になってしまった。

一月末から、友里菜は遙々横浜まで、声楽の助教授にレッスンを受ける為に、隔週金曜日の夕方新幹線に乗り、母の姉である叔母の家に一泊してから、土曜日にレッスンを受け、そして又帰るという慌しい生活を始めた。それは新しい喜びでもあったが、結構しんどい体験でもあったのだ。

次の日曜日は、疲れてほとんど寝ているといった有様。当然、芳人とも又隼人とも、なかなか会えない日が続く。

ケータイは便利で、かなり頻繁にメールするのだが、なぜか電話は躊躇われた。

今年の二月のバレンタインデーこそは、チョコを自分で作ろうとしたが、直前に突然横浜の祖父が急死してしまい、泣き騒ぐ母と共に又新幹線で行き来し、それどころではなかった。葬儀の後も、初七日だ四十九日だ、と母はしょっちゅう横浜に出かけ、転居の準備もあいまって、てんやわんやだった。

芳人はそのような友里菜の事情を知ってはいたが、何もしてあげられないもどかしさを持ちながらも、晴香とは相変わらず奇妙な関係を保っていた。

クラスでも一緒、そして塾でも一緒なので、周囲は明らかに、芳人はカノジョを代えてしまった、と思い込んだ。

それをいいことに、晴香の攻勢は益々強くなって行く。

バレンタインデーの土曜日、塾で晴香が何かの包みを芳人に手渡した。綺麗な少し光沢のある紙に包まれた物。

「はいっ、これ。うふふふ」

「ひえっ!? 又、去年のみたいなでっかい奴?」

「違う、違う。今年、デパートまで行って買ってきたんやで。フランス製や」

「おフランスかいな。そこまでもいいのに」

「あら……わたしからじゃ嫌やったん?」と晴香は嫌味っぽく言う。

「ちゃうやん。あの……友里菜は、お爺さんが亡くなって、今年はそれどころやないんや」

「あ……そう。それはお気の毒様」

「でも、ありがと。おおきに、や」

「そうね。ま、気にせんと、食べてゝな」

それから晴香は、塾教師に義理チョコを差し出した。

「はいっ、先生も!」

何とそれは、芳人へのチョコの10分の1程の小ささで、さすがの芳人も晴香の現金さに呆れて、物も言えない。

何となく浮かない顔付きで塾から戻ってみると、居間にはめずらしく兄の雅人と母親が、妙な顔付きで座っていた。こういう風景は、滅多にないはずなのだが……。

「何か、あつたん?」

「あ、芳人かあ」と母親が、幾分気弱に言いかける。

「芳人っ! こっちに座れ!」

強圧的な雅人の声に、けれども芳人はもう余り反撃せず、おとなしく座り込んだ。

「何や? どうしたん?」

「あのな、実はな」と母親はなかなか言い出せないでいるのを、見かねた雅人が口を差し挟む。

「つまりな……お袋の病気が、再発してん」

「え!？」

芳人は絶句した。

「ってことは、つまり……」

「そう。ガンが転移してもうたわ。父さんはもう知ってるけど、相変わらず、あっけらかんと、当事者の母親は言い継ぐ。」

「済まんねえ、芳人。またまた、入院や」

「済まんことないやんか!」と雅人は怒り出す。「そんなん当然や! 僕らのことより、自分の身体のことを考えるんやで、な、芳人もそうやる?」

けれども芳人は、何もいう事が出来ないでいた。余りにもショックだったのだ。口には出さないが、心配の余り胸が塞がって、声が出ない。

それは雅人もそうらしかった。始めて、兄弟は同じ目線でお互いを見つめていた。二人の目は、こう告げていた。

兄貴い、何とかなるやろか?

大丈夫やて、芳人。何とかなる。何とかなる……はずや?

「それって、いつ……?」

「昨日、定期検査に行って……分かってん」

芳人は自分の甘さに、自分をぶん殴りそうに感じた。チョコをもらったり、そんなことなどもうどうでもいい。芳人はもらったチョコを、そつとカバンの上から押し付けた。何かが、ボキッと折れる感触がする。多分、フランス製のチョコが割れた音だろう。

暗い日々……。

けれども母親は、余程気丈なのか、それともわざと樂觀的な振りをしているのか、泣きも喚きもせず、少し待たされた三月初め、淡々と再入院して行った。それには、運転のできる雅人が付き添った。自分はお呼びじゃない……そんな気がする。けれども、芳人にはそれが母心だとは気付きもしない。

こうして、三学期は何が何だか分からない内に、過ぎ去った。

友里菜も芳人も、精神的にはクタクタだったのだ……。人生の先の見えなさ、儚さ、脆さ……そういうことを、始めて感じた早春だった。

82 桜の頃（中編最終話）

82 桜の頃

芳人にとって、今まで桜の季節と言うのは、単なる“季節”に過ぎなかった。

けれども今年（1998年）は違う。満開の桜の花びらが散る頃、芳人は母親の下着を持って、入院先の病院に向かっていた。

少し前までは、母の下着を持って行く、なんてことは気色が悪くて、きもくて嫌だと言っただろう。けれども今は違う。

母親の居ない家庭は、男ばかりだ。そしていつもはタイガースと仕事のことしか興味の無いように見えた父親が、せつせと自分達兄弟や妻の下着を洗い、そして皿洗いまでする。

そして芳人は、「ほら、お前は春休みやろ？　これ、母さんに持って行けや」と父親から言われても、それを拒めない自分が居た。

「うん、今度の水曜日に塾の前に持って行く」と素直に答える自分が、何だか自分ではないみたいなのだ。

「へえ、芳人も大人になったんかいな」と父親はニタリと笑いながら言うと、その包みを紙袋に入れて差し出した。

「こんなん、なんでもない」と芳人は、この間は兄の雅人が紙袋を持って行ったのを知って、半ば競争心で言った。けれども、あと半分は本当の自分の心だった。

そうして芳人は今回は友里菜にも、母親のことをちゃんと告げていた。友里菜はケータイの向こうで絶句し、それからやっとこう言っただのだ。

「わたし……お見舞いできるかな？」

「それは嬉しいけど、でもお袋は嫌がると思うな」

「そうやね。良く知らない若い女が来るのは、やっぱり女として嫌かも知れへん」

「年取つても、やっぱり女は女、か。て言うより、友里菜のことよく知らへんからや。一度も家には呼んでないし」

「そう、よく知らへんけど、自分の母親だったら、と思うとやっぱり気が重いな。でも、宜しくと伝えておいて」

「うん」

そう言うのと、芳人はケータイを切った。

三学期はあつという間に過ぎた。今度の三学年は、どういうようになるんだろう？ 赤井晴香とは、同じクラスなのだろうか？ 理系のAだったら、一緒かも知れないが、芳人は少し成績を下げてしまっていたのだ。

そして……芳人は、晴香との交際を止めようと思っていた。

晴香は確かに悪い女ではない。けれども、人を思いやる心境に少し欠ける気がしたのだ。

晴香は芳人の母親が病気になったと聞いても、いつもと同じようにしか振舞わなかった。多分、ピンとは来ないのだろう。晴香の一家は皆健康そうだからだ。

けれども、少なくとも、顔を少し曇らせるぐらいはして欲しかった。晴香はただ、

「大丈夫やて。最近の医療は進んでいるから」とだけ言ったのだ。

「そんなことより、成績落ちたんは、やっぱりお母さんのことと関係あるん？」

「さあな」と芳人は答えたものの、内心は晴香の機械の様な心には、正直がっかりしていたのは確かだ。

桜並木の坂を上がると、病院だった。芳人は少し立ち止まって、

振り返る。

あつという間に、自分の少年時代は終わった気がする。そう言えば、塾でも晴香とは別のクラスになった。

芳人の今の願望は、母親が存在しているだけで良かった。いつまでも居るとは限らないながら、けれども母親は母親だ。それはカノジヨとは又違う存在だが、かけがえのないものだと言うことだけは当たっている。

友里菜は桜の木の下を駅に向かって歩きながら、中田喜直の『さくら横丁』を口ずさんでいた。その歌詞の中の、深い意味はまだ分からないが、時が無情に過ぎ去って行くことは実感していた。

桜が散り終わって五月が来ると、今度はもう18歳だ。18歳と言つと、どこへ行つても、子供では居られなくなる。

春の宵 さくらが咲くと はなばかり さくら横丁
思い出す 恋のきのう 君はもう ここに居ないと

ああ

いつも はなの女王 微笑んだ夢の ふるさと

春の宵 さくらが咲くと はなばかり さくら横丁
会い見るの時は なかろう

「その後 どう」「しばらくね」と言つたつて 始まらないと
こころえて はなでも 見よう……

（歌詞 加藤周一）

時はどんどん過ぎ去って行く。人生は無常だ。どんどん変わって行く自分達と、そして家族も。

芳人の母親が良くなればいいなと友里菜は思った。又、そう信

じたいと。そうでなければ、芳人が可哀そう過ぎる。

又自分自身の三学年の進路も、気になる。これから新幹線に乗って、横浜までレッスンに行くが、それが本当に実を結ぶのか、それすらも分からない。

ふと同じ位の女子高生達とすれ違った。彼女達はどこかの私立女子高の生徒らしく、短くしたチェックのスカートに、白いソックス、派手な紺色の上着を着て、笑いさざめきながら歩いていった。

今の自分には、ちゃんとした同性の友達が居ないのだ。話せる友達と言えば、芳人や隼人と言った異性ばかり。それにも飽き飽きだ。

あー、女の子の親友が欲しい！ いいなあ、私立の子達は。女子ばかりやけど、なんか楽しそうやし。わたしも、共学より私立女子高の方が良かったんかも知れない。

そやから、どうしても、どうしても大学は女子大に行くんや！
どうしても！

気を取り直した友里菜は、楽譜で重いカバンを抱いて、さつさと道を急ぎ始めた。その肩に、桜の花びらが散って行く。

来る三学年は、どうなるのだろう、と思い悩みながら。

過ぎ去りし日々「中篇」終わり

82 桜の頃（中編最終話）（後書き）

これで、「過ぎ去りし日々」の中編は終了します。
後編まで、しばらくお時間を下さいます。ありがとうございます。

【後編】 83 新しいクラス（前書き）

長い間お待たせいたしましたで、どうも済みません（V―V；
今日から後編、再開します。

後編は二人が段々大人になって行く過程と、大学受験に追われる日々になると思います。

少しずつ子供っぽさが失せて行く……。そんな三学年の日々です。

【後編】 83 新しいクラス

83 新しいクラス

芳人は思っていた通り、理系Bクラスになった。水泳部などの部活もあるし、兄の雅人よりも勉強していなかったから当然と言えば当然なのだが、やはり結果を知ると愕然とする。

雅人からは、「そろそろ部活やめたらどうや」と嫌味を言われたし、父親は慥然としていた。ただ、やっと退院した母親だけは、「芳人は雅人とは違うんやから……」。わたしはどの大学へ行こうとどうでもいいよ。あんたの納得の行くようにすれば？」と言っただけだった。

母親は退院したものの、傷口が痛そうだったし、髪の毛の抜けたのを隠す為にいつも帽子を被っており、やはり息子の進路どころではないようだ。芳人は、自分の道は自分で決めよう、と決心した。

それよりも、早く母親が元気になって欲しい……。今はそれだけだ。

医学部に行こうかな……。

急にそう思ったのは、やはり母親の病気のせいだった。けれども理系Bでは、国立大学の医学部では心もとないし、私立は行けそうだが、芳人の家にはそんなお金があるようには思えなかった。例えば、土建会社の重役と言う立場の父親を持っていたとしても……。

ただ一つだけホッとしたのは、赤井晴香とは別のクラスになったことだ。

やはり、晴香は理系Aクラスだったのだ！ 晴香は女子とは言え、

ホンモノの秀才だったのだろう。

けれどもこれで晴香と別れられる、と思ったのは大きな大間違いでもあった事に、芳人はまだ気づいていない。

一方友里菜のほうも、そんなに嬉しいクラス替えではなかった。

悪夢の2学年のクラスからは逃れられたものの、今度は芸術専攻コースなどというややこしいクラスに編入されたのだ。

このK高は、有名な声楽家やポップ歌手、漫画家なども時折輩出しているような、芸術に理解のある高校でもあったから、本来ならそのクラスで喜んで良いようなのだが、友里菜の気は晴れなかった。

最初の日から、クラスに入って行くと、自分がどこか浮いた存在であることにすぐに気付いた。

まず嫌でも目に付いたのは、『学年の女王様』伴坂沙莉菜だった。彼女は友里菜を認めると、微かに笑って見せた。その笑いは、チャームリングだどこか不気味で、何を考えているか皆自分からない“謎の笑み”だ。

そしてその横には、例のカレシと言われていると噂木がピタリと張り付いていた。二人とも、どうやら音大に行くらしい。

この二人は完全に“絵”になっていた。まるでマンガのお姫様と王子様だ。友里菜が最も嫌うタイプである。

と言うのも、友里菜は今でも、自分の教科書を盗んだのは沙莉奈ではないか、と疑っていたのだ。

「推理小説の、法則！ その一つ！ それは、全く犯人ではないと思われる人物が、真犯人だということだ」と、推理小説好きの父が、自信たっぷりに言っていたからかもしれない。

「アガサ・クリステイなんかは、まずそれだな。哀れでひ弱で、あ

りそうもない人物が、必ず犯人なんだよ」

そうか〜と友里菜も妙に相槌を打った。

少なくとも、沙莉奈の取り巻きが居ないだけでした。彼女らは、音大に行く度胸も才覚も無かったらしい。

いい気味〜。あいつらが居ないだけ、まだましかなく？

けれども麤木というテナーとデレデレしている様を見せ付けられるのは、もううんざりだ。友里菜はさり気なく、目で挨拶しただけだった。

「あつ、柿沢さ〜ん」と呼びかける黄色い声は、コーラス部で一緒だった吉沢穂乃香だ。彼女こそ、沙莉菜が居ぬ間に、無理やり友里菜の手をあげてしまったあつかましい女子なのだ。（＊54話三章）
穂乃香は、かねてから沙莉奈を憎んでいる、という噂が絶えない生徒で、性格も悪いらしい。それなのに、穂乃香はさも親しげに近寄ってくる。どうやら、穂乃香もまた音大にでも行くのだろうか？

「あんたも音大に行くの？」と穂乃香が聞く。

「うん、まあどこかに。吉沢さんも？」

「あたしは、短大止まりよ」と穂乃香は、いじけたように答えた。

「それよか、見て〜。あの伴坂さんと麤木のいちゃいちゃぶり。けっ、うざいったらないわよ。ねえ」

「あ、あの人、誰？」と友里菜は穂乃香の言質に引きずられないようにと、窓際に佇む一人の女子を指し示した。儚げな横顔。奇妙なほど大人っぽい色香が漂っているのだ。肌は抜けるように白い。

「見たこと無いけど」

「そりゃそうよ。あの人、二年留年しててんから」

「へえっ？　なぜ？」

興味をそそられながら、友里菜は聞いた。

「あの人ねえ、心臓病で二年留年してたんだって。確か……平瀬翔子。だから、うちらよりも、二歳年上よね」

余りにも当たり前なので、友里菜は穂乃香のアタマを疑った。

「それじゃ、芸術系じゃないのね」

「そ。このクラス、数学とか余りやらへんやない？　多分、学校の配慮ってわけ」

「なんか……やっぱり違うね。大人っぽい」

「そりゃそうやわ。もう直ぐ二十歳なんだから」

「二十歳かあ」

友里菜は妙な気持ちになった。二年経つと、自分もあんなに大人になっているのだろうか？　それほど、彼女の存在は大きく感じた。

84 儂い美女と、守護騎士

84 儂い美女と、守護騎士

友里菜の芸術系クラスは、確かに勉強はワンランク下だった。それが芸術やアーティスト、そしてアスリートなどを目指している生徒達には、心地良いのだ。教師も、少々ことは目を瞑っていた。例えば、髪を紫と黄色に染め上げている男子が居たが、教師達は黙認していたし、

「今日はレッスンですからあゝ！」と騒ぐ、ピアノ科を受験する女子には、早退をしても、知らん顔だった。逆に言えば、自分と言うものをちゃんと確立していないと、怠け癖が付きそうな気もする……。

そんな中において、平瀬翔子は独特の雰囲気とオーラを放っていた。

翔子は二歳年上だ。そのせいか、どこから見ても大人っぽい。けれども、その儂い姿とは裏腹に、どこか底知れない何かを有している。

それが、男子達にはぐぐぐと来たとしても、不思議は無い。同世代には無い“大人”のオナナの匂いを、男子達はいち早く感じ取っていた。

特に、声楽科を希望している、コーラス部のテノール、大垣悠（おぎ）というほっそりした男子は、ずっと翔子の側に居ずっぱりなのだ。

朝は駅で待っていて翔子と共に登校。帰りも、翔子のナイトのように、ぴったり張り付いて、翔子の守護神？のように、家まで送っているという。おかげで、コーラス部の部活はさっぱり。恐らく部活は辞めるのでは、という噂だった。

休み時間ともなれば、これまた翔子の側に張り付いて離れない。何もそこまで、というほど、翔子に明け、翔子に暮れていたから、誰も近寄れなくなってしまった。

「大垣ったら、きつと平瀬さんのおトイレまで、付いていつていつてよお」

と、女子達のもっぱらの噂の種にもなっていた。沙莉奈は、今度はかりは自分が“クラスの女王様”になれないのが、悔しいのだろうが、それは何とか顔には出さないでいた。けれども腹の中は、煮えくり返っていたに違いない。

友里菜は、沙莉奈も翔子もどうでも良かった。けれども、いつも二人がペアでいるのには、どうしてもそこに目がいつてしまう。

友里菜はカレシが二人も居るものの、どちらもこのK高校ではない。それが時折虚しくなることがあるのだ。まして、仲のいい女子の友達もいない。ペタペタとプリクラを張って、お揃いの財布やハンカチを持っているような女子達を、本当は羨ましく思っていたのだった。

「それにしても、儂い女子って、オトコにもてるんやろか？」と、ある日穂乃香が友里菜に囁いた。

「本当に、心臓病やつたん？」と友里菜。

「だって、体育とか休んでるやんか」

「じゃあ、あの大垣、彼女の守護騎士のつもりなんかな？」

友里菜がそう言うと、穂乃香はプツと噴出した。

「守護騎士！？ ええこというやんか」。つまりは、お姫様を護る、ナイトってわけやな」

「いいなあ、わたしもあんな騎士が欲しい」

思わず友里菜は本音を喋ってしまった。

「へえ？ 友里菜のような人が、守護する騎士が欲しいなんて！」
と穂乃香は意外そうだ。

「なんで？」

「だって、友里菜って、何でも一人で出来そうな感じやんか。男の子なんて要らないっていう風に見られてるんよ」

「わたしって、そんな強くない。だって……他校にはカレシっぽいのが居るけれど、それだって、本当の騎士じゃないし」

「いつまで経っても、女子は騎士っぽい人に憧れるんやろかな？」

そう喋りつつ、いつものように翔子を護るように一歩あとに付いて行き、その上翔子のカバンまで持っている悠の姿を、友里菜と穂乃香はチラッと見つめていた。

「ナイトというよりも、従者って感じ」とポツリと言う穂乃香。

「あれじゃあ、部活は無理だわ。受験だってあやしいよ」

「それでもいいんだよ、きっと」と穂乃香は言う。「あの女子の為なら、あいつ、なんだってやるつもりなんやわ」

その声音には、怨念とは別のものが含まれているのに、友里菜はやつと気が付いた。

「穂乃香……？」

「なに？」

「もしかして、大垣君のこと……好きなん？」

「なんでよ」。友里菜ったら、すぐに勘ぐるんだからあ」

そのとって付けた笑いが、どこか淋しげだ。

「わたしみたいなブスで、出来の悪い、色気の無い女なんて……」
それから穂乃香は、自分のカバンを持って「じゃね」と言っ

慌てて去って行った。

友里菜は唯一人、新幹線に乗るために重い楽譜入れと、僅かばかりの荷物のカートを引張りながら、京都駅のホームへと急ぐ。

たった一人……か。受験のためとは言え、つまらない毎日さっ。
でも仕方ないやん、自分で決めたんだもの。

大阪から来た「のぞみ」が滑り込んで来た。

85 ストーカー女子!?

85 ストーカー女子!?

芳人は理系Bクラスになったものの、晴香とはすぐ隣のクラスなので、毎日嫌でも会っていた。おまけに晴香も又ケータイを買ってもらい、しげしげとメールが来るのだ。

さすがこの辺りの秀才高と名高い高校だったので、授業中はメールはしないものの、そうでない時には、ひっきりなしにメールが来る。

「今なにしてる？」

「勉強中？」

「わたしは、今ヒマだけど」(ハートマーク)

「たまには、レスちょうだいよ」(怒りマーク)
レス、しばらく無し。

「そんなにわたしが嫌い？」(激怒マーク)

遂に芳人は根負けして、レスを入れる。

「あ、ちよつと今はごめん」

「なんで？」

「もうすぐ、晩飯」

「なんで、塾来ないの？」

「塾変えたよ」

「何だよ」(激怒マーク)

「だって、成績良くないし」(泣き顔マーク)

「そんなことあらへん」

「ほな、今日はさいなら」

「なんで、なんで、なんで~~~~~!!!!!!」

あゝあ、これやったらほんま身がもたんわな。

芳人は段々メールを見るのが怖くなった。もしかして、友里菜からかも、と思つて開けて見るものの、友里菜は余りメールが好きでは無いらしい。というより、今の友里菜は物凄く忙しいのだ。

五月の連休には、是非とも友里菜に会いたいのだが、それとてもかなり怪しい。

一つだけ嬉しい事があつた。二回目の手術をした母親の具合が、かなりいいのだ。

少なくとも、家族の前では母親は涙一つ見せた事が無い。父親も、少し落ち着いてきている。言うなら、今だ！

「なあ、お袋お」と芳人は、塾前の晩ご飯のときに口を切つた。

「なんや？　なんか、あやしい口振りやな？　芳人がそんな甘え声出したら、ろくなことないさかいな」と母親は、とっくにお見通しと言つて感じたが、それほど嫌そうでも無い。

「僕な、僕は、僕はな」

「何やねん？　はよ、言いな」

「実は、進路変えようかな、と思つて」

「へ！？」

さすがに母親はびっくりしたようだ。

「兄貴と同じ理系はいやや」

「ほんなら、何になりたいの？」

「い、医者」

「医者？！？　ってことは医学部やな」と当たり前のことを聞く。

「つまりは、金があるってことやな」

「うん。私立やったらな……。でも僕頑張るから。二浪してでも、

公立の医学部に入るから」

「今から、二浪するなんてえ。アホちゃうか、お前は。現役合格目指すのが、当たり前やろ？」

母親はすっかり呆れている。

「何で、医学部に？」

「それは、つまりい……」

「わたしのこととかで？」と母親は始めて真顔になった。

「う、うん。いや、別にそうでもないけど……でも、そうかな」

「はつきりしいや、芳人は」

そう茶化してみたものの、母親の瞳に少し涙が浮かんでいるのを、芳人はしかと見た。

「オヤジのような、不動産でもいいかな、と思っただけど、病院で先生達を見ているとな、なんか心が動いたんかも知れへんな」

「芳人」

「ん？」

「あんたも、大人になったなあ」と母親は感慨深そうに言った。そのような言葉は、芳人が生まれて始めて聞く言葉だった。照れくさいが、ジーンとする。

「金が儲かる、とかそんな卑しい志やったら、わたしも嫌やけどな」
「まっさか」

「そやったら、お父さんに言ってみるわ」

「僕は、単純に病気が憎いねん。ただそれだけやで、お袋」

「うん、分かった分かった」

母親は頷いていた。

食後、母親に告白して少し気持ちが晴れていた頃、またまたメールがあった。

「こんどコンサートにいこ。チケット買ったから、連休に」

ええ〜っ、またあ!?

芳人は晴香の攻撃に、すっかり参ってしまった。

これって、まるでストーカーやな。

芳人は昔自分が友里菜をストーカーしていたことを、すっかり忘れていたのだ。

86 一生の親友

86 一生の親友

隔週に一度の新幹線でのレッスンは、友里菜にはかなりきつかった。実は友里菜は、音楽部に進学したいと言い出したことを、半ば後悔していたのだ。

けれども友里菜の意に反して、声楽の先生である山際冴子は、友里菜の中にひそむ原石をかなり磨き上げていた。そして今では、「この調子なら大丈夫」という確信すら持っていたのだ。

「連休の後直ぐ課題曲が分かるけれど、わたしの行っている女子大でいいのね」

と山際先生は念を押した。

「ええ」と友里菜はニツコリと作り笑いをしながらうなずいた。

「それじゃ、又再来週にね。それまで滑り止めも考えておかなければ」

「はい、分かりました」

そう友里菜は言つて、先生の家から慌てて出て行き、大阪行きの新幹線に乗る為に、新横浜に向った。

電車の中では、如何にも私立女子高と思われる制服の生徒達が、2〜3人固まっては、べちゃべちゃとお喋りしている。好きなタレントの話から、テレビドラマ、お洒落、友人の噂、等々お喋りは留まる所を知らないようだ。

友里菜は彼女達の話に耳を傾けすぎて、危うく新横浜で降りるのを忘れる所だった。

暮れなずむホームで佇みながら、友里菜はフーツと溜息をついて

しまう。

いいなあ、ああいう雰囲気……。わたしには、今まで縁がなかった。姉妹も居ないし、女の子同士何の忌憚も無く喋れるなんてなんか、憧れちゃう。

さっきの子達、一生の友達になるんやろうか。それとも、今の間だけなのかな？

友里菜の友達と言えば、居ない事はないが、けれども学校やクラスが変わると、なぜか自然消滅してしまうのだった。最初は自分の性格のせいだとは思ったが、けれども男の子の友達が居る事実は、本当なら女子の友達が居てもおかしくないはずなのだと感じ始めてもいる。

いずれにせよ、友里菜は自分の孤独を感じていた。どうしても馴染めないものを、今の高校に感じてしまう。それは教科書を盗まれたとか、そのせいもあるがそれだけが理由ではない。

けれどもそれが本当はなぜなのか、友里菜には分からなかった。

来週はやつと連休だ。少しは身体と心を休めないと、もうもたないような気さえする。幸い芳人から、「絶対に会いたい」というメールをもらったばかりだ。友里菜は快くOKした。

「カレシは居るのに……なぜ居ないの？ 同性の親友が」

一人淋しく大阪を降り、とぼとぼと帰途に付いたのは、もうとっぷり日が暮れていた。大阪と横浜では時差があるが、新幹線はまるで夕日を追いかけているかのように西に向って走っていたのだ。

西と東。男と女。善と悪。天使と悪魔。何にでも両端はあるものだ……。

友里菜は新しい町で住み始めてまだ数ヶ月。商店街を抜けて行く道筋は、いつも賑やかだが猥雑で、まだ場慣れていなかった。

その町の目の前を、若い妊婦がしんどそうに歩いている。もう臨月間近なのだろうか。足取りは重い。

友里菜はその妊婦を追いつ越そうとして、ふと見つめた。

「あれ？」

妊婦もうざそうに見つめ返す。

「えっ！？ 友里菜あー！？」

二人は道端で立ち止まった。真後ろの自転車が、びっくりしたように、キキィーッと悲鳴をあげて避けて行くのも気付かず。

「え？ 沙夜？ 沙夜でしょ？」

「あー、友里菜かあ」と沙夜は、首を振りながら答えた。

「えー？ なんで？ 沙夜……もしかして、結婚でもしたの？」

「うん、したよ。してどこが悪いの？」と沙夜はぶーたれている。

「高校は？」

「自主退学、ってか、辞めてもうた」

「ほんと！？」

「何も驚くこと無いやんか。うちの高校は、全員卒業するような友里菜んとはちゃうんやから。大体、何割かは卒業前に退学する高校や。知つとるやろ？」

「はー、でも……なんか信じられへん。あの沙夜が、子供産むなんて」

「わたしだつて、もうすぐ18歳や。どこがおかしいん？」

沙夜は不貞腐れながら言ったが、その明らかに目に見える疲れが、沙夜を益々老けさせていた。18どころか、20歳を遥かに超えている感じすらする。

「沙夜、この辺に住んでるの？」

「うん。まだまだ先のアパートやけど。友里菜こそ、こんなところに！」

「又引つ越した。で、相手は誰？」

「しつこいな、友里菜は。相変わらずやわ。カレシは高校の先輩。今はトラック運転手。それでいい？」

友里菜は黙り込んだ。既に沙夜は、自分とは違う世界の人のように感じたのだ。

「あ、ごめんね。それじゃ」

「うん、それじゃ。あ、友里菜。まだ芳人とは続いてんのぉ？」

「続いてるって……まあ、メル友ぐらいかな」

「な、んだ」

「ね、沙夜」

「なに？」

「一生の親友って……やっぱり同性なんかな？　つまり、男の子とは、一生の親友にはなれへんってことなんかな？」

沙夜はにんまりと嗤った。

「ふん、あいかわらずや。なあ、友里菜、あんたまだ男を知らへんねんな」

「……」

「ま、別にどーでもいいけどお。せやな、一生の親友には……やっぱ、女の子の方がいいんとちゃう？　芳人とは、好きやったら早くゲットしちゃえばいいのに。あー、分かった。無理やな、友里菜には。そいじゃね」

「それじゃ……氣いつけてね、沙夜」

沙夜は何も答えず、人ごみの中に去って行つた。

男の子の親友って、やっぱり無理なんかなあ。

五月直前の風が、遠ざかる二人の間に吹き抜けていく。

87 雨の日

87 雨の日

連休にどこかに行こうと約束していた友里菜と芳人だったが、遂に友里菜がダウンしてしまい、最後の日だけが空いているだけになった。

友里菜を気遣った芳人は、見舞いに行こうと思って電話をした。

もうかなり良くなっていた友里菜は、少し躊躇した後、

「ほなら、少しだけ」と答えたのだった。

「何か食べたいもんでもない？」

「いや、別にい。手ぶらでいいよ。ただし、その日誰も居ないから、何も出ないけど」

「誰も居ない!？」

なぜか芳人の心は逸^{はや}った。

「誰も？」

「うん。わたしがマシになったから、両親は温泉に行った」

「一人娘を置いて？ そんなことあるんかな」

「今じゃ、普通じゃん」と思わずハマツコ言葉が出てくる。「だって、連休も残り少ないし」

「それじゃあ、明日行くよ。ええんかなあ？」

「なによ、芳人。なんか、及び腰。ならいいんだよ」

「行く！ 行く行くっ！ 行くって」

そう勇んで言って切ったものの、今晚晴香と行くコンサートがあることに気が付いた。

「いけねえっ。ちっ、忘れてた」

芳人は慌てて、それらしき服を着て出て行く。

「どこ？」と玄関口で母親が聞く。

「あつ、クラスの奴とコンサート」

「コンサート！？」と母親は、怪訝な顔をしたが、最近では芳人を余り子ども扱いしていないようで、何も言わなかった。

大阪で催されたコンサートはクラシックのピアノ・リサイタルで、芳人は危うく眠ってしまうところだった。けれども隣には晴香がピツタリと寄り添い、その腕をつねる。

「いたっ！」

「シート。ねえ、寝んどきよし（＝寝ないでね）。あんたにとっては退屈なのは知ってるけど、でもシヨパンだよ、これ。次はシューマン」

芳人にとって、シヨパンでも食パンでも、シューマンでもシューマイでも何でも良かった。心は明日友里菜に会う妄想に逸り、心ここに在らずだったのだ。

「ねえ、これが最後の曲や。終わったら、何か食べようよ」

とガラにも無く甘える晴香に、次の日忙しいからと芳人は嘘を付き、慌てて帰った。

「ふん。最近、大久保君って冷たいんやからああ」

背後で晴香の泣き節が聞こえるが、芳人にはもうどうでもいいことだ。

けれども次の日は、五月には珍しく大雨。暗い空がどこかおどろおどろしい中を、芳人はコンビニで買った二個のプリンを手土産に、友里菜の新しい家の門に立っていた。傘を差してもびしょ濡れだが、水泳部の芳人は頓着しない。

けれども玄関口では、キョロキョロ落ち着きが無かった。

ベルを鳴らすと、玄関の戸が開き、少し青白く見える友里菜が表

れた。

「はよ、入り。すごい雨やね」

友里菜は抜け目無く周囲を見回すと、急いで芳人を手招きする。

「びしょ濡れやね」と友里菜は言う、少しだけ微笑んだ。

「あ、これ、プリン」

「ひゃあ！ 気が効くん、芳人ってそんな人だったのかな？」

そう言う、友里菜はプリンを受け取り、冷蔵庫に入れた。

新しい家は、確かにマンションよりも広かったが、階段が多く陰気臭い気がした。それは中古だからでもあっただろう。いや、雨のせいかも知れないが。

芳人は不自然にキョロキョロする。

「本当に誰も居ないの？」

「うん。両親、時々わたしを置いて旅行するん」

今のソファに坐りながら、友里菜はボソボソと呟いた。やっぱり疲れているようだ。

「友里菜……もういいんか？ 熱、無い？」

「ああ、大した風邪じゃなかったから。疲れたんかな、昔はこんな事なかったけど」

友里菜は溜息を付きながら、木偶の棒のように突っ立つ芳人を見上げた。

「なにしてるん？ ここに坐りよし」

「あ？ いいのかなあ」

「弱虫」と友里菜はイラついた言葉を投げた。

「何か、今日の友里菜、別人みたいやな」

「そんな事無いわよ。ただ」

「ただ？」

「もう直ぐ18やもん、わたしだって」

「そか。そやな。じゃあ」

せつかく来たくせに、芳人はからきし意気地が無くなっていた。二人は暫く色々話していたが、突如ピカツと稲妻が光り、直ぐにドツカーンという落雷が近くに落ちた。

思わず友里菜は身を縮めて、芳人に擦り寄る。芳人はサツと友里菜の肩を抱いた。急に押さえ切れない欲望が、芳人を占領して行った。

「友里菜……」

芳人は有無を言わず、友里菜の口元を奪う。柔らかい友里菜の身体が少しなり、その口付けの間じつとしていた。けれども、二人は反動でソファの上に倒れた。

「お、重いよ……芳人お」

「あ、ごめん」

そう詫びつつも、芳人の欲望はもうはち切れそうだ。硬く友里菜を抱きつつ、その肉体を味わうかもしれない喜びに身が震えた。

友里菜のＴシャツの下から、芳人は手を差し入れた。もう一方は、ジーンズのウエストから手を伸ばそうとして、硬いボタンが邪魔になりまごまごしてしまう。

「友里菜……僕も……待てない……」

「電気、消して」と友里菜が言う。芳人は半端な状態で立ち上がり、パチンと電気を消した。大雨のせいで、室内は薄暗い。

芳人は貪るように、友里菜の口を奪い、ディープ・キスをする。

友里菜は芳人の身体に手を廻し、少しずつジーンズが下がるのを感じていた。白いレース付きのショーツがチラツと見えただけで、芳人は鼻血を出しそうになった。

芳人の手がなおも下半身に行くと、友里菜が身をよじった。

「今は……だめだよお」

「え？ 何で？」

「今日は、まだ疲れてんの。わたしが病後だつて、知ってるでしょ？」

「あ、ああ、そうか。そうだね、見舞いに来たんだつた」

美味しい“ご馳走”を目の前に、けれども芳人は欲望を何とかして消し去ろうとした。それは友里菜を愛しているからに他ならない。病後で弱っている友里菜を、これ以上攻め立てたくないと言う思い……それが欲望に勝つたのだった。

外は未だに雨が降っていた……。

88 もつと遙かに

88 もつと遙かに

友里菜と芳人は、乱れた衣服を直し、ソファに並んで座っていた。居心地が悪い。

「あ、プリン食べようか」と言いながら、友里菜は台所の方に離れて行く。その後姿を見つめながら、芳人は罪悪感に浸っていた。

思わず情欲のおもむくままに、友里菜に攻め寄ったとは言え、体よく払い腰になったが、けれどもそれは当然の事だ。友里菜はまだ体調が悪そうだし、その見舞いの為に自分は来たのではないか！

アホヤな、俺。落ち着かなければ、落ち着くんだ、芳人！

「はい、プリン！」

そうはつきりと言いながら、友里菜がガラスの皿に盛ったプリンと生クリームの横には、可愛いピーターラビットのスプーンが。

「へえ、友里菜のシュミかあ。可愛いスプーンやなあ」

と芳人は、自分のうちでは絶対に出て来ない、その小さいスプーンを手を取った。

「うっん、違う。これって、母のシュミなの」

「あ……あつ、そう」

「母って、ああ見えてまだまだ乙女気分が抜けてないんだよ。気持ち悪いぐらい少女シュミで」

「それに、この綺麗なガラス器！」

「なによお、そんなに珍しい？」と友里菜は半ば呆れ顔だ。

「だって、うちには女の子居ないし」

「やっぱり違う？」

「そりゃそうさ」と芳人は憮然として答えた。

目の前には、含み笑いをしている友里菜の顔がある。さつきまで自分の下に居て、半ば目を閉じていた艶かしい友里菜の肢体が……。

ああ、あかんあかん。もうここでは、何も考えてはいかんのや。

「あははは。今日の芳人、妙に縮こまっているんやね」

「だ、だつてえ」

「あのさ」と友里菜は急に真面目になって言い始めた。

「さつきはごめん。その気にさせといて、断つてしまつて」

「いや、いいんだ。こつちこそ、まるで野獣のようになつちまつた」
「実はねえ、芳人には言つてなかったけど、この間沙夜に会つたの」

「え！？」

「沙夜、妊娠してた……」

芳人のプリンを食べる手が止つた。

「沙夜、退学して結婚してたみたい」

「そ、そりや、まあ、良かったやんか。誰の子か分からへん子やつたら、困るけどな」

「でも、あんまし幸せな感じはしいへんかったな」

「出来ちゃった婚、なんか？」

「多分ね」と友里菜は素っ気無く言う。言外に芳人を責めている様な素振りだ。

「確かに、僕は、準備何もしてなかった……コンドームさんも持つて来なかったし。気の向くままで。避妊のこと、考えてなかった。友里菜が拒否するのは当然やな」。僕はやつぱりアホや」

「ま、それはもういいわよ。わたしもなんか妙な気持ちになつてたし。でも、沙夜ったら、ヤンママになるんかなあ」。わたしは、沙

夜には樋口君がいいと思ってたんやけど」

「あ！」と今度は芳人が絶句した。

「なに？」

「それは無理やったわ、所詮」

「なんで？」と友里菜は身を乗り出してくる。

「だって、樋口の奴、今は族やで」

「暴走族！？」

芳人は黙ったまま頷く。友里菜はふーっと吐息をついた。

「うまくいかへんなあ、男と女って」

大人びた友里菜の言葉が、薄暗い部屋に響く。

「そやな」と芳人も相槌を打った。

「わたしな」と友里菜は下を向いたまま、続けた。「やっぱり、横浜の女子大に行くつもり」

「そうか」と芳人。「僕はどうしても、医学部に行きたいんや」

「二人の道はどんどん違って行くね。なんか、淋しい」

「どんなに距離が離れても……僕には友里菜しか居ない」

友里菜はその言葉を聞いて、パツと顔を上げた。

「でも、わたし達……このまま続けるんやろうか？」

「友里菜……」

「わたし、芳人からもっと遠くに行ってしまうのって、何だか自信ない」

「だって、メールとか電話とかあるやん」

「わたしな……今度、父からパソコンもらうの。それで、勉強してみる。パソコンのメールの方が使いよいみたいやし、長く書けるし」

「離れているのは、どうしても大変や」

二人は暫く黙っていた。

「離れていても愛があれば、って、よく曲の歌詞とかにあるけれど、実際はどうやるな、友里菜？」

「現実はずいのかもね」

友里菜の進路を自分が縛る事はできないのだ、と芳人は痛烈に感じた。そして友里菜もまた、芳人の将来を左右する事などできるはずがない。二人の未来は未定なのだから。

89 カノジヨは一人だけや！

89 カノジヨは一人だけや！

芳人は決心した。

淫らな気持ちを思わず友里菜に抱いてしまったが、後悔はしていない。なぜなら、それは純粹な気持ちから出たものだったから。

芳人は、友里菜が「いや」と言った時に、ハッと我に返れた。愛しているからこそ、友里菜を氣遣っているからこそ、それが出来たのだ。行け行けドンドンばかりでは、決して友里菜は手に入らない。

けれども友里菜は、“女は妊娠する”と言う恐怖を抱いていたに違いない。男と違って、女はどうしてもソレの危険が待ち受けている。それに気付かないアホではないのだ、友里菜という女子は……。

やっぱり、ホンモノのカノジヨにするってことは、自分自身が汚らわしい気持ちで居たら、アカンのやゝ。まして、他の女子なんかとデートなんかできへんやん……。

そうや、やっぱり、晴香とは別れよう。キツパリ言おう！ 言うなら今が一番いい時期や。皆、それぞれ進路が違うって。そして、やっぱり、カノジヨは一人だけや、って……。

気持ちをはつきりすると、芳人の憂いは忽ち飛んでいった。ある意味、芳人は能天気、言い換えれば樂觀論者、もっと悪く言えば、気が付かない“ドン臭い”男子なのだった。

そう決心して間もなく、芳人は昼休みに理系Aクラスの前で、偶然晴香にバツタリと正面から出会った。晴香は友達と居たのだが、「ちよっと」と言う芳人の声で、その友達はふふんと言いながら去

って行つた。

「な〜に？」

「ちよつと、廊下の隅に來いへん？」と芳人は廊下の一番端に在るガラス窓を顎で差す。

「何よお、学校内ではあんまり変なことしないで」

「ケータイでもよかつたんやけど。でも早い方がお互いいいから」

「早い方がいいって？」

「僕にとつて……」

そこまで言つと、芳人はぐつと息が詰つた。けれども尚も続けた、目を晴香から逸らしながら。

「僕にとつては、カノジヨは一人やから」

「それは知つてゐるわよ」

「だから……もう、やめよう？」

「……………」

頭のいい晴香は、瞬時に察したようだ。

「付き合つのを……でしょ？」

「そ、そうや。そうやな。赤井さんはやっぱり僕より頭いいわ。秀才やから」

「何かあつたんやね、そのK高の子と」

「いや……あの……う」

芳人はしどろもどろだ。

「やらしー！」

と晴香は小さく叫ぶと、思いつきり芳人をぶつた。芳人は一瞬避けたのでそれは空を切り、辛うじて芳人の分厚い胸をかすただけだったが。けれどもその目には、怒りと言うよりも悔しさのようなものが見て取れる。

「はー、やっぱりそうかあ。あの子とやっちまったか〜」

「ち、違うよ」

「じゃ、何だよ」

「お互い行く道が違うからかな。それとも、もうこれからは、頑張らなくちゃって感じかな、勉強に受験に。そやる？」

「女は必要ないのね。朴念仁っ！」

「い、いや……」

「大久保君、医学部に行くってね」

「う、うん」

「多分、無理やわ」

晴香はズバリとそう言った。そしてどこか遠い所をキッと見上げると、後ろに手を組んだ。

「分かった。よお、分かりました。あたしが邪魔だつて事」

「そういう意味では……」

「そういう意味なんよ！ 嘘つき！ ……でも、もういいわ。離れよう、そして頑張ろうか、お互いに」

それから晴香はニツと嗤った。

「だけど、その成績じゃあ、国立大学の医学部は無理やわ。じゃ〜ね、これっきり」

晴香はクルリと背を向けた。その瞳が少し潤んでいるのを、芳人は知らなかった。

芳人は晴香がAクラスに入っていくのを、ぼーっとして見つめていた。

終わったんやな〜、これで。すっきりしたような……ちよつと残念なような、複雑な気分や。けども、友里菜を失いたくないのなら、友里菜を得たいのなら、こうするほかないんや。僕にとって、

カノジョは一人だけなんやから……。

午後の授業の鐘が鳴る……。

90 梅雨の晴れ間

90 梅雨の晴れ間

友里菜は、芳人が晴香ときっぱり手を切った事を知らなかった。芳人は芳人で、その事を友里菜には伝えていない。伝えたくないと言いつ持ち半分、そのような時間が無くなったということ半分だったからだ。

何しろ医者になりたければ、やはり猛烈に勉強するしかない。今の芳人には、夢をかなえるにはそれしかなかった。

一方、友里菜は未だに隼人と別れることは出来なかった。

この間、芳人から危うくバージンを奪われそうになったけれども、それは後悔半分、ほっとした気分半分だったのだ。まだまだ誰にも自分を奪わせたくない！ それは友里菜の性格だったし、今はやはりそのような気分ではなかったのだった。

その点、隼人は気楽だ。

友里菜は声楽の教師山際先生から、入学試験の曲の相談をしていた。友里菜にはその課題曲は極めて簡単そうに感じたが、けれども自由曲が決まらなかったのだ。その為に、山際先生からは、

「この夏が勝負よ、勝負！」ときつく言われていたのだ。

自由曲は、声楽にしるピアノなどの他楽器にしる、課題曲より難しいのを選ぶのが通常だ。それで生徒達はろくに歌えもしない難曲を選び、結果失敗して行くという事がまま在る。

帰りの新幹線で、友里菜は色々考えていた。どれに決めるか悩みは尽きない。難曲は結局駄目になるかも知れず、かといって優しい曲では聞き劣りがする。まだ先のことだが、音大を受験する生徒達

には、死活問題なのだ。

蒸し蒸しする京都で降りた頃、メールが入った。隼人からだ。

「映研の柿沢さんだから、いい映画知っているかな？」

「うん、まあね」と友里菜は直ぐにレスを入れる。隼人の遠まわしな言い方には、もう慣れたが、なぜ率直に「映画に行かない？」と言えないのだろう。友里菜は少し苛々する。

「いつか、空いてる日がある？」

「どうかな？」

「最近、会っていないから、淋しい」

友里菜はケータイを持ったまま、階段を降りながら思案していた。直ぐに断ればいいものを、どうしても友里菜は断りきれない……。

それに、隼人から「淋しい」とグサツと言われたのも初めてだった。「ごめん、忙しいなら無理しないで」と又メールが来た。

「忙しいけど、でも気晴らししたいから」

「なら、いい？」（喜びの絵文字）

「分かった。考えとく」（バイバイの絵文字）

友里菜はケータイをポケットに入れた。（*この頃のケータイは、二つ折りが出来無い）

どうしよう？ また約束しちゃった……。それに、何の映画見ようかな？

以前、先輩の龍也に映画館で絡まれたのを思い出し、友里菜は顔をしかめた。もう大分前なのに、今でもその時の嫌な気分を鮮明に覚えているのだ。

けれども、隼人ならば、そんな恥知らずな事をするはずが無い、と

言う思い込みがあった。

ま、いいか。中間テストの後にでも、少し時間が空くかもしれないし。

見上げると、夕日が赤い。茜色の雲間から、六月の光が差し込んでいる。先ほどのシトシト雨も上がったようだ。

9 1 偽りのくちづけ

9 1 偽りのくちづけ

友里菜は、隼人との映画鑑賞デートには、可もなく不可もない動物映画を選んだ。おかげでロマンスチックな部分はどこにも無く、ひたすら動物達の可愛い、そして獰猛な仕草ばかりで、隼人はただポップコーンを食べながら、案の定何もなかった。

友里菜の計画はある面では成功したのだ。けれどもその後がいかなかった……。

隼人はいつの間にか大人になっていたのだ。友里菜よりもずっとそれは肉体的な意味ではなく、精神的な部分なのだ。隼人は友里菜を誘って、大阪のミナミに行き、二人であちこちをブラブラした。それは当て所ない旅路のようで居て、実は隼人には目算が在ったのだ、と友里菜は後で知ることになる。

「ねえ、僕いいところ知っているんだけど」

「へえ、どこ？」と友里菜は安心しきって、隼人の顔を見上げた。

隼人は最近、急に背が伸びて、そして少し男らしくなった。これから、益々イケメンになって行くような気がする。

「新しく建ったビルがあるんだけど」

「ああ……何とかっていうショッピングモールやない？」

「多分そうかも」と隼人は友里菜を見下ろしながら、静かに言った。「最上階に、綺麗なサテンがあるし」

「そう言えば、なんかお腹すいたな」

と友里菜は、夕暮れの空を見上げながらつぶやいた。梅雨時だが、なぜか隼人と出かけると少しひんやりした空気が流れて来る。それ

はなぜだろう？　いつもはムシムシした関西だというのに……。

「じゃ、そこ行こうよ」

「うん、行く！」と友里菜は何も考えずに頷く。隼人はやや強引に友里菜の手を握ると、ぐいぐいとそのビルに引つ張って行った。

隼人の選ぶ店は、いつも洗練されて綺麗な店ばかりだ。そしてそこはやはり、そういう小奇麗な、そして額も余り高くない店だった。ただ、バルコニー席は、衝立^{ついたて}があった。

多分隼人は、「るるる」とかその類の雑誌を見ているのだろう。芳人とはそこが全く違う。だからこそ、友里菜の女心をくすぐり続けてしまうのだ。

隼人は、何事にも論理的で用意周到だ。計画している所がありありだと、常に友里菜は感じていた。衝動的に何事も決めてしまう芳人とは違う。

隼人は店に入るや否や、若い男性店員になにかごそそと耳打ちした。

「あ、柿沢さん。バルコニー席が空いてるんやて。いいよね。大阪の夜景が綺麗だし」

「うん、いいよ」

その時、隼人は含み笑いをしたように見えたが、友里菜には分かっていなかった。

全面ガラスのバルコニー席。背後は衝立。窓際にテーブルがあり、カップルはラブチェアに坐るような形に並んでいる。

けれども友里菜は、この日はアホになっていた。どこからか、ロマンチックな調べが流れて来る。

「あ、これサティだわ」

「さすが、柿沢さんだね」

隼人はそう言いながらも、やってきた店員に再び耳打ちした。

「今日は、カクテルのおまけがあるって」

「カクテル？ あ……でもわたし達って、まだ……」

「僕達、どう見ても成人にしか見えないよ。それにそんなこと、いちいち聞かなへんって」

友里菜はなぜか冒険したくなった。と言うより、友里菜は酒飲みの父に勧められて、子供の頃からビールぐらいは平気で飲んでいたので。もちろん家の中でだけだが……。

「ま、いいか。ただでしょ？」

「うん、ただ」

ただというのには誰でも弱い。けれどもそこには落とし穴が待ち受けているのだ。

隼人は注文した。

「ねえねえ、今日の映画見て、わたし犬が欲しくなった」

と友里菜は無邪気に言った。隼人は直ぐ横に坐る友里菜の黒髪にチラッと一瞥を与える。

「そうだね、僕も犬は好きだよ。つか、もう既に飼っているけど」

「え？ どんな犬？ 可愛い？」

「妹みたいなカンジかな」

「妹か。でも肝付君、お姉さんが居るんでしょ？」

「うん、だから女に囲まれてるっていう暮らしやからね」

「兄弟とか姉妹とか……いいなあ、憧れるう」

「柿沢さん、一人っ子だからな」

二人は運ばれて来たカクテルを飲んだ。それは友里菜の初めての体験だった。自分が少し大人になったような気がする。そして禁断

の臭いも。

「美味しいっ！ これ、なんて言うの？」

「ブラッディ・メアリ。血のメアリ」

「ああ、歴史でちらつと聞いた事ある」

「ほら、あそこ！ 通天閣が少し見えてる！」

突然隼人が指差したので、友里菜は身をガラスに寄せる。隼人は素早くその肩を抱いた。少し驚いた友里菜が、隼人の横顔を見た。けれども、「何すんのよ」とは言えないムードなのだ、このステキで摩訶不思議な場所では。

「ねえ、もう、友里菜って呼んでいい？」

「は！？」と友里菜。「あ、あ、まあ、いいかな……」

「僕のこと、隼人って呼んでよ。いつまでも肝付君って……何だか嫌だな。この6月で、僕ももう18だよ」

甘えたような隼人の横顔は、うつとりするほど綺麗に見える。それはアルコール・マジックだったかも知れないが。

「うん。は、隼人……」

友里菜が言うが早いか、隼人は友里菜にキスをしたのだ。それはどこか舐めるようなキス。芳人とは明らかに違う。けれども友里菜はぼんやりしたまま、身を任せていた。

後ろでは、例の店員がニタリとしながら、二人の背中を見つめている。

二人が食べ終わった後、隼人は勘定しながら、その店員に囁いた。
「うまくいったぜ。おおきに、だね」

「ったく、隼人は……。けど、可愛い子やんか」

「お前がここのバイトしてくれて、良かったよ」

もちろん友里菜は何も知らない。何も知らず、どこかフワフワし

た気分で隼人に寄りかかった。

「な、帰ろ」

「うん、友里菜」

もちろん、隼人が横を向いてペロリと舌を出したのも、友里菜は気付くはずがなかった！

92 パソコン入門

92 パソコン入門

友里菜は、どこか夢路を彷徨っていたのではないか、と後になつて思った。

あのあと、隼人は友里菜の手をしっかりと握って離さないばかりか肩を抱き、直ぐ耳元で何かを溜息のように囁くのだ。

「友里菜……友里菜……」と呼ぶ声だけが木霊していた。

結局、自分は案外アルコールに弱いのだと、やっと気付いたのだ。つたがもう遅い。隼人とキスをしてしまった自分だが、それは偽りのキス。少しだけ芳人には悪いと思ったが、友里菜はまだ、芳人が晴香と別れたのを知らなかったのだ。もしも知っていたら……？

夏が近付くにつれて、高三の受験生達は目の色を変え始める。夏休みが勝負！ 誰もがそう信じていたのだ。

だから、旅行だの遊びに行くだのは問題外だ。一部の不貞腐れた成績の低位の者達だけは、あちこちに出かけていたが。

芳人は塾の夏期講習、「医学部を目指せ！」のクラスに入った。晴香との別れは、実はちょっぴり残念に感じていたのだが、妙に潔癖な所がある芳人は、雑念を払って勉強に邁進することにしたのだ。

あと少しの辛抱やな。合格したら、車の免許とって、友里菜と好きな所に出かけられる！……つつとつつ、合格したら、やないかあ。そや、合格出来るかどうか、分からへんやんか……。ちつ。それに合格したとして、友里菜の第一志望の大学、関東やったな。あゝあ、そうなったら、遠距離恋愛やんか。。

いや、恋愛ってほどには行つてへんしな。ま、キスまでは行つたけど、友里菜つてガード堅いし。

あゝあ、俺、何を考えてんのやろ？ 煩惱の塊やがな。

「あ、お袋？ どないしたん？」

取りとめの無い妄想に耽つていた芳人は、ドアを開けてリビングダイニングに入つて来た母親の姿を認めて、素つ頓狂な声をあげた。いつの間に帰つて来たのだろう？ 今日には病院に行つて、定期検査をしてくる日だったと気付いた。

けれども、戻つて来た母親の顔は冴えない。疲れたようにどつとソファに腰をおろし、息子である芳人を見向きもしない。そう言えば白髪が少し増えたなと芳人は思った。まだ40代なのだが……。

「今日の結果は？」

「ああ、芳人か。結果は一週間先や。けど、患者仲間を見舞いに行つたんで遅くなつたわ。なんか、今日は何も作りたく無いなあ。あんたの塾やけど、済まんな」

「いいやんか、何も作らんでも。お寿司かピザでも取ればいいやん」
「ま、そうやな」

母親は少しだけ笑つて、立ち上がった。

「それより、なんか……？」

「うん。まあな、患者友達が次々と悪うなつてな。ま、しゃあないけど」

母親はテーブルに肘を突いた。

「でも、悲しくつてな」

「そりゃそうやわ。けど、お袋は運がいいさかい」

「そうやるか？」

「そう思うで」

「な、芳人」と母親は妙にキツパリとした声で、芳人に向った。
「なに？」

「わたしな……パソコンでも始めてみようかな、と思うてね」

「は？」と芳人は少し面食らいながら顔を上げた。「お袋が？」

「変か？」

「そんなことないんやないかな。もともと、お袋頭良いし。つーか、オヤジよりいいかもって気がするしな。良い大学出てるんやし。兄貴の頭いいのんも、きつとお袋の頭とったんやと思うし」

「お世辞ばかり」と母親はやつと笑った。「パソコン事始め、って感じかな？」

芳人は少し母親が誇らしいのだ。この頃は特に。

母親はただの女だと思っていた。そしてただの母だと。けれども、ちゃんとした人格と知性、そして勇気がある存在だと、今頃気付いたのだ。

芳人が医学部に進路変更しても、どーんとしているし、患者友達を見舞っても、愚痴や弱みを息子達には決して見せない。

いや、きつと夫である父親にも見せていないに違いない。何か大変な事があつた時、それでも前進しようとするのが、他ならぬ母親だ。そしてその性格は、芳人にも受け継がれているような気がする。

親を大切にせなあかん……。そう思い始めたのは、芳人も大人に成長したからだろうか。

その日の夜遅く、友里菜の父親が何やら重たい物を持って帰ってきた。

「何ですか、それ！？」と友里菜の母親が聞くと、「これは、捨てられてたパソコンや」と父親が返事した。

「捨てられてた！？」

「そうや。研究所も、金が余ってるんかな？ 古いタイプだから捨

てた、と言つてたけど、それならもらいますと言つてもらつてきた。値段、本来やつたら20数万はするかな？」

「そんなん、どうするんです？ わたしはしませんよ。そんな難しそうなのは」

「友里菜にあげるんや」

「なんやて！ わたしにい！？」

とパジャマでテレビを見ていた友里菜はギクツとして振り返った。

「なんでよ」

「友里菜、もう直ぐ関東に行くんやろ？ そうなったら、電話ばかりでは高いし、これからはパソコンの時代やで。ほら、あの宇宙飛行士の夫婦、アメリカと日本と別居してはったけど、毎日メールしてたそうや」

「けどさ、あたし忙しいよ」

「大学に入つても、結局は必要になる。絶対にやな」

父親は有無を言わせず、その重い物体をドカツと置いた。

「友里菜……。お父さんはね、友里菜と別れるのが辛いんだわ。きつとそうなのよ」

寝る直前、友里菜が歯磨きしていると母親が寄つて来て、そつと耳打ちした。

「え？ 今から？」

「そんなもののなのよ、親つて。だからありがたく受け取りなさい。ま、置く所探さなくちゃ駄目だけど」

友里菜は少しだけ目を見張った。父親が淋しくなるだろうなどと今の今まで考えた事すらなかったが、確かに横浜の女子大に受かったら、友里菜はこの家を離れなくてはならないのだ。

その事実を痛烈に感じた日。それはパソコンが来た日でもあった……。

9 3 姫が倒れ、守護騎士は慌てる

9 3 姫が倒れ、守護騎士は慌てる

梅雨もあけた7月。あと数日で、今学期も終わり、いよいよ夏休み突入と言うある日。

その日はまるで真夏のようにギラギラと太陽が照りつけ、体育館の中は気が狂うほど暑かった。

友里菜のクラスは、どうにも冴えないダンスをしていた。体育の教師も投げやりで、どうでもいい振り付けをし、首に巻いたタオルで汗を拭き拭きだった。

「はー、もう嫌や。こんな、花の精になって、なんて無理やわ。頭、こんがらがってしもうて。早く水飲みたいー！ な、友里菜っ」と、ステップをいい加減に踏みながら、吉沢穂乃香が友里菜に近寄って耳打ちした。

「まあね」

「いいよね、平瀬さんは。ああやって、何もしないで立っているだけなんやから」

と穂乃香はチラッと、隅に立つ、生気の無いがその儚い所が妙に気になる翔子に一瞥してから、憎らしげに言う。

この少し前から、やはり穂乃香が翔子の“守護騎士”である、大垣悠を好きらしいのを、友里菜は見抜いていた。悠はイケメンではないが、どこことなく品があり、女心をそそらされる男子なのだ。もとより、友里菜は悠などは眼中には無かったが。

だからと言って、隼人とのキスは、今でもあまり良い気持ちはしていないのだ。

「いいやんか。平瀬さん、病気なんやしい。あれ？」

と友里菜は、途中で言葉を切った。

「ねえねえ、妙やない？」

「な〜に？」

「平瀬さん、しんどそう」

「そう？　いつもの通りやんか」

「いや、でも……」

友里菜の勘は当たっていた。二人が見ている前で、翔子は横向きにバタンと倒れてしまったのだ。

「あつ！」とさすがの穂乃香も口元に手をやる。

「おらおらおら〜、何してんのや〜。サボったらあかんがな」

と体育の女性教師の富田先生が、二人に注意した。富田先生には、背後で倒れた翔子が見えないのだ。

「先生〜！！　平瀬さんが〜〜！」

と誰かが叫び、富田先生はやっと後ろを振り返り、翔子が倒れているのに気付いた。

「あやややや〜！　これはあかんわ〜！」

富田先生は、体育教師とはとても思えぬどっしりした中年の身体を揺らしながら、翔子に駆け寄った。

「平瀬さん！　平瀬さ〜ん！　大丈夫なのお？」

こんなに暑いと言うのに、翔子の顔は真っ青だ。

「あわわ。どうしよう。これは、熱射病とは違うな〜」

「とにかく、先生。早く医務室に運びましょ」

と、このクラスでは一番優等生的な眼鏡の女子、岡沢マリエがテキパキと言ったので、富田先生も何とか気を落ち着けた。

「でも、運んでもいいんですかあ」と誰かが言ったので、集まって

きた女子達はどうしていいか分からず、ガヤガヤと言うばかりだ。けれども、誰かが呼びに言ったのか、外でランニングしていた男子達と男子の体育教師が慌ててやって来た。

「ああっ！」

悲痛な声で叫んだのは、やはり悠だった。誰もが認めている、翔子のカレシである悠を、皆は遠巻きにして見つめている。悠は明らかに気が動転し、ガタガタ震えていた。

「もしかして……心臓？」

と背後で女子達がヒソヒソ言い合っている。その中を、一對の冷たい瞳が翔子と悠を見つめているのに、敏感な友里菜は気付いた。

沙莉奈の視線は、こんなに暑い関西の夏をも凍らせてしまうような、凍えるような光を放っており、思わず友里菜はさぶいぼ（鳥肌）がたつてしまったほどだ。その整った綺麗な顔が夜叉のように見え、そのカールした茶髪がメデューサの蛇の髪のようにも見えるのだ！

あいつう、やっぱり本性は！……だったら、わたしの教科書盗んだのも、やっぱりあいつやったんかー！？

友里菜はほぼ半分確信した。けれども何の証拠も無いのだ。

「平瀬さん！」と叫ぶ悠の声が、奇妙に甲高く響く中、翔子は男子の体育教師に抱かかえられて外に出された。ぶらぶら揺れる両手足が、まるで人形のようなだ。

「平瀬さん、やっぱり……余りよくなかったんやねー」

ぼそぼそ呟く穂乃香の視線は、じいっと悠の方に注がれていた。諦めきれない目つき。けれども、悠の蒼白な顔、ひたと翔子を見つめる瞳が余りにも切ないので、穂乃香は振り向いて、

「ま、いいや。とにかく大事無ければいいけど」と自らを慰めるように言った。そして直ぐ側の友里菜にチラッと目配せした。

「よね、友里菜」

その時、穂乃香も大人になったんだ……と友里菜は痛烈に感じた。

けれども友里菜は、体育館を出ようとしている轟木の声に、思わず振り返った。ちょうど轟木は隣の男子と何か囁いている所だったのだ。耳のいい友里菜には、その声がよく聞こえた。

「大垣のあの顔見るよお。オタオタしてるで〜。年上カノジョがひっくり返ったんで、どうしていいか分からんらしい。ま、あの調子なら、コーラス部は退部するやるな」

そうか！ 沙莉奈は、こんなフザケたオトコをカレシに持っていたのか……。軽蔑、というフレーズが浮かび、友里菜は沙莉奈の冷た過ぎる横顔を盗み見た。

そして、友里菜は益々沙莉奈を疑うようになっていった。

以来翔子は緊急入院し、いつもその側には悠が付き添っていると言う噂を聞いた。悠はその日以来、出てこなかった。もっとも、直ぐに夏休みが来たのだが……。

なぜか友里菜は、翔子と悠が羨ましいとすら思っていく自分に気付いた。

あたしの守護騎士は、あんなときどうするんやろうか？ てか、守護騎士って一体どっち？

9 4 犯人探しは、もうやめた……

9 4 犯人探しは、もうやめた……

疑いは疑いを呼び、自分自身を縛り付ける。

友里菜は、二年の時にほとんどの教科書を盗まれたトラウマに、未だに縛られていた。それは“呪縛”と言ってもいい。

あの時の悔しさは晴れない。それに犯人が分からなかった事や、担任教師がちつとも気に掛けてくれなかったことなどが、下手すると“恨み”になっていた。だからと言って、友里菜の性格では、あからさまにそれをぶちまける事はできず、いつの間にか心の底に澱の様に溜まっていたのだ……。

燃える炎の中……あれは誰？ 何を投じているの？

あつ、あれはわたしの教科書やないの！？ 一冊一冊、焼け付く炎に投じている人影が、こちらも見えた。

沙莉奈！！ やっぱり……。

沙莉奈は、不気味に笑うと、その整った顔を醜く変貌して行つた。

「きゃあああああああ~~~~~!!!!!!」

と叫んで、友里菜はガバつと起き上がった。汗びっしょりだ。

「なんだ……夢か。つーか、暑っ、暑っ、暑いよぉ、もおお」

友里菜は自室のクーラーのスイッチをONにした。

「ふうーふうー」と溜息を付くと、再び寝に入る。けれども、疑いが今の友里菜をがんじがらめにしてしまう。

あの時、枕を涙で濡らしたものだ。なのに、両親にも友人にも芳人にも、まして隼人の前でも、泣く事はしなかった。意地っ張りな

のではなく、そういう性格なのだ。
つまり、遺伝子なのだ。

今までだって、様々なイジメは自分にもあった。苛める方ではなく、いつも苛められる方だった。

最初の小学校の時には、なぜかシカトされた。次の小学校では、男子が自分の足を面白がって蹴った。そして、三番目のここでの小学校で、やっと自分の居場所を見つけたのだ。
けれどもそこでも、優等生として振る舞い、いや、振舞った振りをしてきただけかもしれないと言うのに。

そんな自分がもう嫌だ。だからといって、そんな自分を変える事など出来ないという事は、もう18歳になって、充分分かっていてもりだった。

少しだけずるくなっていったのは、そういう過去の自分が居るか
らだ。

二股愛がいいとは思わないが、純粋な愛を信じているわけでもない。それは単に本の中だけののような気がする。現実には、友里菜に
ってそんなに甘くなかった。

特に、父親の転勤や転居であちこち移り住んだ自分には……。

同性の親友を求めるのは、自分には姉妹が居ないから、兄弟が居ないからかも知れない。友里菜は子供の頃から、大勢の兄弟姉妹の居るお話や映画が好きだった。その理由が今分かった。

一人っ子なんて、全然面白くもなんともないのだ。

そして、そんな友里菜を唯一人守ってくれたのは、両親を除いて
芳人の存在だったように思う。隼人ではなく……。

「芳人、わたし、淋しいよ。わたしを守ってよ。騎士でなくてもいいから。ん？ まあ、騎士と言うガラでも無いけど、でもわたしの側に居て。いつまでも」

再び涙が枕を濡らす。

そして悪夢が鎌首をもたげる。

今度は自分の教科書や楽譜が、ヒラヒラと濁流の中に落ちて行くのだ……。それを拾おうとする自分に、背後から哄笑が。

それは、亜紀だった。

『ノートなら、わたしが貸すから……』

突如、あの時の亜紀の言葉が鮮明に甦った。

あ！ わたし、何の学科のノートが盗まれたなんて、なんにも言ってなかった……。のに！？ ひょっとして、亜紀……！ うっそー！

もういい、と友里菜は淋しく思う。もう済んだ事だ。

亜紀が犯人かどうか、そして真犯人が反省しているかそれとも未だにほくそ笑んでいるか、それはもうどうでもいい。ただ友里菜は、人間の複雑な心のひだを、そして魂の深遠を始めてのぞいた気がした。

犯人探しは、もうやめた……。虚しいだけやんか。

そうして友里菜は、蒸し暑い明け方、やっと眠りに付いた。

95 背後から抱きつくのは誰！？

95 背後から抱きつくのは誰！？

隼人は、最近しつこいよ、と友里菜は段々隼人がうざくなってきた。

友里菜のスケジュールを無視しては、ケータイに電話する、メールするといった有様だ。友里菜はこの夏休みが勝負だというのに。そして、芳人とも会わずに我慢しているというのに、隼人は一向に気にしていない。

と言うより、例のキス以来、友里菜は自分の者だと思い込んでしまったようだ。それが友里菜には面白くなかった。

いいよね、どーせあんたは、入試が無いんだから。ほぼエスカレーターで大学まで行けるんだから……。

でもわたしは忙しいんだ。物凄く！ もう必死なんだよ。

そう隼人に思い切り言ってみたいが、結局またまた隼人に丸め込まれてしまうのがオチだと思う。芳人にはバンバン言いたい事が言えるくせに、なぜ隼人には言えないのか……？ それが自分でも分からないから、友里菜は次第に苛々して来た。

かつこつけてんのとちゃうやろか？ なぜもつと素直にならないんやろ？ 今度、パーンと言ってやる！ 言ってやるから……。

あー、無理だあー！

そんな頃、またもや隼人から電話があったのだ。ちょうど、祖父の初盆で横浜に行き、ついでにそこにしばらく居て、声楽の山際冨

子にレッスンしてもらうつもりで、準備している最中だった。

「あー、もしもし」

「あつ、友里菜」と隼人は妙に馴れ馴れしい。そうさせてしまったのは、実は自分だということに、友里菜は気付かなかったが。

「あ、隼人か」と友里菜もぞんざいな言い振りになっていた。「なんか用？」

「なんや、冷たいね」

「だって、忙しいんだもん」

「ね、会えない？」

「この夏は、無理やって言ったでしょう。このお盆は特に駄目だよ」
「そうか……」

ケータイの向こうのしょんぼりした声を聞くと、なぜか友里菜の心が痛む。又そう思わせるものを、隼人は持っていた。

「なら、戻って来てから」

「僕、最近車の免許取ったんだ。どこかへ連れて行くよ、君を。どこがいい？」

「車の免許！？ は、早い！」

「えへへ、一発で取れたんだよ。凄いだろ」
と隼人は得意そうだ。

「で、でも、高校生で？」

友里菜は哑然とした。けれども、隼人が良家の“お坊ちゃん”であるのを忘れていたのだ。

「そうだよ。悪い？」

「別に、悪くないけど……でも、わたしは電車がいい」

「……そう？ じゃ、電車でどこか行こか」

少しガツカリした感じの隼人の声したが、これ以上押すと断られると察したのか、隼人は折れて出た。

それでついその気になった友里菜は、うつかり賛成してしまった。

友里菜はケータイを切って、しまったと思ったが、今度は昼間だし屋外だ。それも、平凡な遊園地だという。

祖父の初盆も終わって、ようやく友里菜が大阪に戻って来てすぐ、友里菜は隼人とデートに出かけた。

暫く振りに会う隼人は、ビジュアル的にはもっとステキになったようだ。隼人自身も、少し自惚れて来たように見える。会うなり、隼人はサツと友里菜の手を握って微笑んだ。歯並びのいい白い歯が、夏の光に輝く。

「友里菜、綺麗だね」と隼人は耳元で囁いた。「真夏の陽光の下の友里菜も、またいいな」

「口が巧いのね」

「じゃないよ。本当のことだもん」

そんな拗ねたような口ぶりの隼人と友里菜のカップルを、チラチラと見つめながら通り過ぎる人々が時折居る。まるで“理想のカップル”……。

本来なら嬉しいはずなのに、けれども友里菜はどことなく浮かない。

箕面の高台の遊園地で、友里菜は下界を見下ろした。

「どうしたの？ 横顔が寂しそう」

「そう？ うん、やっぱり、お祖父ちゃんを思い出したのかな？」

「悲しかっただろうね」

「うん」

友里菜は油断していた。隼人の優しい言葉に……。

突如、背後から隼人が抱きついたのだ。友里菜は仰天して、身を

振りほどこうとした。柵がグラリと揺れたような気がする。

「何すんの！？ あぶないやん！」

「何で？ いいじゃない」

「やめてよ！ 皆、見てる」

「見て無いよ。でも、見ててもいいやん。僕達は……」

「何なの！？ わたし達って、なに？ なにが言いたいのに！」

やっと身を振りほどくと、友里菜は隼人に向かい合った。

「わたし、帰る！」

「え……」

目をパチクリする、隼人。

「なんで？ なにかした？ これが、嫌やったん？」

友里菜は答えられなかった。けれども、今こそ感じたのだ。もう別れなくては、これ以上進む前に、隼人とはもう縁を切るのだ、と……。

友里菜はクルリと背を向けると、後も振り返らずさっさと階段を駆け下りた。

隼人は追って来ない。何だか悪い気がした。その気にさせたのは、自分にも非があるというのに、友里菜は自分の心に正直過ぎたのだ。

いや、違う。

悟るのが遅かったのかもしれない。そして、隼人を傷つけたのかも知れない……。けれども、友里菜はわが道を行くしかなかった。我がままだと言われても、自分勝手だと言われても、やっぱりカレシは芳人しか居ないのだ。

隼人は呆然と立ち尽くしていた。終わったのだと悟るのは早かった。だからあとは追わなかった……。

96 塾での諍い

96 塾での諍い

至極ノーテンキに「医学部志望」に変えたはいいが、担任には仰天されるわ、兄の雅人には馬鹿にされるわ、クラスの皆からは冷笑を含んだ目で見られるわで、芳人はこのI高に入って始めて、疎外感なるものを味わっていた。

今になってやっと友里菜の気持ちが理解できる。疎外されるのは、無視されるのは、嫌われるよりも始末に悪いと言っ事を。

『愛の反対は“無視”なのです』

と言っマザー・テレサの言葉に納得したのも、最近だ。

それでも芳人には唯一人の味方が居た。それは母親だった。

少し前まで母親と一緒に居るのも歩くのも嫌だったのに、今ではフツーに口を効き、いやそれどころか自分の一番の理解者になっているのだ。

気付いた事は、“オフクロは自分に似ている”と言っことだった。どこか神経質で苛々している父親は、嫌いではないが、兄雅人にそっくりだ。けれども、何が起こつても平然としているように見える母親は、顔立ちこそ余り似ていないが芳人に瓜二つだった。

どちらも夢のような事に憧れ、それを誰かに揶揄されても全然気にしない。

けれども今日と言っ今日は、そうは行かなかった。

芳人は塾の夏期講習では「医学部コース」に入っただが、その中に嫌な奴が一人居た。父親も開業医だという羽島淳平という男子は近くの中高一貫男子校の生徒で、いつも誰かを嘲笑する事を自分

の話の種にしているような、性格の悪い男子のようだった。

それでいて外見では、小柄ながら端正で女子ならずとも男子も惚れそうなイケメンだった。それが芳人にはシャクなのだ。

「おつ、アンパンマンっ！ 今日もよく食ってきたか」

クラスに飛び込んで来た芳人に向って、いつものように淳平はニタニタ笑いながら話しかける。

「ていうより、筋肉マンかな」

「それ、ちゃうで。大久保は水泳部やそうやから、ガタイが大きいのはしゃーないやん」

と誰かが注意すると、

「あ、そ。水泳部かあ。けど、それ続けてたら、医学部には入れんがな」

とすかさず淳平は言い放つ。「やる気があんのんかいな」

「るせえ！ どーでもええやん」と芳人は無視するように席に着いた。けれども実際は、このクラスに付いて行くのに必死だったのだ。水泳部を止めようかな、という考えも頭をよぎる昨今なのだ。もう直ぐ、高校最後のレースだというのに……。

やがて中休みの時間になり、皆は各自弁当を食べ始めた。そして先ほどもらった物理のテストの点などについて、各々喋ったり唸ったりしていた時、コンビ二弁当を突いていた芳人の前に、例の淳平が立った。

「なんや、おかんの手作りやないんかいな」

「お袋は病後やさかい、休養中や。僕はコンビ二弁当でも何でもいいねん」

「そやな。つまりは食べるものやったら、何でも食うわっちゅーかんじで。泳ぐとお腹すくからなあ」

「夏休みの練習には、あんまり行ってへんけどな」

と芳人は淳平を無視しようとした。
けれども淳平はしつこい。

「お前んところは、オヤジが医者やないんやろ？」

「ああ、そうや。それがどないしてん？」

「土建屋やつてな」

「そういう言い方、好かんなあ。気に障るわ」

「バブル弾けて、今土地建物とかどんどん値下がってるっていう時代や。昔やったら、土建屋さんでも結構儲けたもんやけど」

「何が言いたいねん！？」

芳人は本気になって怒り出した。

「だーからあ、大久保はもつと点取らなあかんねやろ？　なのに、お前の物理は最低点や」

そう言われると確かにそうで、芳人はムツとしたものの黙りこんだ。

「な、国立しか行けへんねやろ。私立は金かかるさかい。そやけど、その点ではなあゝ、おかんが泣くで。I高ゆうたら、もつと頭いいのかと思っただけ……ガツカリや」

「僕はな、羽島みたいな、ただ何となくオヤジの跡を継ごうかっていう卑しい志とはちゃうねん。僕はな、自分の考えで決めた。そやから、これから頑張るつもりや。」

そついう御託は、最後に言っただけだな

「卑しい志……！？　医者になることがか？」

「そやろ。金に任せて、後継ぐつもりや、羽島は」

「お前なあ、医者になるのが如何に大変か、全然分かってへんやろ。そつそう簡単になるってもんやないで！　所詮、土建屋の戯言たわごとかいな」

「土建屋の戯言！？　言わせておけばいい気になりやがって」

「聞いたで。大久保、お前中学のときは、ヤンキーやったってな。ヤンキーには医者なんて、無理や、無理や。もう手を上げて辞めろ！」

「なんやてゝ！！」

芳人はカツとして立ち上がった。直ぐ目の下に、淳平の頭があった。殴りつけたかったが、もうそんなことは出来るはずが無い。

芳人は握りこぶしを降ろした。

「アホには付ける薬は要らん」

そう言つと芳人は横を向き、もう淳平の挑発には乗らなかつた。けれどもその日以来、芳人の苛々は募るばかりになってしまったのだ。それに正比例したかのように、成績もまたさっぱりだった。芳人が厳しい現実の壁に突き当たつた、最初の日だった……。

97 サヨナラの前に

97 サヨナラの前に

高校三年の夏休みほど、ストレスが溜まる時期は無い。特に、自分の能力よりも上の大学を狙っている者は尚更だ。

その点では、友里菜も芳人も同じ穴のムジナだった。どちらもはかばかしくない成績に苛々し、あと少ししか時間が無いという焦燥感に駆られているくせに、道行くのんびりしたカップルが羨ましく感じる。

そして去年の楽しい夏休みの残像が、頭をよぎるのだ。

けれども、それもあと半年足らずの辛抱だ。受験が済めば、晴れて“大学生”になれる！ いや……成れるかも知れない……ひよつとしたら、上手く行かず、それこそ“灰色の浪人生”になるかもしれないが。

そう思うと胸が塞ぎ、このくそ暑い夏が面白くもなんとも無い。けれども受験生は頑張るしかないのだ。

『夏が勝負だぞ〜〜〜！』

とどの塾も、それが合言葉になっているではないか。夏が勝負だと。

「わたしが人生で一番勉強したんは、高校三年間やね〜」

と麦茶を飲みながら、芳人の母親が涼しいクーラーの付いたリビングダイニングでそう誰に言うとも無く呟いた。ちょうど芳人が、大量のソーメンをかつ込んでいる時だ。

「そう言えばお袋は、三重でも一番と言うT高校出身やったな〜」

「こつ見えてもね。でも今はもうアカン。ただの病み上がり、それ

も爆弾を抱えたオバハンやわ」

芳人は箸を休めて、母親の横顔を見つめた。

「昨日な、同じ病室やった友達が亡くなったそうや……」

けれども母親はそれ以上は何も言わなかった。ただ黙って麦茶を飲んだだけで。

「なんや弱気だすなよ」。僕が、優秀な医者になるさかいにい」

「何言うてんねん！ 塾のテスト、ボロボロやんか！ あんな点で国立大医学部なんて、奇跡でも起らん限り無理やな、と雅人が言うてたけど、ほんまやわ」

「ちえつ、又あの兄貴が余計なこと言いくさつて」

「一浪はしゃあないんかもな」

母親は少し微笑んで愛しい息子をチラツと眺めて言った。

「あゝあ、今日もめっちゃめっちゃ暑そうやね、芳人」

その頃、友里菜に電話が掛かっていて。

例の日以来、友里菜は隼人には一度も電話を掛けなかった。また、隼人からも何の連絡もなかった。

そのこと事体に寂しさは感じなかったものの、友里菜は隼人に対してどこことなく後ろめたい気持ちになっていたのだ。それが時には友里菜を苦しめていた。

遂に振ってしまった……けれどもそれはなぜか虚しく、少しも嬉しくは無い。後悔はしていないが、自分のやった行いが正しい事だとはとても言いがたいその思いが、常に友里菜の脳みそを占領し、少しも歌やピアノに身が入らなかったのだ。

そんな時に、隼人から電話があった。幸いな事に、家には誰も居なかった。カレンダーをチラツと見ると、もう8月30日だ。

ケータイを持つ手が、少し震える。けれどもここで決着を付けな

ければ……。

「あー、もしもし」

「柿沢さん？」

押し殺したような隼人の声がした。隼人はもう二度と“友里菜”とは呼ばない。

「え、はい」

偽りのカレシとの会話は、最初はぎこちなかった。そして……。

「サヨナラの前に、一度電話したくて」

そう来たか。“サヨナラの前に……”と。

「この前はゴメン」と隼人はいつものように静かに言った。「驚かせてしもうて」

「あ……うん……」

「でも、それで分かった」

「ん？」

「柿沢さんの本当の気持ち」

暫く沈黙が流れた。

「やあ、僕、負けちゃったよ……どうあがいても、やっぱり大久保君には」

友里菜は言葉が出て来ない。

「君の心には、大久保君が巣食っていたんだ。それは気付いていたし、君が二股掛けているのは知っていたけど……そして実は卑怯だなとも思っただけ」

「なによ！ それって！」

「いや、聞いて」と隼人は友里菜の怒りの言葉を制した。

「僕も卑怯やった。だからあいこ。でも僕が君を好きだったのは本当だから。あゝあ、手に入らないんやなあ、なかなか、愛っていう

もんはさ。それが分かっただけいい勉強したし、君には感謝している。

例え僕をカレシには出来なくとも、今までの日々はとても……とても、楽しい日々やったしね。これからの君の行く末がステキな日になる事を、そして大久保君との……」

「待つて！」と友里菜は叫んだ。「それ勘違いよ。大久保君とは、カレシ未満なの」

「そう？」と隼人は怪訝な言い方だ。

「でも……離れられない」

「それが君の本心やね、やつぱり。ま、頑張りや、これからも」

「肝付君も……ごめんね、わたしは……」

「もういいからあ」

隼人は朗らかに笑った。けれども、どこかやけっぱちな響きがしたのは仕方ない。

「君の幸せを祈ってる。それじゃーね。サヨナラ」
「あ」

友里菜が何か言う前にケータイが切れた。

最後まで、隼人はやっぱり隼人だったんだ。友里菜は今始めて思う。高価な真っ白いシャツと、スラリとしたジーンズが似合う……。

「ごめんね、隼人……」

切れたケータイに向って、友里菜はそう呟いていた。

98 映研よ、さらば！

98 映研よ、さらば！

別れのあとは、いい気持ちはしない。そして苦い思いがいついつまでも友里菜を縛る。

けれどもそれでいいのだ、と友里菜はやっと数日して気持ちを落ち着けた。いつまでも二股は掛けられない。自分の気持ちに正直にならないと、受験もいい加減になってしまう。

恋はゲームだと言う……。けれどもそうだろうか？ ゲームにするような恋は、本当の恋とは言えないんじゃないのだろうか？

少なくとも、今の友里菜は恋愛をゲームにはしたくなかった。そしてゲームではなく、苦い思い出と共に一つの擬似恋愛は終わったのだ。

けれどももう一つ別れなければならないものがある。それは部活だ。

二学期に入って直ぐ、映研の次期部長を決めるミーティングがあった。友里菜は迷うことなく、去年自分を無責任に推挙し「映研のボス」と言った、現在2年生の男子を部長に押し付けた。

その男子は、含み笑いをする友里菜をチラッと見つめると、渋々頷いたのだった。

ふん、ざまーみやがれてえーんだ。これで、あの時のわたしの気持ちが分かっただろう。この責任は取ってもらおうよ。

「それじゃ、わたしはこれで」

と友里菜は優雅に立ち上がる。ここ最近、

『声楽をするものは、物腰優雅に、そして着る物も半端じゃ駄目。カジュアルすぎるのも、地味すぎるのも駄目っ!』とのたまう山際冴子の言いつけ通り、友里菜は麗々しくガーリーに着飾っていた。

少し窮屈で、自分じゃないという気がしたが、今の友里菜は入試の為なら何だってやるつもりなのだ。そう決心していた。

「あのー、せ、先輩」とその男子は背中に言いかけた。

「なあに？ わたし、これからピアノのレッスンやし、早う言うて」
「段々ここに入る子達が減ってんですけど……将来どうなるんでしょうか？ その時は、力貸して下さい」

友里菜はクルリと振り返った。その顔は厳然として険しく、まるで夜叉のようなのだ。

「自分で考えよし。自分の頭で」

「あ、はい……」

その男子は黙り込んだ。

「んじゃ、あたしも」と亜紀も立ち上がった。

「そんじゃーね、みんな。あ、そうそ。今度の文化祭やけど、みな頑張ってるね。見に来るさかい」

亜紀もせいせいしたように言い放つと、つとそのクラスを出て行った。前方の友里菜は、二度と来たくないし見に行く気も無い、とは思ったが、我ながら自分の薄情さに呆れていた。

この高校の門を始めてくぐった時には、もともと自分が純粹だったような気がする……今の自分の、人間の醜さを知った世慣れた有様に、少しだけゾツとしたのだ。

いいんだ、もう。やるべきことはやったし、あとは野となれ山となれ、だわ。後輩達のことまで考えていられへん。

『映研よ、さらば!』

まあ、色々あつたけど……。これで少しは、レッスンに身が入るかな?

友里菜は廊下でほくそ笑むと、スタスタとあの『映研』から遠ざかつて行つた。

「ねえねえ、友里菜!」と亜紀が追いつきながら耳打ちする。
「なによ」

「あのさー、文化祭実行委員の長壁おさかべという奴からの伝言があんの」
「なに?」

「友里菜に歌つて欲しいって!」
「へ!?! 歌?」

「だつて友里菜、わざわざ横浜までレッスンに通つてるんやろ?」
「歌? あんた分かつてんの? わたしの歌は、歌は歌でも、ドイツリートとかイタリア歌曲とかやよ!? なんか、勘違いしてない?」

「まあ、ええやんか。とにかく、文化祭実行委員会の長壁君のところに行ってよ」

「長壁、か? 知らんわ」

「理系の子やからな。じゃ」

亜紀は大切な伝言を伝えたあと、ニンマリ笑つてから手を振り、昇降口に去つて行つた。

「文化祭で、歌を歌う? それって……」

友里菜は首を傾げながらも、実行委員会の部屋の扉を開いたのだつた。

その時、友里菜は自分がアホだったことに気付いていなかった。亜紀は信用が置けないと、あれほど悪夢にまで見ていたというのに!

99 確執

99 確執

二学期になつて、芳人の塾の「医学部コース」は更に峻烈になつた。そして例の医者 of 生意気で嫌味な息子、羽島淳平との間のゴタゴタも益々酷くなつていった。

けれどもある日、芳人はふと自分達の諍いを、他の生徒達が面白がつているのではないか……と感じるようになった。これは以前の自分では、絶対に思いつかないことだったのだ。それ程、芳人は“どん臭い”にぶい”男子だった。

けれども今は違う。これも少しは大人になつた、と言うことなのだろうか？ 物事の裏には、案外真実が隠れている、そうひしひしと感じてきていた。

もう喧嘩や争い、嫌味の言い合いはやめようと思う。けれどもそれをどうやって淳平に伝えていいのか分からない。

淳平は自分よりも高価な、最新流行のケータイを持ち歩いてはいしたが、その番号もメールアドレスも知らないのだ。

今、友里菜よりもこのにつくき淳平の像のほうが、より多く芳人の脳を占めているのだ。そして芳人は、時々友里菜の存在すら忘れてしまふ事があつた。それほど、この競争相手は喉に刺さつた棘だったし、憎かつたのだ。

そうこうしている内に、志望校を絞り込む重要な試験があり、その結果は芳人はやはり散々だった。あれほど頑張っているにもかかわらず、なんとクラスで下から二番目に悪い点だったのだ。

その日、クラスで遅い夜食をボソボソと食べている頃、案の定淳

平が芳人に近寄った。

淳平は小柄だが、今は芳人の机の直ぐ側に立って、弁当に喰らい付く芳人を見下ろしているせいか、威圧的に見える。

「大久保く、今日もコンビ二弁当？ 鮭弁？ それとも唐揚げ弁？」
芳人はチラッと淳平を見上げたが、黙々と弁当を食べている振りをして無視した。なぜなら、淳平が少し成績を下げたので内心は喜んでいたので。

もちろん自分の成績はとても誉められたものではないが、けれども淳平の成績が下がったという事は、実は何より嬉しい。

「ふくん、弁当とそしてサンドイッチか。一つじゃ足りへんのやな」「るせえ！」と始めて芳人は顔を上げた。「人の勝手や」

「どうせ国立は無理なんやから、私立に行く為にお金為貯めときや。ふふふつ、アンパンマンっ」

「るせえて言ってるやろく、このバイキンマンがあ」

「ん！？ バイキンマン？ この僕が」

「そうや。お前や、羽島、お前や。人間の中に蠢く、悪いばい菌やウイルス、ガン細胞……それがお前やねん。なんや、気付いてへんかったのか？ ふくん、案外お前アホやったんやな」

瞬間、淳平の顔色が変わった。もともと青白い顔は、真っ赤になり、身体も小刻みに震え出したのだ。芳人も啞然とするほどに。

「僕はアホやないで」

「成績下がったくせに」と芳人は集中砲火を浴びせる。「僕はいつも下がりっぱなしやから、もう、一浪は覚悟している。けど羽島、お前も怪しいでえく、最近なあ。やろ？」

全員がポカーンとした。それ程淳平の動作が瞬時だったからだ。電光石火、とはこの事かも知れない。

淳平は傍らに置いてあつた芳人がまだ手をつけていないサンドイッチを、壁に向つて投げつけたのだ。ぐしゃとサンドイッチが潰れる音がする。そして淳平はヒステリックに叫んだ。

「お前なんか、医者になる資格は無いぞ！」

「何すんねん！！　へー、そんなやな性格やつたら、とても人の命なんて救えへんがな。お前こそ、さつさと医者になるの諦めたらどないや！」

と芳人も負けずに言い返した。そのドスの聞いた声が、クラス中に響き渡り、窓の外の暗い静寂を押し破る。窓ガラスが、共鳴してビリビリ震えた。

他の生徒達は、隅の方でゴソゴソと耳打ちしていた。

「ほらほら、羽島も大久保もストレス溜まっとるがな」

「あいつら、どっちもアホちゃうか」

「あの様子じゃ、どっちも国立どころか私立医大でさえ無理やな」

芳人は淳平を見据えていたが、その片方では他の生徒達の噂話にも地獄耳で耳を傾けていた。

「みな、見てるやんか。もうやめへんか、羽島」

淳平は黙っていた。そして驚くべきことが起つたのだ。

淳平は乱暴に教科書やノートを高価な黒い皮のブランド物のカバンに突っ込むと、何も言わずに出て行つた。

入れ違いに入つて来た物理担当の若い教師が、

「あれ？」と言う顔をしているのにも気付かずに。

「羽島は、早引きか？」

「い、いえ」

「知りませう」と生徒達。

「ほなら、早速やるで。おらおらおら、もう時間はそんなに残つ

てないぞ！」

若い物理の教師が蛮声を張り上げると、みんないそいそと何事も無かったかのように教科書を出し始めた。

ただ一人、芳人だけが誰も居ない淳平の席を呆けたように見つめていた。溜飲が下がるところか、なぜか苦い思いが胃から上がってくる……。

100 文化祭の舞台で大恥

100 文化祭の舞台で大恥

文化祭実行委員長の長壁は、友里菜に是非ともクラシックの歌を歌って欲しいと懇願した。少しだけ考えたものの、友里菜は山際冴子に相談の電話をした。

「いいんじゃないの？ 受験の為には、人前で歌う度胸が必要よ。あなたはかなりいい線いつてるけど、でも聴衆で歌うという経験が乏しいわ。」

クリスマス前には、わたしのお弟子さん達を集めて横浜のさるホールで発表会を開くけど、その前のちょうど場慣らしにはなると思うわよ。だから勇気を出して出なさいな」

そしてちょっと間を置いて、更に冴子是这样い付けた。

「それにはそれなりの衣装で出なさいね。自分が未来のプリマだということを実感するように！」

「で、でも……わたし、そこまで自信が……。それに、たかが文化祭に、そういうちゃんとした衣装なんて……」と友里菜は慌てて言った。

「そこがあなたの甘い所よ、柿沢さんっ。この世界はね、普通じゃないの。ただの高校生とは違うんだからね、あなたは」

“ただの高校生とは違う”

この言葉は、友里菜を魅了し、逆に言うとな友里菜の理性を破壊した。

友里菜はケータイを置くと、にんまりと微笑んだ。

「ちゃんとした衣装か……。どーせクリスマスには要るんだし、買ってもらっか」

肝心の曲目よりも、衣装の方に気が入ってしまう友里菜。もちろん母親も大賛成で、二人して舞台衣装を見に行ったり、結局知り合いの洋裁が巧いブチック店主に頼み込んだりした。

「友里菜ちゃんには、清楚な衣装が似合うと思うわよ。白に薄いピンクの薔薇のレースが上に被さっている生地があるんだけど、どうかしら？」

その店主の甘い言葉にくらくらとした友里菜母子は、結局その高価なドレスを買ってしまったのだ。

その日の晩、友里菜はそのドレスを着て、父親の前にしなを作りながら立つと、クルリとまわって見せた。父親は、「うん」と言ったとき、黙り込む。

「あれって、気に入ってる証拠よ」
と後に母親が友里菜に囁いたが、友里菜はその時の父心を知らなかった。

「いっつもむつつりなんだからあ」

「いいえ、嬉しいの。だけど、成長してこうしていつか自分たちの元を離れて行く友里菜に対して、複雑な心境なのよね。あんたには分からないだろうけど」

「かな？」

「そうなのよ」

と母親は決めつけるように言った。

ところで、友里菜の出番は最後の方、ちょうどプラスバンド部とコーラス部のあと、英語劇の前という順番になった。

長壁はプリントされたお手製のプログラムを渡しながら、

「……れにしても、マニアックなの、歌うんだな」とだけ呟いた。
「でも、これがクラシックですよ。ビョークや、セリーヌ・ディオ
ンとは違うんですから……」

「けど、チャイコフスキーとスカルラッティの歌って……誰も知ら
んでしょ？　せめて『アメイジング・グレイス』とか『タイムセイ
グッバイ』とかならなあ」

「でも、亜紀は、いや田辺さんは、そういうのが良いと……。長壁
さんだって、そう言ってたじゃないですかあ」

「ま……いいか。今更、曲は変えられないしね」

長壁は意味深にそう言った。

文化祭のその日の夜、芳人から電話があつた。

「ごめんな、友里菜。明日は塾の用事があつて、そっちに行けへん
わ」

「いいよ。どうせ大したことないんやし」

「でもなあ、友里菜の晴れ姿を見たかつたって気もするしな。ドレ
ス姿って見たこと無いし……」

「いいよお、芳人が来ると思うと、あがつちゃうし」

「じゃーな、頑張れよ」

ケータイが切れた。途端に嫌な胸騒ぎがしてきたのは、なぜだろ
う？

翌日、外は突然のにわか雨に襲われ、ブラバンもコーラスもかき
消えるような雷鳴が轟いた。けれども友里菜は、控え室代わりの部
屋で薔薇色のドレスに着替えるのに精一杯。付け焼刃で一回だけ音
合わせした、ピアノ科に進む予定の辻ジュンという子と最後の打ち
合わせをしていた。

「柿沢さん、辻さん。出番〜！」

長壁がやって来たので、二人はいそいそと舞台に立った。瞬間、
友里菜は凍りついた。

客席にはほとんど誰も居なかったのだ。パラパラと、数人の人影

のみで。

そして運が悪いことに、先ほど電気も切れていたのだ。体育館を改造した舞台は薄暗く、誰が座っているかも分からない……。

「え!？」と二人は顔を見合わせて絶句したものの、始めないわけには行かない。

「が、楽譜が見えにくい」と辻ジュンが焦る。

「いいから、続けてよ」と友里菜は囁いた。「もうヤケクソや」

泣きそうになりながら、ジュンは最初の曲を弾き始めた。『ただ憧れを知る者だけが』である。

やっこのことでその曲を歌い終わると、友里菜は次の曲を歌わずにさっと礼をして舞台から逃げるように駆け去り、ジュンが慌ててあとを追った。パチパチという虚しい拍手が、だだっ広い体育館に響く。

舞台の袖にくと、友里菜はしゃくりあげて泣いた。

「わ、わたし行くね。じゃあ……」

「あ、ありがと……辻さん……」

友里菜はジュンが去った後も尚も泣いていた。映研の劇のために、舞台ではゴトゴトと大道具が運び込まれており、ほとんど居なかった客席には少しずつ観客が集まって来ていた。彼らは一様に、場違いなドレス姿の友里菜をジロツと見つめている。

友里菜は恥ずかしさと悔しさで、どこかへ消えたい思いだった。

「友里菜」

その時、声がした。

「友里菜、良かったよ」

友里菜は顔を上げた。目の前に控えめに立つ芳人が、涙で二重に見える。

「よ・し・と？」

「ああ」

「なんで、ここに？」

「今日は雨だから、塾の行事が無くなったさかい、こっそりやってきた」

「うつうつ。うわ~~~~ん」

友里菜は再び泣き喚いた。芳人はその肩をがっしりと掴む。

「友里菜らしくないやんか。芸術家は、たった一人の観客でも、心をこめて演奏しいへんと」

その声は、昔の少年の芳人ではなく、既に大人の領域に入った声音だった。

「うん」

「ドレス姿……綺麗やな、やつぱ友里菜は」

「うん、ありがと。でも赤っ恥かいちゃった」

友里菜は顔をあげ、どうやら涙を拭いた。

「さ、帰ろ。途中で、なんか美味しいものでも食おうかな」

「うん……そうやね」

芳人は友里菜の肩を抱くと、驚愕する映研の者達を尻目にその場を去った。

そして、

「ちえっ！ 見せ付けやがって」と言う舌打ちは、もう一人の観客、

亜紀の口からもれ出ていたのだ。

101 競争相手から親友へ

101 競争相手から友人へ

久しぶりに出会った二人……。友里菜と芳人は、フラリと入ったイタリアンレストランで、今までであった様々な出来事を話題にし、時も忘れて話し込んだ。

友里菜は片手で頬を支え、目の前の更に遅くなった“カレシ”を見つめ、芳人はいつの間にか“大人の女”へと変貌を遂げた友里菜を、眩しそうにしながらもジロジロと眺めていた。

そのせいか、友里菜は今日あった屈辱的な出来事をあらかた忘れることが出来、反対に幸せな気分になった。束の間の幸せ。入試まであとわずかだが、それまでの息抜きと言った感じで、やっと家路に着くことが出来た。

誰からも誉めそやされなくてもいい。けれども芳人さえ自分の艶姿を見つめてくれていたら、もうそれでいいと妙に健気な気分になっていた。

けれども、友里菜と別れた芳人は重い気分で、塾に向っていたのだ。

実は芳人は塾でのイベントをサボっていた。東大&京大へのカリスマ塾教師の特別講義を、途中で抜け出してまで友里菜に会いたかったからだが……。

芳人が恐れていた通り、恐る恐るクラスに入ると、担当塾講師が芳人を呼びつけた。

「大久保！ こんな態度では、益々アカンで。やる気ないんか？ どこへ行ってたんや？」

「映画に」と芳人は嘘を付くと、ふと暗い窓の外を眺めた。

「どこ向いてるんや！やる気ない奴は、もうどこの医学部にも入れんぞ！」

「浪人、覚悟してます」と芳人はボソツと言った。

「もうしやあないなあゝ、大久保は。駄目人間や」

駄目人間……。その言葉は、芳人の心にグサツと刺さった。

「僕は、駄目や無いです」

「そんなんじや、医者は無理やと言つてんのや！」

「少しぐらいのことで、駄目駄目とか言わんといて下さい！」

今まで教師に刃向かったことすらない芳人が、なぜか居直った風に言つので、全員が凍りついた。

「医者は、金儲けとか、家のあと継ぐとかそんな卑しい目的じゃないです。そりや今は成績ビリっぱいけど、けどけどいつか、いつか、僕はちゃんと医者になる！」

「そうかあ？」と教師はさも馬鹿にした顔をした。「そんな甘ちゃんで出来るんなら、やってみいや」

挑戦的な教師の言葉にも、芳人はむつとしたまま黙って席に付いた。胸がむかむかするが、けれどもこれが現実と言えば現実だ。もう国立医学部現役合格などは、夢の夢……。

「大久保っ」と隣の生徒が耳打ちした。「えろう勇氣あるやんかゝ」
「るっせえ」と芳人は言い返した。先ほどまでの友里菜とのデートが、まるで彼方の夢のような気がする。

夜食の時間になつても、芳人は珍しく食欲が出ず、コンビニ弁当を開けたままぼんやりしていた。

そこにツカツカとやって来たのは、なんと淳平だ。芳人は嫌な気分になつて身構えた。

「大久保」と淳平の乾いた声がする。

「なんや」

「……見直した」

「は!？」

「せやから、見直したって言ってるやんか」

「なんで？」

「あの糞忌々しい教師に刃向かってくれて」

「ああ、さっきのことか。それが？」

と芳人はわざと割り箸を裂いてそっぽを向いた。

「僕も……あいつに駄目な奴と言われた」

淳平が短く言う。

「ん？」

「僕の父は、I市でも有名な開業医や。国立大学医学部出の。けど、僕は頑張っても国立大は無理なの知ってる。

で、あいつはこう言った。

『金持ちのぼんぼんやったら、どんなアホ私立大医学部でもいいんやろ?』と」

「アホ私立大か……」

「けどな、僕は確かに父ほど頭が良くないけど、金儲けの為に医者になるんや無い。父は確かに金持ちやけど、けどな、そのお金を使う暇もないねん。そんだけ忙しいねん。そんな父の姿見てたら、生半可な気持ちだけでは医者になれんのはよう知っとる。

だから僕は、成績だけじゃない。駄目じゃないと言いたかったけど……」

「けど？」

「言えんかった」

淳平は、はははと笑ったが、それはどこか虚しい笑いにしか聞こえない。

「ま、君が僕の代わりに言ってくれて、なんかすつきりした。僕は駄目人間や無い。そしてお前も違うんやな、アンパンマンっ」

「なんやて？ そのアンパンマンって言うの、やめてんか」

「うん、確かに。大久保って、結構こうやって見たらイケメンに近いんだな」と思ったし」

淳平は手を微かにあげて、去った。芳人は今始めて、淳平のもう一つ別の姿を知った気がした。

塾が終わり帰宅時はもう10時近い。外は初の本枯らしのようで、寒かった。

出入り口近くで、ただ一人ポツンとマフラーを巻いている淳平の背後から、芳人は勢い良く、けれども物凄い勇気を振り絞って呼びかけた。

「おい、羽島。一緒に駅まで歩かへんか？」

淳平は振り返ると、意外そうなそれでいて安心したような微笑を返した。

「うん」

「じゃ、帰ろうぜ！」

「ああ、いいよ」

「劣等生同士やけどな」

なぜか知らない。けれども科学では説明できないことが起った。

何かしらのビームが二人の間に通ったのだ。それは二人の、生涯に渡って消えることの無い友情の始まりだった。

がちりしたガタイの芳人と、華奢で小柄な淳平は並んで歩き始めた。

102 もう待てない・・・

102 もう待てない…

クリスマスは、友里菜は横浜のホールで、山際冴子の門下生の発表会に、そして芳人は最後の追い込みに必死で、いつの間にか過ぎてしまった、という感じだった。去年の、ルミナリエの思い出も、一年経てば遙か遠くだ。

友里菜は、例のピンク色のドレスで歌ったが、今回は皆門下生ばかりなので華やかであり、来ている聴衆も家族や音楽関係者ばかりである。少し良い気持ちにはなった。

それらが終わればもう大晦日と新年、1999年である。20世紀も末の世紀末。あつという間の、高校の日々だった。

正月も元旦の一日を除き、芳人は塾での猛烈な追い込みに明け暮れていた。友里菜も元旦一日休んだだけで、次の日は両親と入学祈願に神社に行き、翌日から再び入試の為に、声楽、ピアノ、聴音、ソルフェージュ、楽典と目の回るような忙しさだった。

あと入試まで、一ヶ月程しかない。

次第に友里菜も芳人も、電話に出ることすらお互いに遠慮するようになっていった。

「大学に受かったら……」

考えることはそればかりだ。

けれども二月に入る直前、芳人は猛烈に友里菜に会いたくなってしまうのだ。入試へと、緊張の続く季節へと突入する前に、何かにすがりたくなった。

それは、母親では駄目なのだ。家族ではなく、最も愛する人に励まされたいと言う、切なる思い……。

もう待てない。友里菜に会いたい。会ってどうするとかじゃない。ただ、友里菜に会いたいただけなんや……。それって許されるんやろか？ 友里菜、嫌がらないかな？

芳人は悶々とした気持ちの後、電話ではなくメールでその旨を友里菜に送信した。口では何か言いにくかったからでもある。どういう風に伝えていいのやら、分からなかったからだ。

メールをもらった友里菜は……。暫くそのままにしていた。友里菜はその時、入試のために横浜に上京する用意をしていたのだ。赤いストラップのトランクの側で、友里菜は暫く躊躇っていた。

もう芳人に会える時間など無いのだ。けれども、やっぱり友里菜の気持ちも同じだった。不安……。それが友里菜を縛っていた。

「友里ちゃん、もう用意できた？ 明日だからね、明日早起きしてよね。お母さん、車で駅まで送って行くから。荷物重いでしょ？ 楽譜とか、着替え持った？」

母が二階に上がってきて、ひよいと顔を出した。

「う？ うん」

「大丈夫？ 一人で？」

「わたし、もう18歳だよ。子供扱いしないでよっ」

「はいはい、分かりました。なんか、ピリピリしているよね、友里菜も」

母親は納得すると、階段を降りて行った。

友里菜はメールにレスする。

「ごめん。時間ないの。明日横浜に出発するから」

送信後、友里菜はしばらくぼんやりとトランクの前で佇んでいた。何か知らないが、どつと後悔のようなものが押し寄せてきたのだ。

ごめんね、芳人……。

涙ぐみそうになった時、メールが来た。

「京都駅は何時出発？ 少しでもいい。会いたい。ただ会うだけでいい。そして友里菜にメールを送りたい」

友里菜は微笑んだ。とても素直な気持ちが心から湧きあがってくる。友里菜もまた、芳人に会いたかったのだ。一目でいいから、まるで戦争に行く兵士と別れる直前会えるといった恋人同士のような気がした。

「いいよ。わたしも会いたい」

そして時間を書いてメールを送信する。

ほどなくして、芳人からメールが返ってきた。そのメールは無機的なテキスト文字ながら、歡びが躍っているような風にも取れた。

「是非行くよ。待っててくれ、友里菜」

そして次の日、友里菜は思い荷物と共に母の運転で駅まで行った。それから乗り換えて、ＪＲ京都駅に着き、一番端の新幹線乗り場に着く。

駅のホームで来ているはずの芳人を目で探したが、凍てつく寒さで皆が分厚い服やマフラーに身を包んでいるせい、芳人らしき姿は見つからない。

あと１０分ほどで、新幹線が来るというのに……。

締め付けられるような焦燥感に駆られた友里菜が、ガックリと肩を落としたときだった。

「友里菜」という野太い声が背後でした。この声を聞くと、いつも友里菜は救われる思いがするのだ。この前の文化祭の時でもそうだった……。

「友里菜、遅れてごめん」

芳人が言う前に、友里菜は振り向いた。

「いつも、早いのにい」

「僕もこれから塾。でも会えて良かった！」

「のぞみ」がやって来るアナウンスがしてきたが、二人はただ黙ったままその場に立ち尽くし、何も言えずに見詰め合っていた。

「いよいよやな」とやっと芳人が乾いた声で言う。「頑張つてや」

「うん」と友里菜も頷いた。「何だか勇気がわいてきた。ありがと、芳人」

乗客達が列を作り始めたが、友里菜は最後尾に立っていた。

「のぞみ」が滑り込む。その時だった、芳人は素早く抱き締めると、その白い頬にキスをしたのだ。

友里菜は振り返った。今までのどのキスよりも、それは純粋な思いから出たものであることを、友里菜は咄嗟に悟ったのだ。

「じゃ、行ってくる」と言うと、友里菜は微笑んだ。

誰かがいつも自分を見つめてくれている、支えてくれているという思いは、人を強くする。今の友里菜がそうだった。そして芳人もまた、思いは同じだった。

新幹線に乗り込んだ後も、友里菜はドアの側に立ち尽くし、ドアのガラス越しに芳人の真剣な目を見つめていた。そして新幹線が静かに走り出すと、微かに手を振った。

102 もう待てない・・・（後書き）

あと、2、3話で終了する予定です。今まで忍耐強く読んでくださった方々には、深く御礼申し上げます。最後になってくると更新が遅れ始めましたが、ご容赦下さいませ。
それではあと少しだけ、お付き合い下さいね。

103 ヤンママ

103 ヤンママ

友里菜の一本に絞った入試は、何とか無事に終わった。雪がちらほら舞い散る日だったが、二日間の日程をこなして大阪に戻って来ると、芳人からねぎらいのような電話があった。

「今度は僕の番やな」と喋る芳人の口調が少し堅い。「なんせ、私立は無理やから、国立と公立一本。心配や。けどいい、別に、落ちても。又来年があるし」。

それより、明日の合否結果、友里菜、大丈夫かいな」

「まあちよつと落ちつかへんけど」

「自信ある？」

「うん」と友里菜はももごと口ごもった。「少しだけ。英語がちょっと心配。ヒアリングがネイティブの先生やったから、いい加減に書いた気がするし。うん……なんかね、ミッション系っての、公立とは少し違うね」

そう言った友里菜の脳裏に、隼人の爽やかだった微笑がチラッと浮かんだ。それはもう、過ぎ去った過去、過ぎ去った恋、そして過ぎ去った日々だ。けれどもなぜか少しだけ胸が痛む。

けれども友里菜は、その幻を追い払った。過ぎ去った日々はもう二度と戻らない。今これからの未来しかないのだ……。

「今度はこれからそつちやね、芳人」

「まあまだ少し間があるから、猛烈にダッシュするし。それじゃあ、明日の合格祈っているよ」

友里菜はそつとケータイを切った。

ガランとした講堂で歌った課題曲と、そして自由曲「ただ憧れを知る者だけ」。その光景は今でも鮮明で、決して忘れられない。恐らく生きている間、忘れることはないだろう。

鋭い目付きの数人の教官達が、各々バラバラに座って、出てくる受験生達をじいっと見つめていた。その中には、山際冴子も居たが、友里菜の頭にはもう曲のことしかない。

歌い終わった後、心なし冴子が「うん」と頷いた気がした。巧くいったのかもしれないが、友里菜はやはり不安だった。

数日後、冴子から電話が入り、「かなりいい線」ということを聞いた。

「ただ問題は、英語なの。それだけは、わたしの裁量では動かないから。ミッションは英語能力が無いと駄目だから……そうでないと、友里菜ちゃんにもこれからの将来大変だしね」

「そうですね……先生。あつ、どうもありがとうございました！」

友里菜はケータイを握ったままお辞儀をしてしまう。

「じゃ、今度……合格したら、キャンパスで会いましょうね」

と冴子は優しく言いかけた。今までの厳しさを取り払った先生の声が、友里菜の心に心地良い。

その時友里菜は、絶対に受かりたい、と心底思った。

キャンパスは思っていた以上に綺麗だったし、ミッション男子だった隼人の学校のように、凜としたチャペルが中央に建っていた。

そして待っている間にも、一人の受験生と仲良くなった。福島から来たというその女の子とは直ぐ打ち解け、いよいよ別れの時にはもう親友のような気分になっていた。このようなことは今まで経験したこともないことで、不思議な感じだ。

「ね、二人とも受かってればいいね」

「そうね、柿沢さん。わたし、61番だから、ちゃんと見といてね」

「大丈夫よ、又会おうよ！」

「うん」とその子は頷くと、二人は駅で別れた。一人は西に、そして一人は東に。もしかして、一期一会なのかも知れない、と友里菜はハッとした。けれどもこれも運命だ。

明日の合否判定には、叔母が行ってくれるという。そして合格していた場合には、既にこちらから送金していた金額を払ってくれるのだ。そのお金が無駄では無いことを友里菜は祈っていた。

そして61番と言う番号があるかどうか、確かめて欲しいとも言っておいた。

その日……友里菜は朝からそわそわしてしまい、とうとう昼前に「ちよつと本屋にでも出かけてくる」と言って、母親が啞然としている中を家から出て行った。

「じゃじゃあ、その時には電話するから」

「いいよ、いつでもスタンバイしてるから」と友里菜は愛用のケータイを指差す。

「すぐ帰るよ」

「ふふん、友里菜って意外に小心ね」

その母の言葉を背後に出かけたものの、実は行く当てはなかったのだ。

友里菜は結局、駅前のアーケード付きの商店街をぶらぶらと歩いているだけで、時折コンビニを覗いたり、本屋に申し訳程度に入店したりしただけで、あとは上の空だった。

そしてケータイはなかなか鳴り響かなかった。

「あ、友里菜！ 友里菜やかあ！」と言う声で振り向くと、一人のヤンママが赤子を横抱きにして立っていた。

「あ・れ？」

「いやだあ、あたしやんか。あたし」

「え？ 沙夜？」

「そう」

「へえ〜っ」と友里菜は沙夜を見つめた。「沙夜、あんた、もうお母さん？ あっそうか……この間会った時にはもうお腹大きかったしな」

「そ……産まれた」

突然友里菜の脳裏に、中学二年の頃の可愛い沙夜の姿がフラッシュバックした。始めて「友達だ」と呼べた小柄な沙夜。そして妊娠し墮胎し、高校の時にはルーズソックスを履いてだらしくしていた女の子だったのに……もう、母親！？

「やだあ、何見てんのよ。なんか変？」

「い。いや〜、そうじゃなくて。何だか、時が経つのはあつという間やなあ〜とか思ったりしてさ」

「そうやね〜。友里菜もちよつと見ぬ間に、もう“オンナ”やわ」

「やだ〜。でも、カワイイ〜。沙夜がお母さんやなんて〜なんか〜」

友里菜は、まだ未来を知らない赤子の顔を覗き込んだ。

「友里菜、今頃なにしてんの？」

「え？ あ……今日ね、大学入試の発表なの。でさ、何だか落ち着かなくて」

「どこ？」

「うん、横浜の」

「ヨコハマ？」と沙夜は鸚鵡返しにつぶやいた。「受かったら、遠くになるね」

「うん。でも直ぐそこじゃんか」

「いいや、すぐそこやないって」と沙夜は言った。「うちら、もう

別々になるんやね」

「そんなことな……」

そこでケータイが鳴った。

「あつ、待つて」

友里菜は慌ててケータイを持つ。

その顔が薔薇の花のようにほころんで行くのを、沙夜はじっと見つめていた。

「受かったんやね」

「うん！　ありがと！　でも」

「でも？」

「いや、別に」と友里菜は一抹の寂しさに襲われて、けれども何気なさを装って言った。

61番の子は、落ちてしまったのだ。もう二度と会えないだろう

……多分。そしてあの子は、遠いどこかでずっと泣いているのだ。

赤子が泣き出した。

「あ、うち、もう行かんと。お乳の時間や」

「それじゃ」

「会えて良かった、友里菜」

「氣いつけて」

「うん」

そう答えると、沙夜は片手にレジ袋、片手に赤子を抱きながら去って行った。友里菜はしばらくその場に佇み、沙夜の背中を見つめていた。

104 ただ憧れを知る者だけが

104 ただ憧れを知る者だけが

ただ憧れを知る者だけが

わたしの苦しみをわかってくれる

あらゆる喜び、幸せから遠く

わたしははるか遠くの青い空を見つめている

ああ！ わたしを愛し、理解してくれる人

それはどこかわからない遠い所にいる人

そう思うとわたしは気を失いそうに

胸が狂おしくなる

ただ憧れを知る者だけが

わたしの苦しみをわかってくれる

(ゲーテ)

明るい初春の窓辺。日の光が生暖かい……。

もう、春。そう感じながら、友里菜は自分で伴奏を弾きつつ、チヤイコフスキーの歌曲、『ただ憧れを知る者だけが』を歌う。それは、この間入学試験で必死になって歌っていた曲、けれども今はゆったりと言葉を反芻しながら、その曲を肌に感じそして魂を入れる。そうすると、その歌がまるで自分や他の人間達の普遍的な気持ちのような気がしてくるのだ。

そう感じ出したのは、もう高校も卒業し、新しい門出に向って進んで行くという時だからこそ、なのかも知れない……。

友里菜は無事、志望校の大学に受かったが、芳人はやはり国立、公立の医学部共に落っこちた。けれども芳人はガツカリはしなかった。それはもう以前から分かっていたこと、万に一つも受かるはずが無いと勘付いていたからだ。

そして淳平もまた、全ての医学部に落ちた。淳平は、私立大の医学部にも落ちてしまい、結局二人とも浪人することになった。二人の予備校は違っていた。けれども、二人はいつも一緒に居た。物理的に共に居たのではなく、精神的な絆で結ばれていたのだ。

あんなに双方で嫌い合い、罵り合い、嫌味合戦を繰り返していたのに、結局二人は同じ穴のムジナだった。そして……二人は無二の友達だった。

「ええなあ」とある日、友里菜がケータイで芳人に言った。「わたしにもそんな友達が出来るといいけど」

「出来るさ」

「そうかな？」

「そうだよ」と芳人は確信を持って言った。「どこかに居る、きっと。友里菜は大学でそういう友達を見つけるよ！一生付き合う友達を」

そうだ！どこかに、この歌のようにきつとどこかに、居るはず。それは、自分のように、憧れを知る人に違いない。憧れと言うのは、単なる想像やファンタジーではなく、現実を見据えながらも、尚も人を信じることが出来る人なのだ。

それは女性でも男性でもない……ジェンダーなんか超えている人……。

「きつと居るんだ……」

「そうだよ、ステキな友達が。だって、友里菜、ステキだもんね」

「ハハ、アホかいな、そんなお世辞」

「いや、本当だよ。僕の選んだ人だ。僕が好きな人やからな」

しばらく会話が途切れる。

「もうすぐ、友里菜、あっちに行くんやな……」

ボソツとした芳人の声がした。

「なんや、同じ日本やろ？ それに、いつだってメールとか電話とかできるんやな。夏休みには戻って来るし。まるで今生の別れみたいなこと、言わんというて」

「僕もな、来週から忙しくなる。春季講習が始まるから。けど、けど一度会いたいな」

「あしたは？」

「あした！？ ああ、うん、そうやな。もうあしたしかないんやなあ」

「明後日、わたし横浜に行くから。寮の手続きとか色々あつて。しばらくは叔母のところにいるけど、入学式前には引越さんと」

「でも、午後からしか駄目やな。午前中、僕は母と一緒に病院に行くから」

「え？」

「大丈夫。おかんは元気や、おかげさまでね。けど、今まで親孝行してへんかったからな。明日は定期検査」

「そっか」

「色々あつたな、友里菜」

「そやね」

「じゃあ、明日の午後。駅前の本屋で」

「どこか行くの？」

「うん」と芳人は唸った。「多分、母校の校庭とか」

「アハハ。中学の？」

「そう、その近くとか」

「懐かしい……」と友里菜は自分に呟く。

「え？」

「いいや、別にいい」

「全然ロマンチックやないけど」

「ううん、結構ロマンチック、ていうか、ノスタルジーやねえ、芳人は」

「それじゃあ、あした」

芳人はケータイを切った。途端に、胸が掻き毟られるような気がする。友里菜が遠くに離れて行くのを、なぜか察している自分が居るのだ。愛しているのに、けれども愛しているからこそ、友里菜の自由を縛ることは出来ない。

友里菜を再び取り戻す為には、長い長い年月が要るのだ。けれどもその先は誰にも分からない……。

「なんやもう、センチメンタルになっけしもうて。あほやな」

と芳人は一人、ポツンとつぶやく……。窓からは、桜の蕾が見えた。

104 ただ憧れを知る者だけが（後書き）

いよいよ次回で完結します。

「ただ憧れを知る者だけが」はゲーテの詩ですが、チャイコフスキ
ーのロシア語の歌詩は内容が少し違っています。似てはいますが・
・。これは、ドイツ語の原詩によるものです。

105 それぞれの出発（最終章）

105 それぞれの出発（最終章）

芳人と友里菜は、二人揃って母校の中学に出かけた。校庭には桜の木が数本。端にプール、広いが殺風景な校庭の玄関口には、生徒達が植えたのかスミレの花が咲き乱れている。

落ち合った駅前から、芳人と友里菜は余り口を効かなかった。それは語る言葉が無いというより、むしろ語ろうとしても余りにも在り過ぎて言葉が出て来なかったのだ。

「なんや、こんなに狭かったんかな、中学校……」

とパーカーのポケットに手を入れていた友里菜が、ぼそりと言った。「ほんまや」と芳人も、立ち止まりながら、鉄の塀越しに相槌を打った。

校庭では、野球部の部員達が、壘声を張り上げながらボールを投げたりしていた。

「みんな、小さいなあ。まだ可愛いつ」

「僕らもそうやったんかな？」

「可愛いつてこと？」

「じゃなくて……こんな風に、まだまだ子供やったんかな」と

そう言いつつ、芳人は友里菜を見下ろした。最初に見初めた時から見ても、友里菜はそれほど背丈は伸びていない。せいぜい、160cm弱と言ったところだろうか？それに比べて、自分は中学から背が高い方だったが、高校三年間で益々伸びた。今では、180cm近くある。腕で抱けば、すっぽりと自分の胸に収まりそうなほど小柄だ。

けれども芳人は知っていた。友里菜の見かけによらない強さを。

そして又、その弱さを……。そのどちらも、芳人には愛しい。色っぽさと、そしてどこか男の子のような硬い雰囲気をも漂わせている、友里菜。自分が愛した人……。そしてこれからも愛したい、大切な人なのに、別れなければならぬのか……。

「どうしたん？ なんや、黙り込んで。芳人らしくないやんか」

そう言うのと、友里菜は芳人の顔を見上げた。

「いつも、わたしら、20cmの背丈の差があつたんやね。ずっと変わったような、変らんような。でも時間は経っていったんやね、もう5年も」

ボールがこちらに飛んで来たので、一人の野球部員が走り込んで来た。その少年は外野に飛んだボールを追いつながら、ちらちらと二人を見つめた。

「な、友里菜、うちに来いへん？」

「え、芳人のうちに？」

少しの惑いが友里菜を躊躇わせる。

「なんや、なんもしいへんって。うちにはお袋が居るし、ただ一時間ぐらいでいいんや。な、友里菜、明日はもうお別れやる？」

「お別れって……」

芳人は友里菜を永遠に失うような錯覚に陥った。焦る。けれども、今の芳人には何一つ出来ないのだ。

「うん、それじゃちょっとだけね。ええっと、芳人のお母さんって、どんな人なのかな？」

「フツの主婦だよ」

「でも、何だかとても強い人みたい。身体が頑健とかじゃなく、心が強い人。そんな気がするの。だから芳人も強いんだと、今はそう思う」

芳人は何も答えなかった。彼はただ友里菜を促すと、近くの自分の家に誘ったのだ。友里菜は芳人の後ろを、チヨコチヨコと付いて行く。それにつれ、懐かしい昔の自分が住んでいた町が見えてきた。あの時は新しく見えていた町も、今では少しくすんで見えるのはなぜだろう？ それだけ、自分達が成長したという証しなのだろうか？ それとも、周りが過去のものになってしまったという事なのだろうか。

見知った角を曲がると、そこは芳人の家だった。

チャイムを押すと、既にケータイで知っていたのか、芳人の母らしき中年女性が出て来た。芳人の母だから、という予想は大幅に崩れ、その女性は小柄で柔和な表情の人だった。

「あ、お袋。彼女、柿沢さん」と少々照れながら芳人が言うと、友里菜はペコリとお辞儀をした。

芳人の母は、ああ、あの人、という顔をして、微笑みながら中に通した。

「お菓子、あんまりないけど」と母親が芳人に言うと、

「あ、わたし、直ぐに帰りますから」と友里菜は慌てて告げた。

「そうや、柿沢さんは明日横浜に出発するんやから、時間が余りないんやて」

「そう？　じゃ、お茶だけでも。紅茶でいいかしら……柿沢さん？」

「ええ」と友里菜は、しゃちほこばって答える。そんな友里菜を芳人はどんどん二階に導いた。

芳人の部屋は、想像していた雑然とした部屋ではなく、むしろ友里菜の部屋よりずっと綺麗に片付いていた。それは客が来るためと言うよりも、いつもそういう風であるらしかった。

緑色のスプレッドの掛かったベッドに、ちよこんと友里菜は座る。ソファと言ったシャレた物は無いが、けれどもどこか居心地いい。

「これ」と芳人は柵から何かの箱を取り出した。

「なに？」

「写真を入れてある箱。整理してへんけど」

「中学の入学式？」

「うん」

「あ、これは遠足！ 修学旅行も！ あ、彼女、沙夜、……樋口君も。そして……いやや、これわたしじゃない？ 黙って撮ってたなんて、ずるい」

「そうかな？ 言ってへんかった？」と芳人はシラを切った。

「それから……あ……須磨」

あの時の艶かしい海の中の抱擁を思い出し、友里菜の頬が赤くなつた。

その時、芳人の母親がお茶のお盆を持って、二階に上がって来た。そして黙って一隅に置くと、直ぐに降りて行った。

その足音が消えるや、芳人はぐつと友里菜を引き寄せた。

昔、祖父の話によると、戦地に行った若い男性には二種類あったという。一つは、死ぬかも知れない戦地へ出征する前に、愛する人を一晚だけ抱いていった者達。そしてもう一つは、愛する故に後々のことを考え、自分の思いを封じ込めたまま、ただ脳裏に刻み込むように愛する人を見つめただけで、手も触れずに行った者達。

多分自分は後者だと、芳人は思う。そうして芳人は、友里菜を抱き寄せたまま、じっとしていた。そしてしばらくして芳人は友里菜を離れた。

「もしも運命がそうなら……いつかは、友里菜と一緒に人生を歩みたいな。けど今は……ただ、さようならと言うことだけや、な」

友里菜は黙っていた。

PAST DAYS……この言葉が二人を包む。過ぎ去りし日々。それは決して薔薇色ではなかったが、二度と戻らない青春の日々だった。少なくとも、二人は愛していた。本気で愛していたからこそ、今はただ、未来を見つめることしか出来ない。

帰り道の駅まであと少しという時、芳人は友里菜の手を握った。その温もりが切ない。けれども友里菜も芳人もそれについては黙っていた。ただ先を見るだけ、それしかない。

「じゃね」と改札口で友里菜が振り返った。

友里菜が改札口に吸い込まれて行ったあとも、芳人はしばらくその場に立ち止まったままだった。

「頑張れよ」と芳人はつぶやいた。そつと、微かな微風のように。

< 終わり >

105 それぞれの出発（最終章）（後書き）

これでこの物語は終わります。一部、私自身が経験したことが入っている、思い入れ深い物語でした。皆様、ありがとうございました。少しでも心に残って下さることを希望いたします。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4985f/>

過ぎ去りし日々～高校編～

2010年10月9日23時17分発行